京都府埋蔵文化財調査報告書

平成30年度

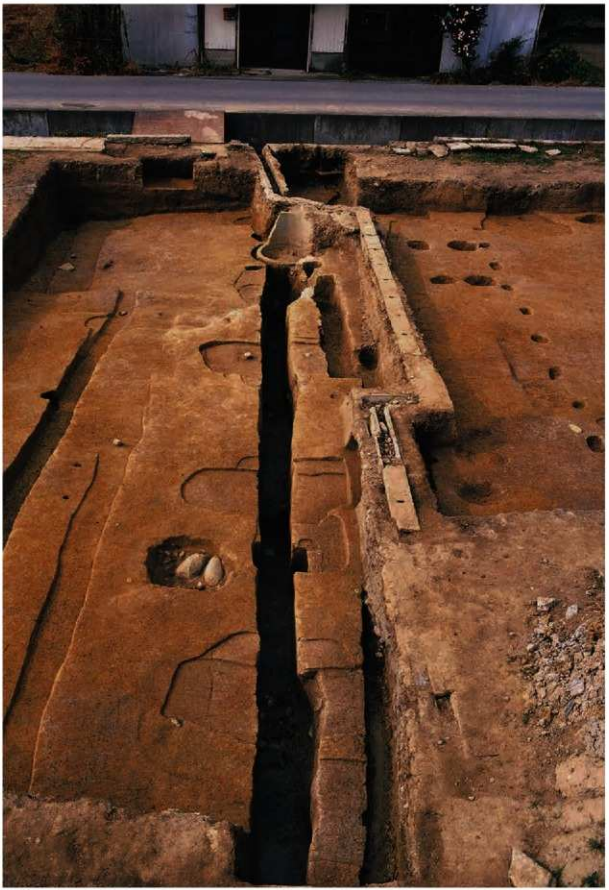
京　都　府　教　育　委　員　会

京都府埋蔵文化財調査報告書

平成30年度

京　都　府　教　育　委　員　会

巻頭図版第１　恭仁宮跡第 98 次



掘立柱塀ＳＡ 18001・18002 検出状況（東から）

巻頭図版第２　国営緊急農地再編整備事業（千代川遺跡第 29 次）

（１）第１トレンチ完掘状況（北西から）

（２）掘立柱建物 SB2901001 完掘状況（北から）

序

京都府内では、平成30年に303件の発掘調査が行われ、各地で重要な発見が相次ぎました。

宮津市安国寺遺跡では、奈良時代の銅銭である和同開珎などの束や、「國」と墨書された土器が出土しました。これまでの調査で確認された建物跡とあわせ、当遺跡が丹後国府の一角である可能性がさらに高まりました。城陽市史跡久津川車塚古墳では、墳丘くびれ部で発掘調査を実施し、墳丘と外堤を繋ぐ渡り土手が確認されました。水鳥形埴輪や鉄製品が出土し、葬送用の通路として利用されたと考えられています。今後、古墳の復元整備を行う上で貴重な成果となりました。木津川市史跡恭仁宮跡では、大極殿院南面区画施設ではないかと考えられる掘立柱塀を確認し、これまで不明であった大極殿院の四至を確定する上で貴重な手がかりを得ましたが、他の三面で確認された築地回廊とは異なり、南面のみ掘立柱塀を用いた特殊な構造であった可能性が高まりました。これは他の宮では見られない、恭仁宮跡独自の構造と評価されます。

今年度は、大阪府北部地震や、7月豪雨、さらには9月に発生した台風21号など、数多くの災害に見舞われ、多くの文化財が甚大な被害を受けました。現在も復旧に向けた作業が実施されており、貴重な文化財を次世代へと継承していく難しさをあらためて認識いたしました。

本書は、平成30年度に京都府教育委員会が実施した発掘調査の概要をまとめたものです。この報告書の刊行を含め、発掘調査等に御協力いただいた多くの方々と関係機関に厚くお礼申し上げますとともに、本書が府の歴史や文化を御理解いただく上での一助となり、文化財の保護と活用に役立つこととなれば幸いです。

平成31年3月

京都府教育委員会
教育長　橋本　幸三

凡　例

1　本書は平成 27~30 年度に京都府教育委員会が実施した埋蔵文化財調査関係の報告書である。

2　本書に収めた調査対象遺跡、執筆担当者は下表のとおりである。

	調査対象遺跡	執筆担当者
1	恭仁宮跡	古川　匠
2	府営農業農村整備事業関係遺跡	北山大熙・桐井理揮
3	国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡	中居和志・桐井理揮・北山大熙・川崎雄一郎
4	平成 29・30 年府内遺跡試掘・確認調査	奈良康正・古川　匠・中居和志・岡田健吾・桐井理揮・北山大熙
5	平成 29・30 年における埋蔵文化財の発掘	奈良康正・岡田健吾

3　本書の執筆は各担当者が行い、文責についてはそれぞれ文末に記した。編集は各担当者が行ったものを古川がまとめた。

4　本書に掲載した地図は、国土地理院発行の地形図である。周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲は京都府・市町村共同ポータルサイト（http://g-kyoto.gis.pref.kyoto.lg.jp/g-kyoto/top/index.asp）に掲載する文化財ＧＩＳデータを基に作成した。国土座標・方位のないものは、上位が北である。

5　本書で使用している測地系は、恭仁宮跡第 98 次は測量法改正（2001 年 6 月 12 日改正、2002 年 4 月 1 日施行）前の平面直角座標系Ⅵである。府営農業農村整備事業関係遺跡（女布遺跡第 8 次）及び国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 28・29・31 次）は新座標（国土座標 2000、平面直角座標系第Ⅵ座標系）である。

6　本書に使用した遺構番号の前にはＳＡ（築地・塀）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＤ（溝）、ＳＫ（土坑）、ＳＸ（その他）等の記号を付した。

7　本書で使用した方位記号は、矢羽根記号は座標北を表し、線描き記号で磁北を表している。

8　本書に掲載している当課撮影の写真等の転載については、これを許可する。ただし、使用した場合は出典を明記すること。

目　次

1　恭仁宮跡平成 30 年度保存活用調査報告（恭仁宮跡第 98 次調査）……1
2　府営農業農村整備事業関係遺跡平成 29･30 年度発掘調査報告……17
［1］女布遺跡第 7 ・10 次調査……18
3　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡平成 27~30 年度発掘調査報告……29
［1］平成 27 ～ 29 年度の調査（千代川遺跡第 28・29・31 次調査）……31
［2］平成 30 年度の調査（余部遺跡第 14 次・法貴峠 20 号墳測量調査）……97
4　平成 29 年府内遺跡試掘・確認調査等報告……99
［1］平安京跡試掘・確認調査……101
［2］佐伯遺跡試掘・確認調査（第 10 次調査）……103
［3］法成寺跡・寺町旧域試掘・確認調査……108
［4］矢田遺跡試掘・確認調査（第 2 次調査）……111
［5］岡田国遺跡隣接地点試掘・確認調査……113
［6］満願寺跡試掘・確認調査（第 1 次調査）……114
［7］光明寺境内試掘・確認調査（第 1 次調査）……117
［8］宮津城跡試掘・確認調査（第 19 次調査）……119
5　平成 29・30 年における埋蔵文化財の発掘……122
［1］平成 29・30 年の動向……122
［2］府内の主な発掘調査……124

CONTENTS

1　Overview of the excavation of the Kuni Palace site
（from april 2018 to march 2019）……1
2　Overview of the excavation of the sites caused by pref-managed improvement in agricultural infrastructure for raising an agriculture manager（from april 2017 to march 2019）……17
3　Overview of the excavation of the sites caused by government-managed urgent farmland reorganization maintenance project "Kameoka center district" (from april 2017 to march 2019) …29
4　Overview of the trial excavation（2018）……99
5　General view of excavation in Kyoto prefecture（from 2017 to 2018）……122

挿図目次

恭仁宮跡（第98次調査）

第1図　恭仁宮跡位置図（1/50,000）……1
第2図　調査地位置図（1/4,000）……3
第3図　恭仁宮跡主要遺構図（1/4,000）……4
第4図　ＩＲ12Ｅ-sトレンチ平面図(1/120)・土層断面図(1/80)……7
第5図　ＩＭ22Ｄ-sトレンチ平面図(1/100)・土層断面図（1/50）……8
第6図　ＩＭ17Ｅ-s・ＩＭ16Ｈ-sトレンチ平面図（1/120）……10
第7図　ＩＭ17Ｅ-sトレンチ土層断面図（1/50）……11
第8図　ＩＭ16Ｈ-sトレンチ土層断面図（1/50）……12
第9図　ＳＰ18401～18404平面・土層断面図（1/40）……13
第10図　ＳＰ18405～18408平面・土層断面図(1/40)……14
第11図　ＳＰ18409・18410平面・土層断面図（1/40）……15
第12図　恭仁宮中央部の復元案……16

府営農業農村整備事業関係遺跡

［女布遺跡第7・10次調査］

第13図　女布遺跡位置図（1/40,000　国土地理院「久美浜」）……19
第14図　調査位置図（1/5,000）……20
第15図　地点Ｂ検出遺構平面・土層断面図（1/100・1/50）……22
第16図　地点Ｂ出土遺物実測図（1/4）……23
第17図　地点Ｂ出土遺物実測図（1/4）……24
第18図　地点Ｂ出土遺物実測図（1/2）……25
第19図　第1～4トレンチ平面・土層断面図（1/80）……26

国営農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

［千代川遺跡第28・29・31次調査］

第20図　調査対象遺跡及び周辺主要遺跡分布図（1/60,000）……33

［千代川遺跡第28次調査］

第21図　千代川遺跡第28次　第30トレンチ（1/30・1/80）……37
第22図　千代川遺跡第28次　第30トレンチ出土遺物実測図（1/2・1/4）……38
第23図　千代川遺跡第28次出土遺物実測図（1/4）40
第24図　千代川遺跡第28次　出土遺物実測図2（1/2・1/4）……41

［千代川遺跡第29次調査］

第25図　千代川遺跡第29次　第1トレンチ配置と周辺の既往調査区（1/2,000）……46
第26図　千代川遺跡第29次　第1トレンチ地区割（1/300）……46
第27図　千代川遺跡第29次　第1トレンチ南壁柱状図（1/100）……46
第28図　千代川遺跡第29次　第1トレンチ全遺構平面図（1/120）……47
第29図　千代川遺跡第29次　第1トレンチ南壁土層断面図(1/60)……48
第30図　千代川遺跡第29次　第1トレンチ第1面遺構（中世末～近世初）平面図（1/180）……49
第31図　千代川遺跡第29次　第1トレンチSK2901028・139土層断面図（1/100）……49
第32図　千代川遺跡第29次　第1トレンチ第1面遺構（鎌倉～室町時代）平面図（1/180）……51
第33図　千代川遺跡第29次　第1トレンチSB2901004平面・土層断面図（1/100）……51
第34図　千代川遺跡第29次　第1トレンチSB2901003平面・土層断面図（1/100）……52
第35図　千代川遺跡第29次　第1トレンチSD2901022土層断面図（1/100）……52
第36図　千代川遺跡第29次　第1トレンチSK2901021・136・137平面・土層断面図（1/100）……52
第37図　千代川遺跡第29次　第1面遺構（鎌倉時代）平面図（1/180）……53
第38図　千代川遺跡第29次　第1トレンチSD2901101土層断面図（1/100）……53
第39図　千代川遺跡第29次　第1トレンチ遺構平面図（第2面・1/180）……55
第40図　千代川遺跡第29次　第1トレンチSB2901002平面・土層断面図（1/100）……55
第41図　千代川遺跡第29次　第1トレンチSB2901001平面・土層断面図（1/100）……56
第42図　千代川遺跡第29次　第1トレンチ遺構平面図（第3面・1/180）……57
第43図　千代川遺跡第29次　第1トレンチSK2901021・SD2901160土層断面図（1/100）……57
第44図　千代川遺跡第29次　出土遺物実測図（1/4）……59

［千代川遺跡第31次調査］

第45図　千代川遺跡31次　トレンチ配置図(1/6,000)

……62
第46図　千代川遺跡第31次　第1～7トレンチ平面・土層断面図（1/80）……64
第47図　千代川遺跡第31次　第8～15トレンチ平面・土層断面図（1/80）……65
第48図　千代川遺跡第31次　第16～23トレンチ平面・土層断面図（1/80）……66
第49図　千代川遺跡第31次　第24～31トレンチ平面・土層断面図（1/80）……67
第50図　千代川遺跡第31次　第32～39トレンチ平面・土層断面図（1/80）……70
第51図　千代川遺跡第31次　第40～47トレンチ平面・土層断面図（1/80）……71
第52図　千代川遺跡第31次　第48～55トレンチ平面・土層断面図（1/80）……72
第53図　千代川遺跡第31次　第56～60トレンチ平面・土層断面図（1/80）……73
第54図　千代川遺跡第31次　第61～68トレンチ平面・土層断面図（1/80）……74
第55図　千代川遺跡第31次　第69～74トレンチ平面・土層断面図（1/80）……75
第56図　千代川遺跡第31次　第75～82トレンチ平面・土層断面図（1/80）……76
第57図　千代川遺跡第31次　第83～87トレンチ平面・土層断面図（1/80）……77
第58図　千代川遺跡第31次　第88～95トレンチ平面・土層断面図（1/80）……79
第59図　千代川遺跡第31次　第96～100トレンチ平面・土層断面図（1/80）……80
第60図　千代川遺跡第31次　遺物実測図1（1/4）……82
第61図　千代川遺跡第31次　遺物実測図2（1/4）……83
第62図　千代川遺跡第31次　遺物実測図3（1/4）……84
第63図　千代川遺跡第31次　遺物実測図4（1/4）……85
第64図　千代川遺跡第31次　遺物実測図5（1/2・1/3）……86
第65図　千代川遺跡の過去の調査地と旧地形の復元案（1/8,000）……89
第66図　千代川遺跡における主要遺構（1/8,000）……91
第67図　掘立柱建物跡の主軸方向……91
［余部遺跡第14次調査・法貴峠20号墳測量調査］
第68図　余部遺跡第14次　調査地点（1/6,000）……98
第69図　法貴峠20号墳　測量調査地点（1/6,000）……98
府内遺跡試掘・確認調査等
第70図　平成30年試掘・確認調査地位置図（番号は付表9に対応）……99
［平安京跡試掘・確認調査］
第71図　平安京跡位置図（国土地理院1/25,000「京都東北部」）……101
第72図　調査地位置図（1/4,000）……101
第73図　調査区平面図（1/80）・土層断面図（1/40）……102
第74図　SK3出土遺物実測図（1/4）……102
［佐伯遺跡試掘・確認調査（第10次調査）］
第75図　佐伯遺跡位置図（国土地理院1/25,000「亀岡」）……103
第76図　調査区位置図（1/4,000）……104
第77図　調査区5平面図（1/400）……105
第78図　調査区7平面図（1/100）……105
第79図　調査区8平面図（1/50）……105
第80図　佐伯遺跡第10次　出土遺物実測図（1/4・1/8）……107
［法成寺跡・寺町旧域試掘・確認調査］
第81図　法成寺跡・寺町旧域位置図（国土地理院1/25,000「京都東北部」）……109
第82図　調査地位置図（1/1,500）……109
第83図　法成寺跡・寺町旧域出土遺物実測図（1/2・1/4）……110
［矢田遺跡試掘・確認調査（第2次調査）］
第84図　矢田遺跡位置図（国土地理院「亀岡」・「法貴」1/25,000）……111
第85図　矢田遺跡出土遺物実測図（1/4）……112
第86図　矢田遺跡調査区平面図・柱穴列断面図（1/80）……112
［岡田国遺跡試掘・確認調査］
第87図　岡田国遺跡隣接地点位置図　（国土地理院1/25,000「奈良」）……113
第88図　トレンチ配置図（1/2,000）……113
第89図　第1・2トレンチ平面・土層断面図（1/100）……114
［満願寺跡試掘・確認調査］（第1次調査）
第90図　満願寺跡位置図（国土地理院1/25,000「西舞鶴」）……115
第91図　満願寺跡調査区位置図（1/1,500）……115

第 92 図　調査区土層断面柱状模式図……116
第 93 図　満願寺跡出土遺物実測図（1/4）……116
［光明寺境内試掘・確認調査］（第 1 次調査）
第 94 図　光明寺境内位置図（国土地理院 1/25,000「丹波大町」）……117
第 95 図　光明寺境内　試掘トレンチ位置図（1/250）……118
第 96 図　光明寺境内西調査区西壁・東調査区東壁土層断面図（1/80）……119
第 97 図　光明寺境内出土遺物実測図（1/4）……119
［宮津城跡試掘・確認調査］（第 19 次調査）
第 98 図　宮津城跡位置図（国土地理院　1/25,000「宮津」）……121
第 99 図　宮津城跡調査区配置・周辺遺構想定復元図（1/1,000）……121
第 100 図　宮津城跡調査区平面・土層断面図（1/100）……121

付表目次

府営農業農村整備事業関係遺跡
付表 1　平成 29・30 年度調査遺跡一覧表……17
付表 2　女布遺跡第 7 次調査　地点 B 出土遺物観察表…28

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡
付表 3　調査遺跡一覧表……30
付表 4　千代川遺跡発掘調査履歴一覧……32
付表 5　千代川遺跡第 28 次　出土遺物観察表……42
付表 6　千代川遺跡第 29 次　出土遺物観察表……61
付表 7　千代川遺跡第 31 次調査　トレンチ一覧……93
付表 8　千代川遺跡第 31 次　遺物観察表……95

府内遺跡試掘・確認調査等
付表 9　平成 30 年試掘・確認調査等一覧……100

平成 28・29 年における埋蔵文化財の発掘
付表 10　平成 29 年度埋蔵文化財担当者及び埋蔵文化財包蔵地数市町村別一覧……130
付表 11　平成 29 年度埋蔵文化財関係届出・通知件数市町村別一覧……131
付表 12　土木工事等による発掘届出・通知件数一覧…132
付表 13　埋蔵文化財発掘調査届出・報告件数一覧…132
付表 14　埋蔵文化財認定件数一覧……132
付表 15　平成 30 年度埋蔵文化財国庫補助事業一覧…133
付表 16　平成 30 年度（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター委託事業一覧……134
付表 17　平成 29 年度発掘調査報告書等刊行状況…136
付表 18　平成 29 年度埋蔵文化財発掘調査届出・報告一覧…139

巻頭図版目次

恭仁宮跡第 98 次

巻頭図版第 1

掘立柱塀ＳＡ 18001・18002 検出状況（東から）

国営緊急農地再編整備事業（千代川遺跡第 29 次）

巻頭図版第 2

(1) 第 1 トレンチ完掘状況（北西から）

(2) 掘立柱建物 SB2901001 完掘状況（北から）

図版目次

恭仁宮跡第 98 次

図版第 1 (1) ＩＲ 12 Ｅ-s トレンチ全景（南西から）

(2) ＩＲ 12 Ｅ-s トレンチ北壁土層断面（南から）

図版第 2 (1) ＩＲ 12 Ｅ-s トレンチ東壁土層断面（西から）

(2) ＩＭ 22 Ｄ-s トレンチ全景（北から）

図版第 3 (1) ＩＭ 22 Ｄ-s トレンチ東壁土層断面（西から）

(2) ＩＭ17 Ｅ-s・ＩＭ16 Ｈ-s トレンチ全景（南から）

図版第 4 (1) ＩＭ 16 Ｈ-s トレンチ全景（東から）

(2) ＩＭ 16 Ｈ-s トレンチ西壁土層断面（東から）

図版第 5 (1) ＩＭ16 Ｈ-s トレンチ南西部南壁土層断面（北東から）

(2) ＩＭ16 Ｈ-s トレンチ南西部南壁土層断面（北から）

図版第 6 (1) ＳＰ 18401・402 東西土層断面（北から）

(2) ＳＰ 18401 南北土層断面（西から）

図版第 7 (1) ＳＰ 18403・404 東西土層断面（北から）

(2) ＳＰ 18405・406 東西土層断面（南から）

図版第 8 (1) ＳＰ 18407・408 東西土層断面（南から）

(2) ＳＰ 18409 東西土層断面（北から）

府営農業農村整備事業関係遺跡

［女布遺跡第 10 次調査］

図版第 9 (1) 女布遺跡遠景（東から）

(2) 第 1 トレンチ全景（西から）

(3) 第 1 トレンチ北壁土層断面（南西から）

図版第 10(1) 第 2 トレンチ南壁土層断面（北から）

(2) 第 3 トレンチ全景（南から）

(3) 第 4 トレンチ南壁土層断面（北から）

国営農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡

［千代川遺跡第 28 次調査］

図版第 11　出土遺物 (1)

図版第 12　出土遺物 (2)

図版第 13　出土遺物 (3)

［千代川遺跡第 29 次調査］

図版第 14(1) 第 1 トレンチ調査前（北西から）

(2) ＳＢ 2901001（北から）

(3) 第 1 トレンチ全景（北西から）

図版第 15(1) ＳＤ 2901022 完掘状況（北西から）

(2) ＳＤ 2901022 断面（北から）

(3) ＳＫ 2901127 断面（南から）

図版第 16　出土遺物

［千代川遺跡第 31 次調査］

図版第 17(1) 千代川遺跡第 31 次地点遠景（北から）

(2) 千代川遺跡第 31 次地点遠景（西から）

(3) 千代川遺跡第 31 次地点遠景（南から）

図版第 18(1) 第 5 トレンチＳＤ 310509 検出状況（北から）

(2) 第 10 トレンチ全景（北から）

(3) 第 13 トレンチ全景（南から）

図版第 19(1) 第 13 トレンチ土層断面（東から）

(2) 第 25 トレンチＳＫ 312502 検出状況（北から）

(3) 第 26 トレンチ全景（南から）

図版第 20(1) 第 26 トレンチ土層断面（南から）

(2) 第 29 トレンチ全景（南から）

(3) 第 42 トレンチ全景（北から）

図版第 21(1) 第 50 トレンチ全景（北から）

(2) 第 55 トレンチ全景（南から）

(3) 第 57 トレンチ全景（南から）

図版第 22(1) 第 69 トレンチ全景（南から）

(2) 第 70 トレンチＳＫ 317001 検出状況（西から）

(3) 第 70 トレンチ土層断面（北西から）

図版第 23(1) 第 71 トレンチ断割内遺構検出状況（西から）

(2) 第 72 トレンチ全景（北から）

(3) 第 72 トレンチ土層断面（北西から）

図版第 24(1) 第 73 トレンチ全景（北から）

(2) 第 78 トレンチ全景（南から）

(3) 第 78 トレンチ土層断面（南東から）

図版第 25(1) 第 79 トレンチ全景（北から）

(2) 第 80 トレンチ全景（南から）

(3) 第 81 トレンチ全景（北から）

図版第 26(1) 第 81 トレンチ土層断面（北から）

(2) 第 84 トレンチ全景（南から）

(3) 第 85 トレンチ全景（北から）

図版第 27(1) 第 89 トレンチ全景（北から）

(2) 第 94 トレンチ全景（南から）

(3) 第 97 トレンチ全景（南から）

図版第 28(1) 出土遺物 (1)

(2) 出土遺物 (2)

(3) 出土遺物 (3)

府内遺跡試掘・確認調査等

［寺町旧域・法成寺跡試掘・確認調査］

［満願寺跡第 1 次調査］

図版第 29(1) 寺町旧域・法成寺跡出土遺物 (1)

(2) 寺町旧域・法成寺跡出土遺物 (2)

(3) 満願寺跡出土遺物

［光明寺境内第 1 次調査］

［佐伯遺跡第 10 次調査］

図版第 30(1) 光明寺境内第 1 次出土遺物

(2) 佐伯遺跡第 10 次出土遺物 (1)

(3) 佐伯遺跡第 10 次出土遺物 (2)

1　恭仁宮跡平成 30 年度保存活用調査報告

（恭仁宮跡第 98 次調査）

1　はじめに

恭仁京は、聖武天皇により天平 12（740）年から同 16（744）年まで足かけ５年にわたって営まれた古代宮都である。京都府教育委員会では、近隣に及び始めた諸開発に備え、恭仁宮跡の実態解明を目的として、昭和 48 年度から継続的に調査を実施し、平成８年度には恭仁宮跡の四至を確定した。

また恭仁宮跡は、昭和 32 年に史跡山城国分寺跡として指定され、平成 19 年に史跡恭仁宮跡（山城国分寺跡）と名称変更・追加指定され、平成 20 年、22 年、27 年、29 年、30 年、31 年にさらに史跡範囲の追加指定が行われた。

平成９年度からは、恭仁宮跡の保存及び活用を図るため、宮内のより重要な地区についての詳細な内容把握を目的として、保存活用調査に着手した。内裏地区では、大極殿の北方に２つの区画施設が設けられていることを確認し、平成 16 年度には、併設された内裏東、西地区それぞれの範囲を確定するに至った。平成 24 年度からは、中心部の内部構造の解明を目的とした 10 箇年計画を策定し、調査を進めている。

本報告では、平成 30 年度に実施した第 98 次調査の略報を行う。

第１図　恭仁宮跡位置図（1/50,000）

《調査組織・平成 30 年度》

調 査 主 体　京都府教育委員会

調査責任者　京都府教育庁指導部理事　文化財保護課長事務取扱　磯野浩光（平成 30 年５月まで）
　　京都府教育庁指導部文化財保護課長　森下　衛（平成 30 年６月から）

専門家会議

　委 員 長　上原真人（京都大学名誉教授）

　副委員長　井上和人（桃山学院大学非常勤講師）

　委　　員　玉田芳英（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部長）
　　箱崎和久（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室長）

調 査 指 導　文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

技 術 協 力　金田明大（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部遺跡・調査技術研究室長）

調査担当者　京都府教育庁指導部文化財保護課記念物担当副課長　石崎善久
　　副主査　古川　匠
　　副主査　中居和志
　　技　師　岡田健吾

調査事務局　京都府立山城郷土資料館

調 査 協 力　木津川市、木津川市教育委員会、京都府山城教育局、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

現地調査及び整理作業に当たっては、多数の方々に多大な協力を得た。心より感謝したい。

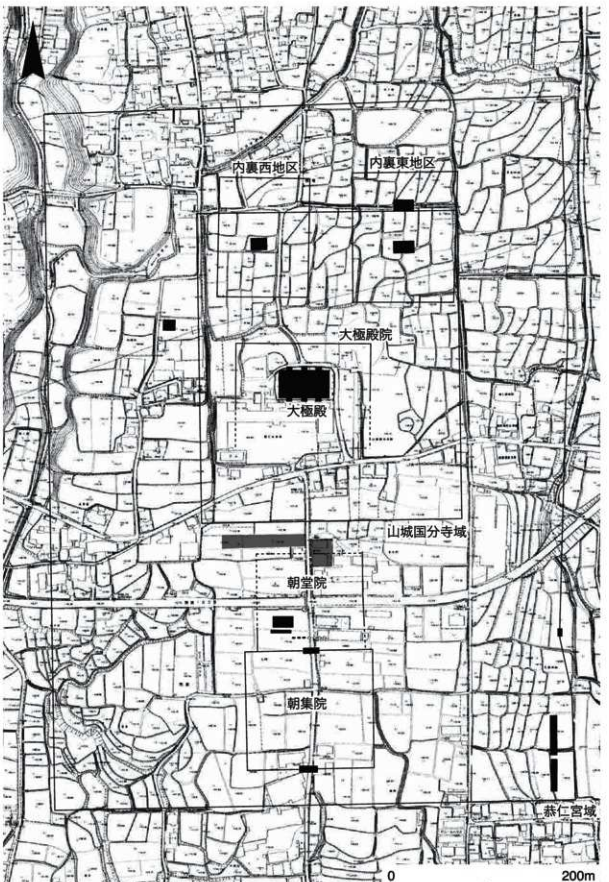
2　調査経過

京都府教育委員会による恭仁宮跡の調査は昭和 48 年度から実施しており、今年度で 46 年目を迎えた。昭和 48 年度の分布調査及び文献調査を経て、昭和 49 年度からは発掘調査に着手した。昭和 50 年度から昭和 61 年度は、宮内の重要施設を確認するため宮跡中枢域において発掘調査を実施し、大極殿院や朝堂院の区画施設、内裏に関連すると想定される建物や塀等の遺構を確認した。

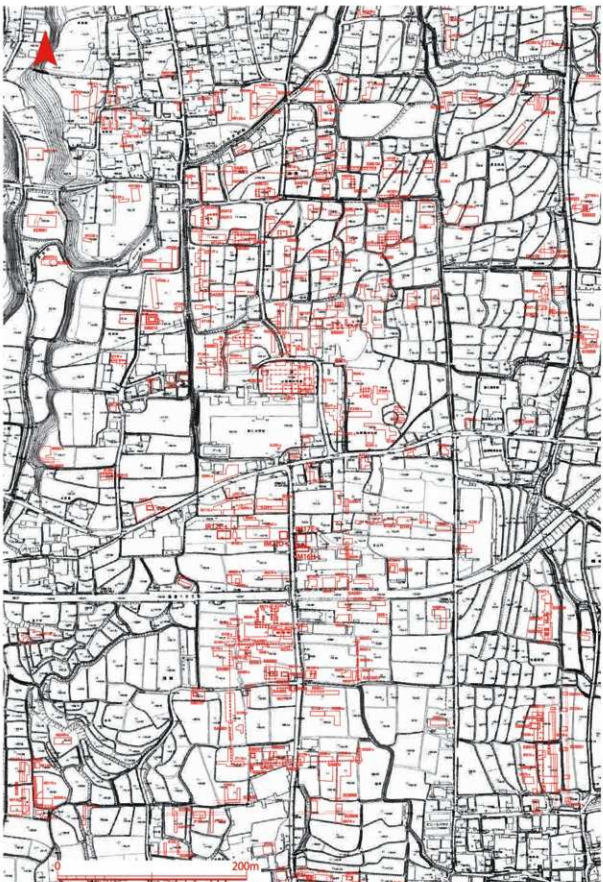
平成４年度から平成８年度に実施した調査によって、宮の四至が南北約 750 m、東西約 560 mであることが確定した。その後も、恭仁宮跡の保存活用を検討する上で、必要な資料を得ることを目的として継続的に調査を進めている。宮跡主要地区での調査成果の概要は下記のとおりである。

内裏地区

平成９年度の調査により、大極殿院の北方に、東西に並ぶ２つの区画施設の存在を確認した。他の宮都では、内裏が存在する位置にあるこれらの区画施設については、現時点ではその性格等の把握が十分ではないため、暫定的に両者を含め「内裏地区」とし、両者を区別する場合には、「内裏西地区」、「内裏東地区」とそれぞれ呼称している。



第２図　調査地位置図（1/4,000）



第 3 図　恭仁宮跡主要遺構図（1/4,000）

「内裏西地区」は、東西約 97.9 m（約 330 尺）、南北約 127.4 m（約 430 尺）の範囲を掘立柱塀で区画するものである。区画内部の建物配置は、中心建物と思われる四面庇の東西棟建物ＳＢ 5303 のほかに２棟の存在が確認されている。

「内裏東地区」は、中心建物と見られる２棟の東西棟庇付き建物が南北に並び、東・西・南の３辺を築地、北辺を掘立柱塀で区画する。東西約 109.3 m（約 370 尺）、南北約 138.9 m（約 470 尺）の規模に復元することができる。

大極殿院地区

大極殿院地区では、昭和 51 年度に大極殿基壇ＳＢ 5100 を調査し、13 基の礎石痕跡と階段等を検出し大極殿の規模が確定した。また、昭和 53 年度には、大極殿の東方で南北に２列に並んだ柱列ＳＡ 5301・5302 を検出し、回廊構築に伴う足場杭列との判断がなされた。しかし、これら以外には、大極殿院地区に係る施設（築地回廊や後殿の配置等）についての手がかりは得られていなかった。

こうした中、平成 15 年度から大極殿院回廊の解明を目的とした新たな調査に着手し、平成 17 年度の大極殿院北東部における調査において、掘立柱建物ＳＢ 0501 を検出した。南北４間、東西 10 間の総柱建物で、南北 11.34 m、東西 42.75 m を測る。この建物は、恭仁宮の仮設的な建物あるいは僧坊など山城国分寺の関連施設と考えられる。また、平成 18･19 年度に大極殿の西北側で実施した調査で、大極殿院築地回廊の西北隅付近を確認した。両年度の調査では、大極殿院西面築地回廊に係る礎石抜取り痕跡を計 10 基９間分、北面築地回廊に係る同様の礎石抜取り痕跡を５基検出した。さらには北・西辺の外側を廻る雨落溝を検出し、西北隅部を明らかにすることができた。この成果により、大極殿院の東西幅は 480 尺（141.5 m）で設計されたものと判断され、北面築地回廊（ＳＡ 0701）南側柱と大極殿基壇北端の間におよそ 95 尺（約 28.1 m）の空閑地が存在していたことが判明した。

大極殿院回廊の南北長を明らかにするため平成 22 年度から平成 24 年度にかけて調査を行った。これらの調査においては、南面回廊の礎石の抜き取り痕跡の可能性がある遺構ＳＸ 12101 などを検出したが、確定には至らなかった。

朝堂院・朝集院地区

朝堂院の区画は、北辺を除く区画施設については、その徴候のある遺構が確認されてきたが、平成 21 年度調査によって、西辺と南辺がそれぞれＳＡ 0902、ＳＡ 0901 に訂正されることとなった。この成果によって、朝堂院の東西幅は 390 尺（約 115.8 m）であることが確定し、大極殿の中心から朝堂院南辺のＳＡ 0901 までの距離は、940 尺（約 280 m）となった。平成 26 年度調査では、朝堂院南門を検出した。また、平成 24 年度調査において、朝堂建物跡をはじめて検出した。この建物は平成 25・26 年度の調査で南北２棟が重複する東西棟の掘立柱建物であることが判明した。また、平成 29 年度の調査で朝堂院東面掘立柱塀北端の柱穴を検出した。

朝集院の区画については、西辺がＳＡ 5901、南辺がＳＡ 6202 であることが確定している。また、朝集院南門と考えられるＳＢ 6305 の存在も確認されている。平成 28 年度の調査で北東隅を確認したことで、朝集院の四至が確定し、規模は南北が 420 尺、東西は 450 尺であることが確定した。

3　第98次調査

平成30年度第98次調査は、大極殿院南面回廊及び南門の検出を目的に実施した。6月5日及び11月7日に、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の技術協力を得て大極殿院・朝堂院地区で地中レーダー探査を実施した。探査の結果については次年度以降報告する。8月16日からトレンチ設定予定地点の測量などを実施し、8月22日から掘削作業を開始した。9月19日には恭仁小学校児童を対象に体験発掘を実施した。恭仁宮跡調査専門家会議を11月28日に開催し、調査成果の検討を行った。平成31年1月16日に報道発表を行い、1月19日の現地説明会は約140名の参加者を得た。1月29日に埋め戻しを含めた現地での作業を全て完了した。調査面積は350㎡で、瓦や陶器片などコンテナ1箱分の遺物が出土した。

（1）既往の調査成果と今年度の調査トレンチの位置（第2・3図）

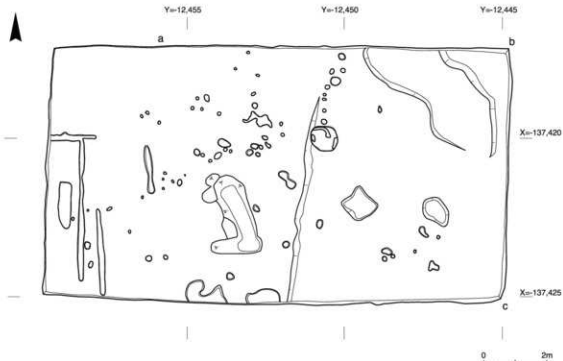
これまで未確定の大極殿院地区と朝堂院地区の境界を解明するため、近隣地点では断続的に調査が実施されてきた。

大極殿院地区では、平成22年度から24年度に実施された第88、89、90次調査[1][2]で、大極殿院西面及び南面回廊の検出を目的とした調査が実施されている。大極殿正面の恭仁小学校南面には幅100m以上、高さ約1mの高低差が存在し、平成22年度以前に想定された復元案[2]（第1案）では、大極殿院南限地点に相当する。恭仁小学校校門付近に設定した第88次ＩＬ23Ｇ-sトレンチでは、ほぼ垂直に0.8m以上落ちる中世以前の段差ＳＸ101を検出し、人為的な盛土で形成されたことが推定された。第1案を補強する成果である。しかし、ＩＬ23Ｇ-sトレンチから約65m南の第88次ＩＱ06Ｕ-sトレンチ及び第89次ＩＱ11Ｕ-sトレンチで、大極殿院南面回廊礎石の抜取り痕跡の可能性がある遺構ＳＰ201、ＳＰ202、ＳＸ11201が検出された。この結果、大極殿院南限を第1案よりも南に復元する案が新たに提示された[1]（第2案）。ただし、大極殿院南面回廊礎石抜取り痕跡の可能性のある遺構は位置こそ南面回廊礎石に相当するものの、残存状況が悪く、また、埋土内には礎石に伴う根石等が確認されていない。遺構単体では礎石抜取り痕跡と確定できず、性格は不明である。

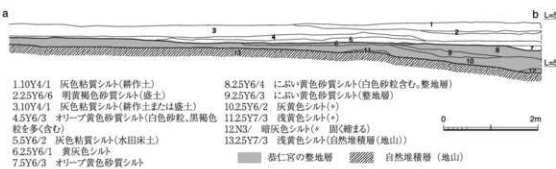
平成29年度の調査では、第2案の大極殿院南面回廊及び大極殿院南門に相当する位置にＩＬ22Ｕ-sトレンチ、大極殿院南面回廊と朝堂院東面掘立柱塀ＳＡ5501の接続地点と想定される地点にＩＬ06Ｕ-sトレンチを設定したが、いずれも顕著な遺構が確認されなかった。しかし、ＩＬ06Ｓ-sトレンチから約50m南に設定したＩＬ06Ｕ-sトレンチで、朝堂院東面掘立柱塀ＳＡ5501の柱穴列の北限を確定することができた。その結果、第2案より140尺南の位置に大極殿院南面回廊を想定する復元案（第3案）[2]を新たに提示することとなった。

平成29年度に提示した第3案は、遺構の不明瞭な第1、2案と比べると蓋然性の高い案と判断されたため、平成30年度の調査では第3案で想定される大極殿院西面回廊南部にＩＲ12Ｅ-sトレンチ、大極殿院南門北西部にＩＭ22Ｄ-sトレンチ、大極殿院南門東部にＩＭ17Ｅ-sトレンチを設定した。そして調査の進捗状況を踏まえ、ＩＭ17Ｅ-sトレンチの南隣にＩＭ16Ｈ-sトレンチを設定

し、調査を実施した。



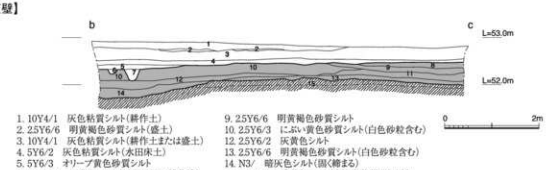
【北壁】



1.10Y4/1　灰色粘質シルト(耕作土)
2.25Y6/6　明黄褐色砂質シルト(盛土)
3.10Y4/1　灰色粘質シルト(耕作土または盛土)
4.5Y6/3　オリーブ黄色砂質シルト(白色砂粒、黒褐色粒を多く含む)
5.5Y6/2　灰色粘質シルト(水田床土)
6.2.5Y6/1　黄灰色シルト
7.5Y6/3　オリーブ黄色砂質シルト
8.2.5Y6/4　にぶい黄色砂質シルト(白色砂粒含む、整地層)
9.2.5Y6/3　にぶい黄色砂質シルト(整地層)
10.2.5Y6/2　灰黄色シルト(×)
11.2.5Y7/3　浅黄色シルト(×)
12.N3/　暗灰色シルト(× 固く締まる)
13.2.5Y7/3　浅黄色シルト(自然堆積層(地山))

恭仁宮の整地層　自然堆積層（地山）

【東壁】



1. 10Y4/1　灰色粘質シルト(耕作土)
2. 2.5Y6/6　明黄褐色砂質シルト(盛土)
3. 10Y4/1　灰色粘質シルト(耕作土または盛土)
4. 5Y6/2　灰色粘質シルト(水田床土)
5. 5Y6/3　オリーブ黄色砂質シルト
6. 2.5Y6/2　灰黄色シルト(近世以降の耕作溝)
7. 2.5Y6/2　灰黄色シルト(近世以降の耕作溝)
8. 7.5Y6/1　灰色砂質シルト
9. 2.5Y6/6　明黄褐色砂質シルト
10. 2.5Y6/3　にぶい黄色砂質シルト(白色砂粒含む)
12. 2.5Y6/2　灰黄色シルト
13. 2.5Y6/6　明黄褐色砂質シルト(白色砂粒含む)
14. N3/　暗灰色シルト(固く締まる)
15. 2.5Y7/3　浅黄色シルト(自然堆積層(地山))

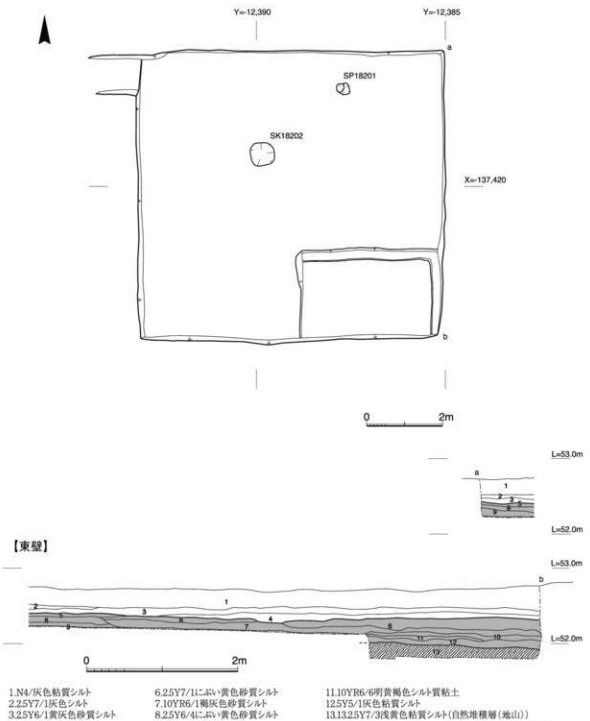
恭仁宮の整地層　自然堆積層（地山）

第４図　ＩＲ１２Ｅ-ｓトレンチ平面図(1/120)・土層断面図（1/80）

（2）ＩＲ 12 Ｅ -s トレンチ（第４図）

ＩＲ 12 Ｅ -s トレンチでは、近年まで水田耕作が行われており、南北方向の畦畔が存在した。この畦畔の位置が大極殿院西面回廊想定位置とほぼ合致するため、畦畔を含めた範囲に東西に長いトレンチを設定した。

しかし、畦畔の直下を含め、恭仁宮期の構造物に伴う遺構は確認されなかった。トレンチの全面で



第５図　ＩＭ 22 Ｄ -s トレンチ平面図 (1/100)・土層断面図（1/50）

不定形な小穴が分布するが、不規則な分布であることから、柵等の遺構や人為的な植栽痕ではなく、自生植物の根痕と判断される。また、トレンチの現地形は水平な地形であるが、堆積状況を見ると、トレンチ西部では地表下0.4 mの標高52.6m で、自然堆積層（いわゆる「地山」）が検出されるのに対し、トレンチ中央部から東部の堆積状況を見ると、自然堆積層が西から東に向かって緩やかに傾斜が下がり、トレンチ北東端部では、自然堆積層が検出されるのは地表下1.05 mの標高51.8m である。

この地形の直上には、他のトレンチで検出された恭仁宮の整地層と共通する土質の層が堆積し、この層の上面は水平である。すなわち、恭仁宮造成に伴って、緩やかに起伏していた地形が平坦に造成されたことが分かる。ちなみに、恭仁宮整地層上面の標高は52.5 ～ 52.7 mである。

整地層以外に顕著な遺構は検出されず遺物の出土量もほぼ皆無であった。したがって、大極殿院西面回廊が存在したとすれば、顕著な削平を後世に受けたと考えられる。または、この地点には大極殿院西面回廊が構築されなかった可能性も想定される。

（3）ＩＭ22Ｄ-sトレンチ（第5図）

大極殿院南門北西隅部想定位置に設定したトレンチである。地表下0.3 ～ 0.4m の深さで、恭仁宮期の整地層がトレンチ全面を覆っていることを確認した。整地層上面の標高は約52.3m である。調査当初に想定した、大極殿院南門に関連する遺構は検出されなかった。遺構は希薄で、全長0.2 mの小型柱穴ＳＰ18201と、全長0.5m の隅丸方形の土坑SK18202に限られ、遺構配置には規則性も認められない。遺物の出土量も僅少である。

なお、当初の想定では、トレンチ中央部から南部にかけて大極殿院南門基壇が存在する可能性があったため、大極殿院南門に伴う地業の有無を確認するためにトレンチ東部で整地層を南北に断ち割ったが、整地層は水平に堆積しており、地業の痕跡は確認されなかった。

（4）ＩＭ17Ｅ-sトレンチ（第6・7図）

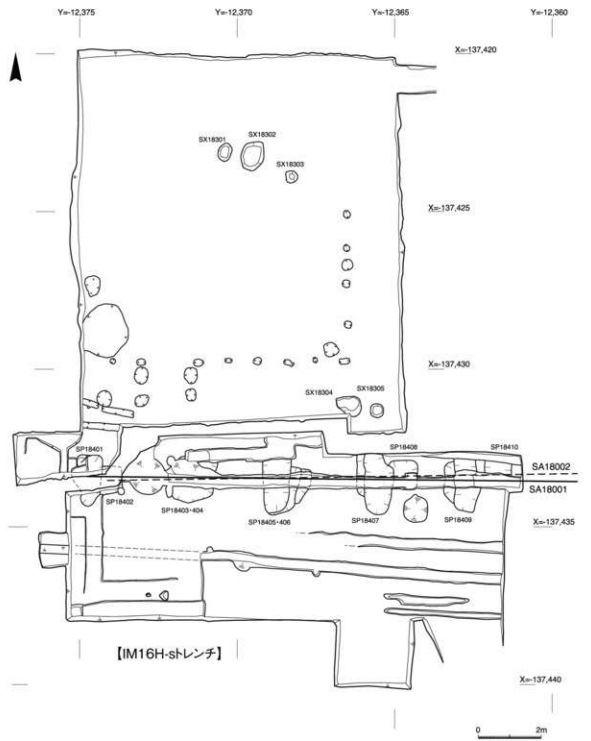
大極殿院南門南東部に該当する位置に設定したトレンチである。地表下0.3 ～ 0.4m の深さで、恭仁宮期の整地層がトレンチ全面を覆っていることを確認した。整地層上面の標高は約52.5m である。整地層上面で確認された遺構は、トレンチ南部及び東部の現代家屋に伴う撹乱だけである。

ＩＭ22Ｄ-sトレンチと同様に、大極殿院南門基壇が存在する可能性があったたため整地層を掘り下げたが、掘込地業等は確認されなかった。性格不明遺構SX18301 ～ 18305を検出したが、遺物が全く含まれず、恭仁宮期以前の自然地形の落ち込みの可能性が高い。

（5）ＩＭ16Ｈ-sトレンチ（第6・8図）

ＩＭ17Ｅ-sトレンチの南隣に追加で設定したトレンチである。平成29年度第97次調査ＩＬ06Ｕ-sトレンチで検出した朝堂院東面掘立柱塀北端柱穴から、ほぼ真西の位置にあたる。

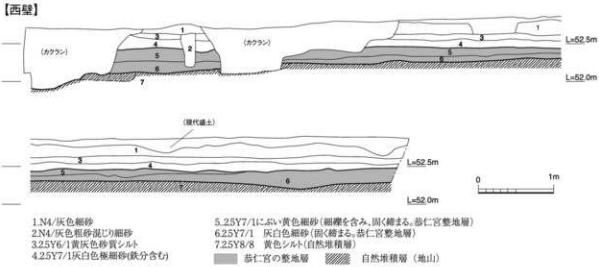
地表下約0.4 mの標高52.2m で、恭仁宮整地層を確認した。整地層は東から西にかけて、そして北から南にかけて顕著に厚く堆積する。西壁と南壁の土層（第8図）から、恭仁宮以前の旧地形は北東



第６図　ＩＭ17Ｅ-s・ＩＭ16Ｈ-sトレンチ平面図（1/120）

から南西に向かって深くなる地形で、恭仁宮造営に伴って水平に整地されたと推定される。

トレンチの北端部で、東西方向の掘立柱塀ＳＡ18001（ＳＰ18401、403、405、407、409）、18002（ＳＰ18402、404、406、408）を検出した。柱穴の重複関係から、ＳＡ18002の方が古い。ＩＭ16Ｈ-sトレンチでは柱穴列の西端を確認できないため、北隣のＩＭ17Ｅ-sトレンチを南西に拡張したが、



第７図　ＩＭ17 Ｅ-s トレンチ土層断面図（S=1/50）

柱穴ＳＰ 18401 から西には柱穴が確認されなかった。したがって、ＳＰ 18401 が掘立柱塀ＳＡ 18001 の西端と考えられる。

ＳＡ 18001、18002 を構成する柱穴は東西方向の溝状の撹乱と重複するため、撹乱を利用して土層断面観察を行った。

ＳＰ 18401（第９図）　柱穴の平面規模は東西長 0.8 m以内、南北長は不明である。柱抜取り痕の規模は東西 1.0 m、南北 1.6m を測る。柱抜取り痕埋土には礫が多く含まれる。柱穴中央部が調査不可能であるため、柱の正確な位置と深さは不明である。

ＳＰ 18402（第９図）　柱穴の平面規模は南北長 0.9m、東西長も同規模と推測される柱穴である。

ＳＰ 18403・404（第９図）　撹乱と大部分が重複するため、単独または複数の柱穴か不明であるが、この地点以外は、ＳＡ 18001、18002 を構成する柱穴が重複あるいは隣接して検出されることから、この地点でも２基の柱穴の重複を想定する。土層断面で確認できる掘方は１基分であるが、柱穴東西長は 1.0 m、柱抜取り痕東西長は 1.5m である。柱抜取り痕埋土には礫が多く含まれる。

ＳＰ 18405（第 10 図）　柱掘方は東西 1.2m、南北長 1.5m、深さ 0.8 m を測り、柱抜き取り痕跡は南北長 1.7 m以上、東西長 0.95m、深さ 0.9m 以上を測る。柱抜取り痕埋土に礫が多く含まれる。

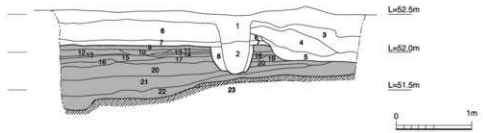
ＳＰ 18406（第 10 図）　SP18405 と大部分が重複し、SP18405 より先行する。柱穴規模はやや小さく、南北長 1.1m を測る。埋土内には礫が含まれない。

ＳＰ 18407（第 10 図）　柱穴の平面規模は南北 1.3m 以上、東西長約１ｍを測る。SP18407 を遺構底まで掘削したところ、柱抜取り痕の深さは 0.95 m を測る。また、柱抜取り痕埋土底部付近に大型の礫が多く含まれる。

ＳＰ 18408（第 10 図）　柱穴平面規模は 0.9m 四方を測る。平面、土層断面の両方で柱抜取り痕が確認されなかった。遺構埋土には礫が含まれないのも特徴である。

ＳＰ 18409（第 11 図）　柱穴の平面規模は南北 1.4m 以上、柱抜取り痕は南北 1.8 m以上を測る。柱抜取り痕が柱穴掘方の大部分を破壊する他の柱穴に対して、ＳＰ 18409 は柱穴掘方埋土が堆積を乱さ

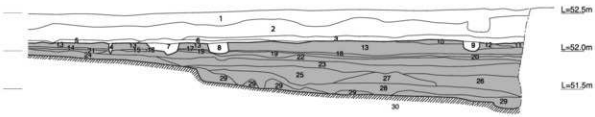
【西壁】



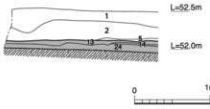
1. 2.5Y6/1　黄灰色シルト（礫多量に含む。現代盛土）
2. 10YR6/1　灰色粘質シルト（近現代溝埋土）
3. 7.5Y6/1　灰色砂質シルト（カクラン）
4. 7.5Y6/3　オリーブ黄色砂質シルト（カクラン）
5. 10BG5/1　青灰色粘土（カクラン）
6. 2.5Y5/1　黄灰色粘質シルト
7. 2.5Y6/1　黄灰色砂質シルト
8. 10YR6/2　灰黄褐色シルト（近世溝埋土）
9. 10YR7/6　明黄褐色砂質シルト
10. 10YR7/6　明黄褐色砂質シルト
11. 10YR7/3　にぶい黄橙色粘質シルト
12. 10YR7/3　にぶい黄橙色粘質シルト
13. 7.5Y7/1　灰白色極細砂
14. 5Y7/3　浅黄色砂質シルト
15. 2.5Y6/6　明黄褐色粘土
16. 2.5Y6/1　黄灰色粘質シルト
17. 5Y7/3　浅黄色砂質シルト
18. 5Y7/3　浅黄色砂質シルト
19. 5Y7/3　浅黄色シルト
20. 2.5Y8/4　浅黄色粘土
21. 2.5Y8/3　淡黄色粘土
22. N4/　灰色砂質シルト
23. 2.5Y6/3　にぶい黄色粘質シルト（自然堆積層（地山））

恭仁宮の整地層　自然堆積層（地山）

【南壁西部】



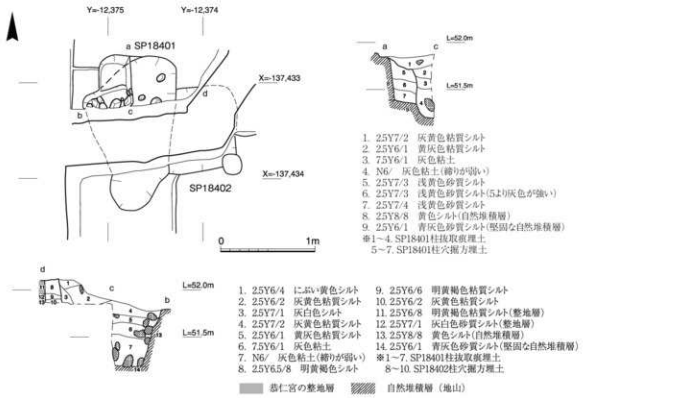
1. 西壁第 1 層と同一層
2. 西壁第 6 層と同一層
3. 西壁第 7 層と同一層
4. 10YR7/4　にぶい黄橙色砂質シルト
5. 10YR7/4　にぶい黄橙色シルト
6. 10YR6/1　褐灰色シルト
7. 10YR7/1　灰白色シルト（近世溝埋土）
8. 10YR7/1　灰白色シルト（近世溝埋土）
9. 10YR7/1　灰白色シルト（近世溝埋土）
10. 10YR6/4　にぶい黄橙色粘質シルト
11. 西壁第 9 層と同一層
12. 10YR6/4　にぶい黄橙色粘質シルト
13. 西壁第 12 層と同一層
14. 西壁第 13 層と同一層
15. 7.5Y7/1　灰白色砂質シルト
16. 7.5Y7/1　灰白色シルト
17. 西壁第 13 層と同一層
18. 西壁第 13 層と同一層
19. 西壁第 15 層と同一層
20. 西壁第 15 層と同一層
21. 10YR6/6　明黄褐色粘土
22. 西壁第 16 層と同一層
23. 西壁第 20 層と同一層
24. 7.5Y6/1　褐灰色砂質シルト
25. 西壁第 21 層と同一層
26. 西壁第 21 層と同一層
27. 10YR6/1　褐灰色粘質シルト
28. 2.5Y8/3　淡黄色粘土
29. 西壁第 22 層と同一層
30. 2.5Y6/3　にぶい黄色粘質シルト（自然堆積層（地山））



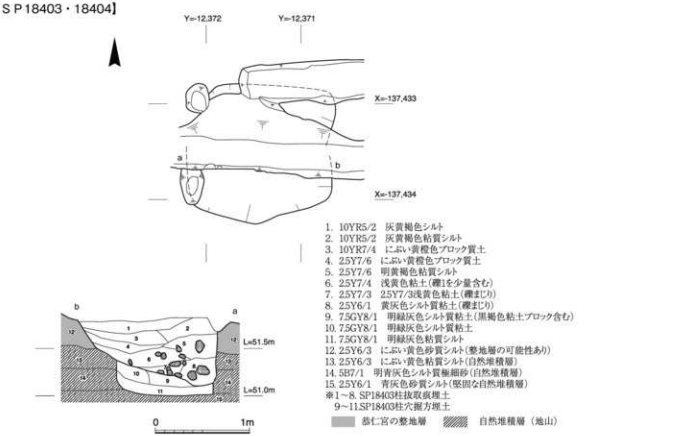
恭仁宮の整地層　自然堆積層（地山）

第 8 図　ＩＭ 16 Ｈ -s トレンチ土層断面図（1/50）

【ＳＰ18401・18402】

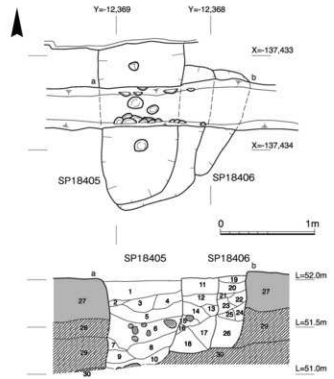


【ＳＰ18403・18404】



第９図　ＳＰ 18401 ～ 18404 平面・土層断面図（1/40）

【ＳＰ18405・18406】

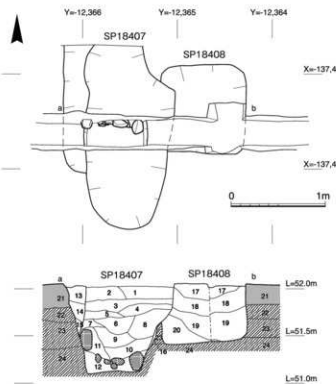


1. 2.5Y6/3　にぶい黄色シルト
2. 7.5Y6/1　灰色砂質シルト
3. 7.5Y6/1　灰色シルト
4. 7.5Y5/1　灰色シルト
5. N6/　灰色粘土
6. N6/　灰色粘土（礫多量）
7. 7.5Y6/1　灰色シルト
8. 10BG7/1　明青灰色粘土（礫まじり）
9. 10BG7/1　明青灰色粘土
10. 5BG7/1　明青灰色シルト混じり粘土
11. 5Y7/3　浅黄色砂質シルト
12. 5Y6/2　灰オリーブ色砂質シルト
13. 5Y6/1　灰色シルト
14. N5/　灰色シルト
15. 2.5Y7/4　浅黄色粘土
16. 10BG7/1　明青灰色粘土
17. 5Y7/4　浅黄色粘土
18. 2.5GY7/1　明オリーブ灰色粘質シルト
19. 2.5Y6/2　灰黄色シルト
20. 2.5Y7/4　浅黄色シルト
21. 7.5Y6/2　灰オリーブ色シルト
22. 2.5Y6/2　灰黄色砂質シルト
23. 7.5Y6/1　灰色シルト
24. N5/　灰色粘土
25. 2.5Y7/6　明黄褐色シルト
26. 2.5Y7/2　灰黄色砂質シルト
27. 2.5Y6/3　にぶい黄色砂質シルト（整地層か）
28. 2.5Y6/3　にぶい黄色粘質シルト（自然堆積層）
29. 5B7/1　明青灰色シルト質極細砂（自然堆積層）
30. 2.5Y6/1　青灰色砂質シルト（堅固な自然堆積層）

※1～10．SP18405柱抜取痕埋土
11～18．SP18405柱穴掘方埋土
19～26．SP18406柱穴掘方埋土

恭仁宮の整地層　自然堆積層（地山）

【ＳＰ18407・18408】

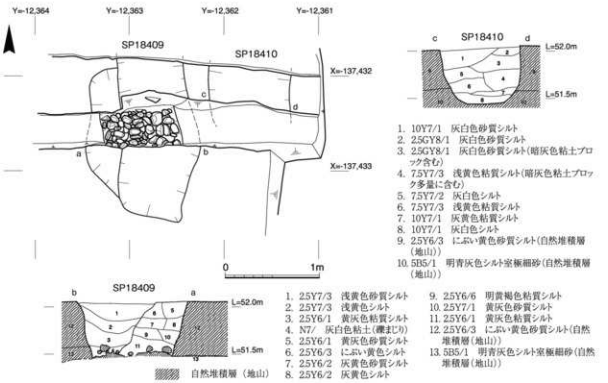


1. 2.5Y6/4　にぶい黄色シルト
2. 2.5Y6/4　にぶい黄色砂質シルト
3. 2.5Y5/3　黄褐色砂質シルト
4. 2.5Y5/3　黄褐色粘質シルト
5. 2.5Y7/3　黄褐色シルト
6. N6/　灰色粘質シルト
7. 2.5Y5/4　黄褐色シルト
8. N6/　灰色シルト黄褐色ブロック混じり
9. N5/　灰色粘土
10. 2.5Y7/　灰白色シルト質粘土
11. N5/　灰色粘質シルト
12. 2.5Y7/　灰白色シルト質粘土（軟質）
13. 2.5Y6/4　にぶい黄色砂質シルト
14. 2.5Y5/3　黄褐色砂質シルト
15. N7/　灰色シルト
16. 2.5GY8/1　灰白色粘土
17. 2.5Y6/3　にぶい黄色砂質シルト
18. 2.5Y5/4　黄褐色シルト
19. 2.5Y7/3　浅黄色粘土（黒褐色粘土ブロック含む）
20. N7/　灰白色シルト質粘土
21. 2.5Y6/3　にぶい黄色砂質シルト（整地層か）
22. 2.5Y6/3　にぶい黄色粘質シルト（自然堆積層）
23. 5B7/1　明青灰色シルト質極細砂（自然堆積層）
24. 2.5Y6/1　青灰色砂質シルト（堅固な自然堆積層）

※1～12．SP18407柱抜取痕埋土
13～16．SP18407柱穴掘方埋土
17～20．SP18408柱穴掘方埋土

恭仁宮の整地層　自然堆積層（地山）

第 10 図　ＳＰ 18405 ～ 18408 平面・土層断面図（1/40）



第 11 図　　S P 18409・18410 平面・土層断面図（1/40）

れずに残っている。柱穴掘方埋土は遺構検出面から 0.6m の深さで礫が水平に堆積していた。

S P 18410（第 11 図）　東西長 0.9m、深さ 0.6m の柱掘方を検出した。柱痕跡は確認されなかった。

S A 18001 を構成する柱穴 S P 18401、403、405、407、409 は、柱抜取り痕埋土に礫が含まれるのが特徴である。このうち S P 18409 は、柱抜取りの影響が軽微で柱掘方埋土が良好に残存し、礫が水平に敷かれた状態で検出された。この礫は柱設置の段階で根巻石として機能したと考えられる。その他の S P 18401、403、405、407 の柱抜取り痕埋土に含まれる礫も、根巻石が柱抜取り段階に廃棄されたものと想定して矛盾はない。したがって、S A 18001 は、各柱を設置する際に根巻石を敷く工法で施工されたと考えられる。

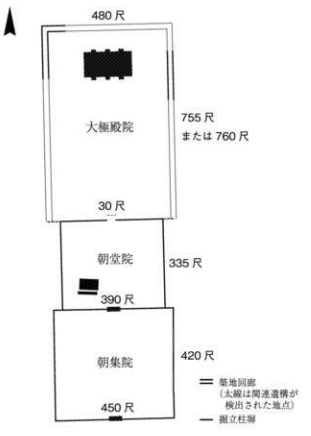
S A 18002 を構成する柱穴 S P 18402、404、406、408、410 は、柱抜取り痕等の柱を立てた痕跡が確認されなかった。したがって、S A 18002 は各柱穴が掘られたものの、掘立柱塀は実際には設置されなかった可能性が高い。

S A18001 の西端に位置する柱穴 S P 18401 は、恭仁宮大極殿院中軸線から 15 尺東に位置する。通常であれば大極殿院南門が想定される位置である。しかし、S P 18401 の南北では対応する控え柱の柱穴が検出されなかった。また、礎石に伴う根石を据えた痕跡や瓦類の出土も確認されず、掘立柱と礎石を併用する瓦葺の門の存在も想定しがたい。さらに、S P 18401 と大極殿院中軸線との位置関係から、全長 30 尺の門または通路の存在が想定される。仮に中央扉口が広い三間門であれば S P 18401 から西に 10 尺以内の位置に柱穴または礎石据付痕が存在するはずであるが、遺構は確認されなかった。したがって、大極殿院中軸線をはさんで S P 18401 から 30 尺西の地点までは中間に柱穴が存在せず、二本柱門と想定される。ただし、扉口幅が 30 尺まで達し、棟木や横架材の存在は想定

しがたい[5]。また、ＳＡ 18001 西端柱穴のＳＰ 18401 の規模は他の柱穴と変わらず、大型の柱の存在は想定しがたい。

したがって今回の発掘調査からは、恭仁宮大極殿院中央には顕著な南門が存在せず、掘立柱塀の間に、簡素な通路状の施設だけが存在した可能性を想定する（第 12 図）。

なお、今回の調査で朝堂院南北長は 335 尺で確定したが、大極殿院は北面中心の遺構位置や詳細な造営尺が不明であるため確定することができない。現段階では計算上 755 尺または 760 尺と推定する。



第 12 図　恭仁宮中央部の復元案

4　まとめ

今年度の恭仁宮跡保存活用調査では、大極殿院と朝堂院の境界で、東西方向の掘立柱塀ＳＡ 18001 が検出された。昭和 48 年度以来実施されてきた近隣の発掘調査では、このほかに大極殿院南面区画施設の候補となる遺構は確認されておらず、ＳＡ 18001 が大極殿院南面掘立柱塀である可能性は高い（第 12 図）。

しかし、大極殿院区画施設は北、西、東面は築地回廊であるため、南面だけが掘立柱塀という特異な構造となる。東、西面の築地回廊とどのように接続するのか、今後の検証が必要である。また、今年度の調査では大極殿院南門遺構が確認されなかった。古代宮都では、大極殿院南門は大極殿院南面中心に位置し礎石立ちで重層の瓦葺建物であるため、恭仁宮大極殿院は、極めて特異な構造の施設と想定せざるを得ない。今後も近隣の調査を継続し、ＳＡ 18001 の確実な位置づけを図る必要がある。

（古川　匠）

（注）

（1）京都府教育委員会 2011『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成 22 年度）』
京都府教育委員会 2012『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成 23 年度）』
京都府教育委員会 2013『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成 24 年度）』

（2）足利健亮 1969「恭仁京の歴史地理学的研究　第１報－現景観の観察・測定にもとづく朝堂院・内裏・宮城および右京「作り道」考」－」『史林』52－3　史学研究会
奈良康正 2011「恭仁宮大極殿院考」『京都府埋蔵文化財論集』第６集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

（3）京都府教育委員会 2012『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成 23 年度）』

（4）京都府教育委員会 2018『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成 29 年度）』

（5）独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 2011『官衙と門』第 13 回古代官衙・集落研究会報告書

2　府営農業農村整備事業関係遺跡

平成 29・30 年度発掘調査報告

京都府教育委員会では、府農林水産部が進める府営農業農村整備事業に係る埋蔵文化財の取扱いについて同部農村振興課と協議を行い、埋蔵文化財の保護と同事業との調整を図っている。事業着手前には、事業地内における埋蔵文化財包蔵地に対し、試掘・確認調査を実施して遺構・遺物の広がり等の詳細な内容を把握するとともに、やむを得ず本調査の必要な部分については、それぞれ関係する広域振興局と府及び各市町教育委員会との間で協定書を締結し、発掘調査を実施している。

平成 29、30 年度の府営農業農村整備事業に係る発掘調査は、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。その内訳は、本調査６件である（付表 1）。

平成 29、30 年度の調査組織及び関係機関は以下の通りである。調査期間中に協力いただいた関係機関及び関係者の方々には記して感謝したい。

《調査組織》

平成 29 年度

調 査 主 体　京都府教育委員会

調査責任者　京都府教育庁指導部理事　文化財保護課長事務取扱　磯野浩光

調査担当者　京都府教育庁指導部文化財保護課記念物担当副課長　石崎善久

副主査　中居和志

技　師　桐井理揮

技　師　北山大熙

平成 30 年度

調 査 主 体　京都府教育委員会

調査責任者　京都府教育庁指導部理事　文化財保護課長事務取扱　磯野浩光（５月まで）

付表 1　平成 29・30 年度調査遺跡一覧表

1　京都府教育委員会が実施した調査

遺跡名	所在地	現地調査期間
女布遺跡（第７次）	京丹後市久美浜町女布地内	平成 29 年５月 26 日～平成 29 年９月８日
女布遺跡（第 10 次）	京丹後市久美浜町女布地内	平成 30 年６月 25 日～平成 30 年７月６日

2　その他の機関が実施した調査

遺跡名	所在地	調査機関
女布遺跡（第６・９次）	京丹後市久美浜町女布地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
女布遺跡（第８・11 次）	京丹後市久美浜町女布地内	京丹後市教育委員会

	京都府教育庁指導部　文化財保護課長		森下　衛（6月から）
調査担当者	京都府教育庁指導部文化財保護課記念物担当	副課長	石崎善久
		副主査	中居和志
		技　師	北山大照
		技　師	川崎雄一郎

調査事務局　京都府教育庁指導部文化財保護課

調 査 協 力　京丹後市教育委員会、京丹後市久美浜町女布区、京都府農林水産部農村振興課、京都府丹後広域振興局、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都府丹後教育局、京都府立丹後郷土資料館

［1］女布遺跡第７・10 次調査

1　はじめに

女布遺跡は、京丹後市久美浜町字女布に所在する。府営農業農村整備事業が実施されることから、関係部局との調整を経て、今年度は事業予定地の中で工事による掘削が遺構面に及ぶ水路部分に 4 箇所のトレンチを設定し、発掘調査を実施した。調査期間は平成 30 年 6 月 25 日から同 7 月 6 日で、調査面積は 25㎡である（第 10 次調査）。また、平成 29 年 9 月に実施した第 7 次調査は昨年度すでに概要を報告済みであるが、遺物の整理作業が完了したため、改めて報告する。

2　位置と環境

女布遺跡は、佐濃谷（まのたに）川右岸の扇状地上に位置する縄文時代から近世にかけての集落跡である。遺跡内には、佐濃谷川流域で唯一、式内社に比定される賓布（ひめ）神社が位置している。女布遺跡の報告は、昭和 28 年の耕地整理に伴い安井良三氏によって調査が行われたのが初出であり、弥生時代中期後半から古墳時代中期前半の土器、大型の石包丁及び奈良時代の土師器・須恵器が出土遺物として報告されている[1][2]。遺物が出土した詳細な位置は明らかではないが、小字黒田の近辺で 45㎝程掘削したところで黒色土層がみられ、その 15 ～ 60㎝下層から出土したという[1]。また、『熊野郡誌』の記述によると、賓布神社の参道から南に約 70m の地点に寺院の礎石と推定される「巨石」が存在したとされるが、安井氏が耕地整理に伴う調査で現地に赴いた際にはすでに取り除かれた後であったといい、詳細は不明である。これまでの調査では、遺跡地内の広い範囲で径 40㎝を超える大礫を含む堆積を確認しており、この「巨石」も自然堆積物の可能性はあるが、今後の開発の際には注意が必要である。平成 4 年度には京都府教育委員会が丹後国営農地開発事業に伴い立会調査を行ったが、顕著な遺物・遺構は確認されず[3]、女布遺跡の実態は不明瞭なままであった。

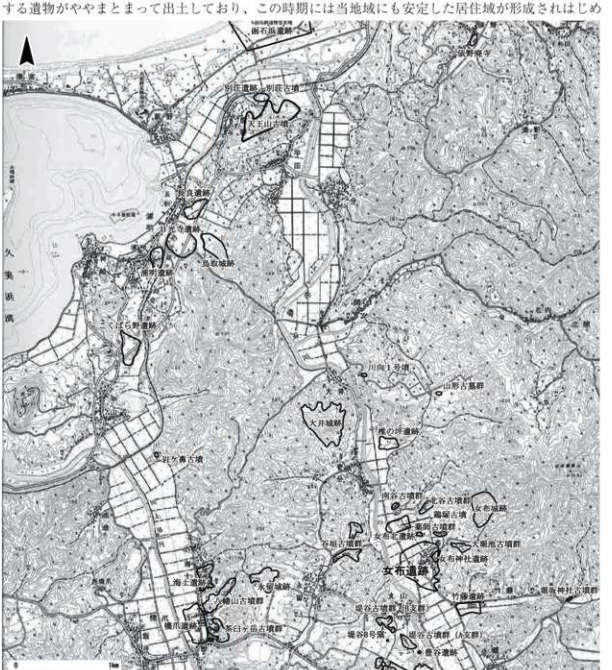
近年、遺跡地内におけるほ場整備事業が計画され、平成 23 年度及び同 28 年度に京丹後市教育委員会によるグリッド調査が行われ、包蔵地内の広い範囲に弥生時代から中世の遺物包含層が存在するこ

とが確認されている[11][12]。また、府営農業農村整備事業に伴って実施された平成 28 年度の公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターと当教育委員会による調査では、弥生時代後期の竪穴建物や中世の土坑等が検出され、女布遺跡の具体的な様相が次第に明らかになりつつある。

次に、調査地周辺における歴史的環境について概観する。

久美浜町周辺では、弥生時代前期以前に遡る遺跡としては、旧石器時代のものと考えられるスクレイパーが出土した鳥取城跡下層や、縄文時代早期とみられる押形文土器の破片が出土した女布北遺跡の例があるが、いまだ不明瞭な点が多い。

海浜部の浦明遺跡や函石浜遺跡（史跡函石浜遺物包含地）では、弥生時代前期末から中期初頭に属する遺物がややまとまって出土しており、この時期には当地域にも安定した居住域が形成されはじめ



第 13 図　女布遺跡位置図（1/40,000　国土地理院「久美浜」）

第 14 図　調査位置図（1/5,000）

る。弥生時代中期になると、遺跡数の増加がうかがわれ、先述の浦明遺跡のほか、橋爪遺跡などでも大規模な居住域が検出されている。女布遺跡の南西では畿内第Ⅱ様式並行期に豊谷墳墓群が形成され、1号墓の埋葬施設からは打製石剣や石鏃等が出土している。

後期前半の遺跡としては、鳥取城跡下層や茶臼ヶ岳古墳群などの墳墓が知られるものの、集落は不明瞭な点が多い。この傾向は、久美浜町周辺だけでなく丹後地域全域に共通し、後期前半の集落の検出例はほとんど知られていない。一方、後期後半には、先述の橋爪遺跡のほか、外面にタタキをもつ畿内系とされる土器が出土した椎ノ坪遺跡や直径8mの円形竪穴建物が検出された西谷遺跡、海士遺跡、竹藤遺跡など小規模な遺跡が谷筋に多く出現する。

古墳時代は前期の集落跡が女布遺跡・女布北遺跡、中期の集落跡が別荘遺跡で調査されている。古墳は1990年代前後の国営農地整備事業に伴い多く調査され、堤谷古墳群（前期から中期）、天王山古墳群（前期から後期）、谷垣古墳群（前期後葉から中期）、別荘古墳群（中期）、川向1号墳（後期）、鶏塚古墳（後期）などで、その内容が明らかとされた。女布遺跡の東側丘陵上には10基からなる北谷古墳群があり、そのうち5基が調査された。1号墳からは、鉄製刀剣類や碧玉製紡錘車形石製品、土師器等の豊富な副葬品が出土しており、当地域を代表する有力者の古墳として評価されている。

古代の遺構が検出された遺跡としては、今回の調査地に北接する女布北遺跡での調査が特筆される。女布北遺跡では奈良・平安時代の数棟の掘立柱建物や土器溜まり等の遺構が検出されており、一帯では縄文時代以降、地点を変えながらも継続的に土地利用が行われたことが判明しつつある。また、別荘遺跡や河口部の日光寺遺跡でも、奈良時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物がややまとまって検出されている。この時期の生産遺跡としては堤谷窯跡群があげられる。堤谷窯跡群では3基の登窯が調査され、7世紀から8世紀前葉にかけて操業されたことが、出土した須恵器から明らかにされている。特に、3号窯跡では8世紀前半の須恵器に伴って瓦が出土しており、佐野小学校保管の採集品や矢田八幡神社保管品の中にも当窯跡出土資料とされる瓦がみられることは注目される。熊野郡に該当する久美浜町域では、この時期の官衙や寺院の存在が不明のため供給先は未詳であるが、今後の調査が期待される。

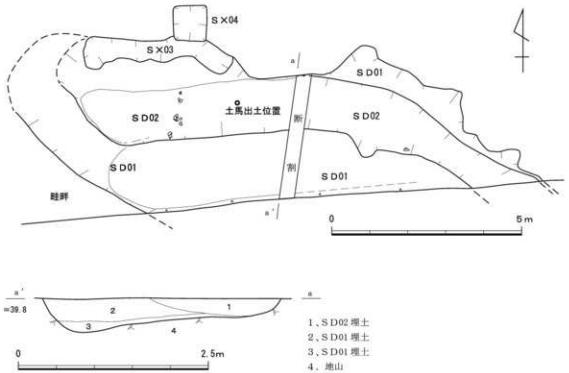
（桐井理揮）

3　調査の概要

（1）地点Bの調査

平成29年度の調査では、16箇所の調査区を設定し、調査を行った。その概要は昨年度報告したとおりである。その中でも特に顕著な成果を得ることができた地点Bについて、遺物の整理等作業が完了したため、報告することにしたい。

平成29年度地点Bは賓布神社の北側の工事地内において行った調査である。特に、遺物の散布状況が顕著であった地点を中心に遺構の平面的な検出を行った結果、溝状遺構2条と方形の柱穴1基、不整形の溝状遺構を検出した。また、溝の中央付近で断割を行い、土層の確認を行った。



第 15 図　地点 B 検出遺構平面・土層断面図（1/100・1/50）

①検出遺構（第 15 図）

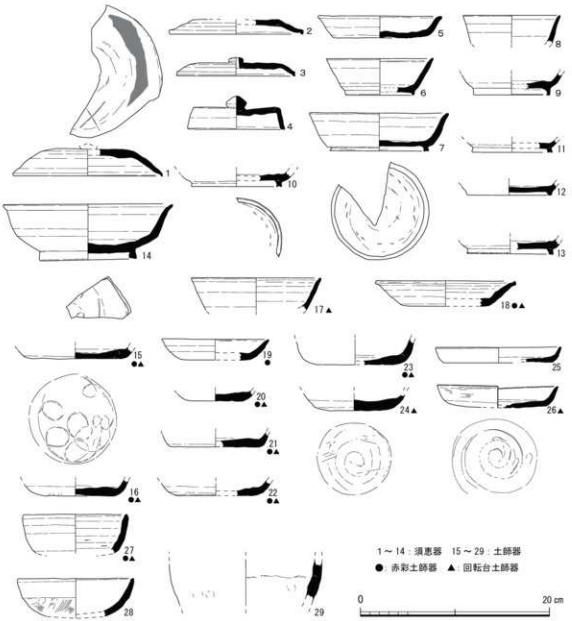
溝状遺構ＳＤ１は最大幅約 3.5 ｍを測る。南東端では検出面からの深さ約 1.0 ｍ程であるが、北西にかけて次第に浅くなる。床土を除去したところ、北西端付近の浅い部分ではすぐに遺物が露出したのに対し、南東側の深度の深い部分では溝底付近で多くの遺物が出土したことから、北西側では後世の改変によって、溝の上部が失われていると考えられる。

ＳＤ２はＳＤ１と重複して検出した、最大幅 1.3 ｍを測る溝状遺構である。遺構の南肩は平面的に認識することができたが、北肩はＳＤ１とほぼ共有しており、ＳＤ１と同様、北西端にかけて次第に浅くなる。ＳＤ１と２の境界は不明瞭で、後述する出土遺物の様相も踏まえると、ＳＤ２は独立した遺構ではなく、ＳＤ１の埋没過程の一単位である可能性がある。ＳＤ２埋土上層からは須恵器大甕や土馬の頭部等が出土した。

②出土遺物（第 16 図～第 18 図）

遺物はすべてＳＤ１・２から出土した。厳密にはどちらの溝に伴うか明らかではない遺物も含まれるが、遺物は型式学的にみてまとまりのみられる資料であるため、良好な一括資料と判断される。出土遺物の総量は遺物収納コンテナ４箱分である。

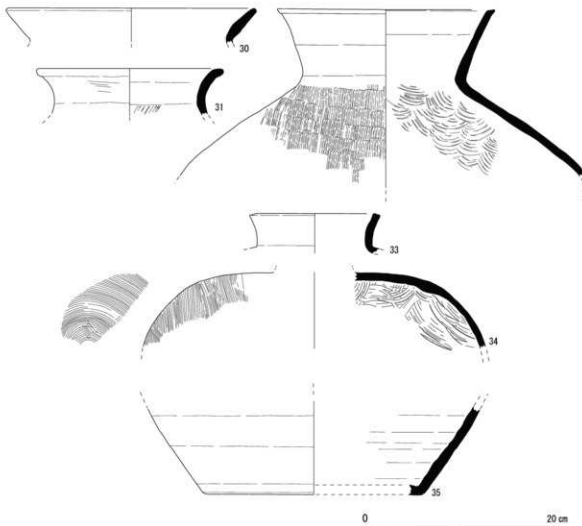
１～４は須恵器蓋である。１はやや深手で側面観は緩い台形状を呈し、口縁端部は面を持つように整形される。天井部外面には「×」状のヘラ記号が認められ、わずかにススが付着する。２、３は偏平な天井部を持ち、口縁端部はいずれもナデによる沈線が認められる。ヘラケズリは明瞭ではない。



第 16 図　地点 B 出土遺物実測図（1/4）

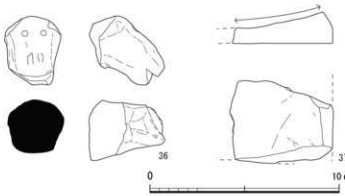
4は天井部と口縁部の間に明瞭な稜をもつもので、壺蓋と考える。5は須恵器皿である。器壁は厚く、口縁部は外反する形状となる。6・7は須恵器杯B、8は須恵器椀、9～13は須恵器椀・杯類の底部である。7・10の高台は、端面が貼付け時の強いナデによって沈線状に凹み、底部裏面には爪圧痕を残すなど製作技術上の共通点をうかがうことができる。11は断面が三日月状を呈する高台をもつ。13は高台横面に爪圧痕が認められる。14は須恵器稜椀である。口縁部を一部欠く以外はほぼ完形で出土した。高台は幅広の貼付高台で、底部には糸切りの痕跡等は残さない。稜は体部の下方にあり、明瞭に屈曲する。京都府北部でも亀岡市篠窯跡群や福知山市尾藤窯跡等で稜椀を生産していたことが知られているが、本例はこれらの事例ではなく、播磨灘沿岸や加古川流域で認められるものとの共通点が多く、西方から搬入されたものであると考えておきたい。

15～29は土師器である。15は暗文土師器の底部である。暗文は螺旋状に施されるのではなく円を



第 17 図　地点 B 出土遺物実測図（1/4）

組み合わせるように描かれているようで、地元で変容したものであると考えられる。また、内面には赤彩が認められる。16 は回転台土師器の内面に暗文を施したものであり、15 と同様内面には赤彩が認められる。暗文は、反時計回り方向に弧を描くように、二回に分けて螺旋状に施されている。17 は杯口縁部である。回転台によって成形されたと考えられるが、ナデによる器面の凹凸は顕著ではなく、平滑に仕上げられている。胎土には雲母片をやや多く含んでおり、15 と類似しているため、あるいは同一個体である可能性も考えられる。18 は回転台土師器であり、内外面に赤彩が塗布される。底部から口縁部に向かって外開きの逆台形状を呈し、口縁部は明瞭に上方に摘み上げている。20 ～ 24 は回転台土師器杯である。全形を伺えるものはないが、平底気味の底部に逆台形状の器形を持つものと考えられる。20 ～ 23 は赤彩が認められる。25･26 は皿であり回転台で成形されたものである。26 は底部成形時の粘土紐の痕跡と、ヘラ切りの痕跡が認められる。27 も回転台土師器であり、体部にはナデによる凹凸が残る。回転台土師器は 26 のように比較的器壁が薄く、扁平な皿状のものと、24 や 27 のように器壁が厚く、深手のものの 2 者が認められる。28 は丸底の鉢であり、底部下半はハケで仕上げられる。飛鳥時代の土器の混入であろう。29 は粗製の鉢の体部であり、製塩土器の可能



第18図　地点B出土遺物実測図（1/2）

性がある。

30は土師器甕の口縁部である。供膳具に対して土師器煮沸具の出土は少なく、図化に耐えうるものは30のみであった。31、32は須恵器大甕である。32は口縁部から体部中位まで残存するもので、溝検出時にすでに口縁部が上を向くようにして露出していたものである。33は壺、あるいは横瓶等の口縁部と考えられる。直立気味に立ち上がり端部は面を持つように整形する。34は破片資料ではあるが、横瓶の肩から体部と考える。側面には同心円状のカキ目が施されている。35は大形の鉢である。

36は土馬の頭部であり、耳部と首部以下は欠損している。中実で口はヘラ、目と鼻は竹管状の工具で刺突して表現する。頭部の裏面には粘土によるひねりの痕跡が認められるが、馬具を表現したものではなく、おそらく裸馬であろう。

京丹後市域ではこれまで多くの土馬が出土しており、特に久美浜町内では7点が知られている。しかし、過去の採集資料が多く、年代を決定するに至ったものは皆無であった。本例は遺構から出土しているため、年代の定点となりうるだけでなく、式内社に近接する地点から出土したという点で、土馬の使用に係る性格を知りうる重要な資料であるといえるだろう。

石器は37の1点のみ出土した。残存幅4cm、厚さ1.6～0.8cmを測る砥石であり、片面にのみ使用痕跡が認められる。肉眼観察では墨の痕跡等は認められない。

③小結

平成29年度地点Bでは小規模な調査ながら重要な成果を得ることができた。以下ではその成果についてまとめておきたい。

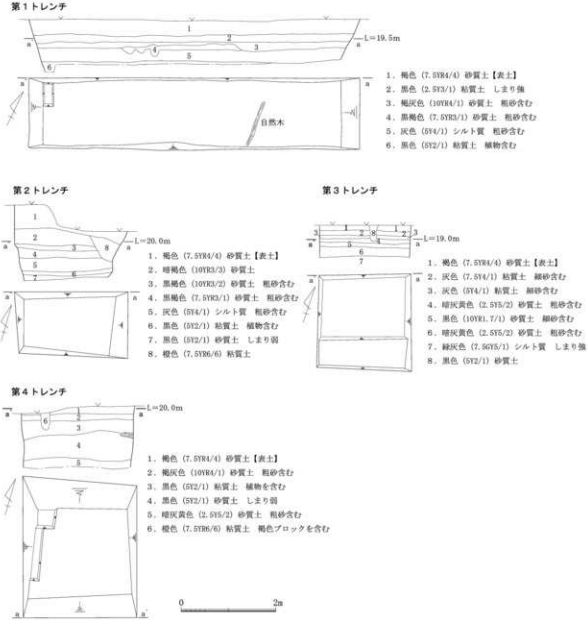
地点B出土遺物は、わずかに古式土師器や飛鳥時代前半の土器が混入する以外は、まとまりのある資料である。特に土師器供膳具の主体は回転台土師器が占めることが大きな特徴となっている。ただし、これらの中に底部に糸切りの痕跡を残すものはなく、糸切り出現以前の資料群である。また、丹後半島ではこれまでまとまって赤彩土師器が出土していなかったが、地点B出土土師器の多くは赤彩土師器であり、山陰東部や若狭湾沿岸部など、丹後地域に隣接する日本海沿岸部の土器様式との共通点を指摘しうる。一方、回転台土師器の内面に暗文を持つものが含まれていること、播磨系の稜椀が出土していることから、女布遺跡が外部、特に丹後以南の地域の情報も流入するような性格の遺跡であったと考えられる。

次に、土器の年代観について見通しを述べておきたい。当地域の古代の土器の編年はいまだ未確立ではあるが、近隣地域に類例を求めると、但馬国分寺跡出土資料が参考になる(7)。但馬国分寺跡SD200中層資料は木簡年代から8世紀末～9世紀初頭に位置づけられるが、この資料と比較すると地点

B出土資料は須恵器蓋が扁平であることや、口径の縮小した須恵器杯Bが認められることなどから、やや後出する可能性がある。共伴した緑釉陶器の年代から９世紀中ごろに位置づけられる但馬国分寺跡ＳＤ 200 上層資料は、土師器杯の暗文が完全に消失するとされていることから、地点Ｂ出土資料は両者の間の、９世紀前葉の年代を与えるのが一つの案である。

ただし、 丹波地域の篠窯跡群では、９世紀前半のマル山１号窯では既に小型の壺類を中心に底部の糸切りが認められるため、当資料の時期は９世紀初頭の西長尾１・４号窯段階、あるいは８世紀末まで遡る可能性もある。周辺地域との年代観の並行関係については今後の検討課題としておきたい。

丹後半島においては、松尾史子氏が編年案を提示しているが、９世紀代の資料として京丹後市横枕遺跡下層資料が当てられている(9)。今回の地点Ｂ出土土器群はこの資料群との接点を認めうるもので



第 19 図　第１～４トレンチ平面・土層断面図（1/80）

あり、8・9世紀の丹後半島内での基準資料となりうるものである。今後の資料の増加を待ちたい。

（桐井理揮）

（2）平成30年度　第1～4トレンチの調査（第19図）

計画水路の幅と掘削深度に合わせて、7m×1.5mの調査区を1箇所、3～2m×2.5～1.5mの調査区を3箇所に設定し、バックホーによる掘削を行った。耕作土を除去し、表土下1.6～0.7mまで掘削したところ、第1～4トレンチでは、遺物包含層を確認できず、近世の遺物を数片含む沼地状の堆積土を確認したのみであり、安定地盤を確認することができなかった。近世以降に現在の田を形成したものと想定され、それ以前は沼地として存在していたと考えられる。

4　まとめ

賣布神社の北側で行った平成29年度の調査地点Bでは多量の須恵器や土師器、土馬が出土し、本報告で詳細を報告した。式内社の賣布神社の北側の地点からまとまった遺物や土馬が出土したことは熊野郡の古代の様相を検討する上で、重要な資料となった。

平成30年度の調査では、調査範囲が限られたため顕著な遺構を確認できなかった。しかし、第1～4トレンチでは沼地状の堆積を確認し、これまでに京丹後市教育委員会が近隣で実施した調査成果を参考にすると、調査地一帯には沼地状堆積が厚く、広がっていることが判明し、遺構面・遺物包含層の広がりについて情報を得ることができた。

以上のように平成28年度から継続的に行われてきた女布遺跡の調査によってこれまで不明とされてきた遺跡の様相が明らかになってきた。特に居住域の広がりや旧地形の状況が確認できた。今後、これらの成果をもとに女布遺跡の実態を明らかにすることが期待される。

（北山大熙）

（注）

（1）安井良三 1953「丹後熊野郡に於ける彌生式遺跡―佐濃谷川流域―」『史想』第2號 柴郷史学会

（2）田中彩太 2013「京都府佐濃谷川流域の遺跡再考―久美浜町における古墳再考―」『同志社考古』第13号 同志社大学考古学研究会

（3）肥後弘幸 1993「3．国営農地開発事業関係遺跡平成4年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1993）』京都府教育委員会

（4）新谷勝行 2013『女布遺跡発掘調査報告書（京都府京丹後市文化財調査報告書第9集）』

（5）岡林峰夫 2016『女布遺跡発掘調査報告書Ⅱ』府営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査　京都府京丹後市文化財調査報告書第13集

（6）桐井理揮 2018『女布遺跡第7次調査』『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成29年度）』京都府教育委員会

（7）前岡孝彰 2012「第1節　SX250の年代観」『祢布ヶ森遺跡第40・41次発掘調査報告書―第2次但馬国府跡の調査Ⅰ―』豊岡市文化財調査報告書第4集、豊岡市教育委員会　但馬国府・国分寺館

（8）松尾史子 2001「丹後地方の回転台土師器」『京都府埋蔵文化財論集』第4集、財団法人京都府埋蔵文化財センター

付表２　女布遺跡第７次調査　地点Ｂ出土遺物観察表

報告番号	種別	器種器形	出土遺構	法量			残存率	胎土	色調	焼成	備考
				口径	器高	底径					
1	須恵器	蓋	SD01・02	15.8	-	-	5/12	やや密	2.5Y7/1(灰白)	良	
2	須恵器	蓋	SD01・02	14.0	-	-	3/12	やや密	10YR8/1（灰白）	軟	
3	須恵器	蓋	SD01・02	12.4	2.0	-	8/12	やや密	N5/0（灰）	良	
4	須恵器	蓋	SD01・02	9.8	3.5	-	6/12	密	N6/0（灰）	良	
5	須恵器	杯	SD01・02	12.8	2.3	6.0	3/12	密	10Y6/1（灰）	良	
6	須恵器	杯	SD01・02	11.2	3.9	7.0	3/12	やや粗	10YR8/1（灰白）	やや軟	
7	須恵器	杯	SD01・02	14.6	8.0	8.4	9/12	密	7.5Y6/1(灰)	良	
8	須恵器	杯	SD01・02	10.2	-	-	2/12	密	2.5Y7/1（灰白）	良	
9	須恵器	杯	SD01・02	-	-	8.1	3/12	密	10YR8/1（灰白）	やや軟	
10	須恵器	杯	SD01・02	-	-	9.5	3/12	密	N6/0(灰)	良	
11	須恵器	杯	SD01・02	-	-	8.5	2/12	密	N5/0（灰）	良	
12	須恵器	杯	SD01・02	-	-	8.8	2/12	密	10YR8/1（灰白）	軟	
13	須恵器	杯	SD01・02	-	-	9.0	4/12	密	10YR8/1（灰白）	軟	
14	須恵器	稜椀	SD01・02	18.0	6.0	10.2	8/12	密	10YR8/1（灰白）	良	
15	土師器	杯	SD01・02	-	-	9.6	2/12	やや密	7.5YR7/3（にぶい橙）	良	赤彩（10R5/6　赤）
16	土師器	杯	SD01・02	-	-	8.2	12/12	密	10YR6/3（にぶい黄橙）	良	赤彩（2.5YR6/6　橙）
17	土師器	椀	SD01・02	13.6	-	-	2/12	やや密	10YR7/4（にぶい黄橙）	良	
18	土師器	皿	SD01・02	14.6	2.7	8.8	3/12	密	7.5YR8/6（浅黄橙）	良	赤彩（10R5/6　赤）
19	土師器	皿	SD01・02	11.4	2.2	6.0	1/12	密	7.5YR7/4（にぶい橙）	良	赤彩（10R6/6　赤橙）
20	土師器	杯	SD01・02	-	-	6.0	5/12	やや密	10YR7/3（にぶい黄橙）	良	赤彩（2.5YR4/8　赤褐）
21	土師器	杯	SD01・02	-	-	9.4	1/12	やや密	5YR7/3（にぶい橙）	軟	赤彩（2.5YR4/8　赤褐）
22	土師器	杯	SD01・02	-	-	8.2	2/12	やや密	7.5YR7/4（にぶい橙）	軟	赤彩（2.5YR4/8　赤褐）
23	土師器	杯	SD01・02	-	-	9.4	1/12	やや密	5YR7/3（にぶい橙）	軟	赤彩（2.5YR4/8　赤褐）
24	土師器	杯	SD01・02	-	-	5.6	12/12	やや密	10YR7/1（灰白）	良	
25	土師器	皿	SD01・02	13.2	1.6	10.6	1/12	やや密	5YR7/3（にぶい橙）	やや軟	
26	土師器	皿	SD01・02	12.9	2.3	9.7	10/12	やや密	10YR7/2（にぶい黄橙）	良	
27	土師器	杯	SD01・02	10.8	-	-	3/12	やや密	10YR8/3（浅黄色）	良	赤彩（5YR7/6　橙）
28	土師器	杯	SD01・02	12.4	-	-	3/12	やや粗	5YR7/8（橙）	やや軟	
29	土師器	粗製鉢	SD01・02	-	-	-	1/12	粗	7.5YR7/4（にぶい橙）	やや軟	
30	土師器	甕	SD01・02	25.8	-	-	3/12	粗	10YR7/3（にぶい黄橙）	軟	
31	須恵器	甕	SD01・02	19.4	-	-	2/12	粗	10YR8/3（浅黄橙）	軟	
32	須恵器	甕	SD01・02	23.3	-	-	5/12	やや密	N5/0（灰）	やや軟	
33	須恵器	横瓶	SD01・02	13.8	-	-	1/12	やや密	5Y6/1（灰）	良	
34	須恵器	横瓶	SD01・02	-	-	-	4/12	密	10YR7/1（灰白）	良	
35	須恵器	鉢	SD01・02	-	-	22.4	4/12	粗	2.5Y7/1（灰白）	良	
36	土師質	土馬	SD01・02	-	-	-	4/12	粗	10YR5/1(褐灰)	軟	
37	石器	砥石	SD01・02	-	-	-	-	-	10YR7/4（にぶい黄橙）	-	

3　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡　平成 27 ～ 30 年度発掘調査報告

亀岡市の中央を流れる桂川（大堰川）の右岸で、近畿農政局による国営緊急農地再編整備事業が計画された。対象となったのは、亀岡市千代川町、大井町、本梅町、曽我部町、余部町、薭田野町、曽我部町、追分町にまたがる農地等である。

事業対象地では、多くの埋蔵文化財が調査対象となることが予想されたことから、近畿農政局、京都府、京都府教育委員会、亀岡市、亀岡市教育委員会の間で協議を重ねた。その結果、切土施工等によりやむを得ず影響を受ける部分について、記録保存を前提とした発掘調査を実施することで合意に達している。

平成 26 年度には、平成 27 年 2 月 12 日付けで近畿農政局、京都府知事、亀岡市長の 3 者間において「国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」における埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書」を交換した。この覚書に基づき、今年度は、平成 30 年 4 月 3 日付けで近畿農政局長、京都府教育委員会教育長、亀岡市長の 3 者間において「平成 30 年度国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」における埋蔵文化財の発掘調査に関する協定書」を締結した上で、京都府教育委員会、亀岡市教育委員会、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの 3 機関において発掘調査を分担して実施することとなった。

近畿農政局と土地所有者の皆様には、京都府の歴史理解の上で重要な遺跡の発掘調査について御理解と御協力をいただいたことについて感謝申し上げる。

調査組織及び調査機関は以下のとおりである。調査期間中、御協力をいただいた関係機関の方々には記して感謝したい。

《調査組織》

【平成 27 ～ 29 年度】

調 査 主 体　京都府教育委員会

調査責任者　京都府教育庁指導部理事　文化財保護課長事務取扱　磯野浩光（平成 27 ～ 29 年度）

調査担当者　京都府教育庁指導部文化財保護課記念物担当

副課長　岸岡貴英（平成 27 年度）・石崎善久（平成 28・29 年度）

主　査　福島孝行（平成 27 年度）・奈良康正（平成 28・29 年度）

副主査　古川　匠（平成 27 年度）・中居和志（平成 27 ～ 29 年度）

技　師　桐井理揮（平成 28・29 年度）・北山大熙（平成 29 年度）

調査事務局　京都府教育庁指導部文化財保護課

調 査 協 力　亀岡市教育委員会、亀岡市経済部国営事業推進課、亀岡市千代川町自治会、近畿農政局、京都府農林水産部農村振興課、京都府南丹広域振興局、京都府南丹教育局、公益財団法

人京都府埋蔵文化財調査研究センター

【平成 30 年度】

調 査 主 体　京都府教育委員会

調査責任者　京都府教育庁指導部理事　文化財保護課長事務取扱　磯野　浩光　（５月まで）
　　文化財保護課長　森下　衛　（６月から）

調査担当者　京都府教育庁指導部文化財保護課記念物担当副課長　石崎　善久
　　主　査　奈良　康正
　　副主査　中居　和志
　　技　師　北山　大熙
　　技　師　川崎雄一郎

調査事務局　京都府教育庁指導部文化財保護課

調 査 協 力　亀岡市教育委員会、亀岡市経済部国営事業推進課、亀岡市余部町自治会、近畿農政局、京都府農林水産部農村振興課、京都府南丹広域振興局、京都府南丹教育局、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

また、現地調査、ならびに整理作業に当たっては、多数の方々の協力を得た。

今回は、亀岡市千代川町の千々川以北において平成 27 ～ 29 年度に実施した、千代川遺跡第 28、29、31 次調査の成果を主に報告する。

なお、平成 30 年度に実施した余部遺跡第 14 次調査及び法貴峠 20 号墳の測量調査の成果は、現在整理作業中であるため概略のみを報告することとし、次年度以降に整理作業が完了した段階で報告することとしたい。

付表 3　調査遺跡一覧表

1　京都府教育委員会が実施した調査（平成 27 ～ 30 年度）

遺跡名	所在地	現地調査期間
千代川遺跡（第 28・29・31 次）	亀岡市千代川町地内	平成 27 年 11 月 4 日～平成 28 年 2 月 26 日、平成 28 年 8 月 22 日～平成 29 年 2 月 28 日、平成 29 年 11 月 1 日～平成 30 年 2 月 28 日
余部遺跡（第 14 次）	亀岡市余部町寒又地内	平成 30 年 11 月 1 日～平成 31 年 2 月 13 日
法貴峠 20 号墳	亀岡市曽我部町中中小路	平成 31 年 1 月 28 日～平成 31 年 2 月 28 日

2　その他の機関が実施した調査（平成 30 年度）

遺跡名	所在地	調査機関
春日部遺跡（第 2 次）	亀岡市曽我部町中地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
春日部遺跡（第 3 次）	亀岡市曽我部町中地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
金生寺遺跡（第 3 次）	亀岡市曽我部町犬飼地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
金生寺遺跡（第 4 次）	亀岡市曽我部町犬飼地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
犬飼遺跡（第 2 次）	亀岡市曽我部町犬飼地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
余部遺跡（第 15 次）	亀岡市余部町寒又地内	亀岡市教育委員会

［1］平成 27 ～ 29 年度の調査（千代川遺跡第 28･29･31 次）

1　はじめに

千代川遺跡では、昭和 55 年度から平成 29 年度まで 32 次にわたって発掘調査が実施されている（付表 4）。国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」に伴う千代川遺跡の発掘調査は平成 27 年度に開始され、多くの知見が蓄積されている。平成 27 年度から毎年調査報告を刊行しているが、これまで一部出土遺物等が未報告であったため、本書で報告する。また、平成 27 年度から 29 年度の調査成果の総括も併せて行う。

2　位置と環境

（1）地理的環境

千代川遺跡が立地する亀岡市は、京都府のほぼ中央に位置し、北は南丹市、東は京都市、南は大阪府高槻市・茨木市、西は大阪府豊能郡に接している。面積は約 224.9㎢で、東西約 24.6km、南北約 20.5km の広さをもつ。北東部に若丹山地、南西部を摂丹山地の両山地に囲まれて、中央部に亀岡盆地が広がっている。これらの山地は丹波帯と呼ばれ、泥質岩、砂岩、チャートを主とした堆積岩で、一部に石灰岩を含んでいる。盆地内には多数の断層が存在し、現在の亀岡市の地勢に大きく影響している。特に亀岡断層、神吉・越畑断層、猪倉断層、埴生（はぶ）断層など西北から東南に弓なりに曲がって形成された断層が多く、さまざまな地点で断層崖を確認することができる。それらの断層に沿うように桂川水系の大堰川（おおいし）が流れ、両岸に河岸段丘が発達している。大堰川は淀川の一支流であり、京都盆地を経て大阪湾へと注ぐ。盆地内では大堰川に直交するように北東から南西方向に流れる大小の支流が複数存在し、河岸段丘を形成している。このような地理的環境によって亀岡盆地内は山麓の傾斜面から大堰川に向かって断層崖と扇状地、平坦な河岸段丘というように階段状の地形をなす。

調査地である千代川町は亀岡市の北部、大堰川西岸に位置し、南丹市に隣接している。西側には行者山（標高 431 m）、南丹市八木町の境界にあたる城山（標高 330m）が控える。山麓斜面には扇状地が広がり、千々川などによって段丘状をなしている。亀岡市の最低所（大堰川保津橋地先三角点）が標高約 90 mであり、千代川遺跡から南東部に向かって徐々に標高が低くなる。

（北山大熙）

（2）歴史的環境

千代川遺跡は亀岡盆地の北端の千代川町に位置する、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。縄文時代中期以前の遺構は未検出であるが、有舌尖頭器や縄文時代早期の押型文土器が出土しており、亀岡盆地の中では最も古くから継続している遺跡の一つである。また、第 16 次調査では縄文時

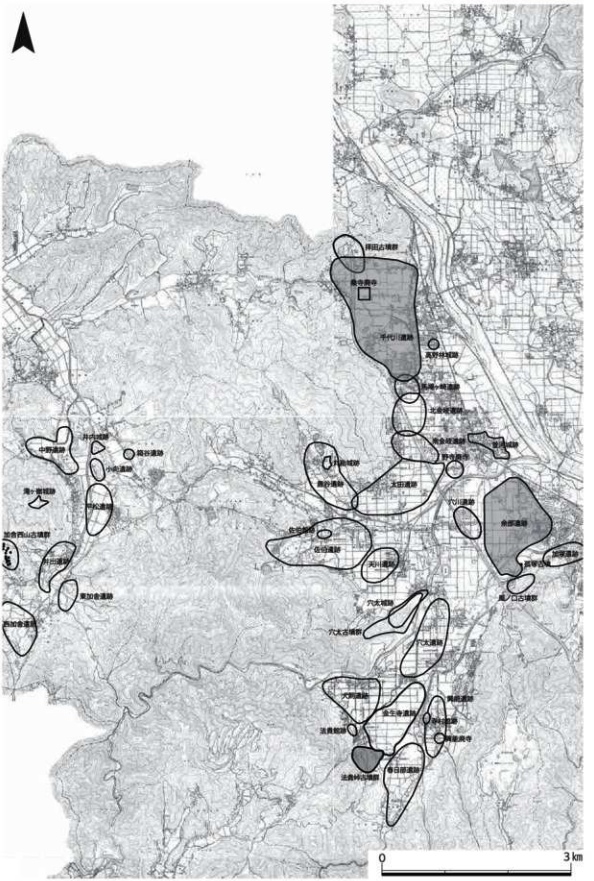
付表 4　千代川遺跡発掘調査履歴一覧

年度	次数	調査機関	原因	主な成果	文献
昭 55	1	府教委	9 号バイパス	国府推定域南西部の調査	府埋概（1981－2）
昭 56	2	府埋セ	9 号バイパス	弥生～古墳時代の掘立柱建物 5 棟、古代の掘立柱建物 5 棟	府遺概第 1 冊
昭 57・58	3	府埋セ	日吉ダム関係	古墳時代前期の集落	府遺概第 12 冊
昭 58	4	府埋セ	丹波愛護学校	奈良～平安の遺構確認	府遺概第 10 冊
昭 58	5	府埋セ	9 号バイパス	弥生後期～古墳時代前期の集落、古代の掘立柱建物	府遺概第 11 冊
昭 58	6	府埋セ	府道拡幅	弥生時代の方形周溝墓、桑寺廃寺関連の遺構確認	府遺概第 14 冊
昭 59	7	府埋セ	府道拡幅	弥生時代の水田域	
昭 59	8	府埋セ	丹波愛護学校	古代の掘立柱建物	
昭 60	9	府埋セ	9 号バイパス	古代の掘立柱建物ほか	府遺概第 16 冊
昭 61	10	府埋セ	9 号バイパス		
昭 62	11	市教委	日吉ダム関係	縄文時代溝 3 条	亀市報第 15 集
昭 62	12	府埋セ	9 号バイパス	古代の掘立柱建物ほか	府遺概第 16 冊
昭 63	13	府埋セ	9 号バイパス		
平元	14	府埋セ	9 号バイパス		
平 2	15	府埋セ	9 号バイパス		
平 2	16	府埋セ	府道拡幅	多くの縄文土器（中期）、古代の掘立柱建物	府遺概第 44 冊
平 4	17	市教委	市道拡幅	古代から中世の小柱穴	〃
平 6	18	市教委	範囲確認	古墳時代の竪穴住居、南北方向の溝	亀市報第 30 集
平 6	19	市教委	範囲確認	古墳時代の竪穴住居 1 棟、古墳時代？の掘立柱建物 1 棟、古代の国府関連と思われる南北溝 3 条、中世？の掘立柱建物 3 棟	亀市報第 33 集
平 7	20	府埋セ	千ヶ川改修	中世素掘溝	府埋概第 72 冊
平 7	21	市教委	範囲確認	弥生時代方形周溝墓 1 基、古墳時代竪穴住居 1 棟、奈良時代の掘立柱建物 2 棟	亀市報第 37 集
平 8	22	市教委	NTT 千代川別館	古墳時代の竪穴住居 3 棟	亀市報第 40 集
平 8	23	市教委	範囲確認	弥生時代方形周溝墓 2 基、古墳時代竪穴住居 1 基、奈良時代掘立柱建物 3 棟（清草・千原ヶ前）	亀市報第 39 集
平 9	24	市教委	範囲確認	弥生時代の方形周溝墓 1 基、古代の掘立柱建物 2 棟	亀市報第 47 集
平 10	25	市教委	範囲確認	弥生時代の方形周溝墓、瓦・墨書土器 5 点	亀市報第 50 集
平 11	26	市教委	範囲確認	弥生時代中期の竪穴住居 1 棟、方形周溝墓 1 基、古墳時代の溝、土坑など、灰釉陶器を埋納した地鎮？遺構	亀市報第 55 集
平 25	27	市教委	ほ場整備	グリッド調査	亀市報第 85 集
平 27	28	府教委	ほ場整備	グリッド調査	府報平 27・本報告
平 28	29	府教委	ほ場整備	古代の掘立柱建物 2 棟、中世の南北溝など	府報告 28・本報告
平 28	30	市教委	ほ場整備	古墳時代～古代の溝など、墨書土器出土	亀市報第 95 集
平 29	31	府教委	ほ場整備	グリッド調査	本報告
平 29	32	市教委	個人住宅	試掘調査	亀市報第 95 集

※調査機関：府教委…京都府教育委員会、府埋セ…財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、
市教委…亀岡市教育委員会

※文　献：府埋概…京都府埋蔵文化財調査概報、府報…京都府埋蔵文化財調査報告書、府遺概…京都府遺跡調査概報、亀市報…亀岡市文化財調査報告書

代中期末から後期前半、第 11 次調査では晩期の凸帯文期の土器がまとまって得られており、今後近隣の調査ではこれらの時期の居住域が検出されることも期待される。特に第 11 次調査では凸帯文土器と少量の弥生時代前期の土器が出土しており、亀岡盆地における弥生文化の成立を考える上では貴重な成果であるといえよう。弥生時代の遺構の広がりは不明瞭な点が多く残るが、現在の府道 73 号線付近の調査では畿内第Ⅳ様式並行期の方形周溝墓、住居跡等が確認されており、この付近の微高地上に集落が形成されていたものと考えられる。弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構も、千原・拝田地区を中心に遺跡地内の広い範囲で確認され、古墳時代前期の竪穴建物等が検出されている。千



第 20 図　調査対象遺跡及び周辺主要遺跡分布図（1/60,000）

代川遺跡では、縄文時代以降、地点を変えながらも継続的に土地利用が行われたことをうかがうことができる。

古代の律令制下では、亀岡盆地は丹波国のうち桑田郡にほぼ相当する。千代川遺跡の範囲内にその存在が想定されている桑寺廃寺は、郡名を冠する「桑田寺」が転訛したものと考える説があり、古くから注目されてきた。しかし、過去の調査では西端の基壇状の高まりと東端の柵列の可能性がある遺構が検出されたのみで、その詳細は明らかではない。ただし、出土した多くの瓦は素弁蓮花文をもち、丹波地域でも最古級のものと評価することができ、白鳳期に付近に寺院等の何らかの施設が存在した可能性は高い。また、千代川町内には「国司牧」「国主ヶ森」「大門」「学堂」などの国府に関連すると考えられる小字が存在することや、正方位の地割がみられることなどから、木下良氏らによって古代における丹波国府の有力候補とされてきた。丹波国府の所在地については千代川遺跡のほかにも大堰川東岸の池尻遺跡や南丹市の屋賀とする考えもあり、未だ意見の一致をみておらず、今後の調査研究が期待される。

中世以降の千代川遺跡周辺は、これまでの調査では耕作に伴う溝や柱穴等が多数検出され、遺物包含層も広い範囲で確認されているものの、集落の実態は明らかではない。丹波国府も 12 世紀代には大堰川東岸に移動したという説が定説となっており、相対的に遺物の密度は低くなったと考えられる。近世以降には遺跡の東端には南北方向に近世山陰街道が、北端には東西方向に愛宕道が通り、おおよそ現在の景観が形成されたと考えられる。遺跡の北側の山麓斜面に位置する小松寺は、寺伝では平重盛の寵臣がその弔いに養和元（1181）年に観音堂を建立したことに始まるとされており、境内には街道沿いに設置されていた高卒塔婆が移設されている。

次に、千代川遺跡が位置している大堰川流域を中心に、亀岡盆地の遺跡を概観する。

縄文時代では早期の押型文土器とされる土器片が千代川遺跡や南条遺跡などで得られているものの、中期以前の遺構が検出された遺跡数はいまだ寡少である。遺跡数の増加をうかがうことができるのは縄文時代後期以降であり、とくに凸帯文土器は千代川遺跡湯井地区、北金岐（きたかなげ）遺跡などでややまとまって出土している。北金岐遺跡では、出土土器の 6 割近くが角閃石を多量に含むいわゆる生駒西麓産胎土とされるもので占められ、当該期の地域間交流を考える上で重要な資料である。

弥生時代前期の集落として太田遺跡が挙げられる。太田遺跡では全長約 40 m、幅約 2 ～ 4 mの環濠が検出され、東西 130 m、南北 100 mの範囲が数条の環濠で囲まれた環濠集落であったと推定される。環濠内外に形成された土坑、方形周溝墓あるいは環濠内からは多量の土器、石器、木器などが出土した。出土土器には東海系土器や無文土器系土器も出土しており、広範囲に及ぶ交流があったことを示唆している。太田遺跡は Ⅱ 様式以降には継続せず、Ⅲ 様式以降には盆地内の広い範囲で大規模な集落が形成されるようになる。千代川遺跡の約 2.5km 南東に位置する余部（あまるべ）遺跡では、竪穴建物、方形周溝墓などが検出され、玉作り関連遺物も出土した。南丹地域では数少ない弥生時代の玉作りを行った集落であり、中期中頃における大堰川西岸の中心的な遺跡である。

古墳時代になると、有力な前期古墳は盆地東南部に多くみられ、中期以降には大堰川東岸に比較的大型の前方後円墳が築造されるようになる。亀岡盆地ではこれまで前期の前方後円墳は未発見である

が、園部盆地では園部垣内古墳や中畷古墳が継続して築造されており、この時期の南丹地域の中心は園部盆地にあったと考えられる。中期以降には亀岡盆地でも保津車塚古墳や千歳車塚古墳など大型の前方後円墳が築造される。坊主塚古墳は一辺 38 mの中規模の方墳ながら、鉄製武具類を中心に豊富な副葬品が出土した。大堰川西岸で古墳の築造が盛んになるのは古墳時代中期末以降であり、中小規模の群集墳が多数確認されている。200 基以上の古墳からなり、府内最大の群集墳とされる小金岐古墳群や大堰川西岸最大の前方後円墳である拝田 16 号墳を擁する拝田古墳群、あるいはウイリアム・ガウランドによって調査された鹿谷古墳群など、石室に石棚や石障を伴う特異な古墳が多くみられ、当地域の古墳文化の特徴の一つとなっている。集落遺跡も中期から後期において多く存在し、100 棟を超える竪穴建物が検出された鹿谷遺跡をはじめ、余部遺跡などを挙げることができる。

古代の亀岡盆地内では、先述の桑寺廃寺をはじめ複数の古代寺院の存在が知られており、大堰川西岸でも野寺廃寺や興能廃寺を挙げることができるが、古代における大堰川西岸の様相については不明瞭な点が多い。他方、大堰川東岸では国営農地再編整備事業や丹波国分寺跡・国分尼寺跡の範囲確認調査が行われ、その実態がある程度判明している。池尻廃寺では奈良時代後半の瓦積基壇や礎石建物が検出され、寺院あるいは官衙的な施設の存在が想定されるが、平安時代初頭には廃絶したとされる。池尻廃寺の約 2.5km 南東では奈良時代中頃に国分寺・国分尼寺が造営された。丹波国分寺跡では約 220 m四方の寺域が復元され、三彩火舎等の鎮壇具が出土したほか梵鐘鋳造遺構も検出され、国史跡に指定されている。

池尻遺跡、時塚遺跡、車塚遺跡では奈良・平安時代の大型掘立柱建物が多数検出されており、池尻廃寺、丹波国分寺・国分尼寺の建立に伴い地域の開発が大きく進展したと評価されている。生産遺跡としては、国分寺・国分尼寺の創建瓦が焼成された三日市遺跡や、盆地東南部の篠窯跡群を挙げることができる。7 世紀に操業を開始した篠窯跡群は 9 ～ 10 世紀には最盛期を迎え、篠窯産の須恵器及び緑釉陶器は、平安京を中心に宮城県多賀城跡から宮崎県小山尻東遺跡までの広域で確認されている。

中世の遺構は大堰川西岸の広い範囲で検出されている。国道 9 号バイパス建設工事に伴い調査が行われた北金岐遺跡や太田遺跡では、多数の掘立柱建物、井戸等が見つかり、中世に継続的に利用されたことが判明している。これらの遺跡から出土した瓦器椀は「丹波型瓦器椀」と呼称されるものであり、当地域の中世土器の編年の基準資料となっている。

室町時代以降には市内北部・西部を中心に山城が多く築造された。千代川遺跡の北側の城山にある八木城跡は丹波守護代内藤氏の拠点として機能しており、その規模は畿内でも最大級を誇る。その後、丹波平定の命を受けた明智光秀によって拡張・整備された。明智光秀の丹波平定以降、丹波の拠点は八木城から亀山城へと移ることとなる。江戸時代には岡部長盛が丹波亀山藩主として封じられ、「天下普請」によって近世城郭として亀山城を大改修し、現在の亀岡市街の礎が築かれた。

このように千代川遺跡周辺は縄文時代以降継続的に利用され、とくに古代においては寺院や官衙の存在が想定されるなど、丹波地域の中核地として機能してきたといえる。したがって、こうした環境の中にあった当遺跡は地域の歴史を語る上では欠くことのできない重要な遺跡である。

（桐井理揮・北山大熙）

3　平成27年度の調査（千代川遺跡第28次調査）

第28次調査では、千代川遺跡の千々川以北一帯で3m四方のグリッド調査区を49箇所設定し、発掘調査を実施した。全ての調査区から遺物が出土しており、遺物総量は遺物整理用コンテナで21箱である。調査の概要と各トレンチの検出遺構については平成28年度に報告済み(1)であるが、出土遺物の大部分は未報告であったため、本書で報告する。また、一括遺物を含む多くの遺物が出土し、顕著な成果が得られた第30トレンチの遺構についても、出土遺物を検討する上で必要であるため、改めて概略を報告する。

（1）第30トレンチの遺構（第21図）

第28次調査でとりわけ多くの遺物が出土した第30トレンチでは、床土の下位より南北方向4条、東西方向1条の素掘溝を検出し、さらにその下位から柱穴状の落ち込みを2基（SP153001・3002）検出した。

SP153001には約20cm大の角礫が多く入り、その礫の間から須恵器杯・長頸壺片が出土した。完形品の土器は出土していない。

SP153002からは、完形の須恵器と土師器がまとまって出土した。正位に置いた須恵器杯（5）に土師器杯（1）と須恵器杯（6・8）を立てかけるように並べ、一番南側に須恵器杯（7）を正位に置く。須恵器杯（7）の上には割れた状態の土師器皿・椀（2・3）をのせる。最後に須恵器杯（5）の上面にやや大型の須恵器杯蓋（4）を被せる。これらの土器内部の土をすべて洗浄したところ、須恵器杯（7）内の土中から滑石製臼玉（9）1点が出土した。遺物番号は第21図・第22図に対応する。

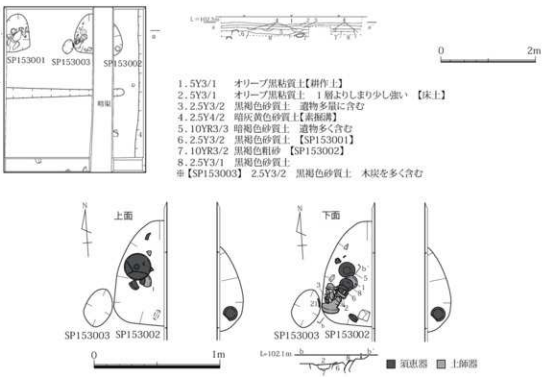
SP153002からは完形品がまとまって出土し、出土状況からは意図的な配置が想定されることから、上記の土器と臼玉は、意図的に一括して埋納されたものと考える。SP153002の性格は、西に隣接するSP153001との位置関係から柱穴の可能性があるが、単独の埋納遺構の可能性もある。

なお、SP153002からは他にも遺物が出土したが、調査は遺構上面の検出に留めたため、1～9との詳細な関係は不明である。

（2）第28次調査出土遺物（第22図～第24図・付表5）

第30トレンチの出土遺物の一部は平成28年度に報告しているが、今回改めて再掲載する（第22図）。第30トレンチ以外の調査区については、遺構掘削を行っていないこともあり小破片が多い。その中で主要なものを第23図・第24図に示す。出土遺物の個別の詳細は、付表5の観察表を参照していただきたい。

第30トレンチからは多くの土器が出土したが、中でもまとまってSP153002から出土した遺物について掲載する。1～39は第30トレンチ出土遺物である。特に1～9は、上述のとおりSP



第21図　千代川遺跡第28次　第30トレンチ（1/30・1/80）

153002からの一括出土品で、1～3は土師器、4～8は須恵器である。1～3の土師器はいずれも内面に放射状暗文を施しており、1が2段の暗文となっているが、2も摩滅しているものの2段の暗文であった可能性が高い。4は須恵器蓋で、上面に重ね焼きの高台片が付着する。5～8は須恵器杯で、7のみ椀形である。9は片面穿孔の滑石製臼玉で、7の充填土を水洗した結果出土したものである。これらの遺物の時期は、密に施した土師器の暗文や形態、高さのある須恵器蓋の形状からみて奈良時代中頃に比定できる。7の中に収められていた滑石製臼玉も同時期のものと評価できるが、滑石製臼玉の使用としては最終段階であり、注目できる事例である。

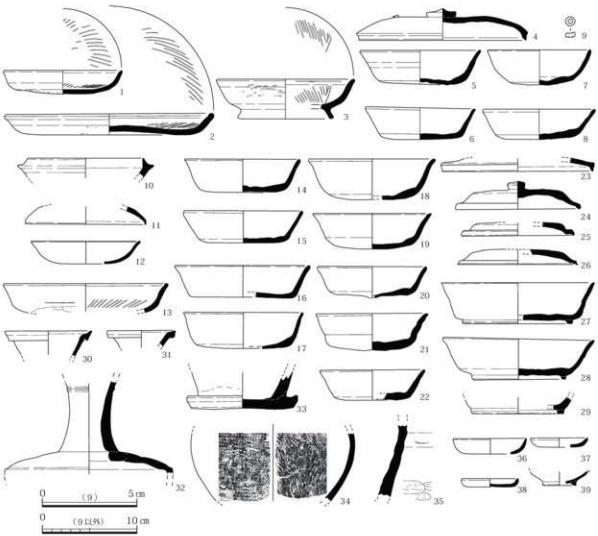
12・14・15・18・28・32はSP153002の西に隣接するSP153001からの出土品である。11・16・17・20・21は、1～9以外のSP153002からの出土品である。これら以外の遺物はいずれも包含層出土である。

10は古墳時代の須恵器杯で、立ち上がり部がやや厚みをもつが、TK209型式に比定できる。

11～13は土師器で、13は内面に明瞭な放射状暗文を施す。14～22は須恵器杯Aである。23～26は須恵器蓋、27～29は須恵器杯Bである。29は他の須恵器に比べて後出的である。須恵器杯・蓋の形状からみて、29以外は奈良時代のものである。30～32は須恵器壺である。特に32は円盤充填技法を用いて製作される。33は須恵器捏鉢である。34・35は須恵器甕で、34は小型品、35は大型品である。

36～28は土師器、39は瓦器椀である。いずれも中世のものであるが小片である。瓦器椀の高台はやや高さがあることから12世紀代のものと判断する。

以上、第30トレンチ出土遺物の多くの時期は奈良時代と考えられ、その中心はSP153002の一括



第 22 図　千代川遺跡第 28 次　第 30 トレンチ出土遺物実測図（1/4）

遺物と同じ奈良時代中頃であると評価できる。一部平安時代まで下がる遺物があることから、長期間の継続した土地利用が想定できる。

第 23 図と第 24 図はその他の調査区出土遺物である。出土地点については、観察表を参照されたい。

40 は縄文時代晩期の浅鉢である。外面は摩滅が著しいがケズリが施される。41 ～ 47 は弥生土器、48・49 は古墳時代前期の土師器である。41 は直口壺で、体部はタテハケ、口縁部はヨコナデを施す。肩部には大きな単位の鋸歯文状の赤彩を施す。42 は甕で体部下半はケズリ、上半はタテハケである。突出底状ではあるが底部が傾き不安定である。41・42 とも弥生時代後期前葉に比定できる。43 は細頸壺である。調整、胎土、焼成からみて滋賀県野洲川流域からの搬入品であり、弥生時代中期後葉である。44・45 は器台である。44 は受部外面端部の垂下部が剥離するが、外面の波状文が確認できる。形態からみて弥生時代後期のものである。46･47 は広口壺であり、いずれも弥生時代後期である。48 は土師器の壺であり、やや退化した二重口縁壺である。49 は壺の肩部の小片であるが、頸部内面に黒色物質が付着する。同様の事例は、大型の二重口縁壺に多く認められるものである。50 は大型の壺の底部であるが、弥生時代中期である可能性がある。

51 ～ 55 は古墳時代から飛鳥時代にかけての須恵器である。51・52・54 は須恵器杯身である。54 はＴＫ 209 型式に比定できる。53 は外面に波状文を施す小片であるが、甕の可能性が高い。55 は返りのついた蓋であり飛鳥時代のものである。

56 ～ 83 は古代の遺物である。56 ～ 63 は須恵器蓋、64 は須恵器杯Ａ、65 ～ 68 は須恵器杯Ｂである。71 は須恵器杯であり、底部に糸切痕の残る平安時代のものである。72 ～ 74 は緑釉陶器である。いずれも胎土は須恵質であり、色調等から平安京近郊産である。75 は壺の肩部であり、外面にカキメを施す。77・78 は須恵器鉢である。78 は篠窯産で 11 世紀のものである。79 は土師器椀で、内外面にミガキを施す。80 は土師器甕で、端部を上方に摘み上げる。82・83 は瓦でいずれも軟質な焼成である。外面に格子状タタキ、内面に布目が残る。調整や焼成から、桑寺廃寺の瓦である可能性が高い。

84 は土師質で中央に穴をもつ円盤形土製品であるが、時期は不明である。

85 ～ 145 は中世の遺物である。85 ～ 98 は瓦器椀、99 は瓦器皿である。瓦器椀は、図化できなかったものを含め、広範囲の調査区から出土している。85・86 のような立ち上がりの高い高台をもつものは少なく、図化できなかったものの大多数が 91 のような断面三角形の貼り付け高台である。端部形態は多様性があるが、口縁部を薄く摘み上げるいわゆる丹波型瓦器椀が多数派を占める。85・86 は 11 世紀、他の瓦器椀は 13 世紀のものである。

100・101 は土師器椀である。100 は形状が黒色土器と類似する。時期は 13 世紀である。

102 ～ 124 は土師皿である。102 はやや大型の土師皿で 13 世紀前半のものである。103 はての字口縁をもつ 11 世紀後半のものである。104 は屈曲する口縁をもつ 15 世紀末から 16 世紀にかけてのものである。105 は二段ナデを施す土師皿で、12 世紀中頃である。106 ～ 123 の土師皿は、いずれも在地産のものとみられるが、時期比定が難しい。124 は底部が平らで直線的に広がる口縁をもち、見込部には圏線状の強めのナデが入る 16 世紀前半のものである。

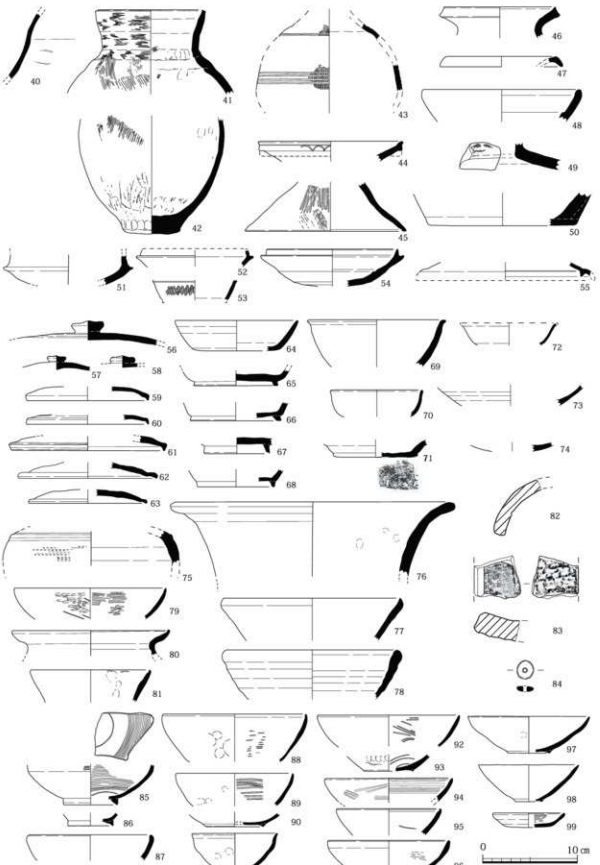
125 ～ 127 は瓦器甕である。いずれも焼成は軟質である。128 は瓦器羽釜、129 は瓦器鉢であり焼成はやや硬質である。

130・131 は東播系の鉢、132 は備前焼の擂鉢である。

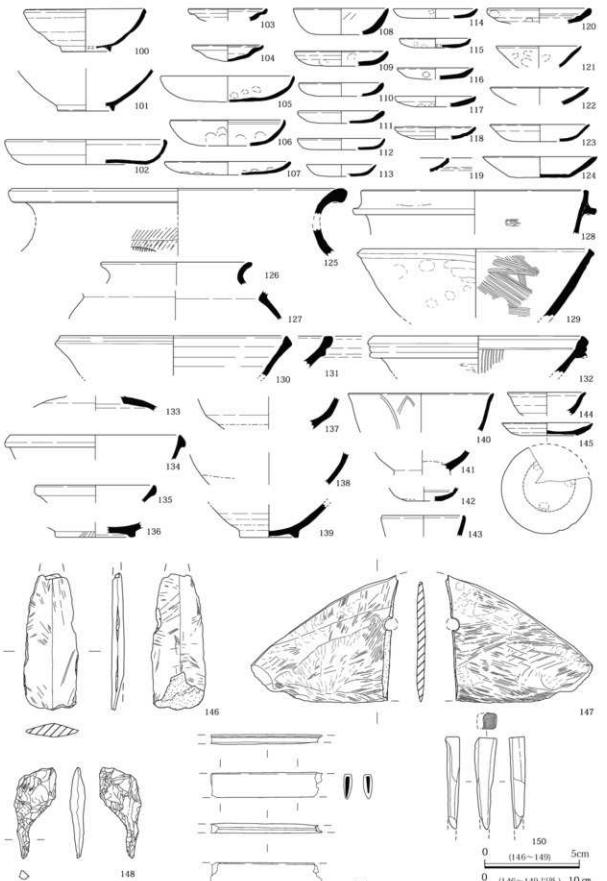
133 ～ 139 は白磁、140 ～ 142 は青磁であり、いずれも中国製である。133 は壺で、内面まで釉薬が厚くかかる。134・135 はⅣ類鉢であり、12 世紀のものである。136 は高台外面にハケ状の痕跡が残る。139 はケズリ出し高台である。140 は外面に連弁文を陰刻する。142 は同安窯系の皿である。

143 ～ 145 は国産施釉陶器である。143 は天目椀だが、通例と異なり端部を内湾させる。144 は灰釉をかけた瀬戸窯産の椀である。145 は瀬戸窯産の丸皿で、底部は碁笥底である。底部にはトチン痕が明瞭に残る、15 ～ 16 世紀の大窯段階のものである

146 ～ 148 は石製品である。146 は粘板岩製の石剣で、切先と基部は破損する。残存長 7.2cm、最大幅 2.8cm、厚さ 0.7cm である。外面は丁寧な研磨を施す。147 は粘板岩製の石包丁で、片面はやや丁寧に研磨するが、もう片面は剥離痕を明瞭に残す。残存長 7.6cm、幅 6.7cm、厚さ 0.4cm である。148 はサヌカイト製石錐である。先端はやや摩滅しており、使用痕の可能性がある。全長 4.9cm、先端部径 0.4cm である。



第 23 図　千代川遺跡第 28 次　出土遺物実測図（1/4）



第 24 図　千代川遺跡第 28 次　出土遺物実測図 2（1/2・1/4）

149 は小柄である。保存処理時に金属製柄の成分分析を行ったところ、銅製であることが判明した[2]。薄い銅板をまげて棟部で接合する。柄の内側には鉄製の刃部が残存する。残存長 5.9cm、幅 1.4cm、厚さ 0.5cm である。同時に出土した遺物の時期は中世である。中世に遡る小柄の出土例としては京都市羽束師菱川城跡出土例がある[3]。羽束師菱川城跡では、出土した５点の小柄のうち真鍮製が２点で、いずれも製作技法は本事例と類似する。銅製は３点で、１点が本事例と同じ整形技法だが他の２点は一鋳成形である。

150 は加工木材である。先端を細く加工しているが先端部は破損する。硬質な材を用いているが樹種は不明である。

（3）小結

千代川遺跡 28 次調査はすべてグリッド調査であることから、遺構の掘削は断割などの最小限にとどめている。そのため、前述のように遺物の多くは細片である。しかし調査を行ったすべての調査区で遺物が出土していることは、千代川遺跡の広範囲にわたって土地の利活用が長期間継続していたことを示している。

中でも第 30 トレンチから奈良時代中ごろの一括遺物が出土したことは特筆できる。これらの資料は、奈良時代の確実な遺構に伴う遺物として定点資料となるものである。丹波国府の候補地でもある千代川遺跡において重要な資料であり、今後のさらなる資料の充実を期待したい。

（中居和志）

（注）

（1）中居和志 2017「平成 27 年度の調査（千代川遺跡第 28 次）」『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成 28 年度）』

（2）保存処理は公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所による

（3）公益財団法人元興寺文化財研究所 2015『羽束師菱川城跡・長岡京跡（長岡京跡第 561 次調査）』

付表５　千代川遺跡第 28 次　出土遺物観察表

報告番号	種別	器種・器形	tr	出土場所 遺構・層位	口径	法量（cm） 器高	底径	残存率	胎土	色調	焼成	備考
1	土師器	皿	30	SP153002 一括	12.4	2.5	10.0	完形	密	明赤褐（5YR5/8）	やや軟	
2	土師器	皿	30	SP153002 一括	21.7	2.3	18.0	完形	密	橙（2.5Y6/8）	やや軟	歪みあり
3	土師器	台付皿	30	SP153002 一括	13.8	4.3	8.8	2/12	密	橙（7.5YR7/6）	良好	
4	須恵器	蓋	30	SP153002 一括	17.6	3.3	—	完形	密	灰白（10YR7/1）	良好	重ね焼き痕あり
5	須恵器	杯	30	SP153002 一括	12.7	3.9	9.0	完形	密	灰（N7/）	良好	
6	須恵器	杯	30	SP153002 一括	13.7	3.4	8.0	完形	密	灰白（10Y7/1）	良好	
7	須恵器	椀	30	SP153002 一括	10.8	3.7	6.8	完形	やや粗	灰（N6/）	良好	重ね焼き痕あり
8	須恵器	杯	30	SP153002 一括	11.8	3.2	7.2	完形	密	灰（N7/）	良好	
9	玉	臼玉	30	SP153002 一括	0.5	0.25	—	完形	—	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）	—	滑石製
10	須恵器	杯	30	3 層	12.0	2.2	—	1.3/12	密	青灰（5PB6/1）	良好	
11	土師器	蓋	30	SP153002	12.8	1.9	—	1/12	密	橙（5YR6/8）	良好	
12	土師器	杯	30	SP153001	11.4	2.4	6.0	4/12	密	橙（5YR6/8）	やや軟	№2と同時出土
13	土師器	杯	30	4・5 層	17.3	3.1	—	1/12 以下	密	浅黄橙（7.5YR8/4）	やや軟	
14	須恵器	杯	30	SP153001	12.2	3.5	8.4	6/12	密	灰白（2.5Y7/1）	やや軟	
15	須恵器	杯	30	SP153001	13.7	3.4	8.0	6/12	密	灰白（7.5Y7/1）	良好	
16	須恵器	杯	30	SP153002	14.2	3.3	10.6	6/12	密	灰（N5/）	良好	
17	須恵器	杯	30	SP153002	12.5	3.8	10.0	6/12	密	灰白（2.5Y7/1）	良好	
18	須恵器	杯	30	SP153001	13.2	4.2	9.0	6/12	密	灰白（2.5Y7/1）	良好	№2と同時出土
19	須恵器	杯	30	4 層	12.4	3.7	8.0	3/12	やや粗	灰（N6/）	良好	

報告番号	種別	器種・器形	tr	出土場所 遺構・層位	法量（cm） 口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	焼成	備考
20	須恵器	杯	30	SP153002	11.6	3.3	8.0	4/12	密	青灰（5B6/1）	良好	
21	須恵器	杯	30	SP153002	11.8	3.9	8.0	10/12	やや粗	灰白（10YR8/1）	軟	
22	須恵器	杯	30	4 層	11.0	3.2	8.0	2.4/12	密	灰（N7/）	良好	
23	須恵器	蓋	30	4 ・ 5 層	16.0	1.9	—	1/12 以下	密	灰（N7/）	良好	自然釉かかる
24	須恵器	蓋	30	4 ・ 5 層	13.0	2.9	—	9/12	密	灰（N6/）	良好	
25	須恵器	蓋	30	4 ・ 5 層	12.0	1.4	—	1/12	密	灰（N5/）	良好	
26	須恵器	蓋	30	4 ・ 5 層	12.6	1.6	—	2/12	密	灰（N4/）	良好	
27	須恵器	杯	30	4 層	16.2	4.2	11.7	6/12	密	灰白（2.5Y7/1）	良好	
28	須恵器	杯	30	SP153001	15.9	4.5	9.3	10/12	密	明オリーブ灰（2.5GY7/1）	やや軟	
29	須恵器	杯	30	4 ・ 5 層	—	1.8	9.6	2/12	密	灰（N5/）	良好	8 世紀
30	須恵器	壺	30	3 層	9.0	2.8	—	2/12	密	青灰（5B6/1）	良好	
31	須恵器	壺	30	3 層	7.0	2.1	—	1.7/12	密	暗オリーブ灰（2.5GY4/1）	良好	自然釉厚い
32	須恵器	壺	30	SP153001	—	8.5	—	4/12	やや粗	灰白（10YR7/1）	良好	自然釉かかる
33	須恵器	鉢	30	4 ・ 5 層	—	3.8	11.6	3/12	密	灰（N6/）	やや軟	断面灰赤色
34	須恵器	甕	30	SP153002	—	7.5	—	2/12	密	灰白（2.5Y7/1）	良好	
35	須恵器	鉢	30	SP153002	—	7.8	—	1/12 以下	密	明青灰（5B7/1）	良好	
36	土師器	皿	30	3 層	7.6	1.6	5.0	4/12	粗	橙（7.5YR7/6）	良好	
37	土師器	皿	30	3 層	6.0	1.0	4.0	2/12	密	灰白（7.5Y8/2）	やや軟	
38	土師器	皿	30	3 層	6.0	0.9	5.0	4/12	密	浅黄橙（7.5YR8/4）	良好	
39	瓦器	椀	30	3 層	—	1.4	3.5	4/12	密	灰白（10Y8/1）	軟	
40	縄文土器	浅鉢	27	4 層	—	7.5	—	1/12 以下	粗	にぶい褐（7.5YR6/3）	軟	
41	弥生土器	壺	11	2 ・ 3 層断割	11.6	8.5	—	2/12	やや密	浅黄橙（10YR8/3）	良好	胴部に赤彩あり
42	弥生土器	壺	11	2 ・ 3 層断割	—	12.6	—	4/12	やや粗	にぶい黄（2.5Y6/3）	やや軟	外面スス付着
43	弥生土器	壺	39	5 層	—	—	—	1/12 以下	やや粗	外：灰黄（2.5Y7/3）内：黒褐（2.5Y3/2）	良好	近江湖南地域搬入
44	弥生土器	器台	39	4 層	15.4	2.1	—	1/12 以下	密	浅黄橙（10YR8/3）	良好	
45	弥生土器	器台	39	2 層	—	5.3	17.0	1/12 以下	やや粗	灰白（10Y7/1）	良好	
46	弥生土器	壺	39	5 層	11.6	2.9	—	1/12	密	にぶい黄橙（10YR7/3）	良好	
47	弥生土器	壺	40	3 層	11.6	1.1	—	1/12	粗	灰白（2.5Y8/2）	やや軟	
48	土師器	壺	38	2 層	16.8	3.4	—	1/12 以下	やや粗	灰白（2.5Y8/1）	やや軟	
49	土師器	壺	26	2 ・ 3 層	—	2.8	—	1/12 以下	粗	浅黄橙（10YR8/3）	良好	内面黒色物質付着
50	弥生土器	壺	6	精査	—	3.5	13.6	1.5/12	やや粗	浅黄橙（7.5YR8/4）	やや軟	
51	須恵器	杯	26	3 層	—	3.2	—	1/12	密	黄灰（2.5Y6/1）	良好	
52	須恵器	杯	38	2 層	—	1.9	—	1.5/12	密	青灰（10BG6/1）	良好	
53	須恵器	鉢	38	3 層	—	2.1	—	3/12	密	灰（7.5Y6/1）	良好	内外面自然釉
54	須恵器	杯	49	3 層	13.8	4.0	8.0	4/12	密	灰（N8/）	良好	
55	須恵器	蓋	28	2 層	—	2.6	—	1/12 以下	密	灰白（2.5Y7/1）	良好	
56	須恵器	蓋	6	3 層	—	2.0	—	3/12	密	灰（N7/）	良好	
57	須恵器	蓋	29	2 ・ 3 層	—	1.5	—	2/12	密	灰白（7.5Y7/1）	良好	
58	須恵器	蓋	13	3 層	—	1.2	—	1/12 以下	密	青灰（5B5/1）	良好	
59	須恵器	蓋	38	3 層	12.8	1.5	—	1.3/12	密	青灰（5PB6/1）	良好	
60	須恵器	蓋	27	3 層	12.8	1.0	—	1/12 以下	密	褐灰（10YR6/1）	良好	
61	須恵器	蓋	26	2 ・ 3 層	16.0	1.5	—	1.5/12	密	灰（N6/）	良好	
62	須恵器	蓋	32	2 ・ 3 ・ 4 層	15.0	1.7	—	1/12 以下	密	灰（7.5Y6/1）	良好	鋸状痕あり
63	須恵器	蓋	38	3 層	12.6	1.5	—	1.5/12	密	灰白（7.5Y7/1）	良好	
64	須恵器	杯	7	3 層	11.2	3.2	8.4	1/12	密	明青灰（5PB7/1）	良好	
65	須恵器	杯	7	3 層	—	1.6	9.0	1.3/12	密	灰白（2.5Y7/1）	良好	
66	須恵器	杯	39	2 層	—	1.9	8.5	1.5/12	密	灰（N7/）	良好	
67	須恵器	杯	33	3 層	—	1.7	6.8	3/12	やや粗	灰（N7/）	良好	三日月高台
68	須恵器	杯	6	3 層	—	1.9	8.4	1.3/12	密	青灰（5B6/1）	良好	
69	須恵器	椀	39	5 層	14.8	3.3	—	1/12	密	褐灰（10YR5/2）	良好	
70	須恵器	椀	35	素掘溝	9.8	2.8	—	1.2/12	密	灰（N5/）	良好	
71	須恵器	杯	29	2 ・ 3 層	—	1.8	8.8	2/12	密	灰（N5/）	良好	
72	緑釉陶器	椀	13	表土	11	2.2	—	1/12	密	灰（10Y6/1）	良好	素地は須恵質
73	緑釉陶器	椀	20	2 層	—	2.1	—	1/12 以下	密	暗灰黄（2.5Y5/2）	良好	素地は軟質
74	緑釉陶器	椀	3	3 層	—	1.0	—	1/12 以下	密	胎土：灰白（5Y7/1）釉：灰白（5Y7/2）	良好	素地は須恵質
75	須恵器	壺	6	3 層	—	3.5	—	2/12	密	灰白（N7/）	やや軟	
76	須恵器	甕	6	3 層	30.0	7.8	—	1/12	やや粗	灰白（5Y7/1）	やや軟	
77	須恵器	鉢	6	3 層	18.6	4.5	—	1/12	密	青灰（5PB6/1）	良好	
78	須恵器	鉢	42	断割	19.0	5.2	—	2/12	密	灰白（7.5Y7/1）	軟	
79	土師器	椀	35	3 層	16.2	3.3	—	2/12	密	浅黄橙（10YR8/3）	良好	
80	土師器	甕	29	4 ・ 5 層	16.2	3.2	—	1/12	密	橙（7.5YR6/8）	良好	
81	製塩土器	製塩	29	3 層	12.8	3.2	—	1/12 以下	やや粗	明橙（7.5YR5/6）	良好	
82	瓦	丸瓦	20	3 ・ 4 層	—	—	—	1/12 以下	粗	青灰（5PB6/1）	やや軟	
83	瓦	平瓦	19	3 層	—	—	—	1/12 以下	粗	灰白（5Y8/1）	やや軟	
84	土師器	円盤	46	4 層	—	—	—	完形	やや粗	灰黄（2.5Y7/2）	良好	

報告番号	種別	器種・器形	tr	出土場所 遺構・層位	法量（cm） 口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	焼成	備考
85	瓦器	椀	49	2 層	—	4.3	5.6	2/12	密	黒（10YR2/1）	良好	
86	瓦器	椀	33	5 層	—	1.4	4.8	3/12	密	黒（10YR2/1）	良好	
87	瓦器	椀	36	3 層	12.8	2.7	—	1/12 以下	密	黒（2.5Y2/1）	良好	
88	瓦器	椀	36	3・4 層	15.4	5.0	—	1/12	密	灰白（10Y8/2）	やや軟	
89	瓦器	椀	11	5 層	12.4	3.4	—	1/12 以下	密	青黒（5B2/1）	良好	
90	瓦器	椀	11	6・7 層	—	1.4	6.0	2/12	やや粗	青黒（5B2/1）	軟質	
91	瓦器	椀	7	精査中	4.0	9.0	3.4	1.3/12	密	黒（5Y2/1）	軟質	
92	瓦器	椀	38	3 層	15.0	3.3	—	1/12	密	黒（2.5GY2/1）	やや軟	
93	瓦器	椀	38	3 層	—	1.8	5.2	2/12	密	黒（2.5GY2/1）	軟	
94	瓦器	椀	28	4・5 層	13.0	2.8	—	2/12	密	黒（2.5GY2/1）	軟	
95	瓦器	椀	44	SD 2	10.8	2.8	—	1/12	密	暗黒（N3/）	良好	
96	瓦器	椀	49	2 層	13.0	3.3	—	2/12	密	黒褐（2.5Y3/1）	良好	
97	瓦器	椀	18	4 層上面	13.0	3.8	5.4	1/12	やや粗	浅黄（2.5Y8/6）	やや軟	
98	瓦器	鉢	24	4 層	10.6	3.9	2.8	24/12	密	青黒（5B2/1）	やや軟	
99	瓦器	皿	46	4 層	7.4	1.4	4.0	1/12	密	橙（5YR6/6）	良好	
100	土師器	椀	16	2 層	12.6	4.5	5.3	1.5/12	密	浅黄橙（10YR8/3）	良好	
101	土師器	椀	49	3 層	—	5.2	5.8	1/12	密	にぶい黄橙（10YR7/2）	良好	
102	土師器	皿	49	3 層	16.6	2.6	12.0	3/12	密	にぶい橙（7.5YR7/4）	良好	
103	土師器	皿	44	3・4・5 層	8.4	1.3	—	1/12	密	にぶい橙（7.5YR7/4）	良好	ての字口縁
104	土師器	皿	49	3 層	7.6	1.7	2.0	3/12	密	浅黄橙（10YR8/3）	良好	
105	土師器	皿	42	SP153002	14.2	2.7	8.0	6/12	密	浅黄橙（10YR8/4）	良好	
106	土師器	皿	49	3 層	12.2	3.3	6.0	2/12	密	橙（5YR6/6）	良好	
107	土師器	皿	36	3・4 層	13.0	1.4	8.0	1/12	密	浅黄橙（10YR8/3）	良好	
108	土師器	皿	38	2 層	10.0	2.8	6.0	2/12	密	灰白（10YR8/2）	やや軟	
109	土師器	皿	28	2 層	10.0	1.6	—	1/12	密	灰黄（2.5Y7/2）	良好	
110	土師器	皿	37	断割	9.0	1.4	5.0	1/12	密	浅黄橙（7.5YR8/3）	やや軟	
111	土師器	皿	42	断割	8.3	1.3	5.0	2/12	密	にぶい橙（7.5YR7/4）	良好	
112	土師器	皿	38	2 層	9.2	1．2	6.5	1.5/12	密	浅黄橙（7.5YR8/6）	やや軟	
113	土師器	皿	7	3 層	7.6	1.2	4.0	1.7/12	密	浅黄橙（7.5YR8/4）	良好	
114	土師器	皿	24	4 層	8.9	1.0	6.0	1.2/12	密	浅黄橙（7.5YR8/4）	良好	
115	土師器	皿	13	3 層	7.6	1	4.3	1.7/12	密	浅黄橙（10YR8/3）	良好	
116	土師器	皿	33	4 層	8.0	1.2	6.0	1/12	密	にぶい赤褐（5YR5/4）	良好	
117	土師器	皿	17	3 層	8.6	1.1	4.4	1.3/12	密	にぶい黄橙（10YR7/3）	やや軟	
118	土師器	皿	49	3 層	8.4	1.3	—	1.5/12	密	灰白（10Y8/2）	良好	
119	土師器	皿	32	5 層	—	1.5	—	1/12 以下	密	灰白（7.5Y8/2）	良好	
120	土師器	皿	49	2 層	10.6	1.6	—	1/12	密	灰白（10Y8/1）	良好	
121	土師器	皿	38	3 層	9.0	2.3	—	1.5/12	密	灰白（10YR8/2）	軟	
122	土師器	皿	46	2 層	10.4	1.8	—	1.5/12	密	黒（10YR1.7/1）	良好	
123	土師器	皿	32	2・3・4 層	10.4	1.8	6.0	2/12	密	橙（5YR7/6）	良好	
124	土師器	皿	7	素掘溝	12.0	2.2	6.4	完形	密	浅黄橙（7.5YR8/3）	良好	
125	瓦器	甕	32	3 層	36.0	8.6	—	1/12 以下	粗	灰黄（2.5Y7/2）	良好	
126	瓦器	甕	6	3 層	16.0	2.2	—	1/12	やや粗	灰（N4/）	やや軟	
127	瓦器	甕	28	3 層	—	3.2	—	1/12	密	暗灰（N3/）	良好	
128	瓦器	羽釜	49	3 層	24.0	4.7	—	1/12 以下	密	黒（10YR1.7/1）	良好	
129	瓦器	鉢	13	3 層	24.0	7.1	—	1.5/12	やや粗	青黒（5PB2/1）	やや軟	
130	須恵器	鉢	24	3 層	24.0	4.2	—	1/12	粗	青灰（5PB6/1）	やや軟	
131	須恵器	鉢	32	3 層	—	3.4	—	1/12 以下	密	黄白（2.5Y8/1）	良好	東播系
132	陶器	擂鉢	19	2 層	22.0	3.9	—	1/12 以下	密	にぶい赤褐（2.5YR5/4）	良好	備前焼
133	白磁	壺	7	3 層	—	1.6	—	2/12	密	胎土:灰白（N8/）釉:灰白（2.5GY8/1）	良好	
134	白磁	椀	27	3 層	18.0	2.7	—	1/12 以下	密	胎土：灰白（7.5Y7/1） 釉：灰白（7.5Y7/2）	良好	IV類
135	白磁	椀	8	3 層	12.4	1.9	—	1/12 以下	密	灰白（5Y8/1）	良好	
136	白磁	椀	6	3 層	—	1.6	8.4	1/12	密	灰白（5Y8/1）	良好	
137	白磁	椀	39	4 層	—	3.2	—	3/12	密	胎土：灰黄（2.5Y7/2） 釉：灰白（2.5Y8/2）	良好	
138	白磁	椀	39	6・7 層上面	—	3.2	—	1/12 以下	密	胎土:灰白（5Y7/1） 釉:灰白（5Y7/3）	良好	
139	白磁	椀	3	落ち込み	—	6.1	6.2	4/12	密	灰白（5Y7/1）	良好	
140	青磁	椀	46	表土	15.2	4.1	—	1/12 以下	密	胎土：灰（N6/） 釉：オリーブ灰（2.5GY5/1）	良好	
141	青磁	椀	46	表土	—	2.6	—	1/12 以下	密	胎土：灰白（5Y8/1） 釉：明オリーブ灰（2.5GY7/1）	良好	
142	青磁	皿	27	3 層	—	1.5	4.2	1/12	密	胎土：灰白（1.5Y7/1） 釉：オリーブ灰（2.5GY5/1）	良好	同安窯系
143	陶器	天目椀	8	2 層	8.6	2.1	—	1/12 以下	密	緑黒（7.5GY2/1）	良好	
144	陶器	椀	19	3 層	6.8	2.9	—	2/12	密	胎土：にぶい黄褐（10YR7/3） 釉：明オリーブ灰（2.5GY7/1）	良好	
145	陶器	皿	19	4 層	8.6	1.2	5.4	8/12	密	浅黄（5Y7/4）	良好	

報告番号	種別	器種・器形	出土場所 tr	遺構・層位	法量（cm） 口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	焼成	備考
146	石器	石剣	38	3層	—	—	—	—	—	暗オリーブ灰（2.5GY3/1）	—	粘板岩製
147	石器	石包丁	49	4層	—	—	—	6/12	—	青黒（5PB1.7/1）	—	粘板岩製
148	石器	石錐	38	SP153002	—	—	—	完形	—	暗青灰（5B3/1）	—	サヌカイト製
149	金属製品	小柄	13	3層断割	—	—	—	—	—	—	—	銅製
150	加工木	杭	11	5層	—	—	—	—	—	—	—	

4　平成28年度の調査（千代川遺跡第29次調査）

平成28年度に実施した第29次調査は、平成29年度以降のほ場整備事業に先立ち、工事で切土が遺構面まで達することが確実でさらに平成29年度の耕作がない地点について、面的なトレンチ調査を行った（第1トレンチ）。さらに平成27年度と同様に、遺構の有無と遺構面までの深さを確認するためのグリッド調査区を31箇所設定した。調査期間は平成28年8月22日から平成29年2月28日までである。なお、グリッド調査の成果については、平成29年度に報告済みである。(1)

（1）調査の経過

第1トレンチを設定した場所は、平成27年度の第28次調査で第4・5トレンチを設けた場所にあたる。第27次調査の第4・5トレンチでは、古代の掘立柱建物や時期不明の土坑を検出したことから、周辺に古代を中心とする遺構が展開することが想定できた。平成28年度はこの調査成果を受けて、ほ場整備で切土される場所を対象に調査区の設定を行った。ただし、周辺には耕作地や用水路、里道などが広がることから、調査区と切土対象地外との間に余裕を持って調査区を設定した。南北約16m、東西約25mの調査区を設け、表土を重機で除去した後、床土以下を人力にて掘削し、遺構面の検出を進めた。調査面積は391㎡である。

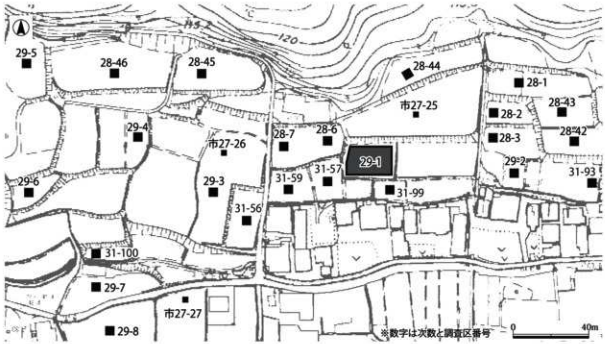
第1トレンチの調査地は、かつて1筆の水田であったが、数年来休耕地となっていた場所である。調査を進めると、調査区の南半に黒色シルト層を確認し、北半には黄褐色細砂の地山となっている状況が確認できた。黒色シルト層上面では中世の遺構を検出し、黄褐色細砂層では古代・中世の遺構や時期不明の遺構を検出した。

中世の遺構の掘削後は、黒色シルト層を重機で掘り下げ、古代の遺構面となるクロボク層を検出した。古代の遺構を掘削後、調査の内容を公開するために現地説明会を平成29年1月29日に開催し、約70名の参加者を得た。

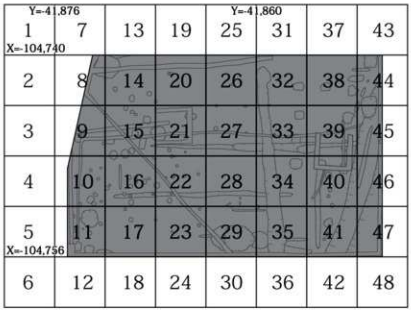
現地説明会終了後、下層遺構の確認のため重機にて断割を実施したところ、クロボク層の下層から斜行する溝や流路を確認したため、これらの記録を作成し掘削を行った。その後、調査地の埋め戻しを行ったうえで、現地作業は平成29年2月28日に終了した。

（2）調査区の設定と基本層序（第25図～第27図）

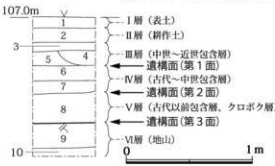
第1トレンチの周辺には、これまでに亀岡市・京都府が複数の調査区を設けている（第25図）。今回のトレンチより東側に設けた調査区では、第29次第2トレンチで中世に比定できる柱穴を複数検



第 25 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ配置と周辺の既往調査区（1/2,000）

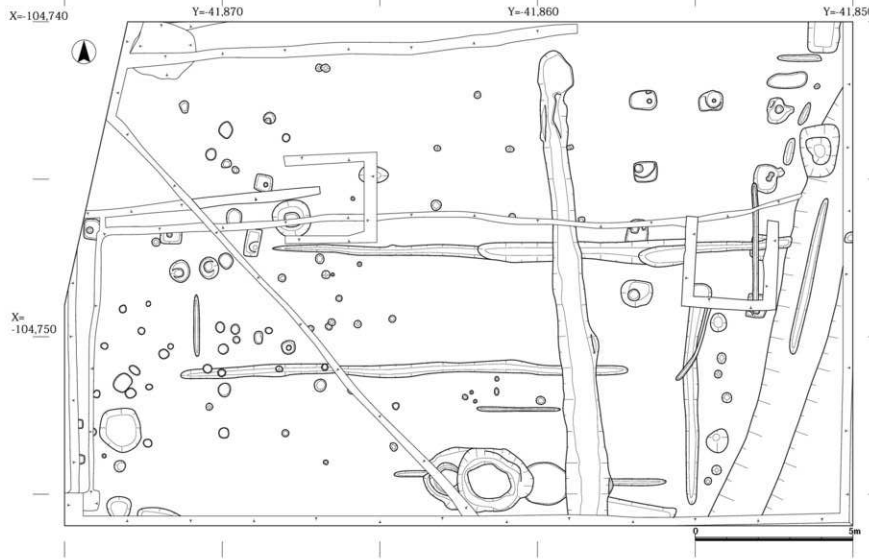


第 26 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ地区割（1/300）

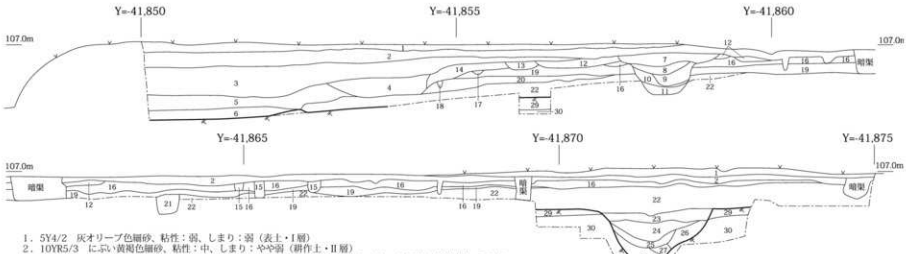


1．5Y4/2　灰オリーブ色細砂
2．10YR5/3　にぶい黄褐色細砂
3．10YR4/3　にぶい黄褐色細砂～粗砂
4．10YR3/3　暗褐色中砂～粗砂混じり細砂（素掘溝）
5．10YR4/3　にぶい黄褐色中砂～粗砂混じり細砂、（素掘溝）
6．10YR3/2　黒褐色極細砂～細砂、わずかに粗砂混じる
7．10YR2/2　黒褐色シルト～極細砂
8．10YR2～1.7/1　黒色粘土～シルト
9．2.5Y4～3/1　黒褐色シルト～極細砂
10．5Y4/2　灰オリーブ色細砂とシルト質の互層

第 27 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ南壁柱状図（1/30）



第 28 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ全遺構平面図　(1/120)



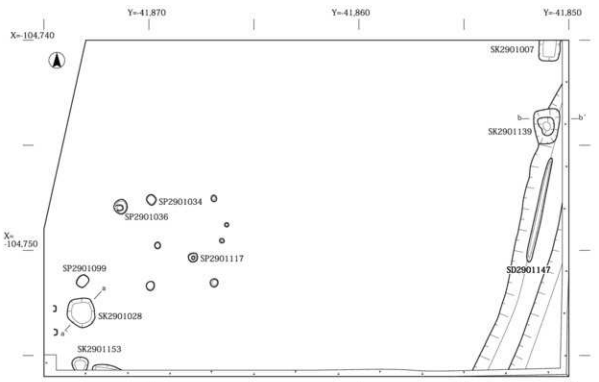
1．5Y4/2　灰オリーブ色細砂、粘性：弱、しまり：弱（表土・I 層）
2．10YR5/3　にぶい黄褐色細砂、粘性：中、しまり：やや弱（耕作土・II 層）
3．10YR4/3　にぶい黄褐色細砂～粗砂、わずかに有機物含む、粘性：やや弱、しまり：やや弱（近世盛土・III 層）
4．10YR6～5/4　にぶい黄褐～にぶい黄橙色細砂～粗砂、粘性：弱、しまり：弱（近世盛土・III 層）
5．10YR5/4　にぶい黄褐色細砂～粗砂、粘性：弱、しまり：弱（近世盛土・III 層）
6．10YR5/4　褐色細砂～粗砂、粘性：弱、しまり：弱（近世盛土・III 層）
7．7.5YR4/2　灰褐、細砂～中砂、第 22 層ブロック少し含む、粘性：やや弱、しまり：中（SD2901022）
8．10YR3/2　黒褐色砂質土粗砂混り、第 22 層ブロック多く含む、粘性：やや弱、しまり：中（SD2901022）
9．10YR3/2　黒褐色砂質土粗砂混り、第 22 層ブロック少し含む、粘性：やや弱、しまり：中（SD2901022）
10．10YR3/2　黒褐色砂質土、粗砂・第 22 層ブロック多く含む、粘性：やや弱、しまり：中（SD2901022）
11．10YR2/2　黒褐色シルト粗砂混り、第 22 層ブロック少し含む、粘性：強、しまり：やや強（SD2901022）
12．10YR3/3　暗褐色中砂～粗砂混じり細砂、炭化物・第 22 層ブロック多く含む、粘性：やや弱、しまり：やや強（素掘溝）
13．10YR4/3　にぶい黄褐色中砂～粗砂混じり細砂、炭化物わずかに含む、第 22 層ブロック含む、粘性：やや弱、しまり：やや強（素掘溝）
14．10YR4/3～4　にぶい黄褐～褐色中砂～粗砂まじり細砂、炭化物わずかに含む、第 22 層ブロック含む、粘性：弱、しまり：やや強い、遺物やや多い（中世基盤土・III 層）
15．10YR4/3　にぶい黄褐色粗砂まじり細砂、粘性：やや弱、しまり：やや弱（ピット埋土）
16．10YR4/3　にぶい黄褐色中砂～粗砂まじり細砂～極細砂、粘性：やや弱、しまり：やや強（III 層）
17．10YR4/2　灰褐色細砂、粘性：弱、しまり：弱（ピット埋土）
18．10YR4/2　灰褐色細砂、粘性：弱、しまり：弱（ピット埋土）
19．10YR3/2　黒褐色極細砂～細砂、わずかに粗砂混じる、粘性：やや強、しまり：やや強、遺物やや多く含む（中世整地土・IV 層）
20．10YR2/2　黒褐色シルト～極細砂、粘性：やや強、しまり：強、遺物少ない（IV 層）
21．10YR3/2　黒褐色細砂、粗砂混じる、粘性：やや強、しまり：やや弱（古代の柱穴）
22．10YR2～1.7/1　黒色粘土～シルト、粘性：強、しまり：強、遺物ほぼ含まない（古代の基盤土、クロボク層・V 層）
23．10YR3/1　黒褐色シルト、極細砂～細砂を多く含む、粘性：強い、しまり：強い（NR2901148）
24．2.5YR 5～4/1　黄灰色極細砂～中砂（砂質土）、レンズ状にシルトが互層に入る、粘性：やや強い、しまり：中（NR2901148）
25．10YR1.7/1　黒色中砂～粗砂まじりシルト、粘性：強い、しまり：強い、わずかに有機物含む（NR2901148）
26．10YR3/1～2　黒褐色シルト、粘性：強い、しまり：強い（NR2901148）
27．10YR1.7/1　黒色粘土、雲母をやや多く含む、粘性：強い、しまり：強い（NR2901148）
28．2.5YR6～5/1　黄灰色細砂～粗砂、ブロック状に粘土入る、有機物含む、粘性：強、しまり：やや弱い（NR2901148）
29．2.5Y 4～3/1　黒褐色シルト～極細砂、粘性：中、しまり：強、鉄分多く含む（古代以前の流路、土坑の基盤土、地山・VI 層）
30．5Y4/2　灰オリーブ色細砂とシルト質の互層、粘性：なし、しまり：やや強（地山・VI 層）
31．5YR4/2　灰オリーブ色シルトと 5Y　5/1　灰色中砂～粗砂まじり、細砂が互層状、粘性：やや強、しまり：やや強（地山・VI 層）

第 29 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ南壁土層断面図　(1/60)

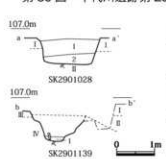
出しているが、その他の調査区からは明確な遺構を検出できていない。一方、第１トレンチより西側では、多くの調査区で柱穴を検出しており、遺構密度が高くなる傾向にある。

調査区は、国土座標に合わせて４ｍメッシュを設定した（第 26 図）。メッシュには、北西隅から順番に 48 番までの番号を付し、遺物の取上はメッシュ番号ごとに行った。

基本層序は、地山を含めて６層に大別できる（第 27 図）。Ⅰ層は表土、Ⅱ層は床土を含む耕作土である。Ⅲ層は中世末から近世初めにかけての遺物を含む包含層で、特に調査区南東側に厚く堆積する。Ⅳ層は古代から中世の遺物を含む包含層で、遺物をやや多く含む。Ⅳ層上面で、遺構面第１面（中世～近世初頭）を検出した。Ⅴ層はいわゆるクロボク層で、古代以前の遺物をわずかに含む。Ⅴ層上面で、遺構面第２面（古代）を検出した。Ⅵ層は花崗岩の風化した真砂土の地山である。Ⅵ層上面で、遺構面第３面（古代以前）を検出した。



第 30 図　千代川遺跡第 29 次　第１トレンチ第１面遺構（中世末～近世初）平面図（1/180）



１．10YR5/3　にぶい黄褐色細砂～中砂、粘性：弱、しまり：弱
２．10YR3/1　黒褐色シルト～粘土、地山ブロックを少し含む、粘性：中、しまり：やや弱
Ⅰ．10YR2～ 1.7/1　黒色粘土～シルト
　粘性：強、しまり：強、遺物ほぼ含まない（南壁第 22 層、クロボク層）
Ⅱ．2.5Y４～３/1　黒褐色シルト～極細砂粘性：中、しまり：強（南壁第 29 層、地山）

１．10YR4～３/2　灰黄褐～黒褐色細砂～中砂、粘性：弱、しまり：中
Ⅰ．10YR5/3　にぶい黄褐色細砂、粘性：中、しまり：やや弱（南壁第２層）
Ⅱ．10YR4/3　にぶい黄褐色～粗砂、わずかに有機物含む
　粘性：やや弱、しまり：やや弱（南壁第３層）
Ⅲ．10YR　２～ 1.7/1　黒色粘土～シルト
　粘性：強、しまり：強、遺物ほぼ含まない（クロボク層、南壁第 22 層）
Ⅳ．2.5Y４～３/1　黒褐色シルト～極細砂、粘性：中、しまり：強（南壁第 29 層、地山）

第 31 図　千代川遺跡第 29 次　第１トレンチ SK2901028・139 土層断面図（1/100）

（3）第 1 面の調査（第 30 図～第 31 図）

第 1 面は中世から近世初頭に比定される遺構面で、遺構の時期は遺構の切り合いや出土遺物の時期から、さらに 3 つの時期に細分することができる。最も新しい時期の遺構は土坑ＳＫ 2901028・139、ＳＤ 2901147 で、この時期に調査区南東角の段差を通路状に成形している。ただし、この段差自体は中世以前から存在した可能性があり、あくまで成形したのがこの段階である可能性がある。次に新しい時期の遺構は、掘立柱建物ＳＢ 2901003・04 や溝ＳＤ 2901022 で、最も古い時期の遺構はＳＤ 2901010 等の素掘溝群である。

①中世末～近世初頭（第 30 図・第 31 図）

ＳＫ 2901028　調査区南西角近くで検出した土坑である。平面はほぼ円形で、埋土は上下 2 層に明確に分かれる。出土遺物には瀬戸焼の陶器などがあり、中世末から近世初めのものと判断できる。

ＳＫ 2901139　調査区北東の段差部分で検出した土坑である。断面の状況から、段差よりも古いことを確認した。土坑の底部近くでは花崗岩の石材を検出した。出土遺物は、瓦器や唐津焼の椀があることから、近世初期に埋没したと評価できる。

ＳＤ 2901147　調査区東端で検出した溝である。出土遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、段差の中段部分に併行しており、埋土も段差埋土と共通することから、段差と同時期に掘削されたものと考える。この溝のある段差の中段部分は、平坦に加工されており、通路状の役割をもっていた可能性がある。段差がＳＫ 2901139 よりも新しいことから、遺構の時期は近世初期が上限である。

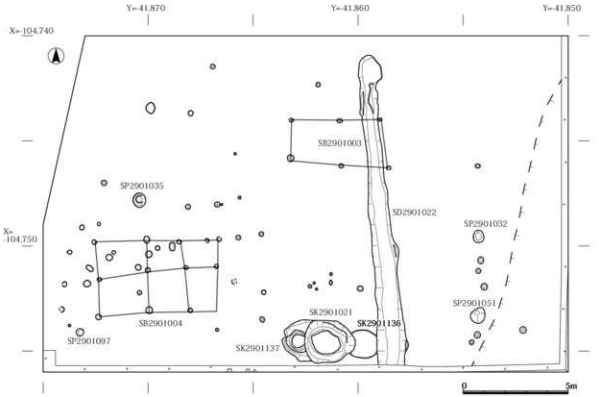
②鎌倉～室町時代（第 32 図～第 36 図）

ＳＢ 2901003　調査区の中央北よりで検出した東西 2 間（3.9・4.2 m）、南北 1 間（1.7・2.1 m）の東西棟の掘立柱建物である。柱通りがあまり良くないが、建物主軸はほぼ東西方向に揃う。柱穴は、いずれも平面円形で直径 20 ～ 33cm、深さ 11 ～ 30cmを測る。ＳＰ 2901106・145 では柱痕跡があり、ＳＰ 2901109 では抜き取り痕を確認できる。出土遺物は全く確認できなかった。

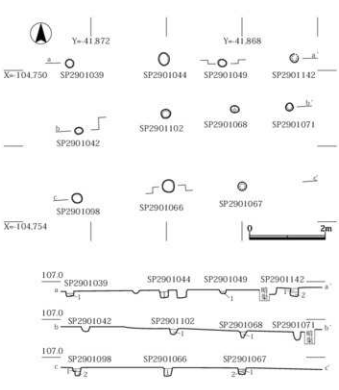
ＳＢ 2901004　調査区の中央北よりで検出した東西 3 間（3.9・4.2 m）、南北 2 間（1.7・2.1 m）の東西棟の掘立柱建物である。重複関係から素掘溝ＳＤ 2901072 よりは新しいことを確認している。南西角の柱は確認できなかったが、削平されたか元々存在しなかったかは不明である。柱通りがあまり良くないが、建物主軸はほぼ東西方向に揃う。柱穴は、いずれも平面円形で直径 21 ～ 36cm、深さ 14 ～ 24cmを測る。いずれの柱も柱痕跡は確認できない。出土遺物は、ＳＰ 2901039・67 に土師器片があるが、どちらも小片で時期は不明である。

ＳＤ 2901022　調査区の中央東よりで検出した溝である。検出全長は 15.1 m、幅は 0.7 ～ 1.2 m、溝の主軸は真北から西に 4.7°振る。溝の北端はやや幅広くなる。溝の底は南に向かって傾斜しており、南壁では深さ 1 mを測る。埋土は 3 層からなり、第 1・2 層はやや砂質が強く地山ブロックを含む。一方で、最下層の 3 層はシルト質で遺物が少ない傾向にある。第 3 層が溝機能時の堆積で、上層の第 1・2 層は人為的な埋め戻し土と判断できる。

出土遺物は、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、砥石と多岐にわたる。土師器皿の時期からみて、埋没時期は室町時代であると考える。



第 32 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ第 1 面遺構（鎌倉～室町時代）平面図（1/180）



【SP2901039】
1．10YR3/2 暗褐色極細砂

【SP2901044】
1．10YR3/2 暗褐色極細砂
　φ0.5 ㎝クロボクブロック含む

【SP2901049】
1．10YR3/3 暗褐色極細砂

【SP2901142】
1．2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂
　φ0.3 ㎝地山ブロック含む
2．10YR3/2 黒褐色細砂、
　φ0.1 ㎝以下の白色粒わずかに含む

【SP2901102】
1．2.5Y4/2 暗灰黄色細砂、粗砂混り

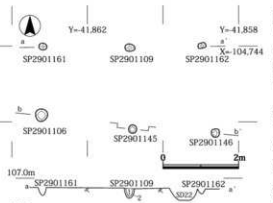
【SP2901068】
1．2.5Y4/2 暗灰黄色細砂、粗砂混り

【SP2901098】
1．10YR3/2 黒褐色細砂、粘性：やや強
2．10YR3/3 黒褐色極細砂
　クロボクブロック少し含む

【SP2901066】
1．10YR2/3 黒褐色細砂
　φ 1 ㎝クロボクブロック少し含む

【SP29010767】
1．10YR3/2 黒褐色細砂
　クロボクブロック少し含む
2．10YR2/3 黒褐色細砂
　クロボクブロック少し含む

第 33 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ SB2901004 平面・土層断面図（1/100）



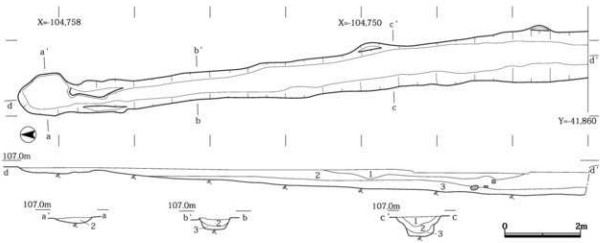
【SP2901109】
1．7.5YR4/1 黒褐色細砂、地山ブロック含む、粘性：弱、しまり：やや強
2．10YR2/2 黒褐色極細砂～細砂、粘性：やや弱、しまり：弱

【SP2901106】
1．10YR2/2 黒褐色極細砂～細砂 φ 1 ㎜以下白色粒わずかに含む、粘性：やや弱、しまり：強

【SP2901145】
1．7.5YR3/2 黒褐色細砂 φ 3～5 ㎜地山ブロック含む、粘性：弱、しまり：強
2．7.5YR4/1 褐灰色細砂、地山ブロック含む、粘性：弱、しまり：やや強
3．10YR2/2 黒褐色極細砂～細砂、粘性：やや弱、しまり：弱

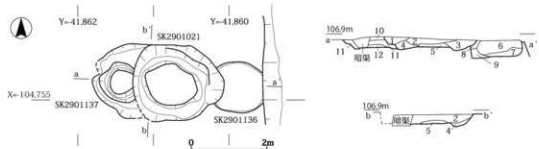
【SP2901146】
1．7.5YR4/1 黒褐色細砂、地山ブロック含む、粘性：弱、しまり：やや強
2．10YR2/2 黒褐色極細砂～細砂、粘性：やや弱、しまり：弱

第 34 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ SB2901003 平面・土層断面図（1/100）



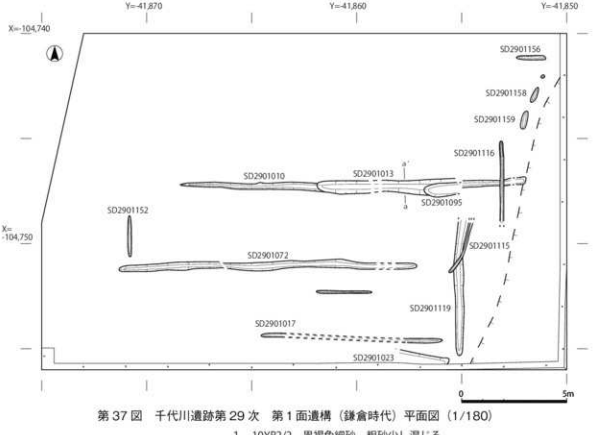
1．10YR3/2　黒褐色砂質土粗砂混り、クロボクブロック多く含む
2．10YR3/2　黒褐色砂質土粗砂混り、クロボクブロック少し含む
3．10YR2/2　黒褐色シルト細砂混り、粘質強い、クロボクブロック少し含む

第 35 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ SD2901022 土層断面図（1/100）



1．10YR3/3～4　暗褐色細砂～中砂、クロボクブロック多く含む、粘性：弱、しまり：やや強（SK2901021）
2．2.5YR3/3　暗オリーブ灰色細砂～中砂、粘性：弱、しまり：やや強（SK2901021）
3．10YR3/4　暗褐色細砂～中砂、クロボクブロック多く含む、粘性：やや強、しまり：弱（SK2901021）
4．2.5YR3/2　黒褐色シルト～極細砂、金雲母含む、粘性：強、しまり：中（SK2901021）
5．2.5YR3/2～3　黒褐～暗オリーブ灰色極細砂、金雲母少し含む、粘性：中、しまり：中（SK2901021）
6．2.5Y4～3/2～3　暗灰黄～暗オリーブ色細砂、クロボクブロック多く含む、粘性：弱、しまり：強（SK2901136）
7．2.5Y3～2/1　黒褐～黒色極細砂、クロボクブロック含む、粘性：強、しまり：やや強（SK2901136）
8．10YR3/4～3　暗褐色細砂～中砂、粘性：弱、しまり：やや強（SK2901136）
9．2.5Y4/2～3　暗灰黄～オリーブ褐色極細砂、クロボクブロック含む、粘性：やや強、しまり：やや強（SK2901136）
10．10YR3/3～4　暗褐色細砂～中砂、クロボクブロック多く含む、粘性：弱、しまり：やや強（SK2901137）
11．2.5Y4/2　暗灰黄色極細砂～細砂、粗砂混り、粘性：弱、しまり：やや弱（SK2901136）
12．2.5Y4～3/2　黄灰黒褐色極細砂～細砂、粗砂混り、粘性：中、しまり：中（SK2901136）

第 36 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ SK2901021・136・137 平面・土層断面図（1/100）



第 37 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 面遺構（鎌倉時代）平面図（1/180）

1．10YR2/2　黒褐色細砂、粗砂少し混じる
2．10YR3/3　黒褐色細砂、粗砂多く混じる（SD2901010）

Ⅰ．10YR3/2　黒褐色極細砂～細砂、わずかに粗砂混じる（南壁第 19 層）
Ⅱ．10YR　2～1.7/1　黒色粘土～シルト（南壁第 22 層、クロボク層）

第 38 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ SD290101 土層断面図（1/100）

ＳＤ 2901022 は、排水溝や耕作溝としては規模が大きいことから、区画施設と判断できる。遺構の西側にはＳＢ 2901004 などの多くの柱穴が確認できる一方、東側には柱穴が少ない傾向にある。このことから、ＳＤ 2901022 は西側の居住区域を区画する区画溝であると評価できる。遺構の規模からみて、堀として防御的な機能をもっていた可能性もある。遺構が北端で途切れるのは、出入口である可能性もあるが、調査地北半に地山が露出することや、中世の遺構も少ないことから、中世以降にＳＤ 2901022 以北を切土により削平したためと考える。中世段階にはＳＤ 2901022 の北端に高低差があり、溝はさらに段差の北側に続いていた可能性がある。

ＳＫ 2901021・136・137　調査区中央南端で検出した土坑である。切合い関係からＳＫ 2901021 が最も新しいが、ＳＫ 2901136・137 の前後関係は不明である。ＳＫ 2901021・137 は、中央部に盛土をして一段高くなっており、平面形は円形周溝状となっている。出土遺物は、ＳＫ 2901021 から土師器、須恵器、瓦器などがある。ＳＫ 2901136 がＳＤ 2901022 よりも古く、出土遺物に瓦器があることから、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構と判断できるが、遺構の用途は不明である。

③鎌倉時代（第 37 図・第 38 図）

素掘溝群　第２面の古代の建物が埋没した上層の第Ⅳ層上面で複数の素掘溝を検出している。これら

の溝は浅く、遺物量が少ないことから、耕作溝の可能性が高い。素掘溝には東西方向と南北方向があるが、東西方向の溝が多い。SD 3901010・72・17 は約 3.6 m間隔となっており、同時期の溝であるといえる。また、SD 2901013 は他の溝と比べてより深い溝で、排水等の用途があった可能性がある。素掘溝群の時期は、出土遺物から鎌倉時代と考える。

（3）第2面の調査（第 39 図～第 41 図）

第2面では、下記の遺構を検出した。出土遺物の年代から、時期は古代と考える。

SB 2901001　調査区の東端で検出した東西2間（4.1 m）、南北3間（6.3 m）の南北棟の掘立柱建物である。建物主軸は真北から4～6°東に振る。柱穴の平面形は方形で、長方形平面なものが多い。柱穴の一辺は、短辺が 55 ～ 70cm、長辺が 75 ～ 100cm、深さ 35 ～ 60cm を測る。北側の柱穴ほど浅くなる傾向にあることから、建物の存在した時の地表面は南に傾斜していた可能性が高い。柱痕はいずれの柱穴でも確認しており、直径 12 ～ 20cm を測る。柱痕の中には、SP 2901119・128 のように柱穴底より 20cm近く深いものもある。SP 2901006 とSP 2901129 は平面形態が北東方向に突出しており、土層断面観察（第 40 図）でも突出部分の埋土（SP 2901006 第1～4層、SP 2901129 第1～3層）は柱穴の最終埋没段階と判断されるため、柱抜取り痕と考える。また、SP 2901129 では柱痕跡が2つあり、SP 2901132 では柱痕跡の南側に直径約 10cmの細い柱痕跡がある。同様の痕跡は他の柱穴に認められないことから、柱の取り換えや支柱の追加による補修痕であると考える。

出土遺物は、SP 2901130 から須恵器杯（第 44 図8）がある。他にも須恵器や土師器があるが、いずれも小破片で図化不能である。

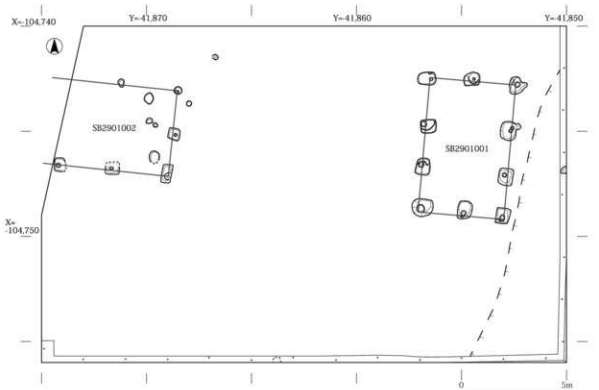
SB 2901002　調査区の西端で検出した東西2間以上（5.2 m）、南北2間（4.0 m）の東西棟の掘立柱建物である。建物主軸は真北に対して6°東に振る。柱穴の平面形は、SP 2901124・149 が円形で他は方形である。方形掘方の柱穴の一辺は 48 ～ 85cmであり、SP 2901109 は南北に長い長方形である。柱穴の深さは 15 ～ 50cm を測る。北側の柱穴ほど浅くなる傾向にあることから、建物の存在した時の地表面は南に傾斜していた可能性が高い。SP 2901124・149 が他の柱穴と比べて小規模で円形であるのも、上面が削平されたために、柱穴の深い部分が残存したためと判断できる。柱は、検出面から約 15cm掘削して切断していることがわかる。出土遺物は全く確認できなかった。

今回検出した2棟の掘立柱建物は、主軸の方位がほぼ一致することから、同時期の遺構と考える。遺構の時期は、柱穴からの出土遺物は少ないものの、包含層出土の古代の遺物の傾向をみると奈良時代の遺物が大半を占めていることから、遺構の時期も奈良時代である可能性が高い。

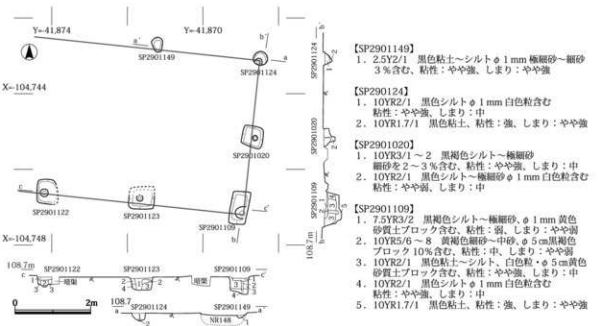
（4）第3面の調査（第 42 図・第 43 図）

第3面では、下記の遺構を検出した。上層の出土遺物の年代から、時期は古代以前と考えられる。

SK 2901127　調査区中央西よりで検出した円形の土坑である。第 27 次調査第5トレンチで検出していた遺構である。断面形状は半円形をなし、中央部がさらにピット状に一段深くなっている。埋土はしまりの強い黒色粘土で、最下層には木質を含んでいる。出土遺物がなく遺構の時期は不明であ



第 39 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ遺構平面図（第 2 面・1/180）



【SP2901149】
1．2.5Y2/1　黒色粘土～シルトφ 1 mm 極細砂～細砂 3 %含む、粘性：やや強、しまり：やや強

【SP290124】
1．10YR2/1　黒色シルトφ 1 mm 白色粒含む 粘性：やや強、しまり：中
2．10YR1.7/1　黒色粘土、粘性：強、しまり：やや強

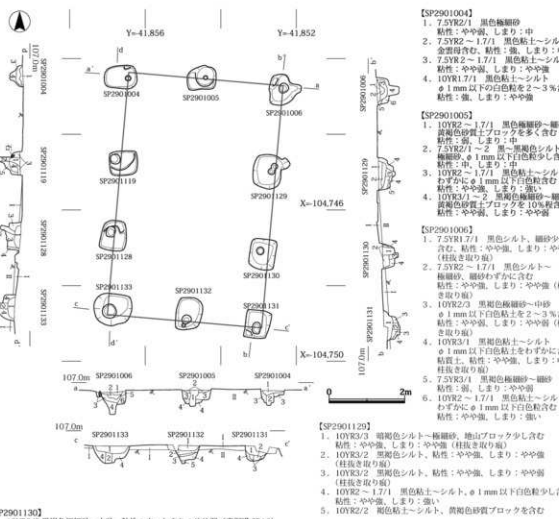
【SP2901020】
1．10YR3/1 ～ 2　黒褐色シルト～極細砂 細砂を 2 ～ 3 %含む、粘性：やや強、しまり：中
2．10YR2/1　黒色シルト～極細砂φ 1 mm 白色粒含む 粘性：やや弱、しまり：中

【SP2901109】
1．7.5YR3/2　黒褐色シルト～極細砂、φ 1 mm 黄色 砂質土ブロック含む、粘性：弱、しまり：やや弱
2．10YR5/6 ～ 8　黄褐色細砂～中砂、φ 5 cm黒褐色 ブロック 10 %含む、粘性：中、しまり：やや弱
3．10YR2/1　黒色粘土～シルト、白色粒・φ 5 cm黄色 砂質土ブロック含む、粘性：やや強、しまり：中
4．10YR2/1　黒色シルトφ 1 mm 白色粒含む 粘性：やや強、しまり：中
5．10YR1.7/1　黒色粘土、粘性：強、しまり：やや強

【SP2901123】
1．7.5YR5 ～ 4/1　灰色細砂～中砂、黄色砂質土ブロック 10 %含む、粘性：弱、しまり：やや弱
2．2.5Y3 ～ 2/1　黒色粘土～シルトφ 1 mm 以下白色粒わずかに含む、粘性：やや強、しまり：やや強
3．2.5Y3 ～ 2/1　黒色粘土～シルト黄色砂質土ブロック 3 %含む、粘性：やや強、しまり：やや強
4．10YR2 ～ 1.7/1　黒色粘土～シルトφ 1 mm 以下白色粒わずかに含む、粘性：強、しまり：やや強

【SP2901122】
1．7.5YR5 ～ 4/1　灰色細砂～中砂、黄色砂質土ブロック 10 %含む、粘性：弱、しまり：やや弱
2．2.5Y2/1　黒色粘土～極細砂φ 1 mm 以下白色粒・金雲母わずかに含む、粘性：やや強、しまり：やや強
3．7.5Y4/1　灰色細砂～中砂、粘性：中、しまり：中
4．2.5Y3 ～ 2/1　黒色粘土～シルトφ 1 mm 以下白色粒わずかに含む、粘性：やや強、しまり：やや強

第 40 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ SB2901002 平面・土層断面図（1/100）



【SP2901004】
1. 7.5YR2/1　黒色極細砂
粘性：やや強、しまり：中
2. 7.5YR2～1.7/1　黒色粘土～シルト
金雲母含む、粘性：強、しまり：中
3. 7.5YR2～1.7/1　黒色粘土～シルト
粘性：やや強、しまり：やや強
4. 10YR1.7/1　黒色粘土～シルト
φ 1 mm 以下の白色粒を 2～3 % 含む
粘性：強、しまり：やや強

【SP2901005】
1. 10YR2～1.7/1　黒色極細砂～細砂
黄褐色砂質土ブロックを多く含む
粘性：弱、しまり：中
2. 7.5YR2/1～2　黒～黒褐色シルト～
極細砂、φ 1 mm 以下白色粒少し含む
粘性：中、しまり：中
3. 10YR2～1.7/1　黒色粘土～シルト
わずかに φ 1 mm 以下白色粒含む
粘性：やや強、しまり：強い
4. 10YR3/1～2　黒褐色極細砂～細砂
黄褐色砂質土ブロックを 10％程含む
粘性：やや強、しまり：やや強

【SP2901006】
1. 7.5YR1.7/1　黒色シルト、細砂少し
含む、粘性：やや強、しまり：やや強
（柱抜き取り痕）
2. 7.5YR2～1.7/1　黒色シルトト～
極細砂、細砂わずかに含む
粘性：やや強、しまり：やや強（柱抜
き取り痕）
3. 10YR2/3　黒褐色極細砂～中砂
φ 1 mm 以下白色粒土を 2～3 % 含む
粘性：やや強、しまり：やや強（柱抜
き取り痕）
4. 10YR3/1　黒褐色粘土～シルト
φ 1 mm 以下白色粒土をわずかに含む
粘質土、粘性：やや強、しまり：中（
柱抜き取り痕）
5. 7.5YR3/1　黒褐色極細砂～細砂
粘性：弱、しまり：やや弱
6. 10YR2～1.7/1　黒色粘土～シルト
わずかに φ 1 mm 以下白色粒含む
粘性：やや強、しまり：強い

【SP2901129】
1. 10YR3/3　暗褐色ブロック～極細砂、地山ブロック少し含む
粘性：やや強、しまり：やや強（柱抜き取り痕）
2. 10YR3/2　黒褐色シルト、粘性：やや強、しまり：やや強
（柱抜き取り痕）
3. 10YR3/2　黒褐色シルト、粘性：やや強、しまり：やや弱
（柱抜き取り痕）
4. 10YR2～1.7/1　黒色粘土～シルト、φ 1 mm 以下白色粒含む
粘性：やや強、しまり：強い
5. 10YR2/2　褐色粘土～シルト、黄褐色砂質ブロックを含む

【SP2901130】
1. 10YR2/2 黒褐色極細砂～中砂、粘性：中、しまり：やや弱（素掘溝 SD10）
2. 7.5YR2/1～2　黒～黒褐色シルト～極細砂、白色粒（φ 1 mm 以下）わずかに含む、粘性：中、しまり：中
3. 10YR2/1　黒色シルト～極細砂、φ 1～2 mm 白色砂を 2～3 % 含む、粘性：やや強、しまり：中
4. 10YR2～1.7/1　黒色粘土～シルト、わずかに φ 1 mm 以下白色粒含む、粘性：やや強、しまり：強い

【SP2901131】
1. 2.5Y3/3～2/1　黒褐～黒色シルト～粘土、φ 5～10cm 黄褐色砂質土ブロックを 10％以上含む、粘性：やや弱、しまり：やや弱
2. 10YR2/2　黒褐色極細砂～細砂、白色粒わずかに含む、粘性：弱、しまり：中
3. 10YR1.7/1　黒色粘土～シルト、φ 1 mm 以下の白色粒を 2～3 % 含む、粘性：強、しまり：やや強
4. 2.5YR4/3　オリーブ褐色極細砂～中砂、粘砂質土、粘性：中、しまり：やや弱

【SP2901132】
1. 2.5Y3～2/1　黒褐～黒色シルト～粘土、φ 5～10cm、黄褐色砂質土のブロックを 10％以上含む、粘性：やや弱、しまり：やや弱
2. 5YR1.7/1　黒色シルト～極細砂、わずかに中砂含む、粘性：中、しまり：やや強
3. 10YR1.7/1　黒色粘土～シルト、φ 1 mm 以下の白色粒を 2～3 % 含む、粘性：強、しまり：やや強
4. 2.5YR4/3　オリーブ褐色極細砂～中砂、粘砂質土、粘性：中、しまり：やや強
5. 2.5Y4/3　オリーブ褐色粘土、第 4 層と区別しにくい、粘性：強、しまり：やや強

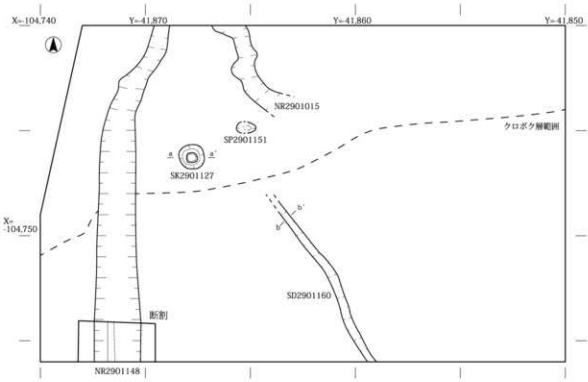
【SP2901133】
1. 5YR1.7/1　黒色シルト～極細砂、わずかに中砂含む、粘性：中、しまり：やや強
2. 10YR2～1.7/1　黒色粘土～シルト、φ 1 mm 以下の白色粒を 5 % 程含む、粘性：中、しまり：やや強
3. 10YR1.7/1　黒色粘土～シルト、φ 1 mm 以下の白色粒を 2～3 % 含む、粘性：強、しまり：やや強
4. 2.5YR4/3　オリーブ褐色極細砂～中砂、粘砂質土、粘性：中、しまり：やや弱

【SP2901129】
1. 5YR1.7/1　黒色シルト～極細砂、わずかに中砂含む、粘性：中、しまり：やや強
2. 5YR1.7/1　黒色シルト～極細砂、φ 1 mm 以下白色・金色粒を少し含む、黄褐色砂質土ブロックを含む、粘性：中、しまり：やや強
3. 2.5Y2/1　黒色シルト～極細砂、細砂～粗砂を多く含む、黄褐色砂質ブロックを含む粘砂質土、粘性：中、しまり：強
4. 5Y3～2/1　オリーブ黒～黒、極細砂～中砂、他の土壌よりも粘砂大きい、粘砂質土、粘性：やや強、しまり：中
5. 10YR1.7/1　黒色粘土～シルト、φ 1 mm 以下の白色粒を 2～3 % 含む、粘性：強、しまり：やや強

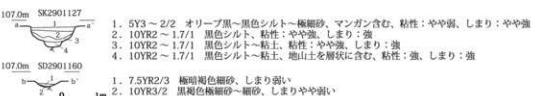
【SP2901119】
1. 10YR3/1　黒褐色極細砂～粗砂、にぶい黄褐色、砂質土ブロックを多く含む、粘性：やや弱、しまり：やや弱
2. 2.5Y3/3～2/1　黒褐～黒色極細砂～中砂、φ 2～3 cm 程の黄褐色砂質ブロックを含む、粘性：中、しまり：やや強
3. 5YR2～1.7/1　黒褐～黒色極細砂～中砂、にぶい黄褐色、砂質土ブロックを含む、粘性：中、しまり：やや強
4. 10YR　1.7/1　黒色粘土～細砂、φ 1mm 以下、白色・黄色粒をわずかに含む、第 5 層に似る、粘砂質、粘性：強、しまり：中
5. 10YR　1.7/1　黒色粘土～シルト、φ 1 mm 以下の白色粒を 2～3 % 含む、粘性：強、しまり：やや強

Ⅰ. 10YR　2～1.7/1　黒色粘土～シルト、粘性：強、しまり：強、遺物ほぼ含まない（南壁第 22 層、クロボク層）
Ⅱ. 2.5Y　4～3/1　黒褐色シルト～極細砂、粘性：中、しまり：強、炭少多く含む（南壁第 29 層、地山）

第 41 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ SB2901001 平面・土層断面図（1/100）



第 42 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ遺構平面図（第 3 面・1/180）



第 43 図　千代川遺跡第 29 次　第 1 トレンチ SK2901021・SD2901160 土層断面図（1/100）

るが、木質を含む同様の埋土をもつ土坑は、堆積環境の近似する佐伯遺跡第 8 次調査（平成 28 年度調査）でも検出されており、出土遺物から縄文時代後期の遺構と評価されている[2]。そのため本遺構も縄文時代の遺構の可能性が高いと考える。遺構の性格としては、底面中央部にピットをもつ形状から、落し穴である可能性がある。

ＳＤ 2901161　調査区の中央南半で検出した溝である。クロボク層のⅤ層を除去した下層より検出した。北西から南西方向に向かって標高は下がっていく。出土遺物がなく時期は不明であるが、検出した層位からみて、第 3 面の遺構であることは確実である。

ＮＲ 2901148　調査区の西端で検出した溝状の遺構である。北から南に向けて傾斜する。断面形状はＵ字形で、粘土質と砂質の埋土が互層状となる。埋土の状況から流水と滞水を繰り返していたことが分かる。溝底部の形状は不定形で、北端部分の平面形が蛇行していることからみて、自然の流路であると考える。出土遺物はなく時期は不明だが、粘土質の埋土がＳＫ 2901127 と近似することから、ほぼ同時期に埋没したと考える。

（中居和志）

（5）出土遺物（第44図・付表6）

第1トレンチの出土遺物はコンテナ17箱分である。遺構出土遺物は小片でも図化するように努めたが、混入品も多く認められ、必ずしも遺構の埋没年代を示すものではない。床土以下の包含層からは各時代の遺物が多くの遺物が出土した。出土場所は調査区南東部分(41･47区)に特に集中しており、8世紀代の遺物が主体を占める。個別の仔細な情報については付表6を参照していただきたい。また、本文中の古代の土器の分類については奈良文化財研究所の分類に準拠した。

ＳＤ2901010　20はサヌカイト製の無頸鏃であり縄文時代の遺物である。同じ溝からは青磁の小片も得られているため、混入品である。

ＳＫ2901021　3は須恵器蓋である。返りは消失しており、天井部はケズリによって扁平に仕上げる。8世紀代の遺物であろう。

ＳＤ2901022　5・9～12・17・19出土した。ほかにも丹波焼甕など中世後期を中心とする遺物が出土したが、図化できたものはない。10～12は中世後期の土師皿である。19は砂岩製の砥石であり、3面に金属刃による擦跡が認められる。5・9は奈良時代の須恵器、17は東播系須恵器鉢であり、いずれも混入品である。

ＳＰ2901034　14は脚杯の土師器皿であろうか。脚は「ハ」字状に外側に広がる形状で、本来は3本あったと考えられる。近世まで下がる可能性がある。

ＳＰ2901035　4は土師器杯Ａである。薄手で、やや外反する口縁部を持つ。

ＳＰ2901097　6・7は須恵器杯Ｂである。いずれも埋土中から出土した。小片ではあるが墨痕などは認められず、硯として転用されたものではない。

ＳＰ2901099　15はやや厚手の土師皿であり、近世のものである。13の瓦器椀は12世紀代のものであるが混入品であろう。

ＳＰ2901130　8は掘立柱建物ＳＢ2901001の柱穴であるＳＰ2901130から出土した須恵器杯Ａである。底径が縮小しておらず、8世紀代に収まるものと考える。ＳＰ2901130の柱痕跡底付近から出土しており、掘立柱建物の存続年代の上限を示すものである。

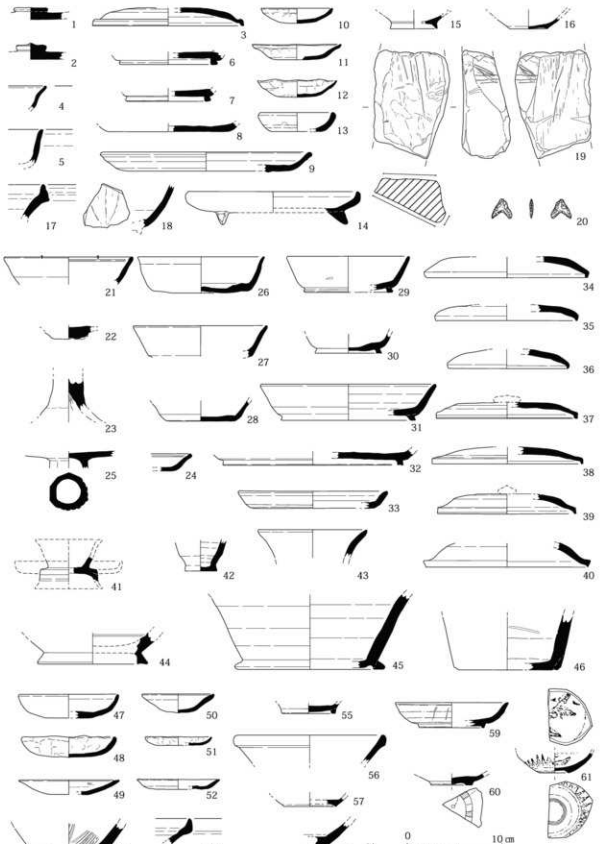
ＳＫ2901139　16は瓦器椀である。高台が退化しており、13世紀代に下るものである。18は底部と口縁部を欠損するため、全形をうかがうことはできないが、鎬連弁文の入る唐津焼の椀である。

ＳＤ2901158　埋土中から1・2が出土した。扁平な須恵器蓋のつまみ部である。

包含層　21は布留形甕の口縁部である。端部の肥厚は弱く、古墳時代前期のものであろう。22は弥生時代後期の甕の底部である。23は古墳時代前期の椀形高杯の杯部である。

25～46は古代の遺物を示した。24・25は土師器である。24は大形の皿と考えられる。内面に暗文は認められない。26～40は須恵器である。土師器の供膳器に比して須恵器供膳器類の割合は高い。26～28は須恵器杯Ａ、29～32は須恵器杯Ｂである。32は底径18cmを測る大形品で、底部には爪圧痕が認められる。33は口縁端部がやや外反気味になる須恵器皿Ａである。34～40は須恵器蓋である。

41は口縁部と底部を欠くが、須恵器托であると考える。托は奈良三彩に多くみられる器種でもあるが、本例は須恵器であり、胎土も他の須恵器と比べて差異はない。



第 44 図　千代川遺跡第 29 次　出土遺物実測図（1/4）

42 ～ 46 は須恵器壺類である。42 は小形の壺Mである。43 はラッパ状に広がる口縁部である。古墳時代の平瓶の可能性もあるが、この調査区からは古墳時代の土器がほとんど出土していないことを考えると、奈良時代前半の長頸壺等が候補となろう。44 ～ 46 は壺の底部である。

47 ～ 61 は中世以降の遺物を示した。47 ～ 52 は土師器皿である。50 は深手の小皿で 15 世紀代のものであろうか。53 は土師質の擂鉢である。擂り目はすり減っており、使用痕が認められる。54 は東播系須恵器鉢の口縁部である。56 は玉縁状口縁を持つ 12 世紀代の白磁椀、57・58 は青磁である。59 は長石釉がかかる瀬戸・美濃系の皿であり、16 世紀後半のものである。60 は唐津椀の底部であろう。61 は碁笥底の中国製青花皿であり、外面には芭蕉文を持つ。16 世紀代のものである。

（桐井理揮）

（6）小結

今回の調査では、古代以前から近世初頭の各時期の遺構・遺物を検出し、大きな成果を得ることができた。以下、時代ごとに調査成果をまとめたい。

古代以前の時期（第 3 面）については、遺構・遺物とも少なく、ＳＫ 2901027 が注目できる。千代川遺跡ではこれまで、縄文時代早期以来の遺物が見つかっているが、明確な縄文時代の遺構は検出できていない。ＳＫ 2901027 は縄文時代の可能性があり、千代川遺跡の初期の土地利用を示す貴重な遺構と考える。

古代（第 2 面）については、千代川遺跡が丹波国府推定地として注目される時期である。今回検出した 2 棟の建物の時期は、前述のように奈良時代である可能性が高い。調査地は千代川遺跡の中でも標高がやや高い位置にあたり、老ノ坂方面まで見通すことができる。また、冬季には遺跡内で最後まで日光があたる場所でもある。こうした立地条件もあって、調査地周辺に古代の遺構・遺物がまとまっている可能性が高い。今回検出した 2 棟の建物は方位がほぼ正方位を向いており、計画的な建物配置といえる。周辺にはさらに同様の建物が配置されている可能性を考慮して、今後の調査を進めていく必要がある。その上で、古代の千代川遺跡の官衙的性格の有無について検討を進める必要がある。

中世（第 1 面）については、畑から規模の大きな区画溝をもつ宅地となり、近世に向けて遺構が減少していく土地利用の変遷が判明した。千代川遺跡では広範囲に中世の遺構が分布していることが既往の調査でわかっているが、明確に遺構の変遷が判明したのは貴重である。特に区画溝をもつ宅地が存在した室町時代には、千代川遺跡の北側丘陵上に丹波守護所である八木城が存在しており、関連性に注目したい。八木城の城道は北側斜面が主要な道であるが、曲輪の展開状況から南側からの城道も重要な道であったとみられる。この南側の道が千代川遺跡へと続いていることを考慮すると、千代川遺跡に八木城の城下町に近似した空間が展開していた可能性がある。

（中居和志）

（注）

（1）桐井理揮・中居和志 2018「平成 28 年度の調査（千代川遺跡第 29 次）」『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成 29 年度）』

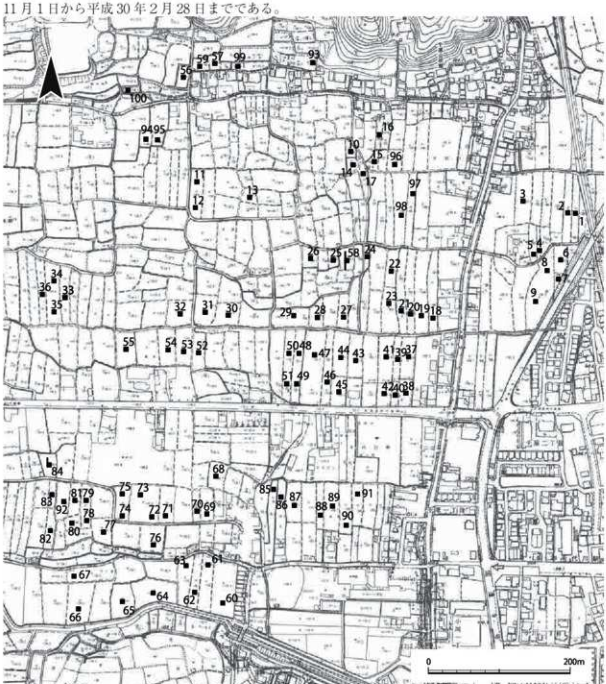
（2）公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2017『佐伯遺跡（第 8 次）現地説明会資料』

付表６　千代川遺跡第２９次　出土遺物観察表

報告番号	種別	器種・器形	遺構・層位	法量（cm） 口径	器高	底径	残存率	胎土	色調	焼成	備考
1	須恵器	蓋	SD2901158	—	1.2	—	1/12以下	密	灰（5Y6/1）	良好	
2	須恵器	蓋	SD2901158	—	1.8	—	1/12以下	密	灰白（2.5Y7/1）	良好	
3	須恵器	蓋	SK2901021	8.0	1.9	—	2/12	密	灰（5Y6/1）	良好	
4	土師器	皿	SP2901035	—	2.3	—	1/12以下	密	橙（7.5YR7/6）	軟質	
5	須恵器	杯	SD2901022	—	5.6	—	1/12以下	密	灰白（2.5Y7/1）	良好	
6	須恵器	杯	SP2901097	—	1.8	10.3	1/12	密	褐灰（10YR6/1）	良好	
7	須恵器	杯	SP2901097	—	1.4	—	1/12	密	灰白（10YR7/1）	良好	
8	須恵器	杯	SP2901130	—	—	12.8	3/12	やや粗	灰白（2.5Y8/2）	軟質	SB2901001
9	須恵器	皿	SD2901022	—	1.9	—	1/12以下	密	黒褐（2.5Y3/1）	良好	
10	土師器	皿	SD2901022	—	2.2	7.6	3/12	密	灰白（10YR8/2）	良好	
11	土師器	皿	SD2901022	—	1.6	9.6	3/12	密	灰白（10YR8/2）	良好	
12	土師器	皿	SD2901022	8.4	1.9	4.0	6/12	密	灰白（2.5Y8/2）	良好	
13	土師器	皿	SP2901099	7.6	2.0	5.6	3/12	密	浅黄（2.5Y8/1）	良好	
14	土師器	脚付皿	SP2901034	18.6	3.5	15.0	1/12	密	にぶい黄橙（10YR7/3）	良好	
15	瓦器	椀	SP2901099	—	2.0	5.0	4/12	密	灰白（5Y8/1）	良好	
16	瓦器	椀	SK2901139	—	1.2	4.0	1.3/12	やや粗	黒褐（2.5Y3/1）	やや軟	
17	須恵器	鉢	SD2901022	—	3.7	—	1/12以下	やや粗	灰白（5Y7/1）	やや軟	東播系
18	陶器	椀	SK2901139	—	4.0	—	1/12	密	胎土：灰白（2.5Y7/1） 釉：灰黄（2.5Y6/2）	良好	唐津か
19	石器	砥石	SD2901022	—	—	—	不明	—	にぶい黄（2.5Y6/3）	—	砂岩製
20	石器	鏃	SD2901010	—	—	—	完存	—	灰黄（2.5Y7/2）	—	サヌカイト製
21	土師器	甕	29ⅠＶ・Ⅴ層	—	—	—	1/12以下	密	橙（7.5YR7/6）	軟	布留形甕
22	弥生土器	甕	表土	—	—	3.0	1/12以下	密	浅黄橙（7.5YR8/4）	軟	弥生後期
23	土師器	高杯	Ⅱ層	—	3.8	—	1/12以下	やや粗	浅黄橙（7.5YR8/4）	やや軟	椀形高杯か
24	土師器	皿	41ⅠＸ層	—	1.8	—	1/12以下	密	明褐（7.5YR5/6）	良好	
25	土師器	高杯	41ⅠＸ	—	2.5	—	1/13以下	密	明褐（7.5YR6/6）	良好	
26	須恵器	杯	41ⅠＸ層	13.4	3.8	12.6	1.5/12	密	灰白（10YR8/1）	軟	
27	須恵器	杯	41・47ⅠＸⅣ層	14.1	3.2	11.0	1/12	密	灰（5Y6/1）	良好	
28	須恵器	杯	41・47ⅠＸⅢ層	—	2.2	9.0	3.5/12	密	灰白（7.5YR7/1）	良好	
29	須恵器	杯	46Ⅰ区	13.0	3.8	9.4	1/12	密	灰（5Y6/1）	良好	
30	須恵器	杯	41・47ⅠＸⅣ層	—	2.0	7.0	6/12	密	褐灰（10YR6/1）	良好	
31	須恵器	杯	47ⅠＸⅢ層	18.6	3.8	14.2	2/12	密	灰白（N7/0）	良好	
32	須恵器	杯	南西端精査	—	1.6	19.0	2/12	密	黄灰（2.5Y5/1）	良好	底部爪痕あり
33	須恵器	皿	29ⅠＸⅣ層	15.8	1.8	13.0	1.5/12	密	黄灰（2.5Y6/1）	良好	
34	須恵器	蓋	22ⅠＸⅢ層	17.0	2.15	—	1/12	密	灰白（7.5Y7/1）	良好	
35	須恵器	蓋	28ⅠＸⅤ層	15.0	1.6	—	1/12	密	灰（5Y6/1）	良好	
36	須恵器	蓋	28ⅠＸⅣ層	—	1.1	—	1/12	密	灰白（5Y7/1）	良好	
37	須恵器	蓋	35ⅠＸⅣ層	15.0	2.2	—	1/12以下	やや粗	灰白（2.5Y7/1）	良好	
38	須恵器	蓋	28ⅠＸⅣ層	15.8	1.8	—	3/12	密	褐灰（10YR6/1）	良好	
39	須恵器	蓋	35・40ⅠＸ	14.7	2.1	—	1.5/12	密	灰白（2.5Y7/1）	良好	
40	須恵器	蓋	41ⅠＸ・Ⅴ層	17.2	2.5	—	1/12	密	灰（5Y6/1）	良好	
41	須恵器	杯	Ⅰ層	—	2.6	—	6/12	密	灰白（7.5Y7/1）	良好	
42	須恵器	壺	Ⅱ層	—	3.3	3.2	6/12	密	黄灰（2.5Y5/1）	良好	陶棄産か
43	須恵器	壺	Ⅳ層	11.6	3.0	—	1/12	密	暗灰黄（2.5Y5/2）	良好	長頸壺か
44	須恵器	壺	Ⅳ層	—	3.3	11.7	1/12以下	やや粗	黄灰（2.5Y6/1）	良好	
45	須恵器	壺か鉢	42ⅠＸⅡ層	—	7.9	16.0	2.5/12	やや粗	灰白（2.5Y7/1）	良好	
46	須恵器	壺	39ⅠＸ層	—	5.8	10.4	1/12	やや粗	灰（5Y5/1）	良好	
47	土師器	皿	Ⅳ層	10.6	2.5	5	2/12	密	浅黄橙（10YR8/3）	良好	
48	土師器	皿	46ⅠＸⅢ層	10.0	2.2	6.0	3/12	密	浅黄橙（7.5YR8/4）	良好	
49	土師器	皿	西端	10.5	1.5	4.2	24/12	密	橙色（7.5YR7/6）	良好	
50	土師器	皿	東壁	8.6	2.0	2.0	3/12	密	にぶい黄橙（10YR7/3）	良好	
51	土師器	皿	Ⅱ層	7.0	0.9	4.8	3/12	やや粗	浅黄橙（10YR8/4）	良好	
52	土師器	皿	Ⅰ・Ⅱ層	8.8	1.1	5.4	2.5/12	密	浅黄橙（10YR8/3）	良好	
53	土師器	羽釜	Ⅱ層	—	3.1	—	1/12以下	やや粗	浅黄（2.5Y7/4）	軟	
54	須恵器	鉢	11・17ⅠＸⅢ層	—	3.1	—	1/12以下	密	黄灰（2.5Y6/1）	良好	東播系
55	瓦器	椀	Ⅱ層	—	1.1	5.8	3/12	密	暗灰（N3/）	良好	
56	白磁	椀	Ⅰ層	—	3.0	—	1/12以下	密	胎土：灰オリーブ（5Y8/1） 釉：灰オリーブ（5Y6/2）	良好	Ⅳ類
57	青磁	椀	41・47Ⅰ区	—	3.4	—	1/12以下	密	胎土：灰白（10YR7/2） 釉：灰オリーブ（5Y5/2）	良好	
58	青磁	椀	Ⅱ層	—	1.0	5.6	3/12	密	胎土：灰白（5Y8/2） 釉：灰白（10Y7/2）	やや軟	
59	陶器	皿	表土	12.0	2.7	6.9	2/12	密	胎土：灰白（7.5Y8/） 釉：灰白（5Y8/1）	良好	志野
60	陶器	皿	西端	—	1.2	4.4	3/12	密	灰白（10YR8/2）	良好	唐津か
61	染付	皿	西端	—	2.1	3.0	8/12	密	胎土：灰白（10YR8/1） 釉：明オリーブ（2.5GY7/1） 絵付：暗青灰（5BG4/1）	良好	

5　平成 29 年度の調査（千代川遺跡第 31 次）

今回報告する第 31 次調査では、遺構の有無と遺構面までの深さを確認するため、調査の同意の得られた耕作地に 1 辺 3 m 四方のグリッドをそれぞれ 1 ～ 2 箇所、合計 100 箇所設定した（第 45 図）。耕作土を重機で除去した後、床土以下を人力によって掘削し、遺構面の検出を進めた。調査地は来年度以降の作付を行うため、床土以下に遺構面が確認できない場合、埋戻しを考慮して調査区全面を掘り下げず、約 30cm 幅の断割を実施して、遺構面の有無や層序の把握に努めた。調査期間は平成 29 年 11 月 1 日から平成 30 年 2 月 28 日までである。



第 45 図　千代川遺跡 31 次　トレンチ配置図（1/6,000）

各調査区からは、溝や柱穴などを検出しており、弥生時代から中世にかけての遺物が出土する包含層を多くの調査区で確認した。一方、埋没谷と想定される地点や、表土直下で地山が検出され、すでに包含層や遺構面が削平されていると考えられる地点も複数確認できた。検出遺構及び出土遺物等の概要は付表7及び付表8に示すとおりである。

（1）第1～100トレンチの調査（第46図～第59図・付表7）

以下では、特徴的な遺構の検出できたグリッドについて詳細を述べる。

第1トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、近世以降の溝を確認した。さらに面的に第4層まで掘削するが、明確な遺構は認められなかった。断割内ににぶい黄褐色を呈する遺構面（第5層）を検出した。面的な掘削は行っていないが、第5層上面では南北方向の溝を検出した。

第5トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、第3層上面にて近世以降の溝を検出した。さらに面的な掘削を行うと、第4層上面にて南北方向のSD310509、溝の東端に列石を確認できた。溝に伴うものと考えられる。調査区南辺の断割によって下層にSD310511を認められた。第4層より上層には中世遺物が含まれないため、中世以前の遺構である可能性が高い。

第10トレンチ　表土を除去したところ、緑灰色シルトの地山（第3層）を検出した。第3層上面で複数の柱穴を検出した。出土遺物はなく時期は不明である。

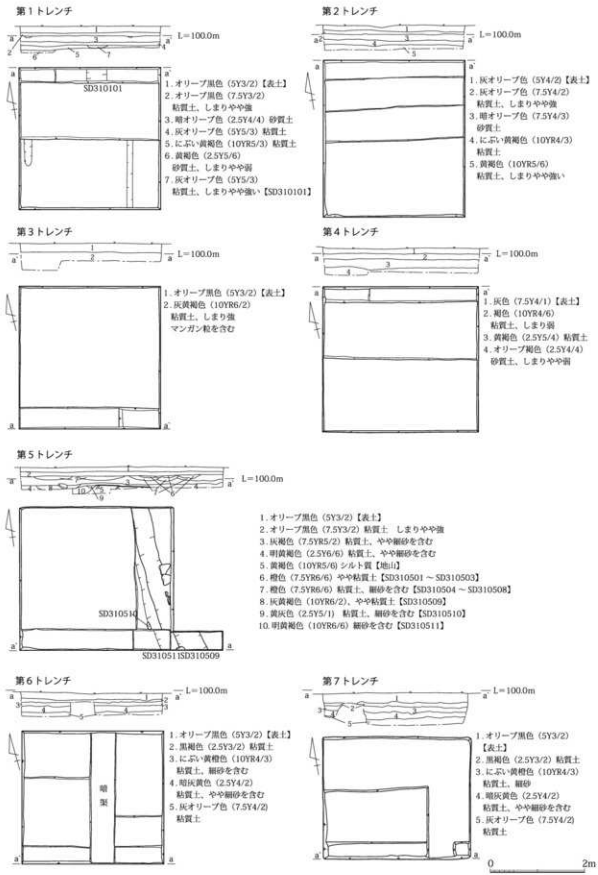
第13トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、中世遺物の包含層が確認できた。その下層の第4層上面からは、円形の柱穴を3基、方形の柱穴を5基、土坑を検出した。土坑の埋土には炭化物が混じる。方形柱穴の並びから3棟の建物が存在する可能性がある。詳細は不明であるため即断はできないが、主軸方向が正方位の掘立柱建物となる可能性がある。

柱穴からは古墳時代の無蓋高杯（第62図59）が出土しており、古墳時代の建物群と考えられる。さらに調査区西側には溝状遺構を検出した。溝状遺構は方形の柱穴に切られていることが確認できる。

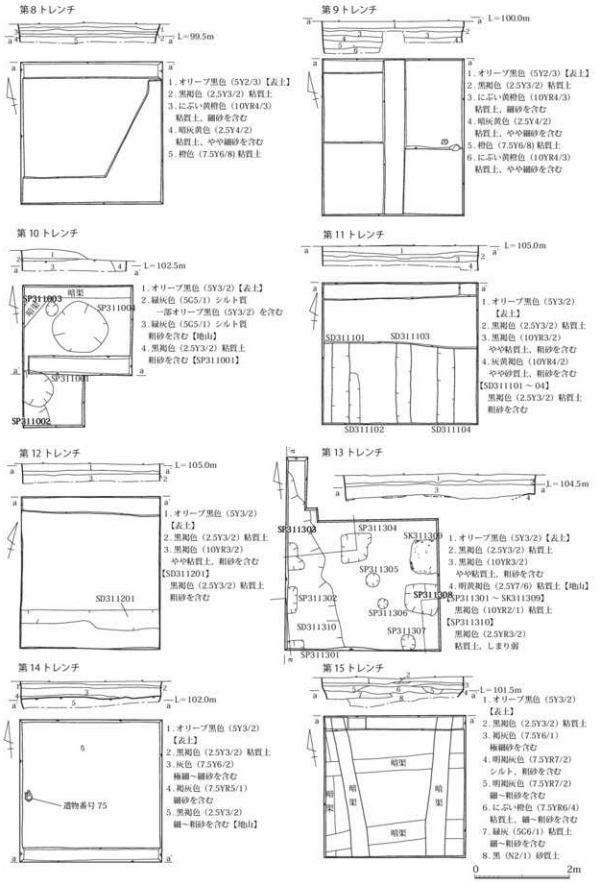
第24トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、調査区西側に明黄褐色シルトの地山（第10層）を検出した。また、第8層を切り込む柱穴を断面で確認することができた。また、第9層の上面からチャート剥片（第64図112）が出土した。

第25トレンチ　表土を除去したところ、第2層より中世遺物の包含層を確認できた。明緑灰色の地山（第6層）を検出した。地山検出面からは柱穴と不整形の土坑などが切り合っている状況を検出した。SK312502を一部掘削したところ、Ⅳ様式の弥生土器が出土した。さらに調査区南側の断割の断面観察を行った結果、第6層に柱穴が切り込んでいることが判明した。また、第6層が西から東に向かって傾斜している地形であったことが分かる。

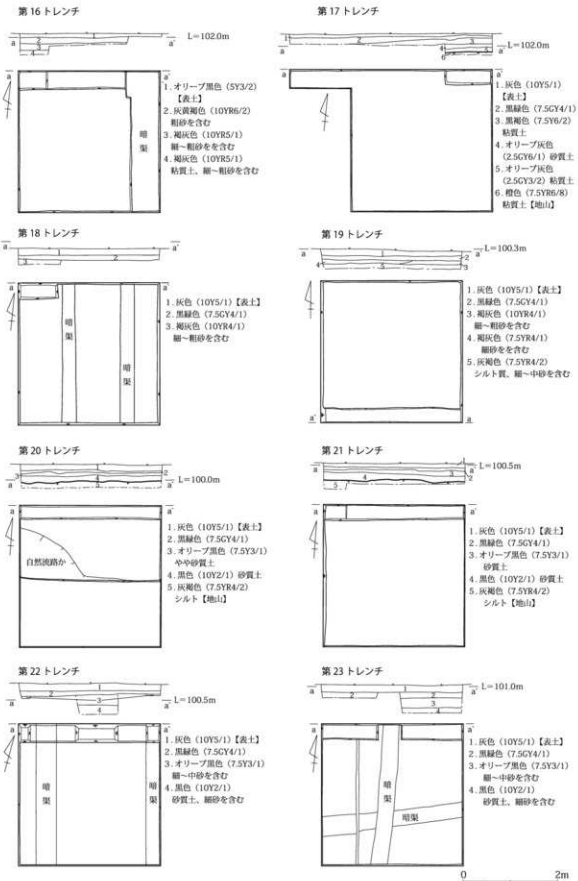
第26トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、中世遺物の包含層が確認できた。第8層上面では柱穴、土坑、溝を検出した。調査区北側のSP312609の断面観察を行うと柱痕が確認でき、建物跡となる可能性があるが、それに対応した柱穴は確認できなかった。出土遺物の図化はできなかったものの、古墳時代の須恵器を伴う柱穴である。そのほかの遺構の時期の詳細は不明だが、検出時の出土遺物から中世と考える。また断割の最下層には緑灰色の地山（第9層）を検出している。



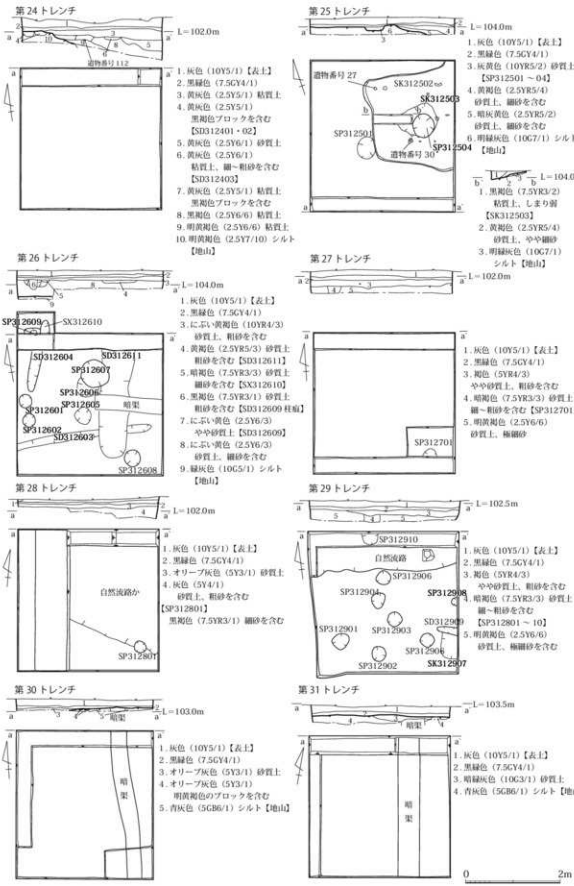
第 46 図　千代川遺跡第 31 次　第 1 ～ 7 トレンチ平面・土層断面図（1/80）



第47図　千代川遺跡第31次　第8～15トレンチ平面・土層断面図（1/80）



第 48 図　千代川遺跡第 31 次　第 16 ～ 23 トレンチ平面・土層断面図（1/80）



第49図　千代川遺跡第31次　第24～31トレンチ平面・土層断面図（1/80）

第27トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、中世遺物の包含層が確認できた。調査区南側を部分的に第5層まで掘り下げたところで柱穴を検出した。検出時の出土遺物から中世のものと考える。

第28トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、オリーブ灰色の砂質土が広がっていた。南側では柱穴を検出した。時期について詳細は不明である。第3・4層には古代から中世の須恵器や瓦器等が多量に包含されていた。

第29トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、調査区北側にはオリーブ灰色の砂質土が広がり、第28トレンチの同層の延長である可能性が高い。南側に複数の柱穴、溝、土坑を検出した。遺構検出時には瓦器椀の破片が多く出土し、SP312910から瓦器椀が出土しているため、その他の遺構の時期も中世と考えられる。

第42トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、第3層からは複数の柱穴と土坑を検出した。遺構に伴って遺物は出土していないものの、第3層からは中世の遺物が含まれており、中世の包含層であると想定できる。また、調査地の南側のみ第4層まで掘り下げたが、遺構は検出されなかった。

第43トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、中世遺物の包含層である第3層を検出した。下層の第4層上面で溝1条を検出した。時期は不明だが、層位から中世以前の可能性がある。

第44トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、第3層上より溝と思われる遺構の肩が検出された。調査区南辺の断割によって断面観察を行った結果、深さ30cm以上であることが確認できた。詳細な時期については不明である。

第46トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、調査区南辺で柱穴を検出した。北半のみ第4層まで掘り下げた結果、溝を検出した。共に時期については不明である。

第47トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、下層の第4層上面で溝を2条検出した。第4層には古代から中世の土師器や須恵器が包含されることから、中世以降の溝と考えられる。

第50トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、中世・近世の遺物を含む包含層（第3・4層）を確認した。表土下0.4mで古代の遺物を含む黒ボク層（第6層）上面で南北方向に主軸を持つ溝を3条検出した。SD315002からは土師皿が出土しており、中世の溝である。

第54トレンチ　表土を除去したところ、下層の第2・3層にはほとんど遺物を含まない。その下層の第5層上面より2条の溝を検出した。さらに調査区北辺に設定した断割の断面の観察によって第7層を切り込む1条の溝を確認した。

第55トレンチ　表土を除去したところ、ほとんど遺物を含まない第2層の広がりを確認した。さらに北半を平面的に掘り下げたところ、西半でにぶい黄橙色シルトの地山（第6・8層）を検出した。同一平面で柱穴を9基、溝を2条、土坑を検出した。調査区北辺断割の断面観察によって土坑は深さ60cmに及ぶことが判明した。遺構の帰属時期は明らかではない。

第56トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、南側で自然流路状の砂質土を確認した。さらに柱穴と土坑を検出した。断割の断面によって自然流路の下層から黄橙色シルトの地山を確認した。

第57トレンチ　表土を除去したところ、近世の遺物を含む第2層を確認した。さらに平面的に掘り下げたところ、黄橙色シルトの地山（第4層）を検出した。地山上からは複数の柱穴と溝を検出した。

SP315705を除けば、遺構埋土は黒色粘質土である。第29次第1トレンチの成果を考慮すると、古代の遺構である可能性が高い。

第58トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、灰色シルトの地山（第3層）を確認した。地山検出面では幅約2.5mから3mの溝2条と土坑を検出した。遺構に伴う遺物はなく、遺構の帰属時期は不明である。

第69トレンチ　床土直下で黒褐色の遺物包含層（第3層）を検出した。第3層からは、弥生時代後期の器台や弥生時代中期の土器片が混在して出土した。断割によって、下層にオリーブ褐色の堆積層を確認した。

第70トレンチ　床土下で黒褐色の遺物包含層（第3層）を検出した。この層は中世溝のベース面となっており、中世溝除去中に弥生土器がまとまって出土した（土器溜まりS K317001）。第3層の下層にはシルト質の黒褐色土（第7層）が堆積しており、第7層が弥生時代中期の遺構面を形成しているものと考えられる。

第71・72トレンチ　床土下で黒褐色の遺物包含層（第3層）を検出した。この層の下層で、遺構が平面的に検出された。第71・72トレンチの遺構埋土の土色は共通する。第72トレンチでは溝の東肩を確認するため、断割を設定して調査を行ったが、平面的に認識することはできなかった。

第73トレンチ　床土直下で複数の溝状遺構を検出したが、湧水が著しく平面的な精査及び土層断面の詳細観察は断念せざるをえなかった。

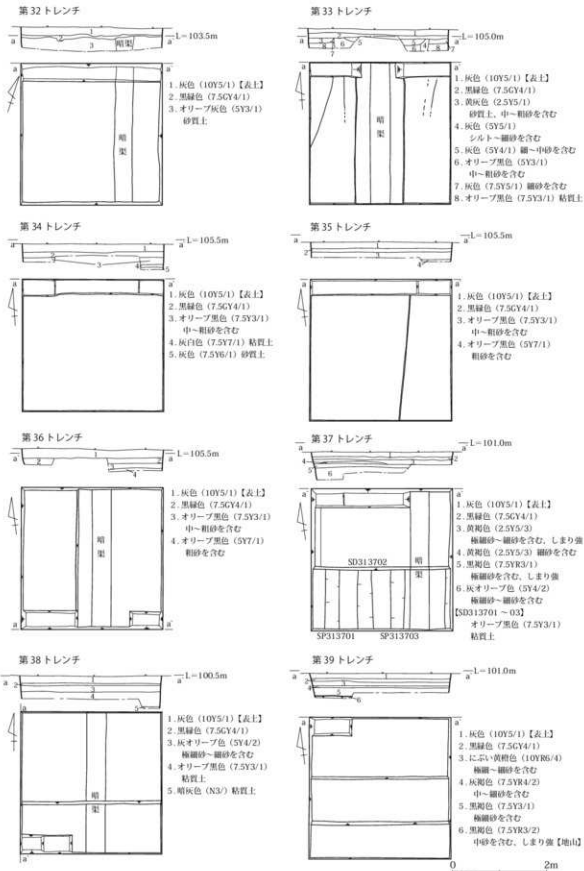
第74トレンチ　床土下で黒褐色の土層を検出したが、第69～73トレンチに比べて薄く堆積しており、遺物の出土量も多くない。南半を平面的に掘り下げたところ、第9層、あるいは第10層から複数の遺構が切りあって検出された。

第75トレンチ　床土直下で黒褐色土（第5層）、地山と考えられるシルト層（第6層）を検出した。黒褐色の遺物包含層（第3層）は極めて薄く、遺物の包含量も少ない。第6層上面で複数の土坑、柱穴を検出したが、伴う遺物がなく、時期は不明である。

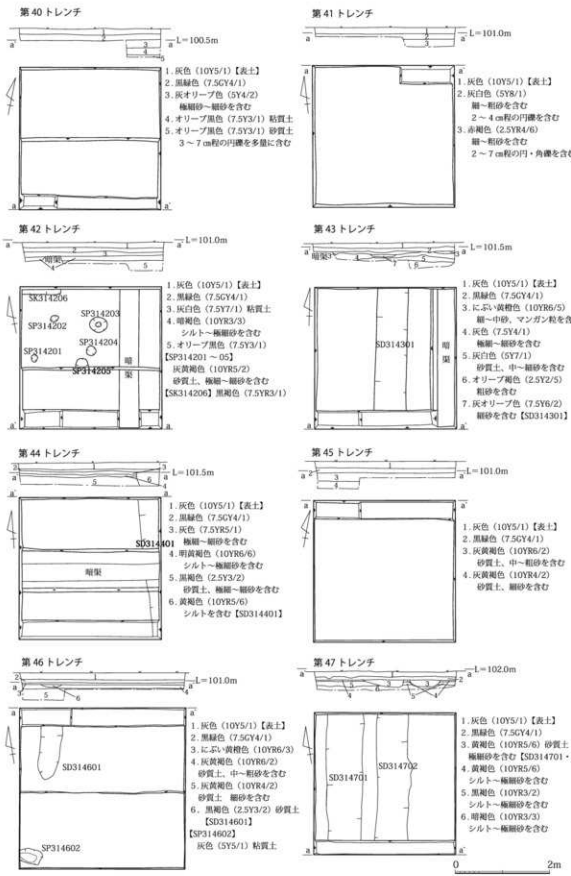
第76トレンチ　床土直下で黒褐色の砂質土（第4層）を検出した。ただし、この第4層は北側に設定した調査区（第69～73トレンチ）で検出した黒褐色の遺物包含層（第69トレンチ第3層ほか）とはちがって締まりのない砂質土であり、遺物も包含しない。第4層上面及び第6層上面で2面にわたって複数の柱穴や溝を検出したが、遺物がせず、時期は不明である。

第78トレンチ　表土を除去したところ、北半では黒褐色土（第4層）を検出した。第4層上面では弥生土器を含む溝S D 317801を検出した。さらに断割によって下層の確認を行ったところ、弥生土器を大量に含む黒褐色土（第6層）を検出した。第6層は第69～74トレンチで検出した弥生土器を包含する黒褐色土と同一層であると考えられる。南半は造成土が盛土され、掘削範囲では遺構面を検出することはできなかった。

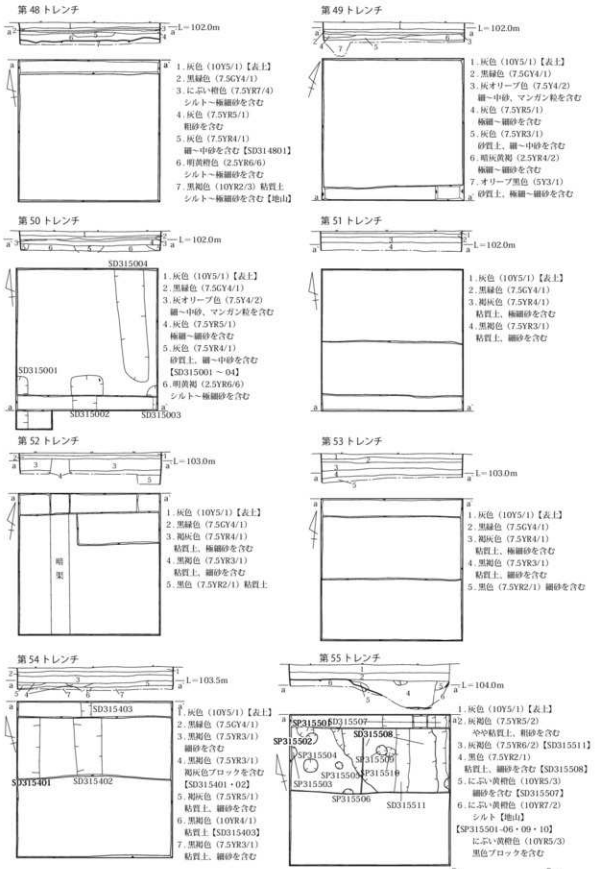
第79トレンチ　表土直下で黄灰色の砂質土層（第2層）を検出した。この面は遺構面を形成しており、ピットや溝等を検出した。遺構の掘削を行っていないため、帰属時期は不明である。断割を行って下層を確認したが、下層遺構は確認することができなかった。



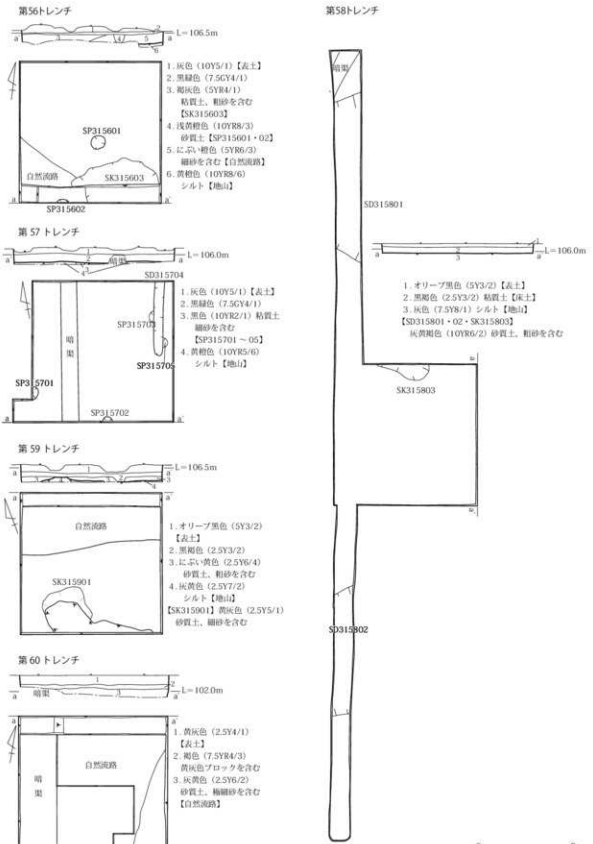
第 50 図　千代川遺跡第 31 次　第 32 ～ 39 トレンチ平面・土層断面図（1/80）



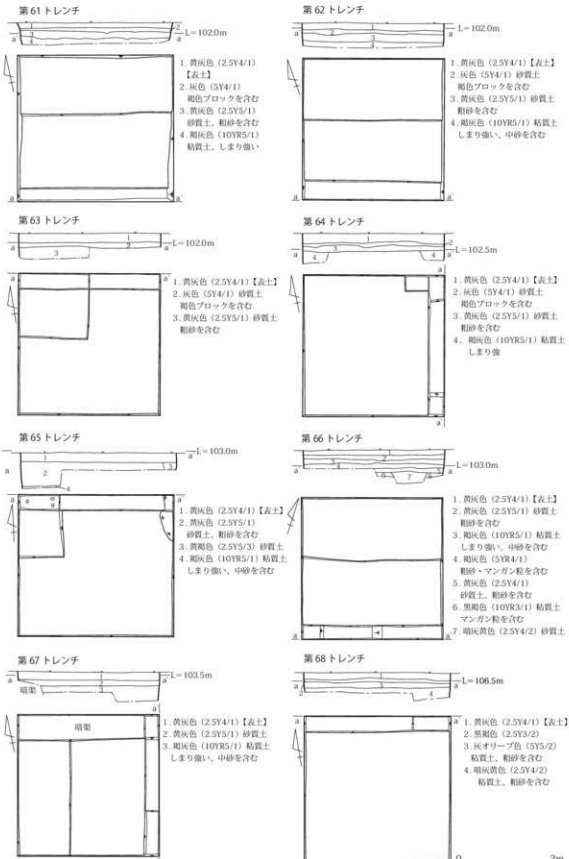
第51図　千代川遺跡第31次　第40～47トレンチ平面・土層断面図（1/80）



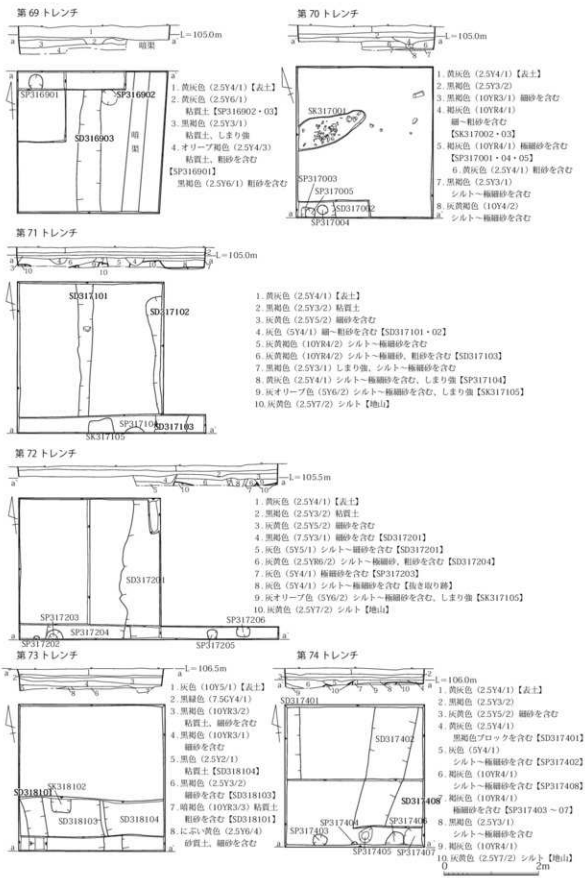
第 52 図　千代川遺跡第 31 次　第 48～55 トレンチ平面・土層断面図（1/80）



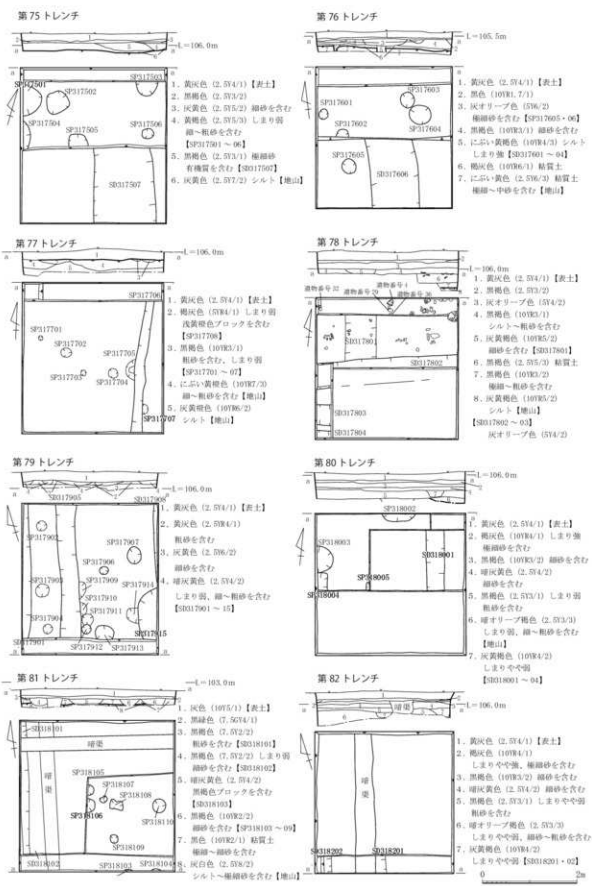
第 53 図　千代川遺跡第 31 次　第 56 ～ 60 トレンチ平面・土層断面図（1/80）



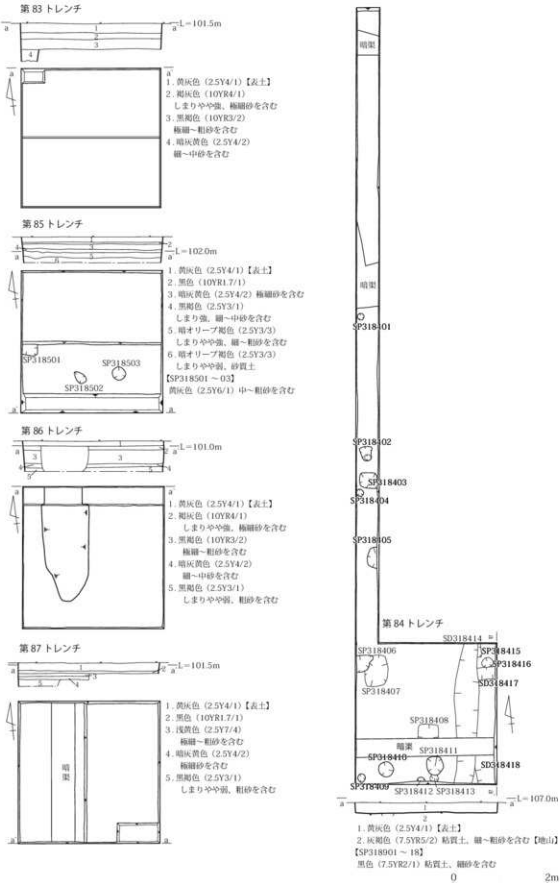
第 54 図　千代川遺跡第 31 次　第 61 ～ 68 トレンチ平面・土層断面図（1/80）



第 55 図　千代川遺跡第 31 次　第 69 ～ 74 トレンチ平面・土層断面図（1/80）



第 56 図　千代川遺跡第 31 次　第 75 ～ 82 トレンチ平面・土層断面図（1/80）



第 57 図　千代川遺跡第 31 次　第 83 ～ 87 トレンチ平面・土層断面図（1/80）

第80トレンチ　第79・81トレンチの南側で、周囲よりも1段低い位置に設定した調査区である。床土以下に遺物を含まない砂質土層が堆積しており、表土下0.6mで地山面（第6層）を検出した。6層は西から東へ緩やかに傾斜している。第6層を切り込むように、隅丸方形の柱穴2基（SP 318004・05）と円形の柱穴（SP 318002）を検出した。第6層直上では古墳時代の須恵器片が出土したが、遺構の時期は不明である。

第81トレンチ　床土直下で黒色粘質土（第7層）を検出した。この層は中世の耕作溝のベース面となっており、第70～74・78トレンチで検出した弥生土器を多量に含む黒色土と類似するが、この調査区では遺物は出土していない。黒色土を除去したところ、シルト質の地山（第8層）を検出した。この上面で複数の円形ピットを検出したが、帰属時期は不明である。

第82トレンチ　床土を除去したところ、ややしまりのない砂質土（第3・4層）を検出した。砂質土は中近世の遺物の遺物を少量含む包含層である。調査地は周囲よりも1段下がったところにあるため、中世以降に造成された可能性も残される。その下層の黒色砂質土（第5層）は土器片をわずかに含有する堆積土で、中世の溝SD 318201・02のベース面となっている。断割によって下層の確認に努めたが、地山面は検出できなかった。

第84トレンチ　床土直下で安定面を検出し、同一面で柱穴や溝等の遺構が切り込むことを確認した。遺構埋土は黒褐色を呈するものが多く、弥生時代や古代を中心とすると考えられる。第27次調査の際にすぐ北側の田畑でも古代の遺構を確認していることから、この周囲には比較的密に遺構が残されていると判断される。第6・7次調査で確認された自然流路の落ちを探すため、北側に大きく断割を設定して調査を行ったが、同様の安定面を検出したのみであった。

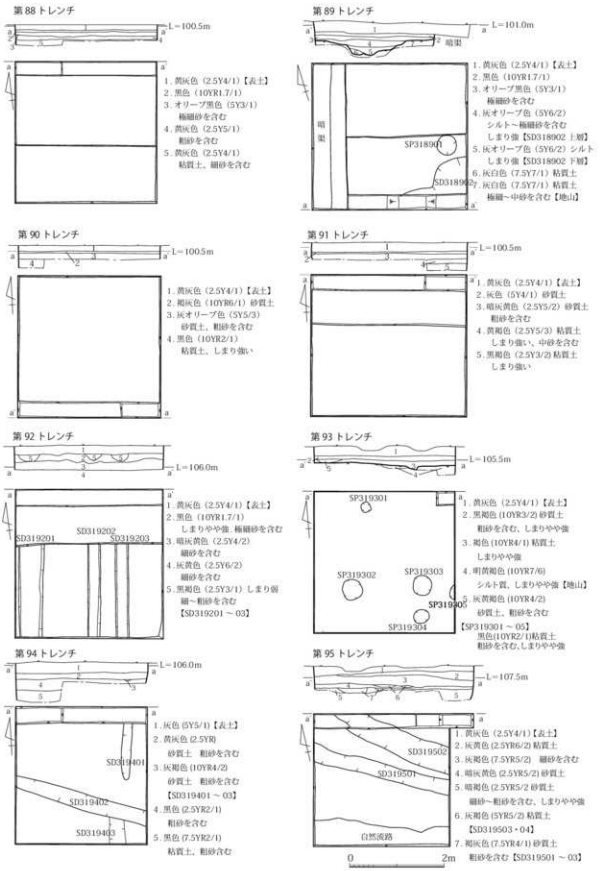
第89トレンチ　千代川小学校北側に設定した調査区である。千代川小学校北側では7箇所の調査区を設定して調査を行たものの、第89トレンチ以外の調査区では砂層の堆積を確認したのみで、顕著な遺構・遺物は認められなかった。第89トレンチでは、ピットSP 318901と溝SD 318902を検出した。SD 318902は検出幅1.2m、深さ0.3mを測り、断面形状は緩い逆台形を呈する。断割中に凸帯文深鉢の小片（第61図55）と、櫛描直線文を持つ弥生土器壺の頸部が出土した。

第93トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、第3層上面より中世から近世にかけての複数の溝を検出した。さらに平面的に掘り下げたところ、明黄褐色シルトの地山（第4層）を確認した。地山検出面には複数の柱穴がみつかり、遺構埋土が黒色粘質土のため、第29次調査の第1トレンチの状況から、古代の遺構である可能性がある。

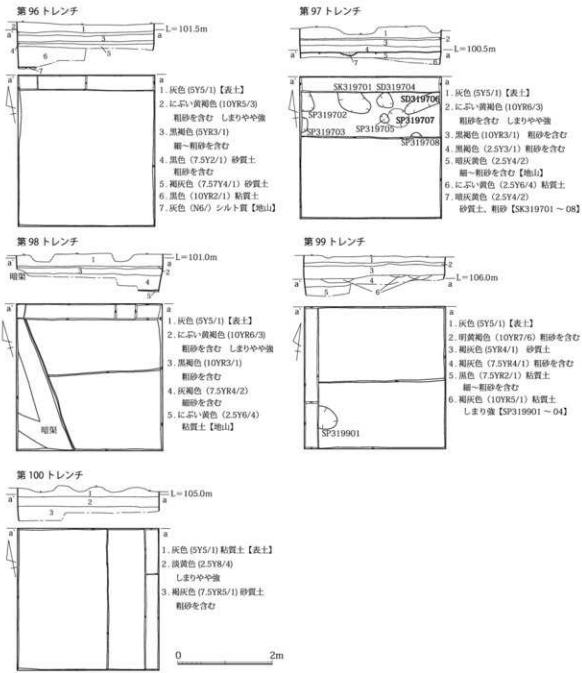
第94トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、第4層上面で複数の溝を検出した。調査区北辺に設定した断割による断面観察によって、地表下0.6mの地点で黒ボク層（第5層）を確認した。

第95トレンチ　表土を除去したところ、須恵器や瓦器椀を含む包含層を確認した。さらに面的に掘り下げたところ、自然流路状の砂質土を検出し、溝2条及び自然流路とみられる土色変化を確認することができた。遺構の帰属時期については不明である。

第97トレンチ　表土及び第2層を除去したところ、第3・4層に中世以前の遺物を含む包含層を確認した。さらに面的に掘り下げたところ、暗灰黄色粘質土の地山（第5層）を検出した。地山検出面



第 58 図　千代川遺跡第 31 次　第 88 ～ 95 トレンチ平面・土層断面図（1/80）



第 59 図　千代川遺跡第 31 次　第 96 ～ 100 トレンチ平面・土層断面図（1/80）

には複数の柱穴と溝を検出した。遺構に伴って遺物は出土せず、詳細な時期は不明である。

第 99 トレンチ　表土及び第２層を除去したところ、近世の造成土を確認した（第３層）。第４層上面からは柱穴を検出し、また断面観察から複数の遺構が認められた。

なお、第４層は須恵器や瓦器椀、土師皿が含まれる包含層である。

（2）出土遺物（第 60 図～第 64 図・付表 8）

千代川遺跡第 31 次調査においては包含層、遺構内から弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石器が出土している。多くの遺物が包含層に伴ってみつかっており、一部の弥生土器は遺構内から出

土している。多くの調査区では遺構検出面で掘削を停止し、それ以上の掘削を行っていないため遺構に伴うものや完形に復元できるものは少ない。その中でも主要なものを第60図から第64図に示した。

なお個別の詳細な情報は付表8の遺物観察表を参照していただきたい。

第24トレンチと第69～78トレンチを中心に、弥生土器が多く出土した。先述のように第70・78トレンチでは一括して出土しており、多くはⅣ様式に属するものである。以下では、比較的残存率に恵まれたものを中心に報告することにしたい。

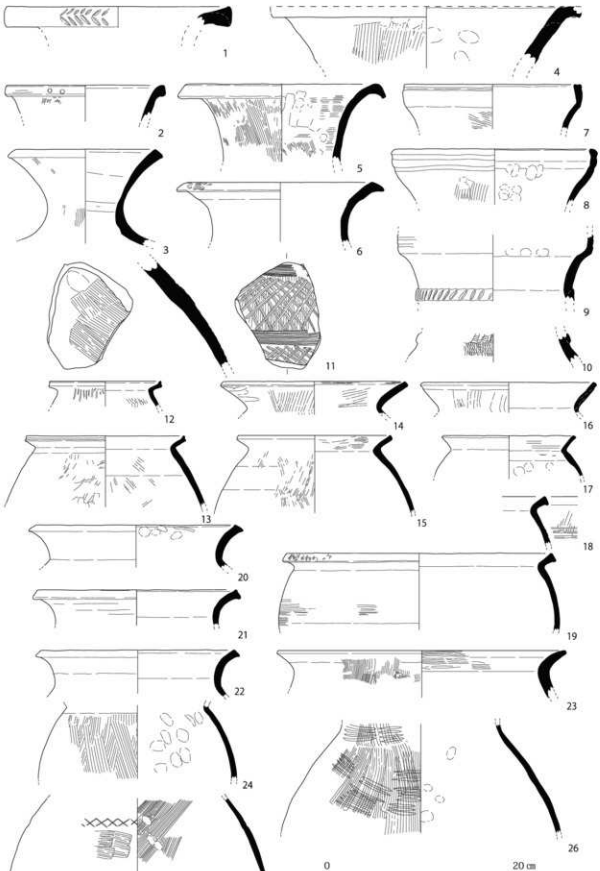
1～10は壺である。1～3は外傾する頸部に肥厚する口縁部を持つものである。1は端部を上下に拡張し、端面にハケ状工具による羽状文をもつ。3は壺の頸部として図化したが、器台や台付鉢等、別の器種の可能性もある。大きく外反する頸部を持つもので、内面には強いハケの痕跡が確認できる。4は粗いハケで仕上げられた破片で、後世の混入品である可能性もあるがはっきりとしない。5、6は口縁部がラッパ状に広がる壺である。6は拡張した口縁端部に波状文を持つ。内面には剥離痕跡が多く認められ、2次的に被熱したものであろうか。5は焼成剥離痕跡は認められないが、内面下半に著しく煤が付着しており、二次被熱を被った痕跡が認められる。7～9は口縁部を上方に拡張する壺である。7・9は焼き上がりが白色、8は淡い橙色を呈す。7はやや内傾気味の口縁部で端部に面を持ち、凹線文も1条のみで、相対的に古相を示す。11は櫛描直線文と斜格子文で施文する壺体部で、加古川下流域から大阪湾北岸で多くみられるものである。胎土から見ても石英・長石等の白色粒と金雲母を多量に含むなど地元の土器とは異なった岩石組成であり、搬入品の可能性が高い。

12～23は甕である。12、13は「く」の字状の跳ね上げ口縁をもつ。12はチャート等丹波帯に由来する混和材が使用されているのに対し、13は石英・長石類や金雲母を多く含む。また、13は内面に弱いケズリが確認できることから、瀬戸内海沿岸地域からの搬入品である可能性もある。14～17は「く」の字状口縁を持つ甕で、端部に面を持たせるように整形するものであり、焼き上がりの色調はすべて茶褐色を示す。14、15、17は口縁部内面にハケを施し、内面には指ナデが認められるなどの製作技術上での共通点も指摘することができる。一方、18～22はすべて焼き上がりが白色系を示す。18、19は短い「く」の字状口縁に肥厚する端部を持つ甕である。いずれも体部外面にはタタキの痕跡を残し、19の口縁部には波状文が施される。20～22は頸部と口縁部の境目が明瞭ではなく、外反する口縁部をもつ甕である。今回出土したこの口縁部をもつ甕は大形品に限られる。23は外反する短い口縁部を持つもので、口縁部内面には横ハケが認められる。

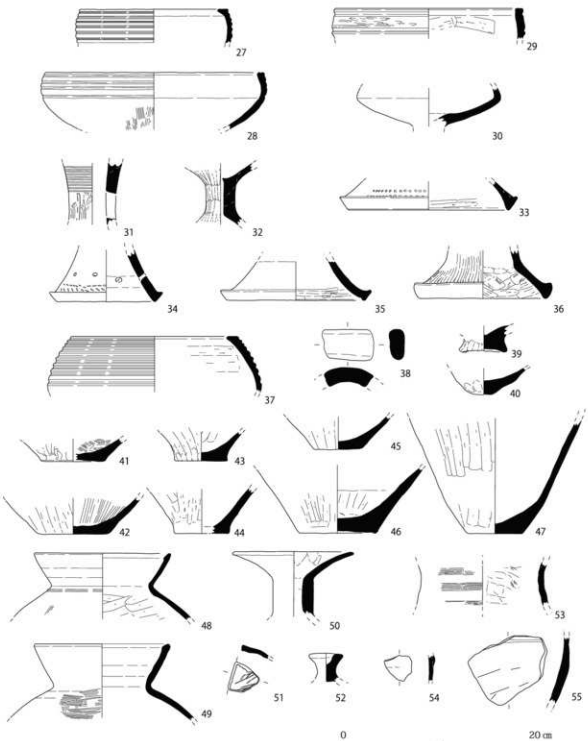
24～26は壺体部である。25、26はハケ調整前のタタキを明瞭に残す。

27～30は高杯杯部である。高杯は杯部が鉢状のもののみで、水平口縁のものは認められない。27は椀状の杯部で、口縁端部は面を持つように整形する。28もやや内湾気味の杯部を持ち、口縁端部には沈線が施される。29はやや直立気味の口縁部を持つ杯部で、口縁端部と屈曲部の2箇所に凹線文が施される。32～36は高杯脚部である。32は脚柱部に凹線と方形のスカシを持ち、後期の器台である可能性もある。34は脚裾部で、2列の刺突文が施される。37は8条の凹線文が施された鉢である。底部以下を欠損するが、本来は台付鉢であった可能性もある。38は水差しの把手である。40は甕の底部で、端部は強い指オサエが残る。

41～47は壺・甕類の底部である。

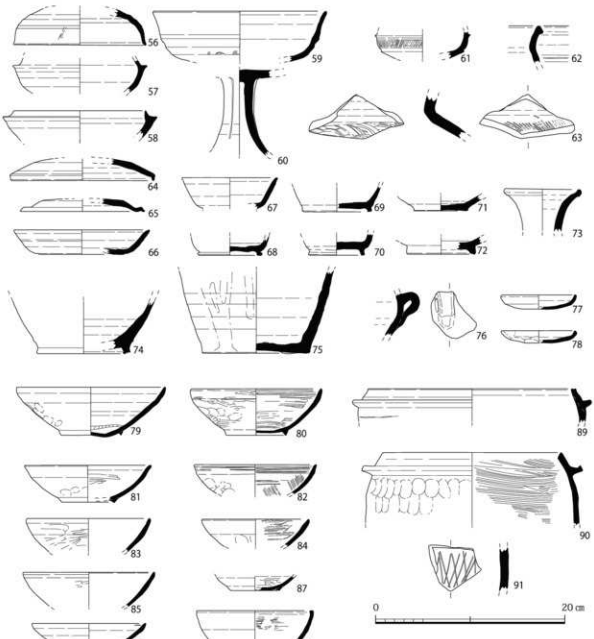


第 60 図　千代川遺跡第 31 次　遺物実測図 1（1/4）



第 61 図　千代川遺跡第 31 次　遺物実測図 2（1/4）

48 ～ 53 は弥生時代後期～古墳時代の弥生土器・土師器である。48・49 は布留形甕の口縁部である。48 は口縁部の肥厚がシャープで、体部内面にも明瞭なケズリが認められる古墳時代前期のもの、49 は口縁部が伸長し、器壁も厚くなった古墳時代中期のものである。50 は器台の上部であり、近江・東海系のものである。混和材には石英・長石類を含むもので、肉眼観察では搬入品か地元の製品かを判断しえない。51 はヘラガキの加飾を施す小片であり、手焙り形土器の覆部であると考えられる。



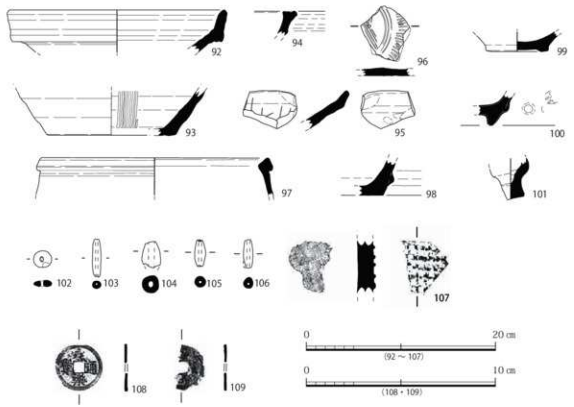
第 62 図　千代川遺跡第 31 次　遺物実測図 3（1/4）

胎土・文様からみて、滋賀県の湖東・湖南地域からの搬入品である。52 は蓋として図化したが、あるいは低脚杯の可能性もある

53 は第 89 トレンチＳＤ 318902 から出土した複帯の櫛描直線文を持つ壺の頸部である。

54 は第 89 トレンチＳＤ 318902 から出土した凸帯文土器である。端部を欠くものの凸帯をもつ口縁部であり、長原式に属する。摩滅が著しく判然としないが、刺突文等は認められない。55 は第９トレンチから出土した晩期の縄文土器深鉢である。

56 ～ 76 は須恵器である。56 は蓋の体部から天井部にかけての断片である。残存高 3.8㎝である。57、58 は杯である。57 は底部、立ち上がり部が欠損している。58 は立ち上がり部が短く、全体浅く扁平である。59 は無蓋高杯で、第 13 トレンチ SP311305 から出土した。残存高 5.3㎝で、体部には



第 63 図　千代川遺跡第 31 次　遺物実測図 4（1/2・1/4）

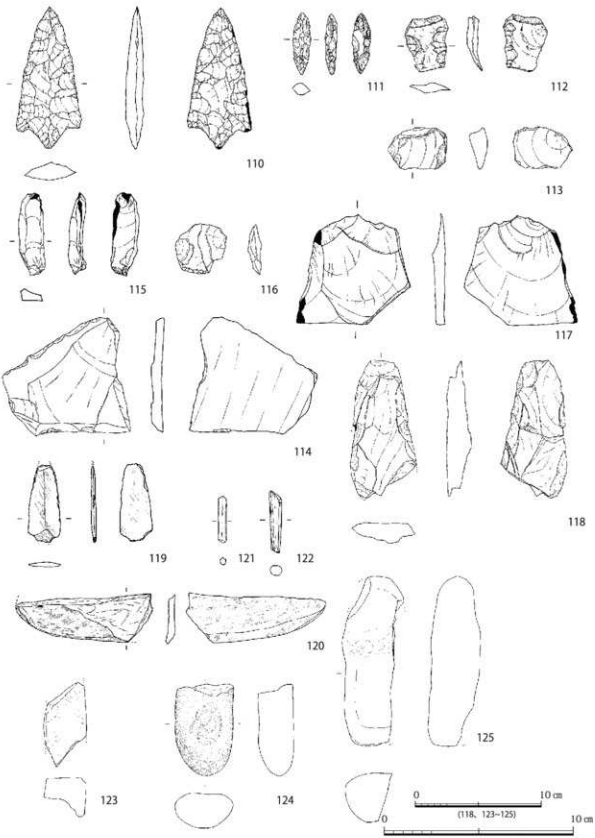
櫛状工具による工具痕が残る。TK208 型式段階のものである。60 は高杯の脚部である。3 方向に沈線を施し、穿孔されていない。61 は鉢である。体部のみ残存しており、刻み目が施されている。62、63 は甕の口縁部と肩部である。63 はタタキ痕とそれに伴う当て具痕が残る。64、65 は杯蓋である。64 は残存高 2.3cm、65 は残存高 1.3cmであり、口縁端部は外方に広がり、端部は尖りぎみにおわる。66 ～ 72 は杯身である。66 は杯 A で、器高 3.2cmである。口縁部が短く、外反ぎみに立ち上がる。67 は高台が欠損しているため不明であるが、68 ～ 72 は高台が断面方形であり、杯 B である。71 には回転糸切り痕が確認できる。73 ～ 75 は壺である。73 が口縁部で、74・75 が体部～底部にかけてのものである。75 には外面に自然釉が確認できる。76 は把手部である。

77・78 は土師皿である。ともに口縁部が直立気味に立ち上がり、外面にはユビオサエ残り、内面にヨコナデが確認できる。金雲母を多量に含んでいる。

79 ～ 89、91 は瓦質土器であり、79 ～ 88 は瓦器椀である。全形のうかがえるものは 79・80 のみである。口縁端部が外反せず、1 cm あまり下がった部分の器壁がもっとも厚く、口縁部を薄くつまみあげている点からいわゆる丹波型瓦器椀である。高台は断面三角形を呈する。内外面には摩耗が激しいものの、ミガキが施されている。88 のみ他とは口縁部形態が異なり、樟葉型瓦器椀である。瓦器椀は多くのトレンチの包含層から出土している。

89、90 は羽釜である。ともに球胴形であり、体部にはユビオサエが明瞭に残る。90 は土師器の羽釜である。91 は瓦質の擂鉢である。

92 ～ 101 は陶磁器類である。92・93 は備前焼の擂鉢である。94 は焼き締め陶器の擂鉢である。2



第 64 図　千代川遺跡第 31 次　遺物実測図 5（1/2・1/3）

方向の擦目が確認できる。97は瀬戸焼の甕の口縁部である。98は信楽焼の水指の底部である。99～101は磁器類である。99は白磁椀の底部である。100、101は青磁の香炉である。100には突起状のものがつき、いわゆる太鼓胴形の製品であろう。釉調や胎土から、優品と考える。

102～106は土師質土錘である。多様な形が確認できる。102は扁平な円形で、103～106は管状を呈する。

107は瓦の破片である。外面は格子目タタキ痕、内面に布目圧痕がみられる。

108・109は銅銭である。109は文字を読み取ることはできないが、108は永楽通宝である。

110～125は石器である。石器は、自然石を含む多量の石質遺物が含まれるが、本稿では、器種の判明する石器、及び石器製作に関係が深いと考えられる剥片類のみに絞って報告する。

110は、有舌尖頭器である。斜状平行剥離により尖頭部及び茎部が作出される。茎部は逆三角形状であり、わずかに縁辺部が内湾する。石材はサヌカイトである。111は、打製石錐である。両面調整で先端の錐部を作出する。使用痕は確認されない。石材はサヌカイトである。112は二次加工のある剥片である。剥片の縁辺部に対して階段状の剥離が連続して施される。石材はチャートである。113は使用痕のある剥片である。剥片の縁辺部に使用痕とみられる潰れが確認される。石材はチャートである。114は使用痕ある石片である。腹面は、節理面に沿って割れている。縁辺部の剥離痕は、規則性が無く、刃部調整とは認めがたい。石材はサヌカイトである。115はサヌカイトの縦長剥片である。表面の風化は弱い。116はチャートの剥片である。剥離面が剪断面のような歪な形状をしているため、両極打法により剥離された可能性がある。117はサヌカイトの剥片である。118は打製石斧である。粘板岩の自然礫を素材とする。

119は磨製石鏃である。表面は中央の稜が作出されるが、裏面は平坦となる。先端部は折れ、側縁にも潰れが確認される。石材は粘板岩である。120は石庖丁である。刃部は片刃で、刃縁は湾曲する。石材は粘板岩である。121、122はチャート製の石針である。全面を研磨により、多角形ないし円形に整形している。使用痕が観察されないことや、完成品の直径が1～2mm程度であることを考慮すると、いずれも未成品の可能性がある。

123は花崗岩製の砥石片である。使用による平坦面が4面確認されている。124は凹石である。砂岩の円礫を凹石として使用している。125はチャート製の磨石である。下端面に使用による擦痕と平坦面が確認される。

（3）小結

過年度の調査に引き続き、第31次調査でも、多くの調査区で遺物包含層と遺構を確認した。さらに部分的に埋没谷が検出された。埋没谷は昨年度の調査と同様に中世の遺構面あるいは包含層以下の層に堆積している。このような成果は、これまでの調査結果とも矛盾しない。

今回の調査では弥生時代中期から後期にかけての多くの遺物が出土している。千代川遺跡内では府道の南側では遺物に伴って、柱穴や土坑などの遺構が検出され、集落跡の広がりが明らかになった。さらに古墳時代中期の可能性のある方形柱穴を検出し、3棟の建物跡を復元することができた。主軸方向が同じ建物群のためほぼ同時期の可能性が高いと考える。また、埋没谷からは中世以降の遺物を

伴うことが確認できた点から中世以前の千代川遺跡の地形は現在のような行者山に向かってなだらかに標高が高くなって地形だけでなく、複数の谷状の地形が入り組む複雑な地形であったことが判明した。古代以前の土地利用の一端を明らかにする上で重要な成果を得ることができた。

（北山大熙・桐井理揮・川崎雄一郎）

6　まとめ

国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」に伴う千代川遺跡の発掘調査は、平成29年度で3年目となった。その間、京都府教育委員会が実施したのは、面調査地1箇所（第29次）、グリッド調査地180箇所（第28・29・31次）、亀岡市教育委員会が実施したのは面調査地1箇所（第30次）、グリッド調査地73箇所（第27次）、試掘調査1箇所（第32次）である。調査地は千々川以北の広い範囲に及び、これまで知りえなかった考古学的情報も蓄積されつつある。そこで、一連の調査成果を総括しておくことにする。

（1）千代川遺跡の旧地形について（第65図）

現在の千代川遺跡地内には、北端に愛宕道、東端には近世山陰街道が通っており、その街道沿いに居住地が形成されている。寛政国絵図等を参考にすると、千代川町内の街道沿いの村は小川村、今津村、千原村、川関村がある。この中で今回の調査の対象となった千原村には、延享3（1746）年の記録によると、小松寺や藤越大明神（神社）等の記述に並んで北条時頼に起源を持つと記された高卒塔婆がある。現在は小松寺に移設されているものの街道を往来する人々の目印となっていたようで、亀岡市内に現存する石碑には「たかそとわへ○リ」等と刻まれているものも多く見受けられる。明治時代の地籍図を瞥見しても、田畠や住居の位置は大きく変化はなく、近世後期にはほぼ現在の景観が形成されたものと考えられる。

千々川以北の千代川遺跡地内は現在大部分が田畠として利用されているため、現在も旧地形の凸凹が地形の段差として認識可能な箇所が多い。この田畠の中に存在する水路や里道は、明治時代初期の地籍図と比較しても大きな相違は認められず、おおむね近世後期以降の景観を残しているものと考えられる。現在も地形として認識することができる大きな地形の窪みは2箇所で確認できる。

北側で確認できる窪地は、ほぼ東西方向に沿っていることから、かつて木下良が千代川を国府推定地とした際に北辺を区画する大溝と評価した窪み[1]である。現在も水路が存在するため、1箇所しかグリッド調査を行うことができなかったが、砂層を検出したのみであり顕著な遺構・遺物は確認していない。この窪地のことを谷1と仮称する。

2つ目の地形の窪みは現在の千々川の流路と谷1の中間地点に認められ、幅50m程で東西方向に延びる。今回報告した第31次調査のこの範囲に位置する調査区では、床土以下で砂層の堆積を確認したのみで安定地盤は存在せず、顕著な遺構・遺物も確認されていない。また、この窪地の南側と北側には第27・28・31次調査で安定地盤の存在を確認していることから、現在の地形の窪地は旧地形

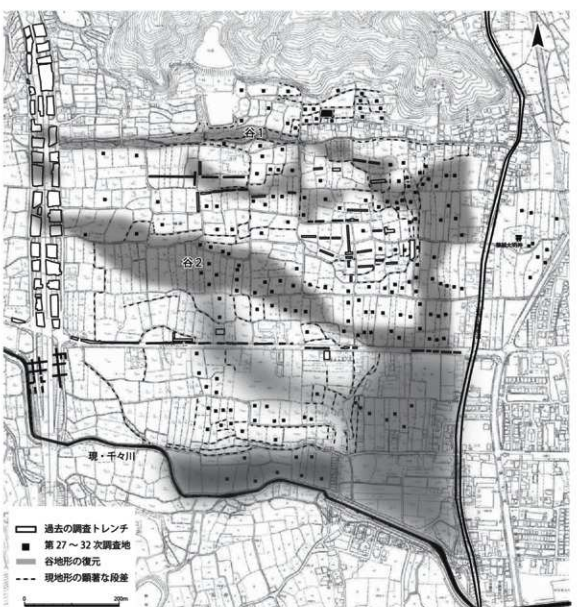
の谷部の反映であると考えられる。この低地を谷２と仮称する。

これらの谷の埋没時期は明らかではないが、国道９号バイパスに伴う調査では今回認識した谷２の延長と考えられる落ち込みが検出され、その埋没時期は中世以前とされている。

したがって、中世以前の谷２は、土地利用が低調な低地部として認識しておきたい。

このような砂層の堆積のみしか確認できず、かつ遺物も出土していない調査区を再検索し、現在の地形に残された段差も考慮して中世以前の旧地形の復元を試みた結果、先述の大規模な谷に加え、中・小規模の流路・谷も復元することができる。逐一それらの性格について言及しないが、かつて国府跡の存在が指摘された千々川以北の地形はかなり起伏に富んだ地形であったといえよう。

谷１、２には、現在、田畠が南北方向に整然と区画され、条里制地割が残存する範囲として指摘されたこともあるが、実際には近世の耕地開発に伴って低地部にも正方位の地割が施行されたものと



第 65 図　千代川遺跡の過去の調査地と旧地形の復元案（1/8,000）

考えておいたほうがよいだろう。近世以前には、大小の低地部あるいは谷と微高地が、複合的に一帯の景観を形成していたものと考えられる。

（桐井理揮）

（2）千代川遺跡の変遷

今回の調査を含め、千代川遺跡では縄文時代以降、継続的に遺物・遺構が検出されている。その総括と詳細な時期的変遷はすでにこれまでの調査で示されており[2]、大きな変更の必要はない。ここでは、先の旧地形の復元を踏まえ、今回の調査で新たな知見を得ることができた弥生時代中期と古代に限って改めて詳述する（第66図）。

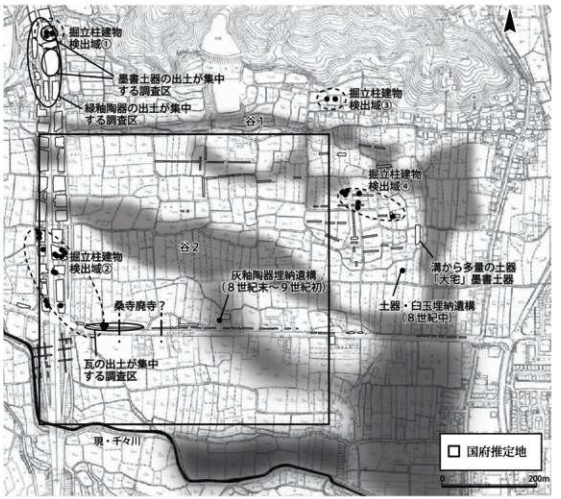
弥生時代　弥生時代前期の土器の出土は極めて限定的であり、第3次調査でヘラ描沈線文をもつ甕の破片が1点出土しているに過ぎない。遺物が希薄であるのは中期前半でも同様であるが、第31次調査第89トレンチでは唯一中期前葉にさかのぼりうる土器片が出土した。このトレンチの周辺でも複数の調査区を設定しているものの、安定地盤は確認することができなかった地点である。限定的な小規模調査では確認しきれない地点に当該期の集落が存在していた可能性もあり、今後周辺の調査が行われる際には、今回の調査で遺構を確認することができなかった地点も含め、再精査する必要がある。

千代川遺跡ではこれまで、第6・7次調査地点を中心として畿内第Ⅳ様式並行期の方形周溝墓群が検出されており、その出土土器は丹波地域の編年の基準資料とされるなど、当地域の当該期の代表的な遺跡とされてきた[3]。その一方で、居住域が検出されてこなかったことなどから、集落自体の実態は不明瞭であったが、一連の調査で当該期の遺構を大きく2箇所で確認できた。

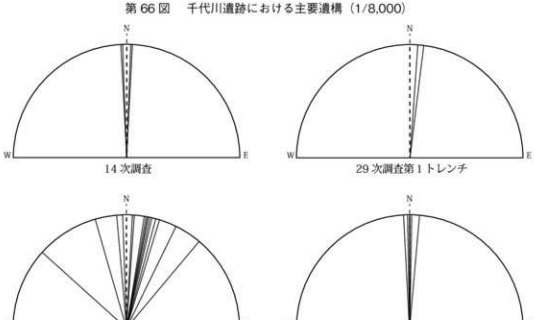
1箇所目は第31次調査第26・27トレンチ周辺である。周辺ではこれまでも第23次調査の際に方形周溝墓が検出されていたが、同じ微高地上で今回検出した遺構は墓域に伴う居住域である可能性が指摘できる。2箇所目は第70～82トレンチ周辺であり、府道の南側の微高地上にあたる。この周辺では弥生土器を多量に含む黒色の遺物包含層と同時期の土器溜り等の遺構を検出した。府道拡幅に伴う過去の調査では同時期の方形周溝墓群が検出されていることから、同様にこの墓群に伴う居住域であると考えることもできるだろう。詳細な検討は面的な発掘調査を待たなければならないが、一連の調査によって、弥生時代中期後葉には、谷を避けるように微高地上に複数の居住域と墓域が存在する可能性が高まった。

古代　歴史的環境の項でものべたように、千代川遺跡地内には白鳳期には桑寺廃寺の存在が想定され、奈良時代以降には丹波国府の有力な推定地とされてきた。これまでの調査でも奈良・平安時代の掘立柱建物跡が多く検出されてきたが、かつて想定された国府の範囲内では確実に国府の施設といえるような建物は検出されておらず、その実態は不明瞭であった。今回の調査では、亀岡市教育委員会による調査でほぼ方位を北にそろえた建物が複数棟検出されていた調査区の付近で、前節で地形の落ちに当たる部分と想定した地点で臼玉を伴った土器埋納遺構（第28次第30トレンチ）や墨書土器を含む多量の土器が出土した落ち込み（第30次）を確認しており、建物だけでなく祭祀的な性格を帯びた遺構が認められる。

そのほか、第 29 次第 1 トレンチでは、これまで確認されてきたよりもさらに北側にも当該期の建物群が広がることを確認した。一連の調査では、かつて木下良が国府の北限を区切る溝とした地形の[(1)]



第 66 図　千代川遺跡における主要遺構（1/8,000）



第 67 図　掘立柱建物跡の主軸方向

窪みよりもさらに北側で多くの調査区を設定したが、第29次第5・6トレンチ、第31次第93トレンチで緑釉陶器片が出土したのをはじめ、広い範囲で遺物、遺構が分布することを確認しており、今後の開発に際しては細心の注意が払われるべきである。

一方で、府道以南に設定した調査区では古代の遺構は相対的に希薄であることも明らかとなった。したがって、現状で想定される古代の千代川遺跡の景観としては、限られた区域に密集度して建物等が造営されていたものと考えられる。それぞれの区域では建物の主軸が異なっている（第67図）ことから、必ずしも同時期に営まれた遺構ではない。丹波国府については具体的な遺構、遺物は検出されておらず、今後のより詳細な調査・研究が待たれる。

（桐井理揮）

（3）おわりに

千代川遺跡では、平成27年度から3年にわたって調査を進めてきた。その結果、遺跡内の広範囲にわたって各時代の遺構が重複して展開していることが判明した。遺構の密度はかなり高いと評価することができる。調査対象とした範囲は、今後ほ場整備で大きく地形が改変されていく予定であるが、遺構が耕作土直下から検出できる地点も多い。今後は、この調査成果をもとにして、遺構への影響が最小限となるように関係機関との調整を進め、遺跡の保護を図っていく必要がある。

（中居和志）

（注）

（1）歴史的環境の執筆には主に以下の文献を参考にした。
石崎善久・小池　寛2013「池尻廃寺とその周辺」『第19回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集　古代寺院と律令体制下の京都府～なぜ寺はそこにあるのか～』京都府埋蔵文化財研究会
亀岡市史編纂委員会1985『亀岡市史』亀岡市
亀岡市史編さん委員会2000『新修亀岡市史　資料編』第1巻
桐井理揮2017「南丹地域における縄文・弥生移行期の様相」『第24回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集　弥生文化出現期前後の集落について』京都府埋蔵文化財研究会
木下　良1964「丹波国府址新考」『史明』4
木下　良1966「丹波国府址―亀岡市千代川町に想定する―」『古代文化』第16巻第2号　古代学協会
高橋誠一1986「亀岡盆地の条里と丹波国府」『人文地理学の視圏』
高橋照彦・中久保辰雄編2012『篠窯跡群大谷3号窯の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第5　大阪大学考古学研究室篠窯調査団
水谷壽克・引原茂治・田代　弘・森下　衛1985「千代川遺跡第6、7次発掘調査概要」（『京都府遺跡調査概報』第14冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財センター）

（2）森下　衛1992「第1節　時期別変遷」『千代川遺跡』京都府遺跡調査報告書第16冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
中澤　勝1998「丹波国府と千代川遺跡」『丹波国府・国分寺関連遺跡発掘事前総合調査報告書』亀岡市文化財調査報告書第47集　亀岡市教育委員会

（3）石井清司1989「丹波・丹後」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、木耳社

付表７　千代川遺跡第 31 次調査　トレンチ一覧

トレンチ番号	小字	主な検出遺構	出土遺物					
			弥生土器	土師器	須恵器	瓦器	陶磁器	その他
1	安田			●	●	●	●	
2	安田		●	●	●	●	●	
3	安田				●			
4	安田		●	●	●		●	瓦
5	安田	溝	●	●	●	●	●	石器・瓦・鏃番・釘
6	宮ノ本			●	●		●	瓦
7	宮ノ本		●	●	●		●	石器
8	宮ノ本			●	●	●		
9	宮ノ本		●	●	●	●		釘
10	大門	柱穴、土坑						
11	学堂	素掘溝						
12	学堂	素掘溝		●	●	●		
13	学堂	方形の焼土坑、溝 掘立柱建物３棟	●	●	●	●	●	石器
14	大門			●	●	●		石器
15	大門			●	●	●		
16	大門			●	●	●		
17	学堂			●	●	●		石器
18	清草		●	●				
19	清草		●	●	●			
20	清草		●	●	●			石器・瓦
21	清草			●	●	●	●	瓦
22	清草			●	●			
23	清草			●		●		
24	清草	素掘溝	●	●	●	●	●	石器
25	清草	柱穴、土坑	●	●	●			
26	清草	方形柱穴、溝		●	●	●		
27	清草	柱穴		●	●	●		
28	清草	自然流路、柱穴		●	●	●		石器・瓦
29	清草	自然流路、柱穴		●	●	●	●	瓦
30	清草			●	●	●		
31	清草			●	●	●		
32	清草			●	●	●		
33	清草			●				瓦
34	清草			●	●			
35	清草			●	●			
36	清草							
37	千原ヶ前	素掘溝		●	●			
38	千原ヶ前			●	●			
39	千原ヶ前			●	●	●		石器
40	千原ヶ前			●	●			

トレンチ番号	小字	主な検出遺構	出土遺物					
			弥生土器	土師器	須恵器	瓦器	陶磁器	その他
41	千原ヶ前							
42	千原ヶ前	柱穴		●	●	●	●	瓦
43	千原ヶ前	溝		●	●	●		
44	千原ヶ前	溝		●	●			
45	千原ヶ前			●	●	●		
46	千原ヶ前	溝		●	●	●		
47	千原ヶ前	素掘溝		●	●			
48	千原ヶ前	溝		●	●		●	
49	千原ヶ前			●	●	●		
50	千原ヶ前	溝		●	●	●	●	
51	千原ヶ前			●	●	●	●	
52	千原ヶ前			●	●			
53	千原ヶ前			●	●	●		
54	千原ヶ前	溝		●				
55	千原ヶ前	柱穴、溝		●	●	●	●	

56	西斉ノ本	柱穴、土坑		●	●		●	
57	西斉ノ本	柱穴、土坑						
58	清草	柱穴、溝		●			●	銅銭
59	西斉ノ本	土坑		●			●	
60	下河原			●				石器
61	下河原							
62	下河原					●	●	
63	下河原							
64	下河原							石器
65	下河原			●			●	
66	下河原			●				
67	下河原			●		●	●	
68	中ノ町			●	●		●	
69	中ノ町	柱穴、溝	●	●	●	●	●	
70	中ノ町	土坑、溝	●	●	●	●	●	
71	中ノ町	柱穴、土坑、溝	●	●	●	●	●	石器
72	中ノ町	柱穴、溝	●	●	●	●		石器
73	中ノ町	土坑、溝	●	●	●	●		石器、銅銭
74	中ノ町	柱穴、溝	●	●	●	●	●	
75	中ノ町	柱穴、溝	●	●	●	●		
76	荒牧	柱穴、溝	●	●		●		石器
77	荒牧	柱穴、溝						
78	荒牧	溝	●	●	●	●	●	
79	荒牧	柱穴、素掘溝	●	●		●		
80	荒牧	柱穴、溝	●	●	●	●	●	
81	荒牧	柱穴、溝	●	●		●		
82	荒牧	溝	●	●	●			
83	荒牧		●	●	●	●	●	
84	中ノ町	柱穴、土坑、溝	●		●			
85	相寄	柱穴	●	●	●	●		
86	相寄			●				
87	相寄		●	●	●	●		
88	相寄		●	●	●	●	●	
89	相寄	柱穴、溝	●	●	●	●	●	
90	相寄		●					
91	相寄		●				●	
92	荒牧	素掘溝	●	●	●	●	●	
93	東斉ノ本	柱穴	●	●	●	●	●	緑釉陶器
94	大門	溝	●	●	●	●	●	
95	大門	溝	●	●	●	●	●	石器
96	大門		●	●	●	●	●	
97	学堂	柱穴、土坑、溝	●	●	●	●		
98	学堂		●	●	●		●	
99	西斉ノ本	柱穴	●	●	●	●	●	
100	西斉ノ本			●	●		●	

付表８　千代川遺跡第 31 次　遺物観察表

報告番号	種別	器種・器形	出土遺構		法量（cm）			残存率	胎土	色調	焼成	備考
			トレンチ	層位・状況	口径	器高	底径					
1	弥生土器	広口壺	72	2 層	23.4	-	-	1/12	やや粗	灰白 10YR7/1	やや軟	
2	弥生土器	広口壺	69	3 層	16.4	-	-	2.5/12	やや粗	浅黄橙 10YR8/4	やや軟	
3	弥生土器	広口壺	71	断割	16.3	-	-	3/12	やや粗	7.5YR8/3	軟質	
4	弥生土器	広口壺	78	断割	33.2	-	-	1.5/12	やや密	にぶい橙 7.5YR7/4	やや軟	
5	弥生土器	広口壺	70	SK317001	22.0	-	-	4/12	やや粗	灰黄褐 10YR4/2	軟質	口縁～外面に赤彩
6	弥生土器	広口壺	70	3 層	21.9	-	-	2/12	やや粗	浅黄橙 10YR8/4	やや軟	
7	弥生土器	壺	70	SK317001	18.9	-	-	1/12	やや密	褐灰 10YR6/1	良好	
8	弥生土器	壺	78	4 層	20.3	-	-	2/12	やや密	浅黄橙 7.5YR8/6	やや軟	
9	弥生土器	壺	70	SK317001	-	-	-	1/12	やや粗	浅黄橙 10YR8/4	やや軟	
10	弥生土器	広口壺	78	4 層	-	-	-	1/12	やや粗	灰白 10YR8/2	良好	
11	弥生土器	壺	71	2 層	-	-	-	1/12	やや密	橙 5YR7/6	やや軟	
12	弥生土器	甕	78	SD317802	11.7	-	-	2/12	やや密	灰黄褐 10YR6/2	良好	
13	弥生土器	甕	78	4 層	16.7	-	-	1.5/12	やや密	浅黄橙 7.5YR8/4	やや軟	
14	弥生土器	甕	74	8 層	19.2	-	-	2.5/12	やや粗	橙 5YR8/6	やや軟	
15	弥生土器	甕	78	4 層	16.0	-	-	2.5/12	やや密	にぶい黄橙 10YR6/4	やや軟	外面に煤付着
16	弥生土器	甕	74	2 層	18.0	-	-	1/12	粗	にぶい黄褐 10YR4/3	軟質	
17	弥生土器	甕	69	3 層	13.8	-	-	4/12	やや粗	にぶい黄橙 10YR6/4	やや軟	
18	弥生土器	甕	70	SK317001	-	-	-	2/12	やや密	灰白 10YR8/2	良好	
19	弥生土器	甕	70	SK317001	28.0	-	-	2.5/12	やや粗	淡黄 2.5Y8/3	軟質	
20	弥生土器	甕	72	3 層	21.0	-	-	1.5/12	粗	灰白 7.5YR8/1	軟質	
21	弥生土器	甕	70	SK317001	21.0	-	-	2/12	やや密	灰白 2.5Y8/2	やや軟	
22	弥生土器	壺	70	SK317001	20.4	-	-	2/12	やや密	灰白 2.5Y8/1	やや軟	
23	弥生土器	甕	78	断割	30.3	-	-	1.5/12	やや粗	橙 5YR6/6	良好	
24	弥生土器	甕	70	SK317001	-	-	-	2/12	やや密	灰黄 2.5Y7/2	良好	
25	弥生土器	甕	70	SK317001	-	-	-	1.5/12	やや粗	灰白 2.5Y8/1	軟質	
26	弥生土器	甕	78	断割	-	-	-	1/12	やや密	にぶい黄褐 10YR7/3	良好	
27	弥生土器	高杯	25	SK312502	17.8	-	-	1/12	粗	灰白 2.5Y8/2	軟質	
28	弥生土器	高杯	70	SK317001	22.6	-	-	1/12	やや密	浅黄橙 10YR8/3	やや軟	
29	弥生土器	高杯	78	断割	18.6	-	-	1.5/12	やや密	灰褐 7.5YR5/2	良好	
30	弥生土器	高杯	25	SK312502	-	-	-	2/12	やや粗	淡橙 5YR8/4	軟質	
31	弥生土器	高杯	78	断割	-	-	-	3/12	やや密	灰白 10YR8/2	やや軟	
32	弥生土器	高杯	78	断割	-	-	-	6/12	やや粗	淡橙 5YR8/4	やや軟	
33	弥生土器	高杯	25	SK312502	-	-	16.9	1.5/12	やや粗	浅黄橙 10YR8/3	軟質	
34	弥生土器	高杯	75	3 層	-	-	12.0	1.5/12	やや粗	浅黄橙 10YR8/4	やや軟	
35	弥生土器	高杯	71	2 層	-	-	14.4	3/12	やや粗	にぶい黄橙 10YR7/2	やや軟	
36	弥生土器	高杯	78	3 層	-	-	14.4	4/12	やや密	浅黄橙 10YR8/3	やや軟	
37	弥生土器	鉢	78	4 層	15.6	-	-	1/12	密	褐灰 10YR4/1	良好	
38	弥生土器	水差	71	2 層	-	-	-	1/12	やや粗	橙 7.5YR7/6	やや軟	取手の一部
39	弥生土器	台付壺	80	4 層	-	-	5.0	12/12	やや密	灰黄 2.5Y7/2	良好	底部にモミ殻痕
40	弥生土器	甕	71	断割	-	-	3.8	12/12	粗	灰白 10YR8/2	やや軟	
41	弥生土器	甕	78	4 層	-	-	6.8	3/12	やや密	浅黄 2.5Y7/3	良好	
42	弥生土器	壺	70	SK317001	-	-	7.4	12/12	粗	灰白 10YR8/2	やや軟	底部内面に爪痕
43	弥生土器	甕	70	2 層	-	-	5.5	12/12	やや密	黄灰 2.5Y5/1	やや軟	
44	弥生土器	壺	78	4 層	-	-	5.6	3/12	やや密	浅黄橙 7.5YR8/4	やや軟	
45	弥生土器	壺	70	SK317001	-	-	5.0	12/12	やや粗	灰白 2.5Y8/2	軟質	
46	弥生土器	壺	70	SK317001	-	-	8.0	12/12	やや粗	浅黄橙 10YR8/3	軟質	
47	弥生土器	壺	70	SK317001	-	-	6.0	6/12	粗	橙 5YR7/6	軟質	
48	土師器	甕	72	2 層	14.2	-	-	2/12	やや粗	褐灰 7.5YR5/1	やや軟	布留形
49	土師器	甕	26	3 層	14.0	-	-	2/12	やや密	橙 5YR6/6	良好	布留形
50	土師器	器台	69	3 層	12.6	-	-	2.5/12	やや粗	浅黄橙 10YR8/3	やや軟	
51	弥生土器	手焙	72	2 層	-	-	-	1/12	やや密	にぶい黄橙 10YR7/3	やや軟	覆部
52	弥生土器	蓋	71	断割	-	3.1	3.7	12/12	やや密	にぶい黄橙 10YR7/2	やや軟	
53	弥生土器	壺	89	SD318902	-	-	-	2/12	やや粗	褐灰 10YR6/1	やや軟	
54	磨文土器	深鉢	89	SD318902	-	-	-	1/12	粗	浅黄橙 10YR8/3	やや軟	
55	磨文土器	深鉢	9	3 層	-	-	-	1.5/12	やや粗	灰 N4/0	やや軟	
56	須恵器	蓋	5	表採	13.9	-	-	2/12	密	灰白 7.5 Y 7/1	良好	
57	須恵器	杯	24	3 層	-	-	-	2/12	密	青灰 5PB5/1	良好	
58	須恵器	杯	14	4 層	13.9	-	-	1.5/12	密	灰 5Y6/1	良好	
59	須恵器	高杯	13	SP311304	18.2	-	-	2/12	密	暗青灰 5PB3/1	良好	
60	須恵器	高杯	39	3 層	-	-	-	12/12	やや密	灰白 5Y7/1	良好	
61	須恵器	脚	15	断割	-	-	-	1.5/12	やや密	青灰 5PB5/1	良好	
62	須恵器	甕	30	2 層	-	-	-	2/12	やや密	褐灰 10YR6/1	良好	
63	須恵器	甕	50	4 層	-	-	-	2/12	やや密	黄灰 2.5Y6/1	良好	
64	須恵器	蓋	27	5 層	15.1	-	-	1.5/12	密	黄灰 2.5Y6/1	良好	

報告番号	種別	器種・器形	出土遺構		法量（cm）			残存率	胎土	色調	焼成	備考
			トレンチ	層位・状況	口径	器高	底径					
67	須恵器	杯	16	断割	10.0	-	-	1/12	密	灰白 N7/0	良好	
68	須恵器	杯	6	3 層	-	-	6.8	3/12	密	灰白 2.5 Y 7/1	良好	
69	須恵器	杯	44	3 層	-	-	7.4	6/12	密	青灰 5PB6/1	良好	
70	須恵器	杯	27	3 層	-	-	6.0	5/12	密	暗青灰 5PB4/1	良好	
71	須恵器	杯	14	断割	-	-	5.6	6/12	やや密	黄灰 2.5Y6/1	良好	
72	須恵器	杯	73	2 層	-	-	7.2	2/12	密	青灰 5PB6/1	良好	
73	須恵器	壺	39	3 層	7.4	-	-	1/12	密	灰白 N7/0	良好	
74	須恵器	壺	14	断割	-	-	10.0	15/12	密	黄灰 2.5Y5/1	良好	
75	須恵器	壺	14	4 層	-	-	11.4	12/12	密	褐灰 10YR6/1	良好	
76	須恵器	把手	1	3 層	-	-	-	12/12	密	灰白 7.5 Y 7/1	良好	
77	土師器	皿	30	3 層	7.7	1.3	2.9	6/12	密	灰白 10YR8/2	やや軟	
78	土師器	皿	27	3 層	7.7	1.5	2.8	5/12	密	浅黄橙 7.5YR8/4	やや軟	
79	瓦器	椀	13	3 層	15.6	5.3	6.4	1/12	密	灰白 2.5 Y 8/2	軟質	
80	瓦器	椀	28	SP312801	13.8	4.9	6.3	4/12	密	暗灰 N3/0	やや軟	
81	瓦器	椀	21	4 層	13.2	3.9	5.4	4/12	密	暗灰 N3/0	やや軟	
82	瓦器	椀	28	SP312801	13.0	-	-	2/12	密	黒褐 10YR3/1	やや軟	
83	瓦器	椀	13	3 層	13.0	-	-	1.5/12	密	黒 N1.5/0	やや軟	
84	瓦器	椀	12	2 層	11.2	-	-	2/12	密	灰 N4/0	やや軟	
85	瓦器	椀	51	断割	13.8	-	-	1.5/12	やや密	灰 N4/0	やや軟	
86	瓦器	椀	9	4 層	12.0	-	-	1/12	密	灰白 7.5 Y 7/1	軟質	
87	瓦器	椀	13	3 層	-	-	5.0	4/12	やや密	灰 N 4/0	やや軟	
88	瓦器	椀	13	3 層	11.8	-	-	1/12	やや密	暗灰 N 3/0	やや軟	
89	瓦器	羽釜	21	4 層	18.8	-	-	1.5/12	やや密	暗灰 N3/0	良好	
90	土師器	羽釜	80	3 層	21.0	-	-	1/12	やや密	浅黄橙 7.5YR8/3	やや軟	
91	瓦器	鉢	70	2 層	-	-	-	1/12	密	灰白 7.5Y8/1	やや軟	
92	陶器	鉢	74	2 層	22.8	-	-	1/12	やや密	暗青灰 5PB4/1	良好	備前焼
93	陶器	鉢	17	3 層	-	-	13.6	1/12	密	赤褐 10R5/3	良好	備前焼
94	陶器	鉢	12	3 層	-	-	-	1/12	やや密	灰褐 7.5YR4/2	良好	備前焼
95	陶器	鉢	89	2 層	-	-	-	1/12	やや密	橙 5YR6/6	良好	焼き締め陶器
96	陶器	鉢	15	断割	-	-	-	2/12	やや粗	橙 2.5YR7/6	良好	焼き締め陶器
97	陶器	甕	39	3 層	23.9	-	-	1.5/12	やや密	灰白 2.5Y7/1	良好	瀬戸焼
98	陶器	水差	78	表採	-	-	-	2/12	やや粗	灰黄 2.5Y7/2	良好	信楽焼
99	白磁	椀	74	8 層	-	-	6.6	3/12	やや密	灰白 2.5Y8/2	良好	
100	青磁	香炉	21	4 層	-	-	-	2/12	密	灰白 5Y8/1	良好	龍泉窯系
101	青磁	香炉	70	2 層	-	-	-	4/12	密	灰白 10YR8/1	良好	龍泉窯系
102	土製品	土錘	17	3 層	-	-	-	12/12	密	にぶい橙 7.5YR7/4	やや軟	土師質
103	土製品	土錘	24	3 層	-	-	-	12/12	密	にぶい赤橙 10R6/4	やや軟	土師質
104	土製品	土錘	50	断割	-	-	-	5/12	密	橙 5YR6/8	やや軟	土師質
105	土製品	土錘	96	2 層	-	-	-	12/12	やや密	にぶい橙 7.5YR7/3	やや軟	土師質
106	土製品	土錘	96	2 層	-	-	-	10/12	密	浅黄橙 10YR8/3	やや軟	土師質
107	瓦	平瓦？	72	2 層	-	-	-	-	密	灰白 10YR7/1	良好	
108	金属製品	銭貨	58	2 層	-	-	-	12/12	-	-	-	永楽通宝
109	金属製品	銭貨	73	2 層	-	-	-	7/12	-	-	-	

（石器・石製品観察表）

報告番号	器種	出土遺構		法量（mm）			石材	備考
		トレンチ	層位・状況	長	幅	厚		
110	有舌尖頭器	7	2 層	75	34	10	サヌカイト	完形
111	打製石錐	17	3 層	33	10	4	サヌカイト	完形
112	剥片	24	9 層	29	24	75	チャート	二次加工あり
113	剥片	64	断割	31	22	10	チャート	使用痕あり
114	剥片	14	4 層	70	61	7	サヌカイト	使用痕あり
115	縦長剥片	13	3 層	44	13	8	サヌカイト	風化強い
116	剥片	95	2 層	27	27	7	チャート	両極剥片か
117	剥片	72	2 層	61	59	7	サヌカイト	
118	打製石斧	71	2 層	(109)	(52)	19	粘板岩	刃部欠損
119	磨製石鏃	76	6 層	(40)	17	3	粘板岩	先端・基部欠損
120	石庖丁	72	2 層	(73)	(26)	45	粘板岩	
121	石針	14	2 層	24	4	4	チャート	未成品か
122	石針	5	2 層	32	6	5	チャート	未成品か
123	砥石	13	3 層	(66)	34	(31)	花崗岩	
124	凹石	—	表採	72	47	28	砂岩	
125	磨石	73	3 層	134	(49)	42	チャート	

［2］平成 30 年度の調査
（余部遺跡第 14 次調査・法貴峠 20 号墳測量調査）

1　はじめに

平成 30 年度の調査は余部町塞又及び、曽我部町中中小路の 2 箇所で実施した。

余部町塞又にて実施した余部遺跡第 14 次調査では、事業予定で切土による遺構面への影響が確実な範囲で、なおかつ調査の同意を得られた耕作地に調査区を設定した。調査区の面積は約 831㎡である。調査期間は平成 30 年 11 月 1 日～平成 31 年 2 月 13 日である。曽我部町中中小路では、事業予定地内に所在する法貴峠 20 号墳の測量調査を実施した。調査期間は平成 31 年 1 月 28 日～平成 31 年 2 月 28 日である。調査期間・整理期間の関係から、詳細は次年度以降に報告することとし、今年度の報告では調査の概要のみを記す。

2　調査の概要

（1）余部遺跡第 14 次調査

今年度の調査区は平成 25 年度に亀岡市教育委員会によって実施された試掘・確認調査において、遺構が確認された地点を対象とした。調査は遺構が確認された調査区東から順次トレンチを拡張しながら、遺構面の検出を進めた。重機により耕作土及び床土を除去すると、床土の直下で近世の遺構面が確認された。近世面の下層では中世とみられる面を確認した。調査区の南側には、落ち込み状の地形があり、弥生時代から古代の土器が出土している。

（2）法貴峠 20 号墳測量調査

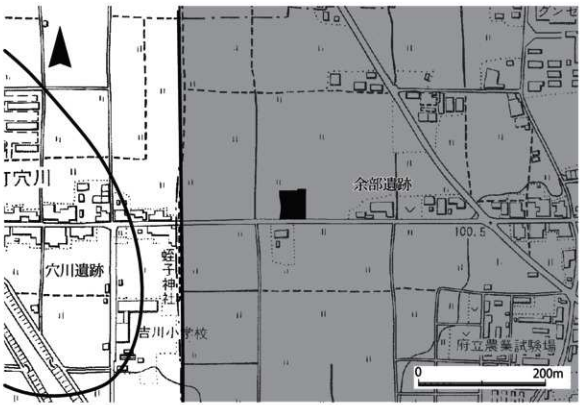
法貴峠古墳群は、亀岡盆地の南西部、霊仙ヶ岳の西南斜面裾部に位置する古墳時代後期の群集墳である。現在、20 基の古墳が確認されている。今年度、測量調査を実施した 20 号墳は古墳群の中でも東端の段丘崖の上に位置している。露出した石材から、主体部は横穴式石室をもつことが確認できた。

3　まとめ

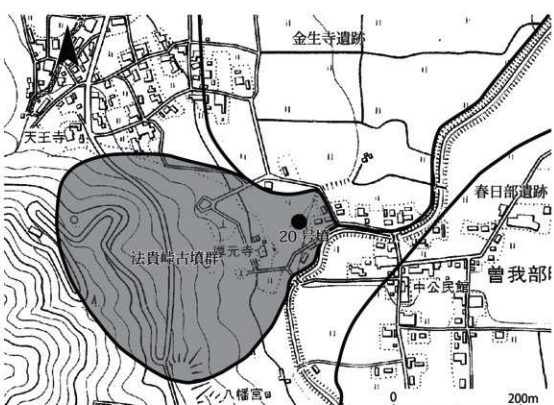
余部遺跡は、これまで遺跡の中央部の調査が主体であったが、今年度の調査で、遺跡の西側の状況が明らかになった。現況は平坦な耕作地であるが、中世以前は一部に谷状地形が入り込むなど、現在より起伏に富む複雑な地形であったことが推測される。

法貴峠 20 号墳は、今年度初めてその概要が明らかとなった。20 号墳は、法貴峠古墳群内でも立地が異質であり、墳形に関しても他と異なる可能性がある。今年度の測量成果は、法貴峠古墳群及び、その周辺の古墳群の成立を考える上で重要となるだろう。

（川崎雄一郎）



第 68 図　余部遺跡第 14 次　調査地点（1/6,000）



第 69 図　法貴峠 20 号墳　測量調査地点（1/6,000）

4　平成 30 年府内遺跡試掘・確認調査等報告

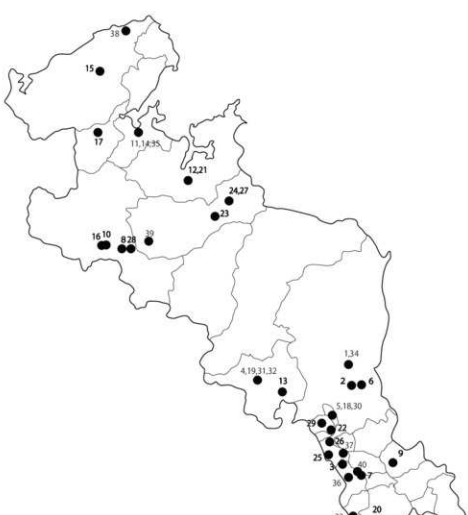
京都府教育委員会では、埋蔵文化財包蔵地における開発事業に伴い、各事業主体者の協力を得ながら、国庫補助事業府内遺跡として、試掘・確認調査、分布調査等を実施している。平成 30 年 1 月から 12 月にかけて当教育委員会では第 70 図、付表 9 に示すとおり総数 40 件の分布調査、試掘・確認調査等を実施した。高速道路建設工事及び道路拡幅工事に伴う調査が多く行われた。

15. 奈具遺跡は、学校用地内の災害復旧事業に伴う調査で、土坑が検出されたほか、遺物包含層をを中心に幅広い時期の遺物が多量に出土した。詳細は次年度に報告する予定である。

このほか 1．植物園北遺跡、3．伝道林遺跡などの調査を実施したが、遺構及び遺物は確認されなかった。

次項では、特に成果の得られた試掘・確認調査について記載する。

（古川　匠）



第 70 図　平成 30 年試掘・確認調査地位置図（番号は付表 9 に対応）

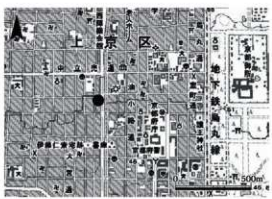
付表 9　平成 30 年試掘・確認調査等一覧

	調査月日	遺跡名称	所在地	概要	調査原因	備考
1	1 月 8 日	植物園北遺跡	京都市	顕著な遺構・遺物なし	倉庫建設	
2	1 月 9 日	平安京跡	京都市	遺構・遺物あり	府営住宅改修	p.101 掲載
3	1 月 22 日	伝道林遺跡	京田辺市	顕著な遺構・遺物なし	堤防改修	
4	1 月 22・29 日、2 月 22 ～ 27 日	佐伯遺跡	亀岡市	遺構・遺物あり	農業用排水路掘削	p.103 掲載
5	1 月 28 日	長岡京跡	向日市	顕著な遺構・遺物なし	府立高校フェンス改修	
6	2 月 7 ～ 13 日	寺町旧域・法成寺跡	京都市	遺物あり	府立高校改修	p.108 掲載
7	2 月 13 日	橋折遺跡	京田辺市	顕著な遺構・遺物なし	自転車道整備	
8	2 月 19 日	上野平遺跡	福知山市	顕著な遺構・遺物なし	府立高校フェンス改修	
9	2 月 20 日	郷之口遺跡	宇治田原町	掘削なし	ポスト改修	
10	2 月 26 日	岡ノ遺跡	福知山市	顕著な遺構・遺物なし	自衛隊基地改修	
11	4 月 3 日	宮津城跡	宮津市	顕著な遺構・遺物なし	下水道工事	p.119 掲載
12	4 月 3 日	満願寺跡	舞鶴市	顕著な遺構・遺物なし	砂防ダム排水溝建設	
13	4 月 10・11 日	矢田遺跡	亀岡市	掘立柱建物を検出	府道拡幅	p.111 掲載
14	5 月 21 日	宮津城跡	宮津市	礎石検出	下水道工事	p.119 掲載
15	5 月 22 日	奈具遺跡	京丹後市	遺構検出・遺物多量出土	災害復旧	次年度報告
16	5 月 22 日	東堀遺跡	福知山市	顕著な遺構・遺物なし	ＮＴＴ電話線埋設	
17	5 月 23 日	家ノ外遺跡	与謝野町	顕著な遺構・遺物なし	砂防ダム建設	
18	5 月 24 日	長岡京跡	向日市	顕著な遺構・遺物なし	ＮＴＴ電話線埋設	
19	5 月 24 日	佐伯遺跡	亀岡市	遺構・遺物を検出	暗渠排水管埋設	次年度報告
20	5 月 29 日	国田国遺跡	木津川市	遺構・遺物を検出	国道拡幅	p.113 掲載
21	6 月 12 日	満願寺跡	舞鶴市	遺構・遺物を検出	砂防ダム堰堤建設	p.114 掲載
22	6 月 21 日	下津城跡・長岡京跡	長岡京市	顕著な遺構・遺物なし	雨水施設新設	
23	6 月 27 日	瀬尾谷城跡	綾部市	顕著な遺構・遺物なし	ＮＨＫ鉄塔改修	
24	7 月 2 日	光明寺境内	綾部市	遺構・遺物を検出	トイレ建設	p.117 掲載
25	7 月 19 日	石城跡	八幡市	顕著な遺構・遺物なし	UR 住宅改修	
26	8 月 30 日	木津川河床遺跡	八幡市	顕著な遺構・遺物なし	下水道施設新設	
27	9 月 13 日	光明寺境内	綾部市	顕著な遺構・遺物なし	トイレ建設	
28	9 月 14 日	立石遺跡	福知山市	顕著な遺構・遺物なし	NTT 電柱設置	
29	9 月 26 日	長岡京跡	長岡京市	顕著な遺構・遺物なし	ＮＴＴ電話線埋設	
30	10 月 16 日	長岡京跡	向日市	顕著な遺構・遺物なし	裁判所改築	
31	10 月 16 日	佐伯遺跡	亀岡市	顕著な遺構・遺物なし	暗渠排水管埋設	
32	10 月 24 日	佐伯遺跡	亀岡市	顕著な遺構・遺物なし	は場整備	
33	10 月 31 日	乾谷城山城跡	精華町	顕著な遺物なし	道路新設	
34	11 月 2 日	植物園北遺跡	京都市	顕著な遺物なし	府立大学倉庫建設	
35	11 月 5 日	宮津城跡	宮津市	遺構・遺物を検出	下水道工事	p.119 掲載
36	11 月 7 日	新遺跡	京田辺市	顕著な遺構・遺物なし	道路関連河川改修	
37	11 月 19 日	上津屋遺跡	八幡市	顕著な遺構・遺物なし	堤防改修	
38	11 月 28 日	平城跡	京丹後市	顕著な遺構・遺物なし	急斜面地対策	
39	11 月 30 日	西町遺跡	綾部市	顕著な遺構・遺物なし	府営団地浄化槽改修	
40	12 月 11 日	稲葉遺跡	京田辺市	顕著な遺構・遺物なし	ハローワーク改築	

［1］平安京跡試掘・確認調査

1　はじめに

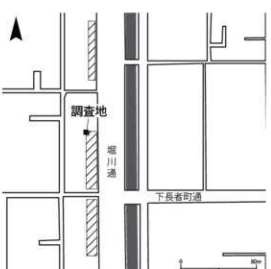
今回の調査は、堀川団地改修工事に伴って実施した。調査地は京都市上京区堀川通下長者町上る奈良物町であり、平安京左京一条二坊八町跡に当たる。八町は平安時代には東側半分に大舎人町、西側半分に内豎町の厨町が所在した(1)。調査は平成30年1月10日に実施した。調査にあたっては京都府建設交通部の協力を得た。



第71図　平安京跡位置図（国土地理院1／25,000「京都東北部」）

2　調査の概要

エレベーターシャフトを設置する4ｍ×4ｍの16㎡について調査を行った。層序は、現地表下0.7ｍで茶褐色シルトの安定面を確認し、この面で遺構を検出した。現地表下1.0ｍでは堀川の氾濫によるとみられる茶褐色砂礫層の堆積を確認した。断ち割りによって下層の確認をおこなったが、遺構・遺物は見つからなかった。

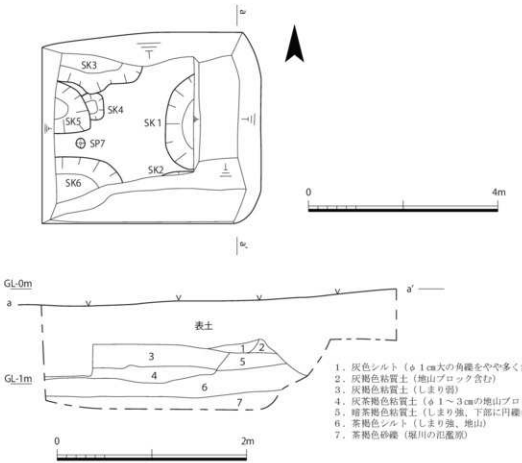


第72図　調査地位置図（1/4,000）

茶褐色シルト層（第6層）上面では土坑ＳＫ1～6、ピットＳＰ7を検出した。ＳＫ1は長辺1ｍほどの楕円形の土坑で、深さは検出面から約40㎝を測る。遺物は土師器皿の細片が出土したのみである。土師器皿の型式は京都Ｘ期中段階とみられ、16世紀中頃の年代観が与えられる(2)。それ以外の土坑は概ね近世に属するものとみられ、土師器皿や陶磁器片などが出土している。

ＳＫ3からは、江戸時代後期の土師器皿がまとまって出土した（第74図1～5）。1～3は小皿である。いずれもほぼ完形である。図示した以外にも小皿は比較的多く出土している。4・5は口径10㎝程度の皿である。出土している土師器皿の型式は京都XII期新段階～XIII期古段階とみられ、18世紀中頃の年代が与えられる。

3　まとめ



第 73 図　調査区平面図（1/80）・土層断面図（1/40）

第 74 図　SK3 出土遺物実測図（1/4）

今回の調査で見つかった遺構・遺物は、16 世紀中頃のＳＫ１が最も古く、それより古いものは確認できなかった。下層には砂礫層が堆積していることから、調査地点は堀川の氾濫原にあたり、削平された可能性が考えられる。また、ＳＫ３からは土師器皿がまとまって出土しているが、18 世紀中頃は町家から土師器の出土がみられなくなっていく時期であり、貴重な資料が得られた。なお、本調査については、これ以上の拡張は必要ないと判断された。

（岡田健吾）

（注）

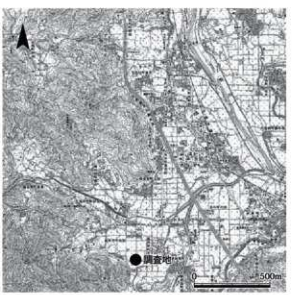
（1）古代学協会・古代学研究所 1994『平安京提要』角川書店

（2）小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7 世紀～ 19 世紀－』京都編集工房

［2］佐伯遺跡試掘・確認調査（第 10 次調査）

1　はじめに

佐伯遺跡は亀岡市薭田野町佐伯に位置する、縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。歴史的には、佐伯遺跡周辺は、和名抄にみられる「佐伯郷」、あるいは中世の佐伯庄に比定され、これまで亀岡市教育委員会、京都府教育委員会、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターによって９次にわたる調査が行われている。平成 27 年度からは、国営ほ場整備事業に伴い公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターによって大規模な発掘調査が行われ（第７～９次調査）、多量の古代瓦や古代の掘立柱建物が検出されており、特に古代においては当地域の中心的な役割を担った遺跡と考えられる。



第 75 図　佐伯遺跡位置図（国土地理院 1/25,000「亀岡」）

今回の調査は第９次調査の終了後、ほ場整備の用地内で、当初は予定に無かった排水路掘削工事のため本発掘調査の要否を判断するために試掘確認調査を行ったものであり、第 10 次調査となる。実施期間は平成 30 年１月 22･29 日、２月 22 ～ 27 日で、調査面積は約 1,247㎡である。調査にあたっては、農林水産省近畿農政局の協力を得た。

2　調査の成果

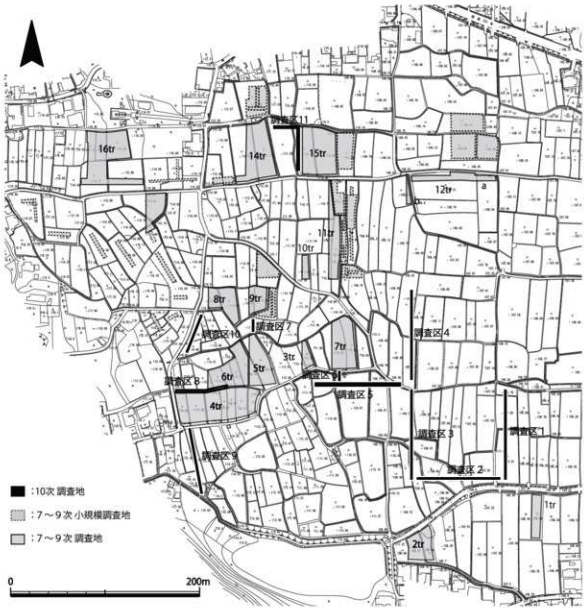
（1）各調査区の概要

今回調査を行ったのは、水路敷設箇所の 10 箇所である。調査区１～ 10 では、約 1.5 ｍの幅で、ほ場の長さに合わせて長さ 10 ～ 100 ｍ程度の掘削を行った。調査区 11 では約 0.3 ｍ幅で約 70 ｍの掘削を行った。多くの調査区では沼地状の堆積を検出したのみであったが、部分的に安定面あるいは遺構を検出した地点もある。以下、その概要を調査区ごとに報告する。

調査区１～３　表土下約 0.4 ～ 0.8 ｍまで掘削を行ったが、湿地状の堆積を確認したのみであり、顕著な遺構・遺物を確認することはできなかった。

調査区４　地表面から約 0.7 ｍの地点で部分的に安定地盤を検出した。安定地盤は起伏があり、調査区の大部分は沼地状の堆積であったが、遺構と考えられる土色変化を２か所で確認した。埋土中からは土師皿の小片が出土しており、いずれも近世以降の遺構である。

調査区５・６　調査区５は、今回の調査で最もまとまって遺構・遺物が検出された地点である。水路

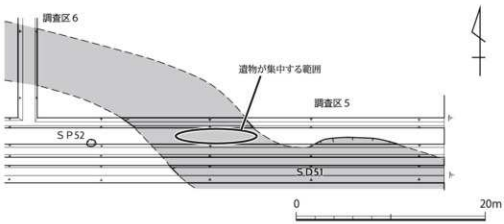


第 76 図　調査区位置図 (1/4,000)

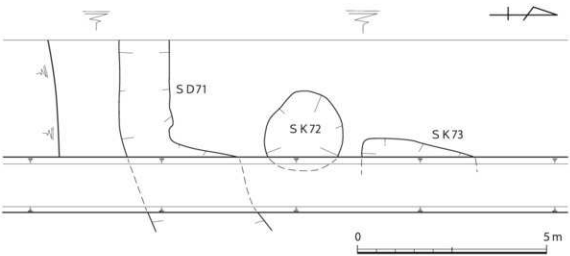
掘削に伴い、遺構埋土と考えられる黒色粘質土が浅い深度で露出した状態であった。調査区５で検出することができたのは一連のものと考えられる溝状遺構（ＳＤ 51）と、土坑１基（ＳＰ 52）である。

ＳＤ 51 は検出幅が最大９ｍを測る溝である。調査区５で平面的に確認することができたほか、調査区６では断面が緩いＵ字状を呈する溝を断面観察によって確認しており、ＳＤ 51 の延長部分にあたると考えられる。溝底のレベルは北西側と比べて南東の方が低くなっており、北西から南東方向に向かって蛇行しながら流れる溝であったと判断される。溝埋土は黒色粘質土であり、有機質を多く含む。調査区中央では板材や曲物、須恵器、土師器等の遺物がややまとまって出土した。これらの出土遺物から、溝の埋没時期は中世前半である。

ＳＰ 52 は径 0.3 ｍを測る円形のピットである。ピット埋土中からの出土遺物がなく明確な帰属時期は不明であるが、周辺の廃土中より緑釉陶器片を表採しており、ＳＤ 51 が埋没する以前の古代の遺構である可能性もある。



第77図　調査区5平面図（1/400）



第78図　調査区7平面図（1/100）

第79図　調査区8平面図（1/50）

調査区7　ほ場の切り下げによって、遺構を確認した地点である。大部分は後世の削平を被っていたが、一部の地点の浅い深度で土坑や溝などの遺構を検出した。第80図7の緑釉陶器椀はＳＫ72上面から出土したものである。

ＳＤ71は幅1.5ｍを測る。さらに東へ延長すると考えられるが、切土の範囲外であるため、規模等の詳細は不明である。埋土中から土師器・須恵器・黒色土器等が出土した。ＳＫ72は径2.1ｍを測る円形の土坑である。埋土中から緑釉陶器椀などの土器片が比較的まとまって出土しており、9世紀代のものと考える。ＳＫ73は検出長約3ｍを測る不整形の土坑である。切土予定範囲の東側では遺構の輪郭を確認することができなかったため、水路による切土の範囲内で収まるものと判断される。埋土中から土師器片などが出土した。

調査区8　地表下約0.7ｍの地点で安定面（礫層、あるいは礫混じりの明黄褐土）を検出した。この層で土坑3基を確認した。調査区東端で検出した土色変化は粗砂混じりの礫層であり、自然流路状の堆積であると考える。

3基の土坑はいずれも全形は不明であるが、埋土は暗褐色粘質土であり、同時期のものであると考えられる。ＳＫ81、83は規模から考えると掘立柱建物に伴う柱穴の可能性がある。いずれの土坑からも遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。

調査区9　表土下約1.5ｍまで掘削を行ったが、湿地状の堆積を確認したのみであり、顕著な遺構・遺物を確認することはできなかった。

調査区10　表土下0.4ｍまで掘削を行ったが、掘削深度が浅く、造成土を確認したのみであった。

調査区11　地表下0.7ｍの地点で安定地盤を検出したが、顕著な遺構・遺物は確認することはできなかった。

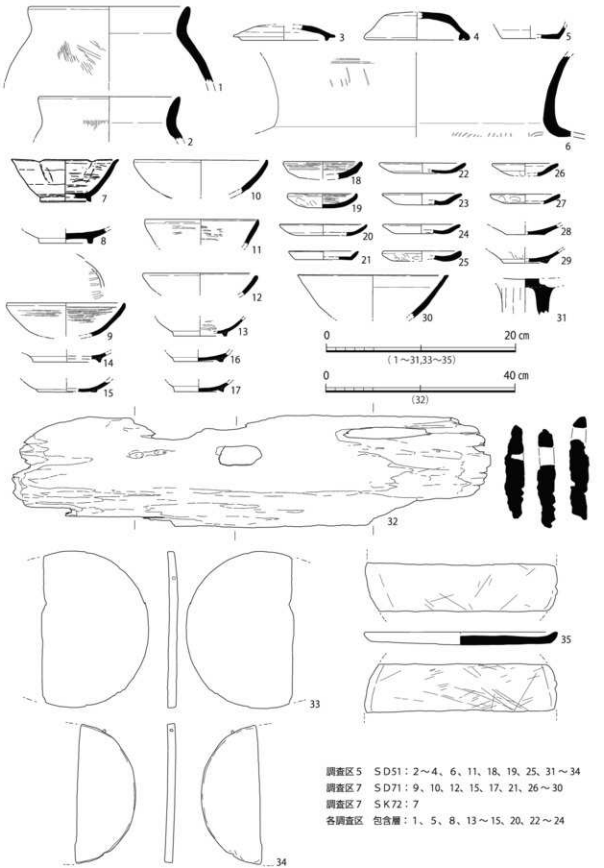
（2）出土遺物（第80図）

各地点から、合わせて整理箱4箱分の遺物が出土した。

1、2は弥生土器である。ともに石英・長石類、雲母、シャモットを多量に含有するもので、在地産であると考えられる。中期後半のものであろうか。3、4は須恵器蓋Ｈである。ともにＳＤ51から出土した。4は天井部にケズリが施されていないもので、側面にわずかに漆が付着する。

7はＳＫ72上面で出土した緑釉陶器椀である。口縁部には押圧と切り込みによる輪花が認められ、内面見込みには圏線が巡る。高台は、貼り付けの高高台であり、端部にはナデによる段を持つ。釉は剥離によって残存状態が良好ではないが、濃緑色に発色する。素地は軟質であり、器面には緻密なミガキが施されている。以上の特徴は、いわゆる近江産の緑釉陶器とされるものである。8は貼付高台をもつ須恵質の底部であり調査区5付近の表土直下で採集したものである。内面見込み部には圏線がめぐり、内外面は緻密にミガキが施されていることから、釉は残存していないものの、東海系の緑釉陶器、あるいは緑釉素地の可能性が高い。

9～17は瓦器椀である。瓦器椀は高台が退化したものも多く、13世紀代まで下るものもあるものの、12世紀代のものが多い。口縁部が残存するものはナデによって端部をつまみ上げる丹波型が主体を



第 80 図　佐伯遺跡第 10 次　出土遺物実測図（1/4・1/8）

占める。18・19は瓦器皿である。ともにＳＤ51から出土した。

20～27は土師器皿である。26、27は調査区７のＳＤ71から出土したものである。側面観が台形を呈するもので、ともに中世後期のものである。

28、29は素焼きの椀底部で、薄い貼付高台をもつ。

30は白磁椀である。口縁部は外折し端部に面をもち、12世紀代の中国製である。

木製品はすべてＳＤ51から出土した。32は残存長90cmを測る板材である。中央付近と片側に方形の孔が穿たれており、建築部材である可能性が高い。33、34は円盤状の木製品であり、曲物の底板、あるいは蓋であると考えられる。ともに１箇所に円形の釘孔がみとめられる。35は木製の挽物皿である。腐食が著しく、加工痕や轆轤爪痕は認められない。

３　おわりに

今回の調査は暗渠工事の切土範囲を対象として実施したため、得られた情報は断片的ではあるが、多くの遺構・遺物を検出することができた。調査区５では、中世の東西方向の溝を検出し、埋土中からは木製品や土器類等の遺物が出土した。また、調査区７で出土した緑釉陶器は型式学的特徴から、近江あるいは東海地域に類例を求めることができる。ただし、近年、同じ亀岡盆地の篠窯跡群西山１号窯でも同じように高高台をもつ緑釉陶器が出土しているため[(1)]、搬入元については今後慎重に判断する必要がある。これまで亀岡盆地では東海・近江産の可能性のある緑釉陶器の出土事例は千代川遺跡等で少量得られているのみであり、貴重な類例を加えることとなった。

今回の調査によって、古代・中世の佐伯遺跡の様相がより明らかになったといえる。今後、これらの成果をもとに地域史の復元に努めていく必要がある。

なお、今回の調査成果から本調査の必要はないと判断した。

（桐井理揮）

（注）

（１）高橋照彦・中久保辰夫編2013『西山１号窯―篠窯跡群における瓦陶器兼業窯の調査―』（大阪大学文学研究科考古学研究室）

［３］法成寺跡・寺町旧域試掘確認調査

１　はじめに

法成寺跡は京都市上京区の京都御苑東側に所在する平安時代の寺院跡である。法成寺は藤原道長によって寛仁４（1020）年に創建された寺院であり、道長が亡くなった場所でもある。その後もしばらくは繁栄を続けるが、鎌倉時代末に廃絶したとされる。寺町旧域は北区から下京区の寺町通東側に帯

状に延びる遺跡である。天正 18（1590）年に豊臣秀吉の京都改造の一環として寺院が集められて寺町が形成された。現在でも多くの寺院が伽藍を並べる。

今回の調査は、府立鴨沂高校の建て替え工事の一環で行われた汚染土除去に伴って実施した。調査地は鴨沂高校の校地の北西隅に当たり、法成寺跡では南西隅に近い部分に比定される。また、寺町旧域では行願寺（革堂）が所在した場所に当たる。調査期間は平成 30 年２月７日～９日である。調査にあたっては京都府教育庁管理部の協力を得た。

第 81 図　法成寺跡・寺町旧域位置図（国土地理院１／ 25,000「京都東北部」）

2　調査の概要

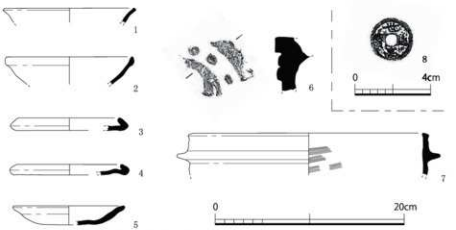
調査地は汚染土除去のため現地表面下 3.0 ｍまでの土砂を重機で掘削することになっており、掘り下げを行いながら遺構・遺物があれば適宜記録をとることとなった。調査面積は約 300㎡である。

第 82 図　調査地位置図（1/1,500）

基本的な層序は、現地表面下 1.4 ｍまでは近代以降の盛土が堆積しており、その下層には掘削深度である地表面下 3.0 ｍまで砂礫層が堆積していることを確認した。砂礫層上面において部分的に灰褐色細砂層の面を検出したが、しまりがなく安定した遺構面ではない。砂礫層は、鴨川やかつて存在した中川の氾濫によって堆積したものであろう。土層の観察から、一度に堆積したものではなく、いくつもの堆積の単位があると判断した。洪水が発生する度に大量の砂礫が流入し、徐々に堆積層が形成されたと考えられる。

今回の調査では、顕著な遺構は全く検出できず、遺物は砂礫層の掘削中に見つけたものを回収することに努めた。出土遺物は古代～近世の土器、瓦など多岐にわたる。出土量が最も多いのは瓦である。そのほとんどが古代の布目瓦であることから、法成寺所用の瓦であると考えられる。

第 83 図は土器を中心に図化し得たものを示した。１は灰釉陶器碗とみられる。被熱しているためか釉薬が痂せている。２は白磁碗である。大宰府分類でⅪ類であるとみられ、11 世紀頃の年代観が与えられる。(1) ３～５は土師器皿である。３・４はいわゆるコースター型の皿である。京都Ⅴ期とみられ、12 世紀代のものであろう。(2) ５は京都Ⅹ期古段階とみられる土師器皿で、16 世紀初頭頃ものである。６は瓦質土器羽釜である。７は軒丸瓦である。右巻きの巴文で珠文を伴う。８は銅銭「世高通寶」である。琉球王国の銅銭で、尚徳王在位中の 1461 ～ 1469 年頃に鋳造されていたものである。また図化していないが、緑釉瓦が数点出土しているほか、「犬丸」と文字が刻まれた瓦が出土している（写真図版 29（２））。１～４、７は法成寺が所在した時代の遺物、それ以外は後の時代の遺物である。なお、



第 83 図　法成寺跡・寺町旧域出土遺物実測図（1/2・1/4）

遺物はいずれも砂礫層から出土している。

3　まとめ

今回の調査では、全面に渡って砂礫層の堆積を確認したのみで、法成寺跡や寺町旧域に関連する遺構は検出されなかった。　出土した遺物は細片が中心であるが、平安時代～鎌倉時代の法成寺に関するものが含まれる。とくに緑釉瓦が出土したことや、灰釉陶器や白磁碗など創建期に近い年代の遺物が出土したことが成果としてあげられる。

これ以外に、琉球王朝で鋳造された銅銭「世高通寶」が京都府内では初めて出土したことが特筆される。この銭は鋳造されていた期間が 1460 年代に限られ、それからあまり年代を経ずに搬入されたと推測される。この時代に調査地周辺にどのような施設が存在したのか、文献史料からは明確にされておらず、発掘調査においても手掛かりが得られていない。この銭がどのような経緯でこの地にもたらされたのか、今後の課題である。

（岡田健吾）

（注）

（1）太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ　陶磁器分類』

（2）小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7 世紀～ 19 世紀－』京都編集工房

（3）公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018『京都府遺跡調査報告集第 172 冊　寺町旧域・法成寺跡』

［4］矢田遺跡試掘・確認調査（第２次調査）

1　はじめに

矢田遺跡は亀岡市上矢田町、下矢田町にまたがる散布地として周知されている遺跡である。周辺には古墳時代後期の君塚古墳や医王谷古墳群、中世の矢田城跡や矢田館跡などの遺跡がある。

今回の調査は府道枚方亀岡線の道路拡幅に伴って行ったもので、昨年度の第１次調査に続くものである。調査地は亀岡市下矢田町君塚地内で、調査日は平成30年４月11・12日である。調査にあたっては、京都府南丹土木事務所の協力を得た。

第84図　矢田遺跡位置図（国土地理院「亀岡」・「法貴」１／25,000）

2　調査の概要

道路の拡幅が予定されている箇所に、南北約11ｍ、東西約2.5ｍの細長いトレンチを設定した。調査面積は約25㎡である。現地表面下約30㎝において、柱穴列ＳＡ１を検出した。

柱穴列ＳＡ１　調査区の西端近くで検出した南北方向に延びる柱穴列である。調査区内では柱穴５基を検出したが、さらに調査区外に延びる可能性もある。柱穴は一辺が約60～70㎝の平面隅丸方形を呈しており、深さは約50㎝を測る。いずれの柱穴でも柱当たりを検出しており、直径は15㎝前後である。柱間はほぼ等間隔で約2.4ｍ（８尺）である。主軸は真北から西に9.8°振っている。柱穴の規模からみて掘立柱建物の一部である可能性が高い。掘立柱建物が柱穴列の東側に展開すれば調査区内で掘方の一部を検出するはずだが、検出されなかった。よって、建物は西側に展開する可能性が考えられる。

ＳＰ１～ＳＰ５の各柱穴からは須恵器が出土している。ここでは残りがよいものを図化した（第85図１・２）。１はＳＰ１から出土した須恵器杯Ａである。口縁部が外反する。器高はやや低い。２はＳＰ５から出土した須恵器杯Ｂの底部である。高台は外側にやや張り出し気味であり、高台底は断面三角形になっている。１・２ともに焼成が甘く灰白色を呈している。これ以外に、ＳＰ４からは鉄製品の破片が出土した。

3　まとめ

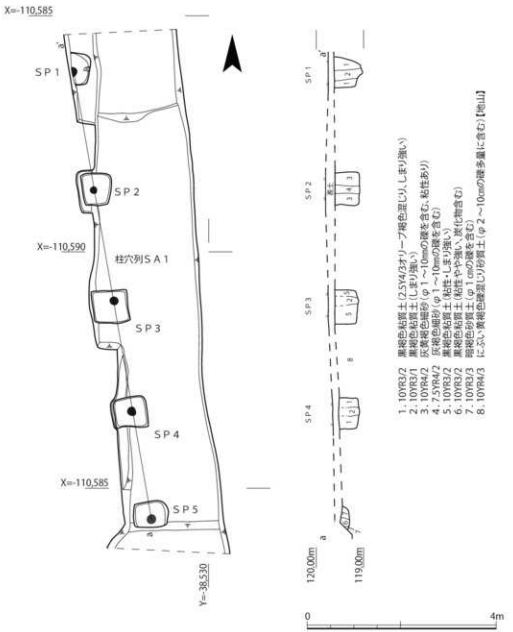
今回の調査では掘立柱建物の一部とみられる柱穴列が見つかった。出土した須恵器の年代観から、

奈良時代末期～平安時代初頭頃の建物であると考えられる。建物全体の規模は不明であるが、調査区の西側に中心部分が展開していると考えられる。柱穴の規模から、大型建物の可能性もある。

この成果により、矢田遺跡では古代の集落跡が展開している可能性が高くなった。今回の開発において本発掘調査は不要と判断したが、今後、近接地での開発行為に際しては、適切な対応が必要となる。

（岡田健吾）

第 85 図　矢田遺跡出土遺物実測図（1/4）



第 86 図　矢田遺跡調査区平面図・柱穴列断面図（1/80）

［5］岡田国遺跡隣接地点試掘・確認調査

1　はじめに

岡田国遺跡は、奈良時代から平安時代の集落遺跡で、奈良時代中期の道路や掘立柱建物、溝が検出されている。道路跡では東西・南北方向に直行する交差点が確認され、建物群は道路と溝で区画された範囲に方位を揃えて立てられていた。公的な施設が短期間存在したとみられ、同時期の都城、恭仁京との関係が想定される遺跡である。また、平安時代中頃の建物群と埋納遺構が検出されている。

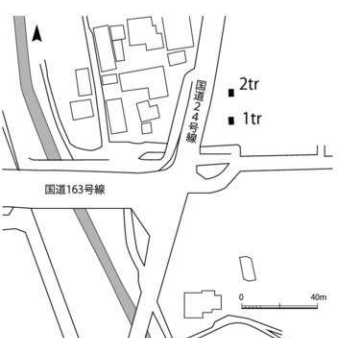
今回の調査は、京都国道事務所による国道163号線拡幅工事が岡田国遺跡隣接地点で計画されたことを受けて、木津川市木津八色地内で、試掘確認調査として実施した。現地調査は平成30年5月29日に実施した。調査面積は30㎡である。調査にあたっては国土交通省京都国道事務所から協力を得た。

第87図　岡田国遺跡隣接地点位置図
（国土地理院 1/25,000 「奈良」）

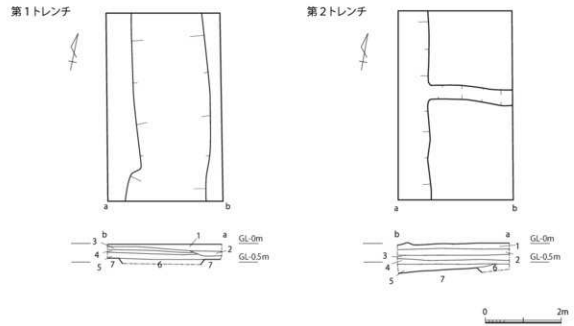
2　調査の概要

国道24号線と163号線の交差する大谷交差点の北東側に、第1、2トレンチを設定した。当調査地点は岡田国遺跡の北側隣接地点に相当し、30～40ｍ南では公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが平成28・29年度に実施した岡田国遺跡第4・5次調査によって、平安時代中頃の遺構群が検出されている。

第1トレンチ　南北5ｍ、東西3ｍの規模の試掘トレンチである。トレンチ中央部で南北方向の溝状遺構を検出した。複数条の溝が重複している可能性があるが、湧水が著しく詳細な平面形態は不明である。埋土はやや暗い灰色シルト層で、瓦片が出土し



第88図　トレンチ配置図（1/2,000）



第 89 図　第１・２トレンチ平面・土層断面図（1/100）

た。

第２トレンチ　第１トレンチの調査結果を受け、北に約 15 ｍの地点に設定した試掘トレンチである。南北５ｍ、東西３ｍの規模である。第１トレンチと同様に南北方向の溝状遺構を検出した。この遺構も、複数条の溝が重複している可能性がある。埋土は暗灰色シルト層で、平安時代と考えられる須恵器片が出土した。

試掘確認調査の結果、岡田国遺跡の範囲内で検出されている平安時代の遺構群が、さらに北に分布していることが判明した。木津川市教育委員会等の関係機関も現地で調査成果を確認し、岡田国遺跡の範囲が、従来の想定より北に広がることを確認した。今後、当地の開発行為に際しては、適切な対応が必要となる。

なお、今回の調査成果を受けて、公益財団法人京都府埋蔵文化次調査研究センターが発掘調査を実施することとなった。

（古川　匠）

［6］満願寺跡試掘・確認調査（第１次調査）

1　はじめに

満願寺跡は舞鶴市万願寺に所在する中世寺院跡である。満願寺は建保六（1218）年に弁円によっ

て創建されたと伝わる。永禄年間（1558 － 1570）に焼失したが、寛文年間（1661 － 1673）に再興された。現在は庫裏と本堂が現地に存続しているが、江戸時代には背後の高台に伽藍が広がっており、礎石などが残っている。

今回の調査は、砂防堰堤建設工事の予定地が包蔵地に含まれることから、遺構の広がりを確認するために実施した。調査日は平成 30 年 6 月 12 日で、調査面積は 10㎡である。調査に当たっては京都府中丹東土木事務所の協力を得た。

第 90 図　満願寺跡位置図（国土地理院 1 ／ 25,000「西舞鶴」）

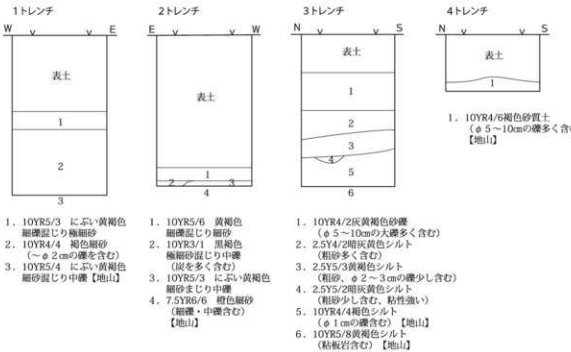
2　調査の概要

砂防堰堤の建設が予定されている地点には段状に複数の平坦面とその奥に斜面が広がっている。平坦面ごとに 4 か所の調査区を設定した（第 91 図）。

第 1 トレンチ　平坦面 1 の山側に設定したトレンチである。1.5 m × 2 mの範囲を地表面下 1.7 mまで掘削した。地表下 1.0 mで検出した褐色細砂層（第 2 層）が遺物包含層であり、土師器皿が出土した。

第 2 トレンチ　平坦面 1 の平地側、土手状の高まりに被せて設定したトレンチである。1.5 m × 2 mの範囲を現地表下 1.6 mまで掘削した。地表下 1.5 mほどで、炭を多く含む黒褐色極細砂混じり中礫層（第 2 層）を検出した。掘削範囲が狭いので明確ではないが、この層は溝状に広がっており遺構の

第 91 図　満願寺跡調査区位置図（1/1,500）

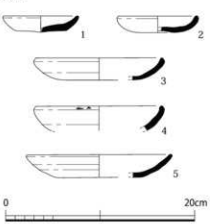


第 92 図　調査区土層断面柱状模式図

埋土である可能性がある。この層からは土師器や須恵器、貿易陶磁器などの遺物が出土した。なお、土手状の高まりから近代の陶器が出土しており、最近構築されたものである。

第 3 トレンチ　平坦面 2 に設定した 1.5 m × 1.4 m のトレンチである。地表から約 1.2 m まで掘削したところで地山を確認した。黄褐色シルト層（第 3 層）土師器の細片が出土した。

第 4 トレンチ　平坦面 3 に設定した一辺 1.2 m のトレンチである。地表から約 0.5 m まで掘削したところで地山を確認した。遺構や遺物は確認されなかった。



第 93 図　満願寺跡出土遺物実測図（1/4）

遺物はほとんどが第 1・2 トレンチから出土した。ここでは残りが良い土師器皿を図化した。（第 93 図 1 ～ 5）。1 は回転台成形の土師器皿で在地産とみられる。底部は回転糸切りである。2 ～ 5 はいわゆる京都系土師器皿である。2 ～ 4 は口縁部に面取りが施されている。京都Ⅵ期中段階頃とみられ、13 世紀前半の年代観が与えられる。5 は二段ナデが施されており、2 ～ 4 よりも古い時期のものである。1 は第 2 トレンチ第 2 層、2 ～ 5 は第 1 トレンチ第 2 層から出土した。また、破片資料のため図化し得ていないが、2 トレンチの 2 層からは白磁四耳壺の肩部や褐釉壺の胴部等の貿易陶磁器や須恵器胴部片が出土している（写真図版第 29（3））。

3　まとめ

今回の調査は、わずかな面積の調査であったが、遺跡の性格を判断する上で重要な遺物が出土した。土師器皿は京都系土師器皿が出土しており、その年代は13世紀前半頃である。これは満願寺が創建されたと伝わる年代と一致しており、調査地点に創建期の満願寺の遺構が展開している可能性を示している。また、貿易陶磁器では碗や皿などの供膳具ではなく、壺類が出土していることが特筆される。これらは希少性が高く、満願寺が所有していたものであるとすれば、その繁栄ぶりがうかがえる資料であると評価できる。

これらの陶磁器が出土した炭を多く含む層については、その性格が問題となる。火災により、焼失した痕跡なのか、寺院で行われていた儀式などに由来するものなのか、今回の調査では判明しなかった。

なお、今回の調査成果を受けて、公益財団法人京都府埋蔵文化次調査研究センターが発掘調査を実施することとなった。

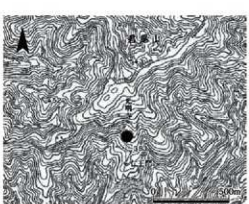
（岡田健吾）

［7］光明寺境内試掘・確認調査（第１次調査）

1　はじめに

光明寺は綾部市睦寄町有安に所在する真言宗の寺院である。創建は聖徳太子といい、延喜年間（901－923）に理源大師によって再興されたという。大永７（1527）年に兵火にかかり、二王門を残して焼失した。その後、近世にかけて復興し現在に至る。仁王門は鎌倉時代中期の建築で、京都府北部では唯一の国宝建造物である。

今回、光明寺境内において公衆トイレの新設が計画されたことから、遺構の有無と調査範囲の拡張の必要性を確認するために調査を実施した。調査日は平成30年７月２日である。調査にあたっては京都府環境部の協力を得た。



第94図　光明寺境内位置図（国土地理院1/25,000「丹波大町」）

2　調査の概要

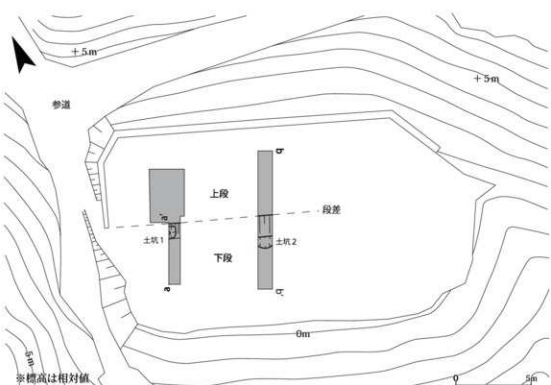
光明寺境内は本堂などがある平坦面が最も標高が高い場所に位置し、二王門に向かって雛段状に多くの平坦面が連なっている。これらの平坦面にはかつては僧坊が存在したと考えられるが、現在はほとんどが更地である。今回調査したのは、庫裏の一段下にある平坦面である。

調査区は、南北方向に細長いトレンチを２本設定した（第 95 図）。調査面積は約 21㎡である。東調査区の北半では、現地表面から約 0.2 m掘削したところで角礫層である地山に到達した。一方、南半では整地層が厚く堆積しており、現地表面下約 1.0 mで地山に到達した。西調査区においても、北半では表土直下で、南半では現地表下 0.6 mで地山に到達した。つまり、元々は調査区の南北で段差があったが、ある段階で整地が行われ平坦になったと考えられる。

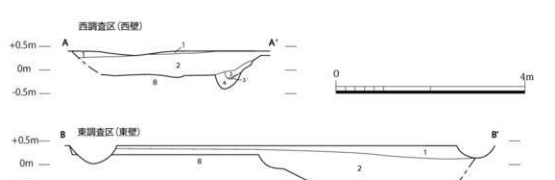
遺構として、西調査区で土坑ＳＫ１を、東調査区で土坑ＳＫ２を検出した。ＳＫ２は幅0.7 m、深さ0.2 mの落ち込み状の遺構である。遺物は出土していない。ＳＫ１は直径 0.8 m、深さ 0.7 mを測る円形の土坑である。埋土は大きく２層にわけられ、その間に炭を多く含む層がみられる。この炭層付近から奈良火鉢が出土した（第 97 図）。出土したのは口縁部や胴部、底部などの破片で、いずれも同一個体だと考えられるが、接合する部分がないため図上で復元している。浅鉢形の火鉢で口縁近くの二重の突帯の間には花菱文のスタンプが連続して押されている。

３．まとめ

今回の調査は狭い範囲で実施したが、土坑から奈良火鉢が出土したことが成果としてあげられる。この奈良火鉢については光明寺の什器であったと考えられる。とすれば、室町時代の段階で、この平坦面に僧房が所在していた可能性も十分にあり得るだろう。本調査は光明寺境内で実施した初めての調査であるが、中世の光明寺の姿を解明する手がかりを得ることができた。境内全域には中世の遺構

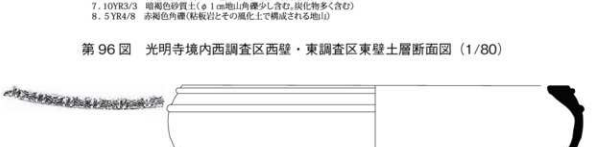


第 95 図　光明寺境内　試掘トレンチ位置図 (1/250)



1．2.5Y4/6　オリーブ褐色砂質土【表土】
2．10YR4/6　褐色砂質土（φ１～10cm地山角礫少し含む。しまりやや弱い）【整地土】
3．10YR4/4　褐色粘質細砂（φ３～５mm地山角礫多く含む。2.5YR6/6橙色の部分あり）
3'．３層に木炭を多量に含む。
4．7.5YR5/4に部位褐色細砂（φ５mm地山角礫を多く含む）
5．7.5Y4/4　褐色砂質土（φ１～５cm地山角礫かなり多く含む）
6．10YR4/4　褐色粘質土（φ１cm地山角礫多く含む。炭化物少し含む）
7．10YR3/3　暗褐色砂質土（φ１cm地山角礫少し含む。炭化物多く含む）
8．5YR4/8　赤褐色角礫（粘板岩とその風化土で構成される地山）

第 96 図　光明寺境内西調査区西壁・東調査区東壁土層断面図（1/80）



第 97 図　光明寺境内出土遺物実測図（1/4）

が良好に残存していると考えられ、今後開発行為等に際しては適切な対応が必要となる。

なお、今回の調査成果を受けて工事の設計変更が実施されたため、本発掘調査の必要はないと判断した。

（岡田健吾）

［8］宮津城跡試掘・確認調査（第 19 次調査）

1　はじめに

宮津城跡は、宮津市鶴賀に所在する近世城館である。細川藤孝によって天正８（1580）年以降に築城されたのが宮津城の始まりである。元和８（1622）年には京極高広が入り再建をはじめ、寛永２（1625）年には全体が完成したとされている。宮津藩は、京極、永井、阿部、奥平、青山、松平（本庄）家と

藩主が頻繁に入れ替わりながら幕末を迎えるが、城の基本構造は京極氏の再建以後大きく変化していない。

今回の調査は、宮津湾流域下水道幹線管渠工事に伴う確認調査として昨年度に引き続き実施した。現地調査は平成30年4月4日（B地区）、5月22日（A地区）、11月5日（C地区）に行い、調査にあたっては京都府流域下水道事務所宮津湾浄化センターから協力を得た。

2　調査の概要

調査地は宮津城跡の東端を画する大膳川に隣接している。今回の調査は、第18次調査地と財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した第8次調査の間をつなぐ部分にあたる。第18次調査では波路門枡形と屋敷地とを画する石垣の基部を検出し、第8次調査では武家屋敷地の掘立柱建物などを上下2層分検出している[1][2]。調査地の現状は歩道と道路であり、下水道幹線の掘削地である。調査は3回に分けて実施したため、東側からA・B・C地区と呼称する（第100図）。

A地区は、アスファルト上から約105cm（標高0.9m）までは近代の染付などを含む近現代層である。その下層はオリーブ褐色細砂層で、さらに下層からSP01を検出した。SP01の中央には長辺約70cm、短辺約45cmの花崗岩の石材を検出した。石材の上面は平坦で、石材の下には円礫を複数確認した。これらの状況から、SP01の石材は礎石で、SP01は礎石の掘方と判断できる。調査区の東端には深さ5cmの落ち込みがあり、埋土はSP01と同一である。SP01と関連する遺構の可能性がある。出土遺物は、近世末を遡る遺物はなく、SP01の時期の上限も近世末である。なお、A地区と第18次調査の間では、石材は確認できていない。

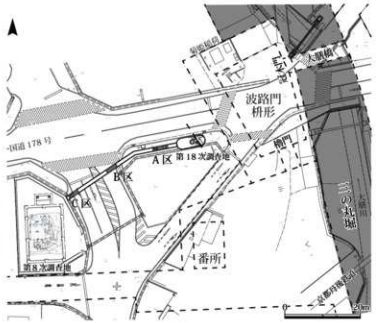
B地区は、アスファルト上から約85cm（標高0.96m）までは近代の染付などを含む近現代層である。その下層では、オリーブ褐色細砂層や灰黄色細砂層を挟んで、SP01検出面と同じ灰黄色細砂の面を検出したが遺構は確認できなかった。出土遺物は、近世末を遡る遺物は確認できなかった。

C地区は、アスファルト上から約62cm（標高1.13m）までは近代の染付などを含む近現代層である。その下層では、にぶい黄褐色細砂層を挟んだ下層でSK02・04、SP03、SD05などの遺構を検出した。出土遺物は、検出面から近世末の肥前焼磁器などが出土したことから、近世末の屋敷地の遺構と判断できる。これらの遺構の下層は遺物を含まない細砂で、遺構面は確認できなかった。

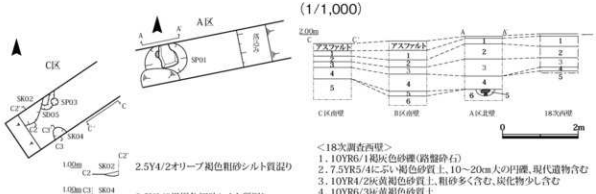
3　調査の成果

今回の調査では、第18次調査で検出した石垣に対応する西面の石垣は確認できず、確認できた遺構の総数も少ない。A地区で検出した礎石なども、出土遺物の時期から近世末と判断でき、細川氏や京極氏の築城期の遺構はない。遺構面が2面ある第8次調査とは対照的な状況であり、今回の調査地部分の土地利用が近世末までは活発でなかったことが分かる。今後も今回のような成果を積み上げていくことで、地表面上では見えづらい宮津城跡の全体像が明らかになることを期待したい。

第 98 図　宮津城跡位置図（国土地理院　1/25,000「宮津」）



第 99 図　宮津城跡調査区配置・周辺遺構想定復元図（1/1,000）



<C区南壁>
1. 10YR5/3灰オリーブ色砂礫(路盤砕石)
2. 7.5YR2/2黒褐色砂質土(コークス層)
3. 10YR4/2灰黄褐色砂質土、礫多い
4. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂、炭化物含む
5. 10YR4/3にぶい黄褐色細砂

<B区南壁>
1. 5Y4/2灰オリーブ色砂礫(路盤砕石)
2. 7.5YR2/2黒褐色砂質土(コークス層)
3. 10YR4/2灰色細砂、近代染付入る(整地土)
4. 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂、しまり強い
5. 10YR6/3灰黄褐色細砂、しまり強い、炭化物含む
6. 2.5Y6/2灰黄色細砂、しまり弱い

<18次調査西壁>
1. 10YR6/1褐灰色砂礫(路盤砕石)
2. 7.5YR5/4にぶい褐色砂質土、10～20cm大の円礫、現代遺物含む
3. 10YR4/2灰黄褐色砂質土、粗砂多く含む、炭化物少し含む
4. 10YR6/3灰黄褐色砂質土
5. 10YR6/4にぶい黄橙色砂質土、しまり弱い

<A区北壁>
1. 5Y4/2灰オリーブ色砂礫(路盤砕石)
2. 2.5Y4/2オリーブ褐色砂質土
3. 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質土、近代染付含む
4. 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂、ラミナあり
5. 5Y3/1オリーブ黒色粗砂、粘性あり(礎石埋土)
6. 2.5Y6/2灰黄色細砂、ラミナあり

第 100 図　宮津城跡調査区平面・土層断面図（1/100）

なお、今回の調査で、本発掘調査の必要はないと判断した。

（中居和志）

（注）

（1）森島康雄 1991「1．宮津城跡第 8 次」（「京都府遺跡調査概報」第 43 冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）

（2）中居和志 2018「宮津城跡試掘確認調査」『京都府埋蔵文化財調査報告書（平成 29 年度）』京都府教育委員会

5　平成 29・30 年における埋蔵文化財の発掘

［1］平成 29・30 年の動向

平成 29 年度の京都府内における周知の埋蔵文化財包蔵地の件数は　17,982 件であるが、包蔵地内において実施される土木・建築工事等に際して提出された文化財保護法第 93・94 条に基づく届出・通知は、付表 11 のとおり 3,139（平成 28 年：2,834）件であった。これは、前年と比較すると 305 件（前年比約 11％）増加している。

このうち、民間の土木・建築工事等に伴う法第 93 条の届出は 2,892（平成 28 年：2,598）件で、294 件（前年比約 11％）の増加である。内訳件数は、京都市 1,501 件、乙訓地域 741 件、山城地域 317 件で、この 3 地域での届出件数の合計は 2,559 件となり、府内全体の約 88％を占める。民間の土木・建築工事の届出は、平成 28 年度と比較して、京都市で 72 件、乙訓地域で 60 件、山城地域で 57 件、丹後地域で 1 件、中丹地域で 9 件、南丹地域で 95 件の増加となり、ほぼ府全域で増加傾向を示したが、京都市及び亀岡市（94 件増）での件数増加が顕著である。

一方、公共事業に係る土木・建築工事に伴う法第 94 条の通知は、平成 14 年の 318 件をピークに、平成 20 年には 177 件とおおむね半減した。平成 24 年から平成 26 年にかけては 230 件前後で推移していたが、平成 27 年には 257 件とわずかながら増加した。平成 28 年に 236 件と再び減少に転じたが、平成 29 年度は 247 件とわずかながら増加している。

府内の埋蔵文化財担当職員（財団法人調査機関の職員含む）は、平成 7 年の 206 人をピークに市町村合併等により減少傾向にある。平成 30 年 4 月 1 日における府内の専門職員の配置数は 153 名（公益財団法人・嘱託職員等含む）であり、配置は 24 市町（組合）のうち 19 市町（組合）で、配置率はおよそ 8 割である。専門職員の配置市町（組合）は前年と同数であるが、専門職員は 6 名増員しており、異動等による減員を、新規採用による増員が上回っている。しかし、人員増により体制が強化される組織がある一方、人員が削減される組織もある。また、担当職員未配置は 5 町（組合）に及ぶ。当該自治体での文化財保護体制は極めて脆弱であり、人員の配置を働きかけるなど、その対応が喫緊の課題となっている。

平成 30 年度に、文化庁の国庫補助を受け、京都府をはじめとして、府内の 18 市町において発掘調査等事業が実施されている。事業内容は、城内の埋蔵文化財の範囲内容を確認する詳細分布調査、開発に対応する緊急発掘調査及び国史跡等の保存・整備に伴う調査等である。また、同じく国庫補助事業である地域の特色ある埋蔵文化財活用事業は、京都府、向日市、長岡京市、木津川市において実施された。京都府では、昨年度に引き続き小学校高学年児童を対象に、丹後地域及び山城地域の国史跡等を文化財保護課職員の解説により巡る「文化財 1 day バスツアー」を実施し、参加者から好評を博した。その他に、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターへの委託事業として、普及啓発事業と出土品再整理事業を実施した。

文化財保護行政を取り巻く環境についても、大きな変化がもたらされようとしている。文化財保護

法の改正が、6月1日に国会で可決・成立し、平成31年4月1日に施行されることとなった。このたびの改正は、「過疎化・少子高齢化等の社会状況の変化を背景に各地の貴重な文化財の滅失・散逸等の防止が緊急の課題となる中、これまで価値付けが明確でなかった未指定を含めた有形・無形の文化財をまちづくりに活かしつつ、文化財継承の担い手を確保し、地域社会総がかりで取り組んでいくことのできる体制づくりを整備するため、地域における文化財の計画的な保存・活用の促進や、地方文化財保護行政の推進力の強化を図る」とされている。改正の要点として、大きく3点が挙げられている。まず、地域における文化財の総合的な保存活用のため、都道府県においては、総合的な施策の「大綱」を策定し、市町村においては、都道府県の策定した「大綱」を勘案し、「文化財保存活用地域計画」を作成し、国の認定を申請できるとされた。次に保存活用制度の見直しとして、個別の文化財の保存活用計画に対し国の認定を法定化し、認定された保存活用計画に記載された行為については、現状変更等の許可を届出にするなど手続きを弾力化するとされている。そして、地方文化財保護行政の推進力強化として、条例により文化財行政を首長部局へ移管することができるとされた。ただし、専門的・技術的判断の確保や、開発行為との均衡に対応するため、文化財保護法において任意設置となっている地方文化財保護審議会の設置が必須とされている。

今回の改正は、文化財の活用を促進することを目的としていると考えられる。ただし、文化財の活用は保存が大前提であり、その価値を損なわないよう適正な取扱いに留意することが肝要である。

また、文化庁では、文化財保護法改正に際し、埋蔵文化財、建造物等の各類型の文化財を総合的に調査・把握し、一体的な保存と活用を企画・立案できる人材の育成が急務であることから、人材育成のための新たな研修制度の設立に取りかかっている。まずは、地方公共団体の文化財専門職員のうち、大多数を占める埋蔵文化財専門職員が主な対象とされた。平成31年度から実施を予定しており、研修の修了者には、文化庁から「修了証」が付与され、彼らが「大綱」「文化財保存活用地域計画」の策定を担うことが期待される。

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56年の設立以来、1,000件以上の発掘調査を実施し、府内の埋蔵文化財の保存と活用に大きな役割を果たしている。平成30年度は、15件の発掘調査を実施した。丹後地域では府道の新設、府営は場整備、教育施設の整備等に伴う調査を、南丹地域では農林水産省近畿農政局が進める国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」に伴う発掘調査を実施し、それぞれの調査において重要な成果を得ている。また、京都市域では、教育庁の新行政棟及び文化庁移転施設の整備事業に伴い平安京跡で発掘調査が実施されている。山城地域では、国土交通省による国道24号寺田拡幅及び西日本高速道路株式会社が進める新名神高速道路建設事業等の大型公共事業に伴う発掘調査を実施している。これらの成果については、現地説明会の実施や、ホームページにおける配信、考古学講座の実施などにより広く府民へと還元している。

また、当教育委員会からの委託による「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」として、以下の事業についても実施した。平成29年度に府内で実施された発掘調査成果の速報展示「発掘された京都の歴史2018」及び、企画展示「いにしえの技とデザイン」を開催した。8月4日から26日にかけて向日市文化資料館で、9月5日から23日にふるさとミュージアム山城（京都府立山城郷土資料館）、9

月29日から10月14日にふるさとミュージアム丹後（京都府立丹後郷土資料館）にて巡回展示され、期間中に2,558名の参加者を得た。また、勾玉づくりや網代編み等の体験学習も実施しており、合わせて288名の参加が得られた。この他に、発掘調査成果を府民に広く公開し、活用することを目的に埋蔵文化財セミナーを開催しており、今年度は6月（京丹後市）、11月（京都市）、平成31年1月（木津川市）の計3回実施され、271名の参加を得た。

京都府立山城・丹後郷土資料館（ふるさとミュージアム山城・丹後）においても、府内の発掘調査の成果についての講演会や速報展などを開催している。山城郷土資料館では、10月13日から12月9日まで、特別展「文字のささやき～京都府出土の文字資料～」を開催し、京都府内の発掘調査で出土した漢字・ひらがな・ローマ字などさまざまな文字資料を通して、文字を受け入れ使いこなしてきた先人たちの足跡に触れ、昔の人々の暮らしを紹介する展示が成された。また、9月15日には、当課の国史跡恭仁宮跡保存活用調査と連携し、山城管内の小学生以上を対象に実施する恭仁宮発掘探検隊を実施した。丹後郷土資料館では、7月14日から8月26日まで、企画展「地球環境と縄文文化」を開催し、福井県若狭地方に所在する三方五湖の一つ、水月湖底の年縞堆積物から推定される環境の変化を紹介するとともに、その変化が、若狭とほぼ同様の環境変化をたどったと考えられる丹後の縄文社会やその時代に生きた人々に及ぼした影響を考古資料を通じて探る展示がなされた。

平成30年度には、国史跡乙訓古墳群を構成する古墳のうち、既に指定されている向日市寺戸大塚古墳及び五塚原古墳と、大山崎町鳥居前古墳で、国史跡の条件の整った地域が一部追加指定された。このほかの国史跡では、丹波国分寺跡附八幡神社跡、平安宮跡、恭仁宮跡（山城国分寺跡）において、その保護に万全を期するため追加指定がなされた。

（奈良康正）

［2］府内の主な発掘調査

平成30年1月から12月にかけて行われた主な発掘調査の成果について、時代ごとに概観する。

①旧石器時代・縄文時代

長岡京市**伊賀寺遺跡**では縄文土器の埋納遺構が見つかった。京丹後市**上野遺跡**では姶良丹沢火山灰が検出された。また、後期旧石器である台形石器が出土した。同市**平遺跡**では、昭和37年に同志社大学と帝塚山大学が調査したトレンチに重複して発掘が行われ、過去のトレンチの位置が判明した。出土遺物には縄文時代中期～晩期の土器や石器がある。

②弥生時代

京都市中京区**烏丸綾小路遺跡**では、弥生時代中期初頭の竪穴建物9棟や水田跡、流路が見つかり、周辺に集落が展開していることが明らかとなった。京都市内でこの時期の水田跡が確認されたのは初である。出土品には石包丁などの石器や多量の土器、管玉などがある。また、合わせて中期後半の方

形周溝墓も検出された。南区**中久世遺跡**では、弥生時代中期の方形周溝墓４基が検出された。周辺の調査でも方形周溝墓が見つかっており、周囲に墓域が展開していると考えられる。南区**大藪遺跡**では弥生時代後期の方形周溝墓と溝が検出された。溝は既往の調査で見つかっているものの延長に当たり、多数の土器が出土した。**長岡京跡左京第 600 次調査**では、弥生時代中期の方形周溝墓３基が見つかった。うち１基は一辺が約 10 mあり、周溝からは供献土器や石包丁未成品転用石器、太形蛤刃石斧が出土した。**左京第 604 次調査**においても方形周溝墓２基が見つかった。

③古墳時代

京都市左京区**岩倉忠在地遺跡**では、古墳時代初頭の竪穴建物とみられる遺構が２基検出された。これにより、集落域が従来の想定より南側に広がることが確実となった。向日市**五塚原古墳**では後円部主体部の攪乱坑の調査が行われ、墓壙及び竪穴式石郭が見つかった。墓壙は南北 12 m、東西 13 mの規模を測り、墓壙壁は途中に平坦面を持つ２段築造である。竪穴式石郭は墓壙のほぼ中央にあり、全長約６m、幅約 1.3 m、深さ 0.8 m以上で、方位は真北から西に 30 度振る。墓壙埋土から鉄刀片が、陥没坑からは古式土師器壺片が多数出土した。この調査により、歳内における最初期の大型前方後円墳の埋葬施設の構造が新たに一つ明らかとなった。長岡京市**久保古墳群**では、古墳２基が新たに見つかった。１基は一辺約７mの方墳で、周溝からは土師器壺が出土した。もう１基は埋葬施設のみが残存していた。**長法寺七ッ塚古墳群**では、７号墳の墳丘が土手状に一部残存していることが確認された。城陽市国史跡**久津川車塚古墳**では、古墳の墳丘と外提をつなぐ「渡り土手」の全容が判明した。土手は幅約９m、長さ約 165 mを測り、表面には直径５～ 10cmの礫が敷き詰められていた。土手の上面から鉄製品が、周溝の底から水鳥形埴輪が出土した。**芝山遺跡**では今年度の調査で新たに円墳２基と土壙墓３基が見つかった。いずれも古墳時代後期に属し、円墳の埋葬施設からは須恵器や鉄鏃が出土した。亀岡市**春日部遺跡**では古墳時代前期～中期の竪穴建物４棟、後期の竪穴建物２棟が検出された。京丹後市国史跡**網野銚子山古墳**では後円部において発掘調査が実施され、墳裾から墳頂部に渡って良好に葺石が残存していることを確認した。２段あるテラス面では丹後型円筒埴輪の埴輪列が見つかった。

④古代

〔飛鳥・奈良時代〕

京都市右京区**周山廃寺**では、昭和 24 年に調査された地点において再発掘調査が実施された。その結果、削平されたと考えられていた西堂の礎石が残存していることが判明した。また、近くの平坦面からは瓦溜りが見つかっており、白鳳期の瓦が大量に出土した。西堂とは別の瓦葺建物が存在したと想定される。宇治市**広野廃寺**では、東西方向に延びる溝が検出された。二本の溝が並行しており、幅はそれぞれ 0.5 m、3.5 mである。埋土からは飛鳥時代後期の瓦や須恵器が出土している。これまでの調査成果から、この溝は寺域の南限溝と考えられ、寺域は 79 m四方であると推定される。城陽市**芝山遺跡**では、飛鳥時代の竪穴建物３棟、奈良時代の掘立柱建物 10 棟が検出された。掘立柱建物は

方位の違いによって五群にわけられ、建てられた時期が異なると考えられる。別の調査地区では、飛鳥時代～奈良時代の竪穴建物7棟と奈良時代の掘立柱建物9棟が見つかった。掘立柱建物は建てられた時期によって方位が徐々に西に振れることが判明した。八幡市**美濃山遺跡**では飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物27棟が見つかった。複数の建物が重複しており、建て替えが行われたと考えられる。また、奈良時代の鍛冶炉や木炭を焼成した遺構が検出されたほか、ひさご形土製品や土馬が出土した。近接する美濃山廃寺で使用する製品を生産した遺跡と考えられる。木津川市国史跡**恭仁宮跡**では、大極殿院の南辺を区画する可能性が高い掘立柱塀が見つかった。従来想定されていた築地回廊ではなく、特異な構造である可能性が高くなった。木津川市**岡田国遺跡**では、奈良時代～平安時代前期にかけての掘立柱建物が複数棟見つかった。建物には重複関係があり、建て替えが行われたと考えられる。宮津市**安国寺遺跡**では、奈良時代末期の皇朝十二銭31枚がまとまって出土した。銭種には「和同開珎」「万年通宝」「神功開宝」があり、出土状況から銅銭にひもを通した「さし銭」であると考えられる。丹後地域で多量に皇朝十二銭が出土したのは初のことで、府内でも長岡京右京第740次に次いで二番目に多い一括出土量である。昨年度に続き柱穴も検出されており、丹後国府の所在を解明するうえで、貴重な資料が得られた。

〔平安時代〕

京都市南区**長岡京左京第603次調査**では、掘立柱建物2棟が見つかった。柱穴の底には礎板が残っており、不安定な地盤でも建物が沈み込まないようにしている。また一辺1.35mの大型木枠組みの井戸が検出された。向日市**長岡宮跡第527次調査**では、内裏「東宮」内郭南面回廊に当たる地点で調査が実施された。昨年度に続き回廊の北側雨落溝が確認されたほか、回廊北側柱の礎石根固め痕跡が検出され、回廊復元の基礎となる定点資料が得られた。長岡京市**長岡京跡右京第1168次調査**では、八条条間北小路の道路側溝が見つかった。側溝は幅約1m、深さ0.2mで、約30m分検出された。長岡京跡において確認された東西道路では最南端のもので、条坊の施行の実態を解明する上で重要な成果となる。このほかに掘立柱建物や門跡が見つかった。調査地に近接して**恵解山古墳**があり、古墳の近辺にも居住域が広がっていることも判明した。長岡京市**右京第1177次調査**では、貴族の邸宅とみられる掘立柱建物や区画溝などが見つかった。掘立柱建物は2棟確認され、1棟は南北7間、東西2間の母屋に西面庇が付属する長岡京でも最大級の建物である。また、宮域などでしか出土していない「旨」の刻印を持つ瓦が出土している。宅地は2町以上の規模であったとみられ、離宮などの重要施設があったと考えられる。長岡京市**乙訓寺**では、掘立柱建物や一辺1.6mの大型土坑3基が並んで検出された。古代の乙訓寺の伽藍配置を復元する上での成果が得られた。同じ調査において、中世の乙訓寺に関する溝、近世の乙訓寺再興に係る整地層が見つかっている。

京都市中京区**平安京左京二条二坊十町跡**では、高陽院の池跡の西岸が見つかった。汀には拳大の礫が使用されており、二時期の護岸の構築が確認された。池の西側では掘立柱建物が検出された。また、別の地点の調査においても高陽院の池底を検出している。中京区**左京三条一坊四・五町跡**では、平安時代の坊城小路の路面及び側溝が見つかった。中京区**右京四条二坊一町跡**では、平安時代前期～中期頃の西靱負小路の東側溝が見つかった。また、築地心に沿ってピット列が多数検出され、柵が存在し

たと考えられる。緑釉陶器や灰釉陶器がまとまって出土している。下京区**左京五条四坊十六町跡**では、東京極大路の東側溝及びその東側で整地層が検出された。側溝は幅約２m、整地層は幅約６mであった。平安京の周囲には羅城があったとされるが、この調査においては整地層のみが確認され、築地塀等の痕跡は見つからなかった。平安京の構造を解明する上で重要な成果である。下京区**左京六条二坊九町跡**では、平安時代前期の井戸から「政所」と墨書された緑釉陶器が出土しており、上級貴族の邸宅が存在したと想定される。下京区**左京八条三坊八町跡**では、七条大路の路面と南側溝が見つかった。これらは平安時代後期に大規模な整備されており、その後頻繁に改修が加えられていることが判明した。右京区**右京三条三坊五町跡**では、平安時代前期の大型掘立柱建物２棟が見つかった。昨年度には敷地の南側でも掘立柱建物群が見つかっており、一町規模の邸宅があったと考えられる。また、「斎」・「政所」の墨書がある土器が出土しており、斎王に関連する施設である可能性が高いことが判明した。左京区**白河街区跡**・**延勝寺跡**では、平安時代末期～鎌倉時代初頭にかけての方形土抗と瓦溜りが検出された。方形土抗は3.0 m × 3.6 mの大きさで、周囲に幅10cmほどの角材が井桁状に組まれ、内部には礫敷が施されていた。この遺構の東側では曲物を据えた円形土抗２基が検出されており、うち１基は瓦で周囲を囲っている。特殊な遺構であり具体的な機能はわからないものの、延勝寺での仏事に関連した遺構の可能性がある。左京区**如意寺跡**では、平安時代前期の瓦や土器と共に塑像仏の一部が見つかった。塑像の表面には漆に金箔を貼った跡が確認された。周辺では礎石建物跡が見つかっており、如意寺以前に存在していた「檜尾古寺」跡であると考えられている。南区国史跡**西寺跡**では講堂の階段跡や基壇跡が見つかった。階段跡付近では焼土層が検出され、永祚２（990）年の火災に伴うものとみられる。講堂跡の遺構が見つかったのは初で、東寺の講堂と一直線上に並んでいることが明らかとなった。伽藍配置を復元する上で重要な成果となった。また、寺域の西限となる西大宮大路の側溝も検出された。**長岡京跡左京第600次調査**では、平安時代の掘立柱建物２棟が見つかった。うち１棟は５間×２間の東西建物で、南北に庇が付く規模の大きなものである。一部で柱の抜き取りが行われており、その埋土からほぼ完形の須恵器瓶子が出土している。亀岡市**春日部遺跡**では平安時代後期の掘立柱建物３棟やそれらを囲む溝が見つかった。溝は直角に屈曲しており、土橋を伴っている。建物と溝の関係から、在地有力者の方形居館であると考えられる。同市**井手遺跡**では、平安時代末期の掘立柱建物３棟が見つかった。周辺には皇嘉門院の荘園「賀舎荘」があったとされ、関連性が注目される。

⑤中世

〔鎌倉時代・室町時代〕

京都市下京区**平安京左京八条二坊九町跡**では、平安時代末期～鎌倉時代の刀装具の鋳型や坩堝などがまとまって出土した。周辺に展開していた商工業者の「七条町」の一端が明らかになった。南区**左京九条三坊八町跡**では、鎌倉時代前期の総柱建物跡が見つかった。柱穴には栗石が施されており、持仏堂や蔵の可能性が考えられる。ガラス玉が出土しており、この時期のものとしては最大級の大きさである。また、針小路の路面が改修されているのも確認され、この時期の平安京南部が開発されてい

た様子がうかがえる。八町跡の別の調査でも鎌倉時代の建物跡や池跡が見つかった。南区**左京九条三坊九町跡**では鎌倉時代の宅地を区画する溝群や柵列が見つかった。四行八門制に則って敷地が区切られていたことを示しているとみられる。南区**大藪遺跡**では、鎌倉時代と室町時代の掘立柱建物、井戸、柵列などが見つかった。近隣の調査では居館跡が見つかっており、関連があるとみられる。また、平安時代とみられる掘立柱建物も検出されている。京都市北区特別国史跡・特別名勝**鹿苑寺**（**金閣寺**）**庭園**では、鏡湖池の南側にあったとされる「南池跡」で発掘調査が行われた。調査では義満期に築かれたとみられる幅2～5m、高さ0.6～1mの堤が全長170mに渡って確認されたほか、島状の高まりが3か所見つかった。ただ、防水のための粘土層や護岸石が見つからないことから、池は未完成であったと推定される。堤は15世紀後半にかさ上げされており、応仁の乱の際に防御用に作り替えられた可能性がある。また、池跡の北東部では礎石建物が検出され、北山殿所用の建物であると考えられる。京丹後市**丹波丸山古墳**では中世墓の可能性のある土坑から、和鏡が出土した。

京都市中京区**平安京左京二条二坊十町跡**では中世末～近世初頭にかけての油小路の路面を検出した。中京区**左京四条三坊十四町跡**では戦国時代の堀跡が見つかった。堀は幅約4m、深さ約1.4～1.7mの逆台形で、全長16m分検出された。堀底で礎石が2基確認され、橋を架けていた跡とみられる。堀は寺院を囲っていた可能性があり、豊臣秀吉の京都改造の際に埋められたと考えられる。上京区**寺町旧域**の調査でも戦国期の堀跡が見つかった。堀は幅約6m、深さ約1.5mの逆台形であり、底面から土器や瓦が出土した。村井貞勝の菩提寺である春長寺を囲っていた堀であるとみられ、秀吉の京都改造により移転した際に埋められたと考えられる。右京区**周山城跡**では航空レーダーによる測量調査が行われ、従来の縄張図より精度の高い測量図が得られた。また、城は「東城」「西城」からなり、「東城」の中心部から放射状に約50の郭が展開することが確認された。石垣や天守台も良好に残存しており、織豊期の城館跡として貴重な遺跡である。宇治市国史跡**宇治川太閤堤跡**では、護岸用の石列や川岸から垂直に突き出た「石出し」が新たに見つかった。「石出し」は今まで3基見つかっているが、今回は最も上流で検出され、計4基となった。全長は約13mあると推定され、見つかっているものの中では最長である。また、護岸は江戸時代前半に改修されていることも確認された。舞鶴市**田辺城跡**では、本丸南側の石垣が見つかった。石垣は高さが最大で1.5m残存しており、14m分を検出した。石積みは5段分が確認された。石垣の積み方から細川幽斎時代の可能性が考えられる。また、石垣上段面に整地層が確認され、隅櫓の土台の可能性がある。

⑥近世・近代

伏見区**淀城跡**では、二の丸の東側の石垣と内堀が見つかった。石垣は高さ1.2～1.4m残存しており、全長17mに渡って最大3段分が検出された。基底石は確認されておらず、石垣はさらに2段以上続く。矢穴の特徴から慶長前半期の構築であるとみられる。また、二の丸では、1段積みの石列による堤状の高まりが見つかった。京都市中京区**平安京左京三条三坊五町跡**では、江戸時代後半の石室が見つかった。側壁には巨大な花崗岩が用いられており、内法で東西12m、南北4mの規模がある。埋土からは加賀藩伝来の容器が出土しており、所有者は加賀藩に縁のある町衆であると推定される。

下京区**左京八条三坊八町跡**では、江戸時代後期の土坑から銅製品の鋳型や坩堝、鞴羽口が多量に出土した。仏具関係の製品を生産していた工房があったと考えられる。東山区**音羽**（おとわ）**・五条坂窯跡**（ごじょうざか）では、近年まで現存していた**浅見五郎助窯**（あさみごろすけよう）が発掘調査され、明治から昭和にかけての窯道具や窯壁材などが出土した。

（岡田健吾）

付表10　平成29年度埋蔵文化財担当者及び埋蔵文化財包蔵地数市町村別一覧

（平成30年4月1日現在）

年度等 / 市町村		27				28				29				周知の埋蔵文化財包蔵地
		職員	嘱託	財団職員	小計	職員	嘱託	財団職員	小計	職員	嘱託	財団職員	小計	
京都府		9		32	41	9		32	41	10		28	38	
京都市		12		37	49	12		37	49	12		45	57	1,381
丹後	京丹後市	3			3	3			3	4			4	6,236
	伊根町				0				0				0	19
	与謝野町	1	1		2	1	1		2	1	1		2	1,716
	宮津市	2			2	2			2	3			3	334
中丹	舞鶴市	2			2	2			2	2	1		3	873
	福知山市	3			3	3			3	3			3	1,721
	綾部市	1			1	1			1	1			1	1,378
南丹	亀岡市	2	1		3	2	1		3	2	1		3	1,249
	南丹市	1			1	1			1	1			1	882
	京丹波町				0				0				0	130
乙訓	向日市	3	1	5	9	3	1	5	9	3		5	8	95
	長岡京市	3	1	5	9	3	1	5	9	2	1	7	10	170
	大山崎町	2			2	2			2	2			2	33
山城	宇治市	4	3		7	4	3		7	4	3		7	305
	久御山町				0				0				0	9
	城陽市	2			2	2			2	1			1	231
	八幡市	1	2		3	1	2		3	1	1		2	169
	京田辺市	1			1	1			1	1			1	263
	宇治田原町				0				0				0	87
	井手町		1		1		1		1		1		1	103
	木津川市	3	1		4	3	1		4	3	2		5	453
	精華町	1	1		2	1	1		2		1		1	105
	和束町				0				0				0	23
	笠置町				0				0				0	7
	南山城村				0				0				0	10
合計		56	12	79	147	56	12	79	147	56	12	85	153	17,982

※周知の埋蔵文化財包蔵地の件数については、公開された遺跡地図により把握したものである。
※各市町村欄には、市町村単位での周知の埋蔵文化財包蔵地数を示し、合計欄にその総計を示している。

付表 11　平成 29 年度埋蔵文化財関係届出・通知件数市町村別一覧

市町村		土木工事による発掘			埋蔵文化財発掘調査			文化財認定
		届出	通知	計	届出	報告	計	
丹後	京丹後市	11	2 (1)	13 (1)	4	5		6
	宮津市	4 (1)	1	5 (1)	0	2		2
	与謝野町	6 (1)	2	8 (1)	0	0		0
	伊根町	0	0	0	0	0		0
	小計	21 (2)	5 (1)	26 (3)	4	7		8
中丹	舞鶴市	15 (3)	5 (2)	20 (5)	0	3		3
	福知山市	47 (8)	20 (5)	67 (13)	1	10		10
	綾部市	16 (2)	3	19 (2)	0	1		0
	小計	78 (13)	28 (7)	106 (20)	1	14	15	13
南丹	亀岡市	201 (28)	3 (1)	204 (29)	2	14		4
	南丹市	32 (1)	2	34 (1)	0	3	0	0
	京丹波町	1	0	1	0	0	0	0
	小計	234 (29)	5 (1)	239 (30)	2	17	19	4
乙訓	向日市	240 (14)	36 (3)	276 (17)	15	0		16
	長岡京市	378 (15)	33 (4)	411 (19)	17	0		17
	大山崎町	123 (4)	4	127 (4)	0	0		3
	小計	741 (33)	73 (7)	814 (40)	32	0	32	36
山城	宇治市	90 (11)	15	105 (11)	0	3	3	5
	久御山町	13 (1)	0	13 (1)	0	1	0	0
	城陽市	38 (1)	3	41 (1)	7	4	7	9
	八幡市	56 (3)	5	61 (3)	0	5	8	4
	京田辺市	58 (4)	1	59 (4)	0	1	2	0
	宇治田原町	14	1	15	1	0	2	0
	井手町	8	0	8	0	0	2	2
	木津川市	40 (3)	4	44 (3)	1	3	3	6
	精華町	0	0	0	0	0	1	0
	和束町	0	0	0	0	0	0	0
	笠置町	0	0	0	0	0	0	0
	南山城村	0	0	0	0	0	0	0
	小計	317 (23)	29 (0)	346 (23)	9	17	26	26
京都市		1,501 (170)	107 (23)	1,608 (193)	36	128	164	31
合計		2,892 (270)	247 (36)	3,139 (360)	84	183	267	118

※（ ）内は発掘調査を指示した件数である。

付表 12　土木工事等による発掘届出・通知件数一覧

年度 / 地域	26			27			28			29		
	届出	通知	小計	届出	通知	小計	届出	通知	小計	届出	通知	小計
丹　後	7	9	16	18	7	25	20	9	29	21	5	26
中　丹	42	14	56	58	12	70	69	15	84	78	28	106
南　丹	129	4	133	161	2	163	138	6	144	234	5	239
乙　訓	518	47	565	612	55	667	681	52	733	741	73	814
山　城	266	33	299	244	43	287	259	48	307	317	29	346
京都市	1,038	130	1,168	1,233	138	1,371	1,429	106	1,535	1,501	107	1,608
合　計	2,000	237	2,237	2,326	257	2,583	2,598	236	2,834	2,892	247	3,139

付表 13　埋蔵文化財発掘調査届出・報告件数一覧

年度 / 地域	26			27			28			29		
	届出	報告	小計	届出	報告	小計	届出	報告	小計	届出	報告	小計
丹後	0	4	4	2	3	5	2	11	13	4	7	11
中丹	1	8	9	1	7	8	2	7	9	1	14	15
南丹	3	9	12	2	0	2	1	4	5	2	17	19
乙訓	37	7	44	32	7	39	31	5	36	32	0	32
山城	5	12	17	7	17	24	9	19	28	9	17	26
京都市	29	110	139	41	128	169	39	137	176	36	128	164
合計	75	150	225	85	162	247	84	183	267	84	183	267

付表 14　埋蔵文化財認定件数一覧

年度 / 地域	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
丹　後	11	14	5	12	3	3	2	3	2	6	8
中　丹	9	7	11	4	2	5	2	7	5	2	13
南　丹	32	24	8	7	8	5	6	11	4	4	4
乙　訓	38	56	42	43	42	38	46	32	46	35	36
山　城	39	30	27	25	25	23	25	21	13	18	26
京都市	43	32	98	101	53	61	63	41	39	37	31
合計	172	163	191	192	133	135	144	115	109	102	118

付表 15　平成 30 年度埋蔵文化財国庫補助事業一覧

事業主体	発掘調査等		地域の特色ある埋蔵文化財活用事業
	事業名	内容等	事業内容等
京都府	恭仁宮跡ほか	各種開発確認、農業基盤整備本調査、保存目的、詳細分布調査等	バスツアー、普及啓発冊子作成
京都市	平安京跡ほか	各種開発確認、個人住宅、零細企業、保存目的、詳細分布調査等	
向日市	長岡京跡ほか	個人住宅、各種開発確認、零細企業発掘調査、保存目的、出土遺物保存処理	体験学習、市民考古学講座、史跡案内人配置、講演会、石室公開
長岡京市	長岡京跡ほか	各種開発確認、保存目的、出土遺物保存処理	シンポジウム、スタンプラリー、講演会、体験学習
大山崎町	町内遺跡	各種開発確認、保存目的	
宇治市	市内遺跡	各種開発確認、保存目的	
城陽市	市内遺跡	各種開発確認、保存目的、詳細分布調査等	
八幡市	市内遺跡	各種開発確認、保存目的	
京田辺市	市内遺跡	各種開発確認、保存目的	
木津川市	市内遺跡	各種開発確認、保存目的	鏡複製品作成、普及啓発冊子作成
井手町	町内遺跡	個人住宅、各種開発確認、保存目的、詳細分布調査等	
亀岡市	市内遺跡	各種開発確認、農業基盤整備本調査、詳細分布調査等	
南丹市	市内遺跡	各種開発確認、保存目的、出土遺物保存処理	
京丹波町	町内遺跡	各種開発確認、詳細分布調査等	
綾部市	市内遺跡	各種開発確認、出土遺物保存処理	
福知山市	市内遺跡	各種開発確認、詳細分布調査等、出土遺物保存処理	
宮津市	市内遺跡	各種開発確認、保存目的	
京丹後市	市内遺跡	各種開発確認、農業基盤整備本調査、保存目的、詳細分布調査等	
与謝野町	町内遺跡	農業基盤整備本調査、保存目的	

付表 16　平成 30 年度（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター委託事業一覧

【発掘調査・委託事業】

番号	遺跡名	所在地	委託者	関連工事名
1	水主神社東遺跡ほか	城陽市	西日本高速道路株式会社	道路建設事業
2	芝山遺跡	城陽市	西日本高速道路株式会社	道路建設事業
3	小樋尻遺跡ほか	城陽市	西日本高速道路株式会社	道路建設事業
4	美濃山遺跡	八幡市	西日本高速道路株式会社	道路建設事業
5	阿良須遺跡	福知山市	国土交通省福知山河川国道事務所	河川築堤事業
6	犬飼遺跡ほか	亀岡市	農林水産省近畿農政局	ほ場整備事業
7	岡田国遺跡	木津川市	国土交通省京都国道事務所	道路建設事業
8	三日市遺跡	亀岡市	府南丹土木事務所	道路建設事業
9	女布遺跡	京丹後市	府農林水産部	ほ場整備事業
10	上野遺跡ほか	京丹後市	府丹後土木事務所	道路建設事業
11	木津川河床遺跡	八幡市	府流域下水道事務所	水道施設事業
12	丹波丸山古墳群	京丹後市	府丹後土木事務所	道路建設事業
13	奈具遺跡	京丹後市	府教育委員会	施設建設事業
14	平安京跡	京都市	府文化庁移転準備室	施設建設事業
15	満願寺跡	舞鶴市	府中丹東土木事務所	砂防築堤事業
16	出土文化財再整理事業	－	府教育委員会	出土品再整理
17	普及啓発事業	－	府教育委員会	普及啓発事業

【普及啓発】

1　刊行図書
『京都府遺跡調査報告集』第 171 冊～第 176 冊
『京都府埋蔵文化財情報』第 134・135 号
『もっと知りたい　京都の遺跡』第３号・第４号

2　埋蔵文化財セミナー・シンポジウム
第 138 回「京都府の横穴墓－横穴墓に葬られた人々－」
平成 30 年６月 16 日（土）　於：アグリセンター大宮
一瀬和夫「群集墳としての横穴墓群」（京都橘大学）
岡林峰夫「丹後地域における横穴墓群の様相」（京丹後市教育委員会）
加藤雅士「南山城地域の横穴墓群」

第 139 回「京都・縄文最前線－つたわる、ひろがる縄文文化－」
平成 30 年 11 月 10 日（土）　於：京都テルサ（京都府民総合交流プラザ）
矢野健一「縄文時代の交流」
高橋　潔「京都盆地の縄文遺跡とその交流－京都市上里遺跡の調査成果を中心に－」
桐井理揮「下水主遺跡をめぐる縄文時代の交流－土偶の左腕はどこから？－」

第 140 回「天平の都を掘る！－恭仁宮とその周辺－」
平成 31 年２月 16 日（土）　於：相楽会館
古川　匠「恭仁宮跡大極殿院の探求－ 40 年以上にわたる試行錯誤－」
福山博章「恭仁宮時代の木津川流域を探る－岡田国遺跡の発掘調査成果を中心に－」
中尾芳治「恭仁宮の造営過程とその背景」

3　展覧会・体験講座
発掘された京都の歴史 2018「いにしえの技とデザイン」
平成 30 年８月４日～ 26 日　於：向日市文化資料館
平成 30 年９月５日～ 23 日　於：府立山城郷土資料館
平成 30 年９月 29 日～ 10 月 14 日　於：府立丹後郷土資料館
夏休み考古学体験教室「勾玉を作ろう！」
平成 30 年８月 15 日～ 17 日　於：公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター研修室
向日市まつり「伝統の網代編みに挑戦しよう！」
平成 30 年 11 月 17・18 日　於：向日町競輪場

4　共同研究
筒井崇史・福山博章「出土土器からみた官衙と集落の比較検討」
竹村亮仁・荒木瀬奈「京都府内における横穴式石室導入期の古墳の検討」
浅田洋輔・村田和弘「丹波の古代寺院と瓦」
面　将道・中川和哉「北部九州における瀬戸内技法の流入時期について」
引原茂治・小池　寛「日本海域における軽石の流通

付表 17　平成 29 年度発掘調査報告書等刊行状況

【報告書等】

・『京都府遺跡調査報告集』第 171 冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財センター　平成 30 年 3 月（「新名神高速道路整備事業関係遺跡平成 23 ～ 26 年度発掘調査報告」松井横穴群第 1 ～ 4 次、向山遺跡第 2 次）
・『京都府遺跡調査報告集』第 172 冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財センター　平成 30 年 3 月（寺町旧域・法成寺跡）
・『京都府遺跡調査報告集』第 173 冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財センター　平成 30 年 3 月（新名神高速道路整備事業関係遺跡　下水主遺跡第 1・4・6 次）
・『京都府遺跡調査報告集』第 174 冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財センター　平成 30 年 3 月（新名神高速道路整備事業関係遺跡　下水主遺跡第 6・9 次、水主神社東遺跡第 6・7 次）
・『京都府遺跡調査報告集』第 175 冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財センター　平成 30 年 3 月（月出遺跡、東光寺跡、伏見城跡、北大塚古墳・大塚遺跡、金堀遺跡、天神山古墳群第 2 次）
・『京都府遺跡調査報告集』第 176 冊　公益財団法人京都府埋蔵文化財センター　平成 30 年 3 月（平安京跡左京一条三坊二町）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-14』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 29 年 5 月（史跡妙心寺境内・平安京跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-15』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 29 年 6 月（上久世遺跡・上久世城跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2016-16』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 29 年 8 月（北野廻寺・北野遺跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-1』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 29 年 8 月（平安宮大炊寮跡・二条城北遺跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-2』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 29 年 9 月（平安宮豊楽院跡・鳳凰遺跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-3』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 29 年 9 月（伏見城跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-4』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 29 年 10 月（長岡京跡・淀城跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-5』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 29 年 11 月（平安京左京六条一坊七町跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-6』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 29 年 11 月（平安京右京九条一坊九町跡（西寺跡）、唐橋遺跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-7』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 30 年 3 月（平安京左京八条四坊八町跡・御土居跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-8』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 30 年 3 月（平安京左京区域三坊八町跡・烏丸町遺跡）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-9』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 30 年 3 月（長岡京左京九条三坊四町跡・淀水垂大下津町遺跡・與杼神社旧境内）
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-10』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 30 年 3 月（寺町旧域（本能寺跡））
・『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-11』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　平成 30 年 3 月（特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園）
・『京都市内遺跡試掘調査報告（平成 29 年度）』京都市文化市民局　平成 30 年 3 月（平安京左京五条四坊十一町跡、平安京右京九条一坊九町跡・西寺跡・唐橋遺跡、仁和寺院家跡、寺町旧域、吉田泉殿町遺跡、高台寺境内（雲居寺跡）、長岡京左京三条三坊十六町跡）
・『京都市内遺跡試掘調査報告（平成 29 年度）』京都市文化市民局　平成 30 年 3 月（平安京右京九条一坊九町跡・西寺跡・唐橋遺跡、方広寺跡・六波羅政庁跡・法住寺殿跡、安楽行院跡、伏見城・桃山古墳群（永井久太郎古墳）、伏見城跡・指月城跡、下三栖城跡）
・『芝古墳（芝 1 号墳）調査総括報告書～乙訓における後期首長墓の調査～』京都市文化市民局　平成 30 年 3 月・
・『京都市内遺跡詳細分布調査報告（平成 29 年度）』京都市文化市民局　平成 30 年 3 月（平安京左京（三条三坊十三町跡・烏丸御池遺跡、五条四坊一町跡・烏丸綾小路遺跡、七条一坊一町跡、七条二坊六町跡・東市跡・名勝滴翠園・史跡本願寺境内、八条四坊三町跡・御土居跡）、平安京右京（三条一坊十五町跡、三条二坊十町跡・西ノ京遺跡、七条一坊七町跡）、八幡古墳群、史跡岩倉具視幽棲旧宅・大雲寺跡、浄土寺七廻り町遺跡、法観寺旧境内、旧琵琶湖疎水、伏見城跡、伏見城跡・指月城跡、周山城跡、八瀬近衛町出土銭）

・『平成 29 年度　京都市埋蔵文化財出土遺物文化財指定準備業務報告書―公家町遺跡（安楽寺杉之坊）出土品・公家町遺跡（櫛笥家）出土品―』京都市文化市民局　平成 30 年 3 月
・『平成 29 年度　重要遺跡出土文化財整理報告』京都市文化市民局　平成 30 年 3 月
・『平安京左京三条三坊四町・烏丸御池遺跡―町頭町の調査―』古代文化調査会　平成 30 年 3 月
・『平安京左京七条二坊五町（東市跡）発掘調査報告書』龍谷大学（大宮学舎建替えに伴う埋蔵文化財調査委員会・株式会社文化財サービス）平成 30 年 3 月
・『考古学実習・文化財実習報告書』第 1 集　龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻　平成 30 年 3 月（大覚寺 4 号墳（狐塚古墳）第四次発掘調査報告、上中城跡第 6 次発掘調査報告）
・『イビソク京都市内遺跡調査報告』第 14 輯「山科本願寺跡・左義長町遺跡・建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」株式会社イビソク　平成 29 年 6 月
・『伏見城跡　京都市伏見区桃山町下野 27 － 1 の発掘調査』株式会社四門　平成 30 年 3 月
・『京都平安文化財発掘調査報告』第 3 集『伏見城跡・桃陵遺跡―京町 1 丁目―』有限会社京都平安文化財　平成 28 年 12 月
・『平安京右京一条二坊四町跡』国際文化財株式会社　平成 28 年 12 月
・『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 108 集　向日市教育委員会　平成 30 年 3 月（長岡宮跡第 521 次調査、五塚原古墳第 9 次調査、物集女城跡第 10 次調査ほか）
・『長岡京市文化財調査報告書』第 71 冊　長岡京市教育委員会・公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター　平成 30 年 3 月（乙訓寺第 24 次調査概要（長岡京跡右京第 1165 次）、長岡京市内遺跡詳細分布調査概要）
・『大山崎町埋蔵文化財調査報告書―長岡京跡右京第 1151 次調査・長岡京跡右京第 1153 次調査―』第 52 集　大山崎町教育委員会　平成 30 年 3 月（長岡京跡右京 1151 次調査（7ANSCE-5 地区）報告、長岡京跡右京 1153 次調査（7ANMSC-2 地区）報告）
・『大山崎町埋蔵文化財調査報告書―平成 29 年度国庫補助事業調査報告―』第 53 集　大山崎町教育委員会　平成 30 年 3 月（第 77 次遺跡確認調査（7YYMS・SS-15 地区）報告～大山崎瓦窯の調査～）
・『木津川市埋蔵文化財調査報告書』第 19 集　木津川市教育委員会　平成 30 年 3 月（鹿背山城跡総合調査報告書（発掘調査編））
・『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第 75 集　城陽市教育委員会　平成 30 年 3 月（久津川車塚古墳の調査、青塚古墳の調査）
・『八幡市埋蔵文化財発掘調査報告』第 65 集『平成 29 年度国庫補助事業発掘調査報告書―馬場遺跡［善法寺家邸宅跡推定地］範囲確認調査報告書―』八幡市教育委員会　平成 30 年 3 月（馬場遺跡）
・『宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 90 集　宇治市教育委員会　平成 30 年 3 月（二子山古墳平成 28･29 年度発掘調査報告書）
・『亀岡市文化財調査報告書』第 95 集『市内遺跡発掘調査報告書』亀岡市教育委員会　平成 30 年 3 月（国営緊急農地再編整備事業『亀岡中部地区』関係遺跡発掘調査報告書（千代川遺跡第 30 次発掘調査（平成 28 年度）・東加舎遺跡第 3 次発掘調査（平成 28 年度）・西加舎遺跡第 4 次発掘調査（平成 28 年度）・井出遺跡第 4 次発掘調査（平成 29 年度））、亀山城跡第 7 次発掘調査報告書、千代川遺跡第 32 次発掘調査報告書、平成 28 年度亀岡市内詳細分布調査　試掘・確認調査等報告）
・『福知山市文化財調査報告書』第 67 集　福知山市教育委員会　平成 30 年 3 月（川北遺跡第 2 次調査）
・『福知山市文化財調査報告書』第 68 集　福知山市教育委員会　平成 30 年 3 月（松ケ端遺跡第 3・4 次調査）
・『綾部市遺跡地図（改訂版）』綾部市教育委員会　平成 30 年 3 月
・『京丹後市文化財調査報告書』第 17 集　京丹後市教育委員会（女布遺跡発掘調査報告書Ⅳ）
・『与謝野町文化財調査報告書』与謝野町教育委員会　平成 30 年 3 月（梅谷遺跡第 2 次発掘調査、地蔵山遺跡第 8 次発掘調査）

【雑誌等】

・『京都府埋蔵文化財情報』第 132 号　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　平成 29 年 10 月（平成 28 年度における京都府内の発掘調査とその周辺（小池寛）／有畦式平窯の成立について（石井清司）／平成 28 年度発掘調査略報（佐伯遺跡、芝山遺跡第 16 次（B 地区）／平成 28・29 年度発掘調査略報（北大塚古墳、岡田国遺跡第 4・5 次））
・『京都府埋蔵文化財情報』第 133 号　公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　平成 30 年 3 月（共同研究　弥生時代後期における有孔鉢の検討－京都府出土資料を中心として－（桐井理揮・音博絵・岡村美知子）／共同研究　帯金式甲冑成立段階における短甲の基礎的研究－方形板革綴短甲と長方板革綴短甲－（藤井陽輔・伊賀高弘）／平成 29 年度発掘調査略報（月出遺跡、女布遺跡、芝山遺跡第 17 次（G・H 地区）、小橋尻遺跡第 3 次）／関西考古学の日関連事業『秋の考古学講座』　軽石の考古学（小池　寛）、縄文土器の文様を復元する（復元体験）（音　博絵）、軒瓦の文様を読み解く（筒井崇史））
・『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』九　公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター　平成 30 年 1 月（長岡京跡右京第 609 次調査～古墳時代 神足遺跡 竪穴建物、長岡京期 条坊側溝等出土資料～／長岡京跡左京第 204 次調査～長岡京期 条坊

鯛溝・宅地内遺構等出土資料～／長岡京跡右京第 356 次調査～戦国期 今里城跡 堀等出土資料～／西岡における平地城館跡）
・『長岡京市埋蔵文化財センター年報（平成 28 年度）』公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター　平成 30 年３月（長岡京跡右京域の調査（右京第 1133 次・1134 次・1136 次・1137 次・1139 次・1141 次・1142 次・1146 次・1147 次・1149 次・1150 次・1152 次・1154 次調査概報）／長岡京跡左京域の調査（左京第 587 次調査概報）／長岡京域外の調査（奥海印寺遺跡等 17 次・18 次調査概報））
・『京都大学総合博物館平成 30 年度企画展図録』「京都大学文化財総合研究センター設立 40 周年記念展示・文化財発掘Ⅳ　足もとに眠る京都―考古学から見た鴨東の歴史―飛鳥～室町時代編」京都大学文化財総合研究センター　平成 30 年２月

付表 18　平成 29 年度埋蔵文化財発掘調査届出・報告一覧

（92 条に基づく報告）

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
1	長岡京跡	向日市寺戸町西野辺 13 番 1、13 番 9 の一部	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	松崎俊郎	平成 29 年 3 月 23 日～平成 29 年 4 月 14 日
2	長岡京跡・内裏下層遺跡	向日市鶏冠井町東井戸 51 番、51 番 4 の各一部	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長		平成 29 年 3 月 27 日～平成 29 年 4 月 7 日
3	岡田国遺跡	木津川市木津馬場南	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	中川和哉・福山博章・田原葉月	平成 29 年 4 月 10 日～平成 29 年 9 月 28 日
4	平安京跡・塩小路若山城跡	京都市下京区東洞院七条下る東塩小路町 848 番	関西文化財調査会代表	吉川義彦	平成 29 年 4 月 17 日～平成 29 年 7 月 27 日
5	長岡京跡・淀城跡	京都市伏見区淀池上町 128 ほか	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	松吉祐希	平成 29 年 3 月 21 日～平成 29 年 5 月 19 日
6	寺町旧城	京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町 488 番地	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	モンペティ恭代・伊藤　潔	平成 29 年 4 月 20 日～平成 30 年 3 月 31 日
7	平安京跡	京都市下京区南門前町 467 ほか	古代文化調査会代表	上村憲章	平成 29 年 4 月 6 日～平成 29 年 5 月 31 日
8	長岡京跡・上里遺跡	長岡京市井ノ内玉ノ上地内	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	大高義寛	平成 29 年 4 月 3 日～平成 29 年 7 月 5 日
9	長岡京跡	長岡京市長岡二丁目 13 番	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	岩崎　誠	平成 29 年 4 月 6 日～平成 29 年 5 月 25 日
10	女布遺跡	京丹後市久美浜町女布黒田	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	細川康晴・竹原一彦・荒木瀬奈	平成 29 年 5 月 16 日～平成 29 年 7 月 28 日
11	長岡京跡・馬場遺跡	長岡京市馬場図所 18－1 の一部ほか	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	福家　恭	平成 29 年 4 月 24 日～平成 29 年 5 月 19 日
12	佐伯遺跡	亀岡市稗田野町佐伯	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	細川康晴・村田和弘・黒坪一樹・浅田洋輔	平成 29 年 5 月 1 日～平成 29 年 12 月 22 日
13	円勝寺跡・成勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡	京都市左京区岡崎円勝寺町（京都市美術館）	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	柏田有香・辻　祐司・鈴木康隆・松永修平・末次由紀恵	平成 29 年 4 月 24 日～平成 30 年 3 月 31 日
14	平安京跡・烏丸町遺跡	京都市南区東九条上殿田町 42 番地ほか	公益財団法人元興寺文化財研究所理事長	佐藤亜聖・村田裕介・坂本　俊	平成 29 年 4 月 25 日～平成 29 年 12 月 29 日
15	平安京跡	京都市下京区中堂寺壬生川町 22 番、22 番 1、23 番、38 番、42 番	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	李　銀眞・木下保明	平成 29 年 5 月 8 日～平成 29 年 6 月 19 日
16	長岡京跡・裕道跡	長岡京市調子二丁目 88 番 1	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	福家　恭	平成 29 年 5 月 8 日～平成 29 年 6 月 12 日
17	平安宮跡・鳳瑞遺跡	京都市中京区聚楽廻西町 74- 2	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	近藤章子	平成 29 年 5 月 22 日～平成 29 年 6 月 9 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
18	平安京跡・西ノ京遺跡	京都市中京区西ノ京桑原町 1	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	山本雅和・合田幸美・三宮昌弘・末次由紀恵	平成 29 年 5 月 1 日～平成 29 年 12 月 28 日
19	平安京跡・西寺跡・唐橋遺跡	京都市南区唐橋門脇町 21、22 － 1	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	鈴木康高・津々池憲一	平成 29 年 5 月 22 日～平成 29 年 6 月 30 日
20	長岡京跡・上里遺跡	長岡京市井ノ内玉ノ上地内	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	大高義寛	平成 29 年 6 月 12 日～平成 29 年 9 月 4 日
21	伏見城跡	京都市伏見区桃山町正宗 15 の 3	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	中谷正和	平成 29 年 6 月 1 日～平成 29 年 6 月 30 日
22	平安京跡・烏丸丸太町遺跡	京都市中京区間之町通竹屋町上る大津町 663 番ほか	合同会社アルケス代表社員	持田　透	平成 29 年 6 月 15 日～平成 29 年 9 月 15 日
23	吉田泉殿町遺跡	京都市左京区吉田泉殿町 1 ほか	京都大学文化財総合研究センター長	千葉　豊	平成 29 年 7 月 18 日～平成 29 年 7 月 18 日
24	延勝寺跡・白河街区跡・岡崎遺跡	京都市左京区岡崎成勝寺町 2 － 1	京都大学文化財総合研究センター長	伊藤淳史	平成 29 年 7 月 19 日～平成 29 年 7 月 19 日
25	法性寺跡	京都市東山区本町 20 丁目 441 － 1 ほか	国際文化財株式会社西日本支店長	河野凡洋	平成 29 年 6 月 14 日～平成 29 年 7 月 31 日
26	長岡京跡	向日市鶏冠井町門戸 4 番、5 番の各一部	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	中島信親	平成 29 年 6 月 26 日～平成 29 年 7 月 31 日
27	笹屋遺跡	向日市寺戸町向畑 28、29、30 の一部、31 の一部、笹屋 41、42 － 1	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	松崎俊郎	平成 29 年 6 月 22 日～平成 29 年 6 月 28 日
28	長岡京跡・開田遺跡	長岡京市開田三丁目地内	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	岩崎　誠	平成 29 年 7 月 3 日～平成 29 年 9 月 20 日
29	水主神社東遺跡	城陽市寺田大畔ほか	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	岩松　保・加藤雅士・岡村美知子・竹村亮仁・安達香織	平成 29 年 8 月上旬～平成 29 年 2 月下旬
30	丹波丸山古墳群	京丹後市峰山町丹波大糸	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	細川康晴、高野陽子	平成 29 年 8 月 1 日～平成 29 年 9 月 30 日
31	奥海印寺遺跡・海印寺跡	長岡京市奥海印寺大見坊 2 － 1、10 － 1・2・3、15、16 － 1・2・3	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	中島皆夫	平成 29 年 7 月 11 日～平成 29 年 7 月 31 日
32	白河街区跡	京都市左京区聖護院山王町 5 ほか	株式会社イビソク関西支店長	石井明日香	平成 29 年 7 月 3 日～平成 29 年 8 月 31 日
33	長岡京跡	長岡京市下海印寺西明寺 10 － 3 ほか、西山田 41 ほか	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	原　秀樹	平成 29 年 7 月 24 日～平成 29 年 9 月 11 日
34	上野遺跡	京丹後市丹後町上野地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	中川和哉・竹原一彦・面　将道	平成 29 年 8 月 7 日～平成 29 年 11 月 16 日
35	長岡京跡	向日市寺戸町西野 6 － 11・13	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	梅本康広	平成 29 年 7 月 18 日～平成 29 年 7 月 21 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
36	阿良須遺跡	福知山市大江町北有路大坪ほか	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	中井和哉・石井清司・藤田智子	平成29年8月21日～平成29年12月14日
37	岩倉忠在地遺跡	京都市左京区岩倉大鷺町89	学校法人同志社理事長	若林邦彦・浜中邦弘	平成29年8月14日～平成29年8月23日
38	平安京跡・烏丸町遺跡	京都市南区東九条室町46番地の2、56番地	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	松吉祐希・鈴木康高	平成29年8月1日～平成29年11月10日
39	平安京跡・堂ノ口町遺跡	京都市下京区朱雀分木町20－3番地	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	金島恵一・津々池憧一	平成29年7月3日～平成29年8月10日
40	平安京跡・烏丸御池遺跡	京都市中京区町頭町101－1・2、105	古代文化調査会代表	小松武彦	平成29年8月2日～平成29年10月24日
41	北ノ口遺跡	向日市物集女町坂本2－1ほか	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	中島信親	平成29年8月1日～平成29年8月10日
42	長岡京跡・今里遺跡	長岡京市今里五丁目118－1ほか	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	原　秀樹	平成29年8月21日～平成29年10月4日
43	吉田泉殿町遺跡	京都市左京区吉田泉殿町1ほか	京都大学文化財総合研究センター長	千葉　豊	平成29年9月29日～平成29年9月29日
44	田中関田町遺跡	京都市左京区田中関田町2－1	京都大学文化財総合研究センター長	笹川尚紀	平成29年10月1日～平成29年12月22日
45	長岡京跡・開田遺跡	長岡京市開田三丁目101番	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	中島皆夫	平成29年9月11日～平成29年10月31日
46	長岡京跡・今里遺跡・乙訓寺	長岡京市今里三丁目地内	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	大髙義寛	平成29年9月25日～平成29年11月17日
47	長岡京跡・神足遺跡・開田古墳群・近世勝龍寺城跡	長岡京市神足一丁目110－1ほか	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	岩崎　誠	平成29年10月3日～平成29年11月16日
48	西ノ岡遺跡	向日市物集女町吉田1	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	中島信親	平成29年9月25日～平成29年11月30日
49	月出遺跡	京丹後市網野町浜詰月出	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	中川和哉・福山博章	平成29年10月17日～平成29年12月25日
50	水主神社東遺跡	城陽市寺田大畔	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	中川和哉・引原茂治・田原業月・面　将道・岡崎研一・福山博章・高野陽子	平成29年10月30日～平成30年3月31日
51	長岡京跡・南栗ヶ塚遺跡	長岡京市勝竜寺29番1号	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	福家　恭	平成29年10月10日～平成30年1月19日
52	平安京跡・烏丸御池遺跡	京都市中京区両替町通姉小路下る柿本町406番、408番	株式会社イビソク関西支店長	田邉一元・近藤真人	平成29年9月4日～平成29年10月13日
53	平安京跡・烏丸綾小路遺跡	京都市下京区醒ヶ井通松原下る篠屋町59番地（元醒泉小学校）	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	近藤章子・中谷正和・伊藤　潔	平成29年10月10日～平成30年8月3日
54	平安京跡	京都市下京区郷之町ほか地内	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	李　銀眞	平成29年10月16日～平成29年12月28日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
55	伏見城跡	京都市伏見区桃山町下野 27 －１	株式会社四門京都支店長	千喜良淳	平成 29 年 10 月 16 日～平成 29 年 11 月 27 日
56	禅定寺城跡	綴喜郡宇治田原町禅定寺小坂本	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	岩松　保・橋本稔・竹原一彦	平成 29 年 11 月 8 日～平成 30 年 2 月 27 日
57	雲林院跡	京都市北区紫野雲林院町 38 番	古代文化調査会代表	板谷純代	平成 29 年 10 月 14 日～平成 29 年 11 月 11 日
58	長岡京跡	向日市鶏冠井町荒内 89 －７の一部、91 －２	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	中塚　良	平成 29 年 10 月 30 日～平成 29 年 11 月 10 日
59	平安京跡・塩小路若山城跡	京都市下京区東洞院通七条下る東塩小路町 554	古代文化調査会代表	上村憲章	平成 29 年 11 月 14 日～平成 30 年 3 月 31 日
60	三日市遺跡・車塚遺跡	亀岡市馬路町上三日市	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	高野陽子	平成 29 年 12 月 1 日～平成 30 年 1 月 30 日
61	長岡京跡・南栗ヶ塚遺跡	長岡京市勝竜寺 29 番１号地内	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	福家　恭・湯本整	平成 29 年 11 月 27 日～平成 30 年 3 月 30 日
62	南条遺跡	向日市物集女町南条 63 －２	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	梅本康弘	平成 29 年 11 月 28 日～平成 29 年 12 月 8 日
63	長岡京跡・森本遺跡	向日市森本町薮路 10 －１の一部、31 －１の一部	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	中塚　良	平成 29 年 12 月 12 日～平成 29 年 12 月 26 日
64	小畷尻遺跡	城陽市寺田鳥垣内地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	岩松　保・竹原和彦・竹村亮仁	平成 30 年 1 月 9 日～平成 30 年 2 月 27 日
65	長岡京跡・南栗ヶ塚遺跡・久保古墳群	長岡京市久貝三丁目 108 番地	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	岩﨑　誠	平成 30 年 1 月 9 日～平成 30 年 2 月 19 日
66	長岡京跡・與杼神社旧境内・淀水垂大下津町遺跡	京都市伏見区淀水垂町	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所理事長	金島恵一	平成 29 年 12 月 11 日～平成 29 年 12 月 22 日
67	六波羅政庁跡・京焼窯跡	京都市東山区芳野町	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	木下保明	平成 29 年 11 月 21 日～平成 29 年 12 月 15 日
68	長岡京跡・渋川遺跡	向日市森本町上森本 21 番１（一部）	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	中島信親	平成 30 年 1 月 10 日～平成 30 年 1 月 17 日
69	長岡京跡・鶏冠井遺跡	向日市鶏冠井町十相 29 番１	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	梅本康広	平成 30 年 1 月 18 日～平成 30 年 1 月 26 日
70	平安京跡	京都市中京区東洞院通蛸薬師下る元竹田町 643 番、645 番、646 番、646 番１	株式会社四門京都支店長	辻　広志	平成 30 年 2 月 1 日～平成 30 年 6 月 30 日
71	長岡京跡・淀城跡	京都市伏見区淀本町 225 番地	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	松永修平	平成 30 年 2 月 5 日～平成 30 年 3 月 16 日
72	長岡京跡・西小路遺跡	向日市上植野町北小路６番２、７番の一部	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	中塚　良	平成 30 年 1 月 22 日～平成 30 年 2 月 9 日
73	物集女城跡・中海道遺跡	向日市物集女町中条 14	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	中島信親	平成 30 年 1 月 30 日～平成 30 年 3 月 28 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
74	長岡京跡・鴨田遺跡	向日市上植野町菱田12番、13番、14番	公益財団法人向日市埋蔵文化財センター理事長	梅本康広	平成30年1月29日～平成30年2月2日
75	芝山遺跡	城陽市富野上ノ芝地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	岩松　保・武本典子・中谷可奈	平成30年2月8日～平成30年7月31日
76	平安京跡・烏丸綾小路遺跡	京都市下京区油小路通六条上る卜味金仏町181番地	公益財団法人元興寺文化財研究所理事長	佐藤亜聖・村田裕介・坂本　俊	平成30年2月19日～平成30年5月9日
77	平安京跡・烏丸御池遺跡	京都市中京区室町通姉小路下る役行者町361番、363番、365番	合同会社アルケス代表社員	持田　透・加世田悠仁	平成30年3月5日～平成30年5月18日
78	小樋尻遺跡	城陽市富野小樋尻・久保田、寺田鳥垣内地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	岩松　保・竹原一彦・竹村亮仁・橋本　稔・石井清司	平成30年4月9日～平成31年2月27日
79	水主神社東遺跡	城陽市寺田大畔・金尾地内	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	岩松　保・竹原一彦・加藤雅士・竹村亮仁・橋本　稔	平成30年4月9日～平成31年2月27日
80	水主神社東遺跡	城陽市寺田地先	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	中川和哉・福山博章・面　将道	平成30年4月9日～平成31年2月27日
81	平安京跡	京都市中京区壬生大竹町14－1・3・4	株式会社イビソク関西支店長	熊谷洋一・濱村友美	平成30年2月1日～平成30年2月28日
82	公家町遺跡	京都市上京区京都御苑15（京都御苑内桂宮邸跡）	公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所長	田中利津子	平成29年11月6日～平成30年11月17日
83	長岡京跡・開田城ノ内遺跡	長岡京市長岡二丁目3番1号	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	湯本　整	平成30年4月3日～平成30年7月20日
84	長岡京跡	長岡京市勝竜寺28－1	公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター理事長	岩崎　誠	平成30年4月3日～平成30年4月27日

（99 条に基づく報告）

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
1	平安京跡	京都市下京区中堂寺千生川町 22、22 － 1、23、38、42	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 3 月 14 日～平成 29 年 3 月 14 日
2	長岡京跡	京都市伏見区久我西出町 4 － 10	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 3 月 16 日～平成 29 年 3 月 16 日
3	安楽行院跡	京都市伏見区深草坊町 51 番 1	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 3 月 22 日～平成 29 年 3 月 22 日
4	長岡京跡	京都市伏見区久我本町 11 － 257 の一部、11 － 23・260	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 3 月 23 日～平成 29 年 3 月 23 日
5	長岡京跡	京都市伏見区久我本町 11 － 257 の一部	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 3 月 24 日～平成 29 年 3 月 24 日
6	周山古墳群	京都市右京区京北周山町中山 39 － 4 ほか（市立周山中学校）	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 3 月 27 日～平成 29 年 3 月 27 日
7	桂城跡	京都市西京区桂久方町 64、64 － 5、65	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 3 月 29 日～平成 29 年 3 月 29 日
8	大鳳寺跡	宇治市菟道西中 17、18	宇治市教育委員会	杉本　宏・荒川史・松宮加奈	平成 29 年 3 月 6 日～平成 29 年 3 月 15 日
9	上狛西遺跡	木津川市山城町上狛曽根 18 － 2	木津川市教育委員会教育長	大坪州一郎	平成 28 年 11 月 28 日～平成 29 年 3 月 31 日
10	石原遺跡	福知山市字石原 2 丁目 212 番、213 番、221 番	福知山市教育委員会教育長	鷲田紀子・山田喜大	平成 29 年 3 月 27 日～平成 29 年 3 月 31 日
11	平安京跡・烏丸丸太町遺跡	京都市中京区間之町通竹屋町上る大津町 663 番地	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 4 月 4 日～平成 29 年 4 月 5 日
12	西寺跡・平安京跡・唐橋遺跡	京都市南区唐橋門脇町 21 番、22 番 1	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 4 月 6 日～平成 29 年 4 月 6 日
13	水主神社東遺跡隣接地点	城陽市寺田大畔	京都府教育委員会教育長	福島孝行・古川匠	平成 29 年 3 月 16 日～平成 29 年 3 月 28 日
14	真名井神社経塚	宮津市字大垣 86 番	宮津市教育委員会教育長	河森一浩	平成 29 年 4 月 17 日～平成 29 年 4 月 28 日
15	嵯峨遺跡	京都市右京区嵯峨釈迦堂門前瀬戸川町 7 － 1、8 － 3	京都市文化市民局長	熊谷舞子	平成 29 年 4 月 10 日～平成 29 年 4 月 10 日
16	平安京跡・烏丸綾小路遺跡	京都市下京区烏丸通松原下る五条烏丸町 396、398、401	京都市文化市民局長	熊谷舞子	平成 29 年 4 月 11 日～平成 29 年 4 月 11 日
17	嵯峨遺跡	京都市右京区嵯峨大覚寺門前八軒町 27 － 3	京都市文化市民局長	熊谷舞子	平成 29 年 4 月 12 日～平成 29 年 4 月 12 日
18	中久世遺跡	京都市南区久世中久世町二丁目 112 番	京都市文化市民局長	熊谷舞子	平成 29 年 4 月 13 日～平成 29 年 4 月 13 日
19	白河街区跡	京都市左京区聖護院山王町 5 ほか	京都市文化市民局長	新田和央	平成 29 年 4 月 17 日～平成 29 年 4 月 17 日
20	平安京跡	京都市右京区西京極南庄境町 1	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成 29 年 4 月 24 日～平成 29 年 4 月 25 日
21	平安京跡・烏丸町遺跡	京都市南区東九条室町 46- 2、56	京都市文化市民局長	新田和央	平成 29 年 4 月 18 日～平成 29 年 4 月 19 日
22	平安京跡	京都市中京区壬生辻町 50 － 1 ・ 9 ・ 10	京都市文化市民局長	新田和央	平成 29 年 4 月 21 日～平成 29 年 4 月 21 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
23	亀山城跡	亀岡市京町37番地地内	亀岡市教育委員会教育長	中澤勝・飛鳥井拓	平成29年5月8日～平成29年5月9日
24	下三栖城跡	京都市伏見区横大路下三栖梶原町33ほか	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成29年4月3日～平成29円5月10日
25	福西古墳群	京都市西京区大枝東長町1－610	京都市文化市民局長	新田和央	平成29年5月2日～平成29年5月2日
26	平安宮跡・聚楽遺跡	京都市中京区聚楽廻東町20－7、22－3・5、24－18・19	京都市文化市民局長	奥井智子	平成29年5月8日～平成29年5月8日
27	平安京跡	京都市中京区柳馬場通二条下る等持寺町15番	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成29年4月26日～平成29年4月27日
28	雲林院跡	京都市上京区大宮通今宮御旅所西入若宮横町134ほか	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成29年4月28日～平成29年4月28日
29	法性寺跡	京都市東山区本町20丁目441－1ほか	京都市文化市民局長	奥井智子	平成29年5月9日～平成29年5月10日
30	平安京跡・御土居跡	京都市北区大将軍川端町61から64、66、69、70、71－2	京都市文化市民局長	奥井智子	平成29年5月12日～平成29年5月12日
31	美濃山廃寺・美濃山廃寺下層遺跡	八幡市美濃山古寺9、32－1	八幡市教育委員会教育長	備前知世	平成29年5月8日～平成29年8月10日
32	植物園北遺跡	京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町34、35、38	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成29年5月16日～平成29年5月16日
33	平安宮跡	京都市上京区仁和寺街道七本松東入一番町102番地	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成29年5月15日～平成29年5月15日
34	カシヅケ古墳・原ヶ谷古墳	南丹市園部町小山東町、八木町室河原	南丹市教育委員会教育長	辻健二郎	平成29年5月15日～平成29年7月15日
35	淀城跡	京都市伏見区淀本津町612－3・18・20・21・22・23・25・26・30	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成29年5月17日～平成29年5月18日
36	女布遺跡隣接地点	京丹後市久美浜町女布	京都府教育委員会教育長	桐井理揮・北山大熙	平成29年5月25日～平成29年5月25日
37	河守北遺跡	福知山市大江町河守1864	福知山市教育委員会教育長	鷲田紀子・山田喜大	平成29年5月25日～平成29年5月31日
38	美濃山遺跡隣接地	八幡市美濃山出口地内	京都府教育委員会教育長	奈良康正・岡田健吾	平成29年5月24日～平成29年5月25日
39	篠遺跡	亀岡市篠町上中筋16番地	亀岡市教育委員会教育長	中澤　勝・飛鳥井拓	平成29年6月8日～平成29年6月8日
40	仁和寺院家跡	京都市右京区宇多野御池町6－2・3	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成29年5月26日～平成29年5月26日
41	平安宮跡・聚楽遺跡	京都市上京区下立売通千本西入る稲葉町456、458	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成29年5月25日～平成29年5月25日
42	宝幢寺境内・嵯峨遺跡・嵯峨北堀町遺跡	京都市右京区嵯峨北堀町31－1	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成29年5月24日～平成29年5月24日
43	太秦馬塚町遺跡	京都市右京区太秦北路町13－1、14－1・2、15－2	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成29年5月23日～平成29年5月23日
44	勧修寺境内	京都市山科区勧修寺西北出町57、58、59	京都市文化市民局長	熊谷舞子	平成29年5月29日～平成29年5月29日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
45	嵯峨折戸町遺跡	京都市右京区嵯峨天龍寺油掛町 10 － 24	京都市文化市民局長	新田和央	平成 29 年 6 月 5 日～平成 29 年 6 月 5 日
46	植物園北遺跡	京都市北区上賀茂薮田町 9 ・ 10	京都市文化市民局長	新田和央	平成 29 年 6 月 9 日～平成 29 年 6 月 9 日
47	正明寺遺跡	福知山市字正明寺小字向野 10 － 1 ・ 5、8010、小字黒福 1690 － 3、1701 － 1	福知山市教育委員会教育長	鷲田紀子・山田喜大	平成 29 年 6 月 9 日～平成 29 年 6 月 16 日
48	平安京跡	京都市中京区壬生天池町 1 番地 8	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成 29 年 6 月 12 日～平成 29 年 6 月 12 日
49	東院跡・長岡京跡	京都市南区久世殿城町 332	京都市文化市民局長	熊谷舞子	平成 29 年 6 月 19 日～平成 29 年 6 月 19 日
50	中臣遺跡	京都市山科区東野舞台町 47 － 1、48、49 － 1、50 － 1、51 － 1	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 6 月 20 日～平成 29 年 6 月 20 日
51	伏見城跡・桃山古墳群	京都市伏見区桃山町島津 60 番の 1 の一部	京都市文化市民局長	熊谷亮介	平成 29 年 6 月 28 日～平成 29 年 6 月 28 日
52	芝古墳	京都市西京区大原野石見町 632 番 3	京都市文化市民局長	熊谷亮介	平成 29 年 5 月 8 日～平成 29 年 6 月 29 日
53	平安京跡・烏丸町遺跡	京都市南区東九条上殿田町 42 ほか	京都市文化市民局長	新田和央	平成 29 年 5 月 1 日～平成 29 年 5 月 22 日
54	寺町旧域	京都市上京区中筋通石薬師下る新夷町 390 － 2 ほか	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 6 月 22 日～平成 29 年 6 月 22 日
55	平安京跡	京都市上京区下立売通御前西入突抜町 428、428 － 1	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 6 月 23 日～平成 29 年 6 月 23 日
56	二子山古墳	宇治市宇治山本 42	宇治市教育委員会教育長	荒川　史・大野壽子・岡紗祐里・松村　真・嵯峨根綾美	平成 29 年 7 月 10 日～平成 29 年 9 月 29 日
57	出雲遺跡	亀岡市千歳町千歳稲上 103 番地	亀岡市教育委員会教育長	飛鳥井　拓	平成 29 年 7 月 7 日～平成 29 年 7 月 7 日
58	篠窯業生産遺跡群	亀岡市篠町夕日ケ丘 3 丁目 7 － 5、7 － 6 の一部	亀岡市教育委員会教育長	飛鳥井　拓	平成 29 年 7 月 18 日～平成 29 年 7 月 18 日
59	小樋尻遺跡	城陽市富野東田部 31 － 1 ほか	城陽市教育委員会教育長	小泉裕司・浅井猛宏	平成 29 年 7 月 21 日～平成 29 年 12 月 28 日
60	平安京跡・公家町遺跡・内膳町遺跡	京都市上京区京都御苑 3	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成 29 年 7 月 7 日～平成 29 年 7 月 7 日
61	嵯峨遺跡	京都市右京区嵯峨小倉山堂ノ前 6 － 16、7 － 1 ・ 3	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成 29 年 7 月 3 日～平成 29 年 7 月 6 日
62	伏見城跡・桃山古墳群（永井久太郎古墳）	京都市伏見区桃山町永井久太郎 69 － 1	京都市文化市民局長	新田和央	平成 29 年 7 月 14 日～平成 29 年 7 月 14 日
63	安楽行院跡	京都市伏見区深草坊町 51 － 1	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 6 月 12 日～平成 29 年 7 月 5 日
64	久我東町遺跡	京都市伏見区羽束師鴨川町 182 － 1	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 7 月 21 日～平成 29 年 7 月 21 日
65	本山古墳群	京都市左京区岩倉幡枝町 350、351、252 － 2 の各一部	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 7 月 22 日～平成 29 年 7 月 22 日
66	北白川廃寺・上終町遺跡	京都市左京区北白川堂ノ前町 39 番地 5	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 7 月 31 日～平成 29 年 7 月 31 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
67	平安京跡・烏丸御池遺跡	京都市中京区頭町101－1・2、105	京都市文化市民局長	新田和央	平成29年7月10日～平成29年7月12日
68	白河街区跡	京都市左京区南禅寺草川町43	京都市文化市民局長	新田和央	平成29年7月26日～平成29年7月27日
69	吐師遺跡	木津川市吐師松葉43－　5、45．52、54、55、61－1、62、水路の各一部及び、46、47、48－2、53	木津川市教育委員会教育長	大坪州一郎	平成29年6月26日～平成29年7月31日
70	篠遺跡	亀岡市篠町馬堀伊賀ノ辻4番の一部、6番1・2、33番	亀岡市教育委員会教育長	飛鳥井拓	平成29年8月3日～平成29年8月3日
71	福西古墳群	京都市西京区大江中山町3－3ほか	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成29年7月24日～平成29年7月24日
72	平安京跡・烏丸御池遺跡	京都市中京区両替町通姉小路下る柿本町406、408、402、410－2	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成29年6月26日～平成29年6月27日
73	嵯峨遺跡・檀林寺跡	京都市右京区嵯峨天龍寺立石町5－10ほか	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成29年7月18日～平成29年7月19日
74	広野遺跡	宇治市広野町東裏65－23	宇治市教育委員会教育長	荒川　史・岡紗佑里・松村　真	平成29年6月19日～平成29年7月14日
75	古世城跡	亀岡市三宅町2番	亀岡市教育委員会教育長	中澤　勝・飛鳥井拓	平成29年7月19日～平成29年7月19日
76	新田遺跡	八幡市内里河原24ほか8筆	八幡市教育委員会教育長	奥村清一郎	平成29年8月2日～平成29年8月2日
77	伏見城跡	京都市伏見区桃山町下野27－1・10の一部	京都市文化市民局長	熊谷舞子	平成29年8月8日～平成29年8月10日
78	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	京都市伏見区竹田東小屋ノ内町89、94	京都市文化市民局長	奥井智子	平成29年8月3日～平成29年8月3日
79	浄法寺遺跡・浄法寺古墳	亀岡市篠町浄法寺中村33番4、34番4、35番2・3・4	亀岡市教育委員会教育長	飛鳥井　拓	平成29年7月7日～平成29年7月7日
80	嵯峨遺跡	京都市右京区嵯峨大覚寺門前八軒町29番1の一部	京都市文化市民局長	奥井智子	平成29年8月21日～平成29年8月21日
81	嵯峨遺跡	京都市右京区嵯峨大覚寺門前八軒町27番1の一部、29番1の一部、29番2	京都市文化市民局長	奥井智子	平成29年8月21日～平成29年8月21日
82	伏見城跡・桃山古墳群	京都市伏見区桃山町永井久太郎59－7	京都市文化市民局長	清水早織	平成29年7月18日～平成29年8月25日
83	山科本願寺跡	京都市山科区西野今屋敷町9番6	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成29年8月16日～平成29年8月17日
84	田畔遺跡	舞鶴市字大波小字田黒1400番地ほか	舞鶴市長	松﨑健太	平成29年9月1日～平成29年12月28日
85	淀城跡	京都市伏見区淀新町134－2	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成29年8月28日～平成29年8月29日
86	吉田泉殿町	京都市左京区吉田泉殿町34	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成29年8月31日～平成29年9月1日
87	平安京跡・烏丸町遺跡	京都市南区東九条東山王町14－1	京都市文化市民局長	清水早織	平成29年9月4日～平成29年9月4日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
88	上津遺跡	木津川市宮ノ裏32－1、32－4・5・6・7・8・9・10・11・12・14、36－180	木津川市教育委員会教育長	大坪州一郎	平成29年8月28日～平成29年9月29日
89	長岡京跡・東土川遺跡	京都市伏見区久我西出町2－15・16・168・143	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成29年8月24日～平成29年8月24日
90	土遺跡	福知山市字土小字天王軒	福知山市教育委員会教育長	松本学博	平成29年9月7日～平成29年11月26日
91	今里遺跡	八幡市下奈良隅田地内	八幡市教育委員会教育長	備前知世	平成29年8月17日～平成29年10月31日
92	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	京都市伏見区竹田東小屋ノ内町84－1	京都市文化市民局長	清水早織	平成29年9月7日～平成29年9月7日
93	平安京跡	京都市中京区古西町452、空也町498	京都市文化市民局長	清水早織	平成29年9月8日～平成29年9月8日
94	寺町旧域	京都市上京区中筋通石薬師下る新夷町390－2ほか	京都市文化市民局長	新田和央	平成29年8月29日～平成29年9月7日
95	平安京跡	京都市下京区魚屋町通仏光寺下る鍋屋町241－1ほか	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成29年9月15日～平成29年9月15日
96	野寺廃寺	亀岡市大井町並河3丁目27番12号	亀岡市教育委員会教育長	中澤　勝・飛鳥井　拓	平成29年9月21日～平成29年9月21日
97	下鳥羽遺跡	京都市伏見区下鳥羽東芹川町5から17、19から34	京都市文化市民局長	清水早織	平成29年9月25日～平成29年9月25日
98	平安宮跡	京都市上京区一条通七本松西入東町43－1・4	京都市文化市民局長	清水早織	平成29年9月27日～平成29年9月27日
99	大雲寺跡	京都市左京区岩倉西河原町38番	京都市文化市民局長	奥井智子	平成29年10月10日～平成29年10月10日
100	平安京跡・烏丸綾小路遺跡	京都市下京区烏丸通松原下る五条烏丸町409番地地先	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成29年9月21日～平成29年9月21日
101	中臣遺跡	京都市山科区勧修寺東金ヶ崎町30	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成29年9月22日～平成29年9月22日
102	平安京跡	京都市下京区富小路通高辻下る恵比須屋町186番地	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成29年9月20日～平成29年9月20日
103	植物園北遺跡	京都市北区上賀茂豊田町37番地	京都市文化市民局長	奥井智子	平成29年10月13日～平成29年10月13日
104	仁和寺院家跡	京都市右京区宇多野御池町6－2・3	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成29年9月11日～平成29年9月11日
105	雲林院跡	京都市北区紫野雲林院38	京都市文化市民局長	清水早織	平成29年9月28日～平成29年9月28日
106	平安宮跡	京都市上京区下長者町通土屋町西入る二本松町17	京都市文化市民局長	清水早織	平成29年9月29日～平成29年9月29日
107	平安京跡	京都市中京区油小路通御池下る式阿弥町128	京都市文化市民局長	新田和央	平成29年10月5日～平成29年10月5日
108	平安宮跡	京都市上京区出水通千本東入る尼ヶ崎横町350－3	京都市文化市民局長	新田和央	平成29年10月6日～平成29年10月6日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
109	川北遺跡	福知山市字川北小字セガタ1650ほか16筆	福知山市教育委員会教育長	鷲田紀子	平成29年9月5日～平成29年11月30日
110	女布遺跡	京丹後市久美浜町女布小字初岡810番地ほか	京丹後市教育委員会教育長	新谷勝行	平成29年10月16日～平成29年10月26日
111	平安京跡・山ノ内遺跡	京都市右京区山ノ内西裏町9－3・7、10－1・23	京都市文化市民局長	新田和央	平成29年10月18日～平成29年10月18日
112	長岡京跡・與杼神社旧境内・淀水垂大下津町遺跡	京都市伏見区淀水垂町ほか	京都市文化市民局長	清水早織	平成29年10月19日～平成29年10月20日
113	篠遺跡	亀岡市篠町馬堀東垣内26番1号	亀岡市教育委員会教育長	中澤　勝・飛鳥井　拓	平成29年10月25日～平成20年10月25日
114	平安京跡	京都市下京区西七条東御前田町39番1、52番1	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成29年10月24日～平成29年10月24日
115	革嶋館跡	京都市西京区川島玉頭町8番9、10番、11番1の一部、11番2・5	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成29年10月24日～平成29年10月24日
116	平安京跡・御土居跡・寺町旧域	京都市下京区五条通寺町西入御影堂町14ほか	京都市文化市民局長	新田和央	平成29年11月6日～平成29年11月6日
117	平安京跡	京都市下京区川端町、下之町、東之町、西之町、上之町	京都市文化市民局長	奥井智子	平成29年10月25日～平成29年10月31日
118	植物園北遺跡	京都市左京区松ヶ崎芝本町20－1	京都市文化市民局長	新田和央	平成29年11月9日～平成29年11月9日
119	長岡京跡・與杼神社旧境内・淀水垂大下津町遺跡	京都市伏見区淀水垂町ほか地先	京都市文化市民局長	清水早織	平成29年11月21日～平成29年11月21日
120	平安京跡	京都市中京区壬生上大竹町14－1・3・4	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成29年9月19日～平成29年9月19日
121	鳥羽離宮跡	京都市伏見区武田浄菩提院町315、316	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成29年11月8日～平成29年11月8日
122	正覚寺跡	京都市伏見区深草正覚町7－3	京都市文化市民局長	熊谷舞子	平成29年11月13日～平成29年11月14日
123	久津川車塚古墳・横道遺跡	城陽市平川山道109ほか	城陽市教育委員会教育長	浅井猛宏・小泉裕司	平成29年11月8日～平成29年11月17日
124	行永遺跡	舞鶴市字行永小字打木532－1ほか	舞鶴市長	松﨑健太	平成29年11月～平成29年11月
125	七日市遺跡	舞鶴市字七日市小字寺下213番3	舞鶴市長	松﨑健太	平成29年11月～平成29年11月
126	土遺跡	福知山市字土小字辻ノ前1071番地	福知山市教育委員会教育長	松本学博	平成29年11月28日～平成29年12月28日
127	井手遺跡	亀岡市本梅町西加舎地内	亀岡市教育委員会教育長	中澤　勝・飛鳥井　拓	平成29年11月16日～平成30年2月28日
128	浄法寺古墳群	亀岡市篠町浄法寺中村7番7	亀岡市教育委員会教育長	飛鳥井　拓	平成29年11月22日～平成29年11月22日
129	平安京跡・公家町遺跡	京都市上京区京都御苑2番地の一部	京都市文化市民局長	熊谷舞子	平成29年11月16日～平成29年11月16日
130	伏見城跡・指月城跡	京都市伏見区桃山町泰長老　桃山東合同宿舎敷地内	京都市文化市民局長	熊谷舞子	平成29年9月19日～平成29年11月2日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
131	平安京跡	京都市上京区皀莢町 287	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 11 月 24 日～平成 29 年 11 月 24 日
132	平安京跡・烏丸綾小路遺跡	京都市下京区西洞院通四条下る妙伝寺町 713－1・2・3・4、715、717	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 12 月 4 日～平成 29 年 12 月 4 日
133	白河街区跡	京都市左京区聖護院中町 8 番 4・9、9 番 3・4・5・11	京都市文化市民局長	奥井智子	平成 29 年 12 月 5 日～平成 29 年 12 月 5 日
134	太秦馬塚町遺跡	京都市右京区太秦馬塚町 21 番 1・2 の一部	京都市文化市民局長		平成 29 年 12 月 8 日～平成 29 年 12 月 8 日
135	白河南殿跡	京都市左京区二条通川端より八筋目東入る上る石原町 283 番 8	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成 29 年 11 月 27 日～平成 29 年 11 月 27 日
136	平安京跡	京都市中京区東洞院通蛸薬師下る元竹田町 643、645、646、646－1	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成 29 年 11 月 30 日～平成 29 年 12 月 1 日
137	長岡京跡・淀城跡	京都市伏見区淀本町 225	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成 29 年 11 月 28 日～平成 29 年 11 月 28 日
138	鳥羽離宮跡	京都市伏見区中島中道町 87 ほか	京都市文化市民局長	清水早織	平成 29 年 12 月 14 日～平成 29 年 12 月 14 日
139	伏見城跡・桃山古墳群	京都市伏見区桃山町島津 60－6	京都市文化市民局長	清水早織	平成 29 年 12 月 12 日～平成 29 年 12 月 12 日
140	平安京跡	京都市下京区油小路通六条上る卜味金仏町 181、184－1、186	京都市文化市民局長	清水早織	平成 29 年 12 月 11 日～平成 29 年 12 月 13 日
141	佐山遺跡	久御山町佐山新開地 179－1・3	久御山町教育委員会教育長	石田茂幸	平成 29 年 11 月 16 日～平成 29 年 11 月 16 日
142	法住寺殿跡	京都市東山区東大路通七条下る東瓦町 964	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 12 月 18 日～平成 29 年 12 月 19 日
143	鳥羽離宮跡	京都市伏見区竹田西桶ノ井町 40	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 12 月 20 日～平成 29 年 12 月 20 日
144	平安宮跡。聚楽第跡	京都市上京区出水通松屋町西入西天秤町 166	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 29 年 12 月 22 日～平成 29 年 12 月 22 日
145	松ヶ端遺跡	福知山市字今安	福知山市教育委員会教育長	鷲田紀子	平成 29 年 12 月 5 日～平成 30 年 2 月 28 日
146	平安京跡・烏丸御池遺跡	京都市中京区室町通姉小路下る役行者町 361、363、365	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成 30 年 1 月 9 日～平成 30 年 1 月 9 日
147	平安京跡・西寺跡・唐橋遺跡	京都市南区唐橋西寺町 10	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成 29 年 10 月 30 日～平成 29 年 12 月 6 日
148	途中ヶ丘遺跡	京丹後市峰山町長岡 876 番地ほか	京丹後市教育委員会教育長	新谷勝行	平成 30 年 1 月 15 日～平成 30 年 3 月 23 日
149	平安京跡・新在家構え跡	京都市上京区京都御苑 13 番地の一部	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成 30 年 1 月 22 日～平成 30 年 1 月 22 日
150	嵯峨遺跡	京都市右京区嵯峨二尊院門前北中院町 2－9	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成 30 年 1 月 22 日～平成 30 年 1 月 22 日
151	女郎花遺跡	八幡市八幡女郎花 30 番地 1	八幡市教育委員会教育長	奥村清一郎	平成 29 年 12 月 20 日～平成 29 年 12 月 21 日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
152	栗栖野瓦窯跡	京都市左京区岩倉幡枝町628番ほか	京都市文化市民局長	熊井亮介	平成30年1月17日～平成30年1月18日
153	寺町旧域	京都市北区鞍馬口通寺町東入北側上善寺門前町340	京都市文化市民局長	奥井智子	平成30年1月25日～平成30年1月25日
154	平安宮跡	京都市上京区浄福寺通一条下る東西俵屋町642－3・8・21	京都市文化市民局長	奥井智子	平成30年1月30日～平成30年1月30日
155	上久世遺跡	京都市南区久世上久世251番、253番2、265番1・3	京都市文化市民局長	奥井智子	平成30年1月31日～平成30年1月31日
156	平安京跡	京都市右京区西院清崎町21	京都市文化市民局長	鈴木久史	平成30年1月24日～平成30年1月24日
157	余部遺跡	亀岡市余部町大塚55番地、法蔵寺25番3、30番	亀岡市教育委員会教育長	中澤　勝	平成30年1月31日～平成30年1月31日
158	亀山城跡	亀岡市三宅町50	亀岡市教育委員会教育長	中澤　勝・飛鳥井拓	平成29年12月25日～平成29年12月25日
159	余部遺跡	亀岡市余部町上条26、26－1	亀岡市教育委員会教育長	飛鳥井拓	平成29年11月30日～平成29年11月30日
160	東山古墳群	京都市西京区大枝北福西町2丁目300－3	京都市文化市民局長	奥井智子	平成30年1月15日～平成30年1月16日
161	長岡京跡	京都市伏見区納所星柳ほか	京都市文化市民局長	奥井智子	平成30年2月13日～平成30年2月13日
162	平安京跡	京都市下京区梅小路高畑町17－2	京都市文化市民局長	清水早織	平成30年2月6日～平成30年2月6日
163	平安京跡・烏丸町遺跡	京都市南区東九条東三王町	京都市文化市民局長	清水早織	平成30年2月7日～平成30年2月7日
164	平安京跡	京都市右京区西院日照町50、51－1、52－2	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成30年2月21日～平成30年2月21日
165	東堀遺跡	福知山市字堀小字上高田2129－4	福知山市教育委員会教育長	鷲田紀子	平成30年2月26日～平成30年2月26日
166	白河北殿	京都市左京区聖護院中町8－4、9－3・4・5・8・9・11	京都市文化市民局長	新田和央	平成30年1月22日～平成30年2月28日
167	平安京跡	京都市右京区太秦安井馬塚町16ほか	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成30年3月1日～平成30年3月1日
168	伏見城跡	京都市伏見区鷹匠町13－1、36－3、紺屋町196－13	京都市文化市民局長	黒須亜希子	平成30年2月28日～平成30年2月28日
169	平安京跡	京都市中京区壬生下溝町2の一部	京都市文化市民局長	清水早織	平成30年2月20日～平成30年2月20日
170	平安京跡	京都市中京区壬生下溝町2の一部	京都市文化市民局長	清水早織	平成30年2月20日～平成30年2月20日
171	平安京跡・西京極遺跡	京都市右京区西院月双町115、114の一部	京都市文化市民局長	清水早織	平成30年2月27日～平成30年2月27日
172	平安京跡・龍勝寺跡	京都市右京区太秦安井奥畑町19－8、22－15、29	京都市文化市民局長	清水早織	平成30年2月22日～平成30年2月22日
173	上京遺跡	京都市上京区元誓願寺通大宮東入寺今町510、512－1	京都市文化市民局長	清水早織	平成30年2月23日～平成30年2月23日

番号	遺跡名称	所在地	調査主体	発掘担当者	調査期間
174	前田遺跡	福知山市字前田小字カヤノ 1878 番 329 の一部、1878 番 330・459	福知山市教育委員会教育長	鷲田紀子・山田喜大	平成 30 年 3 月 15 日～平成 30 年 3 月 15 日
175	土師遺跡	福知山市字土師小字イヤシキ 615 番	福知山市教育委員会教育長	松本学博・鷲田紀子	平成 30 年 3 月 15 日～平成 30 年 3 月 15 日
176	宮津城跡	宮津市鶴賀	京都府教育委員会教育長	中居和志	平成 29 年 3 月 15 日～平成 29 年 3 月 15 日
177	小樋尻遺跡隣接地	城陽市富野	京都府教育委員会教育長	奈良康正・古川匠	平成 29 年 4 月 27 日～平成 29 年 8 月 1 日
178	女布遺跡	京丹後市久美浜町女布	京都府教育委員会教育長	桐井理揮・北山大熙	平成 29 年 5 月 26 日～平成 30 年 3 月 30 日
179	千代川遺跡	亀岡市千代川町千原ほか	京都府教育委員会教育長	中居和志・桐井理揮・北山大熙	平成 29 年 11 月 1 日～平成 30 年 3 月 30 日
180	花ノ木古墳	綾部市鍛冶屋町花ノ木	京都府教育委員会教育長	中居和志	平成 29 年 12 月 4 日～平成 29 年 12 月 4 日
181	矢田遺跡	亀岡市下矢田町	京都府教育委員会教育長	中居和志・岡田健吾	平成 29 年 12 月 6 日～平成 29 年 12 月 6 日
182	川向遺跡	京丹後市丹後町成願寺川向	京都府教育委員会教育長	中居和志	平成 29 年 12 月 18 日～平成 29 年 12 月 18 日
183	安国寺遺跡	京田辺市字中野安国寺 169 番ほか	京田辺市教育委員会教育長	河森一浩	平成 29 年 10 月 10 日～平成 29 年 12 月 22 日

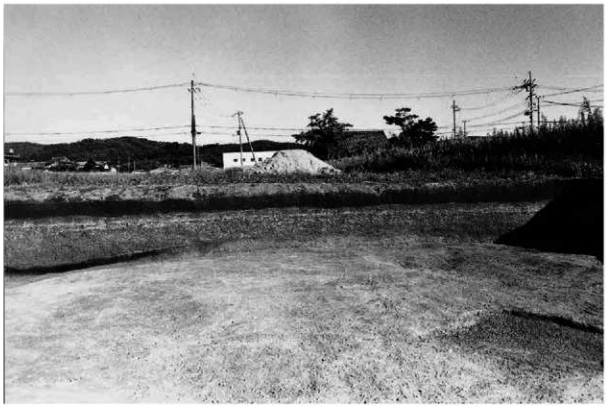
図　　版

図版第１　恭仁宮跡第 98 次

（1）ＩＲ 12 Ｅ -s トレンチ全景（南西から）

（2）ＩＲ 12 Ｅ -s トレンチ北壁土層断面（南から）

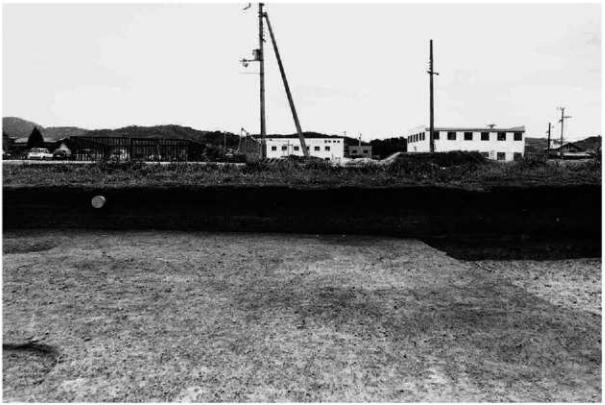
図版第２　恭仁宮跡第 98 次



（１）ＩＲ 12 Ｅ -s トレンチ東壁土層断面（西から）

（２）ＩＭ 22 Ｄ -s トレンチ全景（北から）

図版第３　恭仁宮跡第 98 次



（１）ＩＭ 22 Ｄ -s トレンチ東壁土層断面（西から）

（２）ＩＭ 17 Ｅ -s・ＩＭ 16 Ｈ -s トレンチ全景（南から）

図版第４　恭仁宮跡第 98 次

（1）ＩＭ16Ｈ-ｓトレンチ全景（東から）

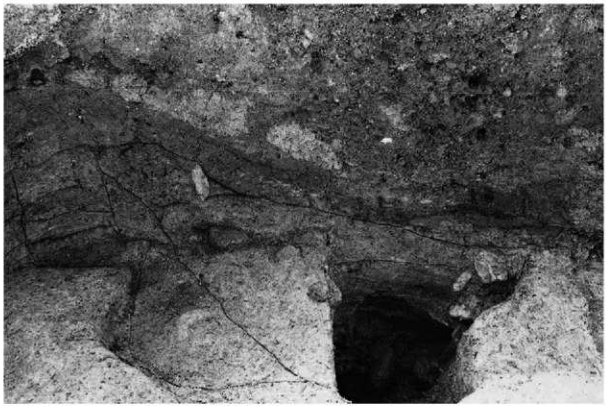
（2）ＩＭ16Ｈ-ｓトレンチ西壁土層断面（東から）

図版第５　恭仁宮跡第 98 次

（１）ＩＭ 16 Ｈ -s トレンチ南西部南壁土層断面（北東から）

（２）ＩＭ 16 Ｈ -s トレンチ南西部南壁土層断面（北から）

図版第6　恭仁宮跡第98次



（1）SP 18401・402 東西土層断面（北から）

（2）SP 18401 南北土層断面（西から）

図版第７　恭仁宮跡第 98 次

（１）ＳＰ 18403・404 東西土層断面（北から）

（２）ＳＰ 18405・406 東西土層断面（南から）

図版第8　恭仁宮跡第98次

（1）ＳＰ 18407・408 東西土層断面（南から）

（2）ＳＰ 18409 東西土層断面（北から）

図版第９　府営農業農村整備事業関係遺跡（女布遺跡第 10 次）

（1）女布遺跡遠景（東から）

（2）第１トレンチ全景（西から）

（3）第１トレンチ北壁土層断面(南西から)

図版第10　府営農業農村整備事業関係遺跡（女布遺跡第10次）

（1）第2トレンチ南壁
土層断面（北から）

（2）第3トレンチ全景
（南から）

（3）第4トレンチ南壁
土層断面（北から）

図版第 11　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 28 次）

出土遺物（1）

図版第 12　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 28 次）

24

28

32

21

124

41

42

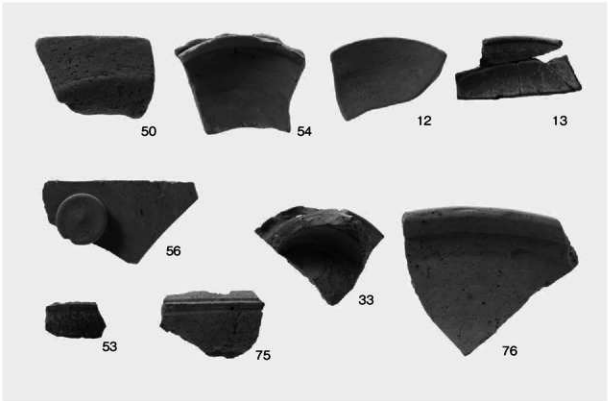
146

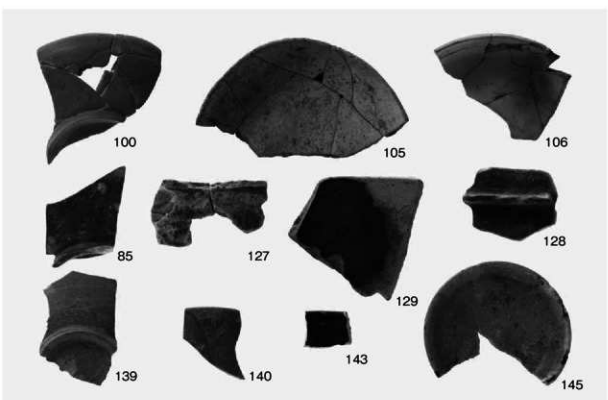
147

149

出土遺物（2）

図版第 13　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 28 次）





出土遺物（3）

図版第14　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第29次）

（1）第1トレンチ調査前（北西から）

（2）ＳＢ2901001（北から）

（3）第1トレンチ全景（北西から）

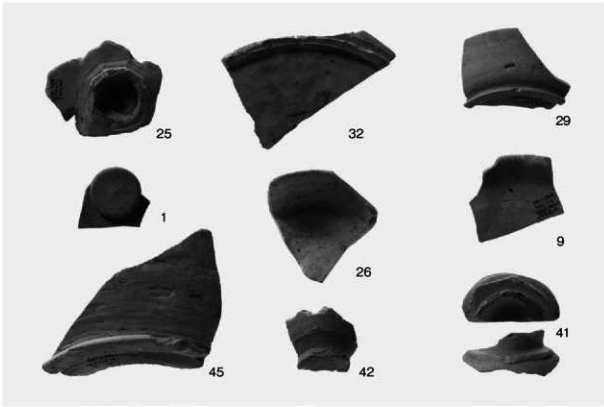
図版第15　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第29次）

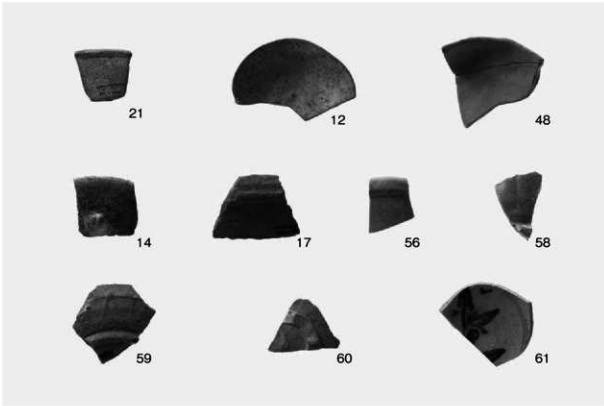
（1）ＳＤ2901022完掘状況（北西から）

（2）ＳＤ2901022断面（北から）

（3）ＳＫ2901127断面（南から）

図版第 16　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 29 次）





出土遺物

図版第 17　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）

（1）千代川遺跡第 31 次
地点遠景（北から）

（2）千代川遺跡第 31 次
地点遠景（西から）

（3）千代川遺跡第 31 次
地点遠景（南から）

図版第 18　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）

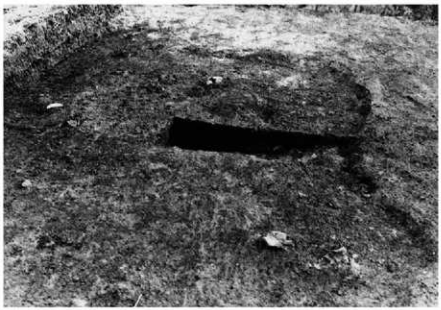
（1）第５トレンチＳＤ 310509 検出状況（北から）

（2）第 10 トレンチ全景（北から）

（3）第 13 トレンチ全景（南から）

図版第19　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第31次）

（1）第13トレンチ土層断面（東から）



（2）第25トレンチＳＫ312502検出状況（北から）

（3）第26トレンチ全景（南から）

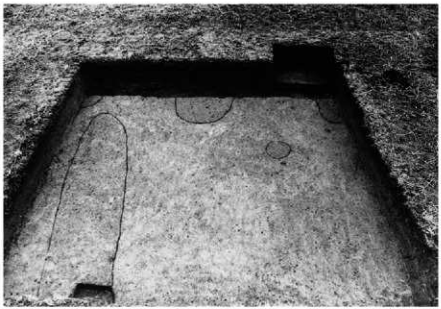
図版第 20　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）

（1）第 26 トレンチ土層
断面（南から）

（2）第 29 トレンチ全景
（南から）

（3）第 42 トレンチ全景
（北から）

図版第 21　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）



（1）第 50 トレンチ全景
（北から）

（2）第 55 トレンチ全景
（南から）

（3）第 57 トレンチ全景
（南から）

図版第 22　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）

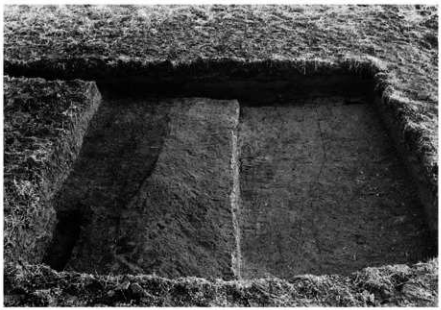
（1）第 69 トレンチ全景（南から）

（2）第 70 トレンチＳＫ 317001 検出状況（西から）

（3）第 70 トレンチ土層断面（北西から）

図版第 23　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）

（1）第 71 トレンチ断割内遺構検出状況（西から）



（2）第 72 トレンチ全景（北から）

（3）第 72 トレンチ土層断面（北西から）

図版第 24　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）

（1）第 73 トレンチ全景
（北から）

（2）第 78 トレンチ全景
（南から）

（3）第 78 トレンチ土層
断面（南東から）

図版第 25　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）

（1）第 79 トレンチ全景
（北から）

（2）第 80 トレンチ全景
（南から）

（3）第 81 トレンチ全景
（北から）

図版第 26　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）

（1）第 81 トレンチ土層
断面（北から）

（2）第 84 トレンチ全景
（南から）

（3）第 85 トレンチ全景
（北から）

図版第 27　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）

（1）第 89 トレンチ全景
（北から）

（2）第 94 トレンチ全景
（南から）

（3）第 97 トレンチ全景
（南から）

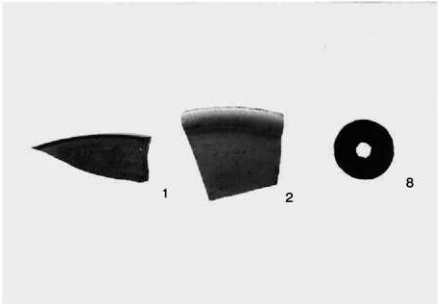
図版第 28　国営緊急農地再編整備事業「亀岡中部地区」関係遺跡（千代川遺跡第 31 次）

（1）出土遺物（1）

（2）出土遺物（2）

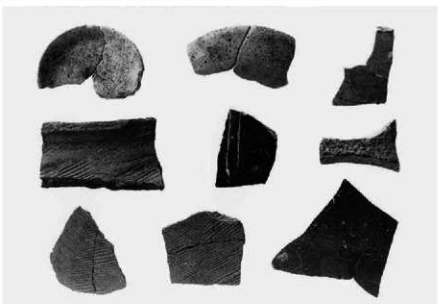
（3）出土遺物（3）

図版第 29　府内遺跡（寺町旧域・法成寺跡、満願寺跡第 1 次）



（1）寺町旧域・法成寺跡出土遺物（1）

（2）寺町旧域・法成寺跡出土遺物（2）



（3）満願寺跡出土遺物

図版第 30　府内遺跡（光明寺境内第 1 次、佐伯遺跡第 10 次）

（1）光明寺境内第 1 次出土遺物

（2）佐伯遺跡第 10 次出土遺物（1）

（3）佐伯遺跡第 10 次出土遺物（2）

報告書抄録

書名	京都府埋蔵文化財調査報告書（平成30年度）
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	奈良康正・古川　匠・中居和志・岡田健吾・桐井理隆・北山大照・川崎雄一郎
編集機関	京都府教育委員会
所在地	〒602-8570　京都市上京区下立売通新町西入薮ノ内町　075-414-5603
発行年月日	西暦 2019 年 3 月 31 日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
恭仁宮跡	木津川市加茂町例幣	26214	173	34度45分45秒	135度51分55秒	20180816-190129	350	保存活用
女布遺跡	京丹後市久美浜町女布	26212	1506	35度36分06秒	134度57分17秒	20170526-0908	58	農業関連（府営農業農村整備事業に伴う事前調査）
						20180625-0706	25	
千代川遺跡	亀岡市千代川町千原ほか	26206	22	35度03分09秒	135度32分26秒	20151101-20160228	441	農業関連（国営緊急農地再編整備事業に伴う事前調査）
						20160822-20170228	670	
						20171101-20180314	900	
余部遺跡	亀岡市余部町鷲又	26206	62	35度01分06秒	135度33分35秒	20181101-20190213	831	
法貴峠古墳群	亀岡市曽我部町中中小路	26206	52	34度59分05秒	135度32分22秒	20190128-0228	-	
平安京跡	京都市上京区弁慶物町	26102	1	35度01分20秒	135度45分04秒	20180109	16	府営住宅改修
佐伯遺跡	亀岡市篠田野町	26206	44	35度00分55秒	135度31分45秒	20180122-0227	1,247	水路
寺町旧域・法成寺跡	京都市上京区松蔭町	26102	170,242	35度01分23秒	135度46分03秒	20180122-0227	300	府立高校建設
矢田遺跡	亀岡市下矢田町	26206	166	35度00分09秒	135度34分40秒	20180411-0412	25	府道拡幅
岡田国道跡隣接地	木津川市木津	26214	-	34度43分49秒	135度49分21秒	20180529	30	国道拡幅
薬師寺跡	舞鶴市浦明寺	26202	206	35度25分42秒	135度27分23秒	20180612	10	砂防堰堤建設
光明寺境内	綾部市睦寄町	26203	L18	35度23分21秒	135度26分33秒	20180702	21	公衆トイレ建設
宮津城跡	宮津市敦賀	26205	87	35度32分08秒	135度11分56秒	20180404-0522 ·20181105	10	下水道

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
恭仁宮跡	宮都	奈良時代中葉	柱穴	瓦、須恵器、土師器	掘立柱塀を検出
女布遺跡	集落	弥生～近世	溝	土馬、須恵器、土師器、石器	溝から9世紀前半の遺物がまとまって出土
千代川遺跡	集落	縄文～中世	掘立柱建物、柱穴、溝、土坑	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、銅銭	8世紀代の掘立柱建物をはじめ、幅広い時期の遺構、遺物が検出された。
余部遺跡	集落	弥生～古代	落ち込み状地形	弥生土器等	-
法貴峠古墳群	古墳	古墳	古墳	-	測量調査を実施した。
平安京跡	都城	中世～近世	土坑	土師器	江戸時代後期の土師器皿がまとまって出土した。

佐伯遺跡	集落	弥生～中世	土坑、溝	弥生土器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、磁器、木製品	弥生時代から中世の遺物がまとまって出土した。
寺町旧城・法成寺跡	寺院	平安中期・中世	包含層	瓦、陶器、銅銭、土師器	法成寺に関する遺物や、中世の銅銭「世高通寶」が出土した。
矢田遺跡	集落	古代	柱穴	須恵器	古代の柱穴列を検出した。
岡田国遺跡隣接地	－	－	溝	－	包蔵地外で遺構を確認
満願寺跡	寺院	中世	遺物包含層	土師器、須恵器、陶磁器、土師器	中世寺院の満願寺所用と考えられる遺物が出土した。
光明寺境内	寺院	中世	土坑	瓦質火鉢	土坑から奈良火鉢が出土した。
宮津城跡	平城	中世・近世	礎石、土坑、柱穴	－	近世末の礎石を検出

要約

・恭仁宮跡では、朝堂院と大極殿院の境界で東西方向の掘立柱塀を検出した。大極殿院南面区画施設の可能性が高い。
・女布遺跡では、平成 29 年度の調査で溝から土馬を含む 9 世紀前半の遺物がまとまって出土した。
・千代川遺跡では、8 世紀代の掘立柱建物をはじめ、幅広い時期の遺構、遺物が検出された。また、広範囲にわたる発掘調査によって、旧地形が復元可能となった。
・余部遺跡では、落ち込み状地形を確認した。
・法貴峠古墳群では、20 号墳の墳丘測量を実施した。
・平安京跡では、18 世紀後半の土師器皿がまとまって出土した。
・寺町旧城・法成寺跡では、河川堆積層から、平安時代の法成寺に関する緑釉瓦や陶磁器や、1460 年代に琉球王朝で鋳造された銅銭「世高通寶」が出土した。
・矢田遺跡では、大型掘立柱建物の一部である可能性のある柱穴列を検出した。
・宮津城跡では、近世末の遺構、遺物が主に出土した。
・岡田国遺跡隣接地では、埋蔵文化財包蔵地の範囲が従来よりも北に広がることを確認した。
・満願寺跡では、満願寺の創建時期と年代観が一致する遺物がまとまって出土した。
・光明寺境内では、光明寺の什器と考えられる奈良製火鉢が出土した。境内全域に中世の遺構が良好に残存している可能性がある。

報告書抄録（英文）

Title	Kyoto Pref. Cultural Properties Report (Heisei 30)
Writer	Yasumasa Nara, Takumi Furukawa, Kazushi Nakai, Kengo Okada, Riki Kirii, Daiki Kitayama, Yuichiro Kawasaki
Copyright	Kyoto Prefectural Board of Education 〒602-8570 Yabunouchicho Shinmachi-nishiiru Shimodachiuri-tori Kamigyo-ward Kyoto-city Japan
The date of issue	31.Mar.2019

Site	Location	North latitude	East latitude	Excavated term	Excavated area(㎡)	Origin of excavation
Kuni Palace site	Reihei Kamo-town Kizugawa-city Kyoto-pref	34° 45′ 45″	135° 51′ 55″	20170901-1219	350	Investigation for preservation and application
Nyou site	Nyou Kumihama-town Kyotango-city Kyoto-pref	35° 35′ 52″	134° 57′ 26″	20170526-0908 20180625-0706	58 25	Pref-managed improvement in agricultural infrastructure for raising an agriculture manager
Chiyokawa site	Chiyokawa-town Kameoka-city Kyoto-pref	35° 03′ 09″	135° 32′ 26″	20151101-20160228 20160822-20170228 20171101-20180314	441 670 900	The government-managed Kameoka agricultural land reorganaization consolidation project
Amarube site	Amarube-town Kameoka-city Kyoto-pref	35° 01′ 06″	135° 33′ 35″	20181101-20190213	831	The government-managed Kameoka agricultural land reorganaization consolidation project
Houkitouge kofun group	Sogabe-town Kameoka-city Kyoto-pref	34° 59′ 05″	135° 32′ 22″	20190128-0228	-	The government-managed Kameoka agricultural land reorganaization consolidation project
Heiankyo ruins	Tsuruga Miyazu-city Kyoto-pref	35° 01′ 20″	135° 45′ 04″	20180109	16	Condminium construction
Saeki site	Sogabe-town Kameoka-city Kyoto-pref	35° 00′ 55″	135° 31′ 45″	20180122-0227	1,247	waterway construction
Former Teramachi・Houjouji temple ruins	Kamigyoku Kyoto-city Kyoto-pref	35° 01′ 23″	135° 46′ 03″	20180122-0227	300	High school construction
Yada site	Shimoyada Kameoka-city Kyoto-pref	35° 00′ 09″	135° 34′ 40″	20180411・0412	25	Road construction
Immediate area of Okadakuni site	Kizu Kizugawa-city Kyoto-pref	34° 43′ 49″	135° 49′ 21″	20180529	30	Road construction
Manganji temple ruins	Manganji Maizuru-city Kyoto-pref	35° 25′ 42″	135° 27′ 23″	20180612	10	Sand control dam construction
Koumyouji temple	Mutsuyori-town Ayabe-city Kyoto-pref	35° 23′ 21″	135° 26′ 33″	20180702	21	Toilet construction
Miyazu castle ruins	Tsuruga Miyazu-city Kyoto-pref	35° 32′ 08″	135° 11′ 56″	20180404・0522 -20181105	10	Sewerage construction

Site	Sort (class)	Period	Features	Artificial description
Kuni Palace site	palace	nara	posthole type wall	haji ware, sue ware, roof tile
Nyou site	dwelling cluster	yayoi-early modern times	posthole, ditch	haji ware, stone toole, sue ware, clay horse
Chiyokawa site	dwelling cluster	jomon-medieval times	posthole, ditch, hole	jomon ware, yayoi ware, haji ware, sue ware, cupper coin
Amarube site	dwelling cluster	yayoi-ancient times	—	yayoi ware
Houkitouge kofun group	kofun	kofun	—	—
Heiankyo ruins	kofun	kofun	—	haji ware
Saeki site	dwelling cluster	—	hole, ditch	yayoi ware, sue ware, green glazed pottery, gaki ware, ceramic, wood tool

Former Teramachi・Houjouji temple ruins	temple	heian-medieval times	—	roof tile, ceramic, haji ware, cupper coin
Yada site	dwelling cluster	ancient times	island-like field	sue ware
Immediate area of Okadakuni site	—	medieval times	island-like field	—
Manganji temple ruins	temple	medieval times	—	haji ware, sue ware, ceramic, haji ware
Koumyouji temple	temple	medieval times	hole	gaki ware
Miyazu castle ruins	castle	medieval-early modern times	post hole, hole	—

KYOTO PREF. CULTURAL PROPERTIES REPORT
COPYRIGHT ©Kyoto Prefectural Board of Education, 2019
Kyoto Prefectural Board of Education
Shinmachi Shimodachiuri Kamigyo-ward Kyoto 602-8570, Japan
edited by Cultural Properties Division Department of Guidance

Kyoto Prefectural Department of Education
Published by Kyoto Prefectural Board of Education
No Parts of this publication may be reproduced or by any means Without prior
permission of copyright owner

京都府埋蔵文化財調査報告書（平成 30 年度）

発　行　平成 31 年 3 月 31 日
編　集　京都府教育庁指導部
　　文 化 財 保 護 課
発　行　京都府教育委員会
　　〒 602-8570　京都市上京区下立売通新町西入藪ノ内町
印　刷　株式会社図書印刷同朋舎
　　〒 600-8805　京都府京都市下京区中堂寺鍵田町 2

KYOTO PREF.
CULTURAL PROPERTIES REPORT

KYOTO PREFECTURAL BOARD OF EDUCATION
JAPAN